松本市文化財調査報告No.60

松本市向畑遺跡 I

― 県道改良工事に伴う緊急発掘調査報告書 ―

1988・3

松本市教育委員会

松本市向畑遺跡 I

— 県道改良工事に伴う緊急発掘調査報告書 —

1988・3

松本市教育委員会

序

向畑遺跡は松本市の東部、中山地区にあり、この周辺の東山山麓は、古くは縄文時代から中・近世に至るまでの多くの遺跡が残され、隣接する内田地区、塩尻市片丘地区とともに、早くから識者の注目するところとなっていた場所であります。

今回の調査は、昨年度まで進められていた県道改良工事が、当遺跡一帯に及んだため、松本市教育委員会では、長野県松本建設事務所の依頼を受け事業予定地内の遺跡の発掘調査を行ったものです。

発掘調査は市教委職員を中心に地元考古学研究者の先生方等で組織した調査団により、8月27日から12月25日にわたって実施され、多大な成果をおさめて無事終了いたしました。調査内容は本文で詳述してあるとおりですが、古墳時代の住居跡などと中世の墓址群やそれらに伴う遺物が多数発見され、この地が古くから人々の生活の根拠地となっていたことが証明されました。

今回の発掘は、記録保存と呼ばれ、開発のために遺跡を破壊するがその前に記録をとっておくという性格のもので、本書を残して遺跡は消え去る運命にあります。せめて、本書に記された調査結果が充分に活用され、郷土や先祖の歴史を探る一助となれば幸甚に存じます。

最後になりましたが、この調査にあたり多大なご理解とご協力をいただきました中山土地改良区、炎天下、発掘に従事された地元の皆様に心からなる謝意を表して序といたします。

昭和63年3月

松本市教育委員会

教育長　中島俊彦

例　　言

1．本書は昭和62年８月27日から12月25日にわたって実施された松本市中山向畑(ひかいはた)に所在する中山向畑遺跡の緊急発掘調査に関する報告書である。

2．本調査は昭和62年度住宅宅地関連道路改良工事に伴う事前の発掘調査であり、松本建設事務所より委託を受け、松本市教育委員会が行ったものである。

3．本書の執筆は下記の分担で行った。

第１章　事務局　　第２章第１節．太田守夫　　第２節．神沢昌二郎　　第３章第１節．三村竜一　　第２節－１．三村竜一・林佳孝　　第２節２～６．三村竜一　　第３節(1)－(i)．竹原学　　(1)－(ii)．直井雅尚　　(1)－(iii)．神沢昌二郎　　(2)関沢聰　　(3)神沢昌二郎　　第４章　神沢昌二郎

4．本書の編集は事務局が行い、滝沢智恵子の助力を得た。

5．本書の作成にあたっての作業分担は次のとおりである。

土器復元　滝沢智恵子　岩野公子　五十嵐周子　西川卓志

遺物実測　神沢昌二郎　直井雅尚　関沢　聰　竹原　学　田中正治郎　岩野公子　土橋久子　赤羽包子

土器拓影　五十嵐周子　百瀬利子

トレース　直井雅尚　関沢　聰　竹原　学　三村竜一　土橋久子　岩野公子　關嶋八重子　赤羽包子　大木たかみ　後藤ひとみ　町田庄司　若井孝夫　林佳孝

遺構写真　三村竜一

遺物写真　宮嶋洋一

一覧表作成　若井孝夫　岩野公子　後藤ひとみ　大木たかみ

6．遺構図中のスクリーントーンは焼土・炭化物を表現したものである。第７・17図を参照されたい。

7．委託契約書、作業日誌等の事業経緯を示す書類は調査結果の記載を重視したために、本書から割愛したが、図類、出土遺物と共に松本市教育委員会が保管している。

目　　次

第１章　調査経過

第１節　調査に至る経過……1

第２節　調査体制……3

第３節　作業の経過……4

第２章　遺跡の環境

第１節　向畑遺跡の地形と地質……5

第２節　周辺遺跡……9

第３章　調査

第１節　調査の概要……11

第２節　遺構

1　住居址……13

2　古墳……37

3　土壙……45

4　溝……81

5　竪穴状遺構……83

6　特殊遺構……86

第３節　遺物

1　土器・陶磁器……87

(1)　縄文時代の土器……87

(2)　古墳時代の土器……91

(3)　陶磁器……126

2　石器・石製品……128

3　鉄器・銭貨……140

第４章　結語……142

挿　図　目　次

第１図　遺跡の位置……2
第２図　地層断面図……6
第３図　周辺遺跡……8
第４図　遺跡範囲図……10
第５図　調査範囲図……12
第６図　第６・８号住居址……15
第７図　第７号住居址……16
第８図　第９・10号住居址……18
第９図　第31号住居址……19
第10図　第32・33・41号住居址……21
第11図　第34号住居址……22
第12図　第35・39号住居址……23
第13図　第36号住居址……24
第14図　第37号住居址……26
第15図　第37号住居址遺物出土図……27
第16図　第38号住居址……28
第17図　第40号住居址……30
第18図　第40号住居址遺物出土図……31
第19図　第42号住居址……32
第20図　第43・46号住居址……33
第21図　第45号住居址……35
第22図　向畑６号古墳……38
第23図　向畑７号古墳……39
第24図　土壙配置図(1)……41
第25図　土壙配置図(2)……43
第26図　土壙(1)……48
〜　〜
第47図　土壙(22)……69
第48図　溝……82
第49図　竪穴状遺構５……84
第50図　竪穴状遺構７……85
第51図　特殊遺構１……86
第52図　縄文時代出土土器……88
第53図　縄文時代出土土器拓影(1)……89
第54図　縄文時代出土土器拓影(2)……90
第55図　古墳時代出土土器(1)……96
〜　〜
第67図　古墳時代出土土器(13)……108
第68図　出土陶磁器……127
第69図　石器(1)……134
〜　〜
第74図　石器(6)・石製品……139
第75図　鉄器・銭貨……141

表　目　次

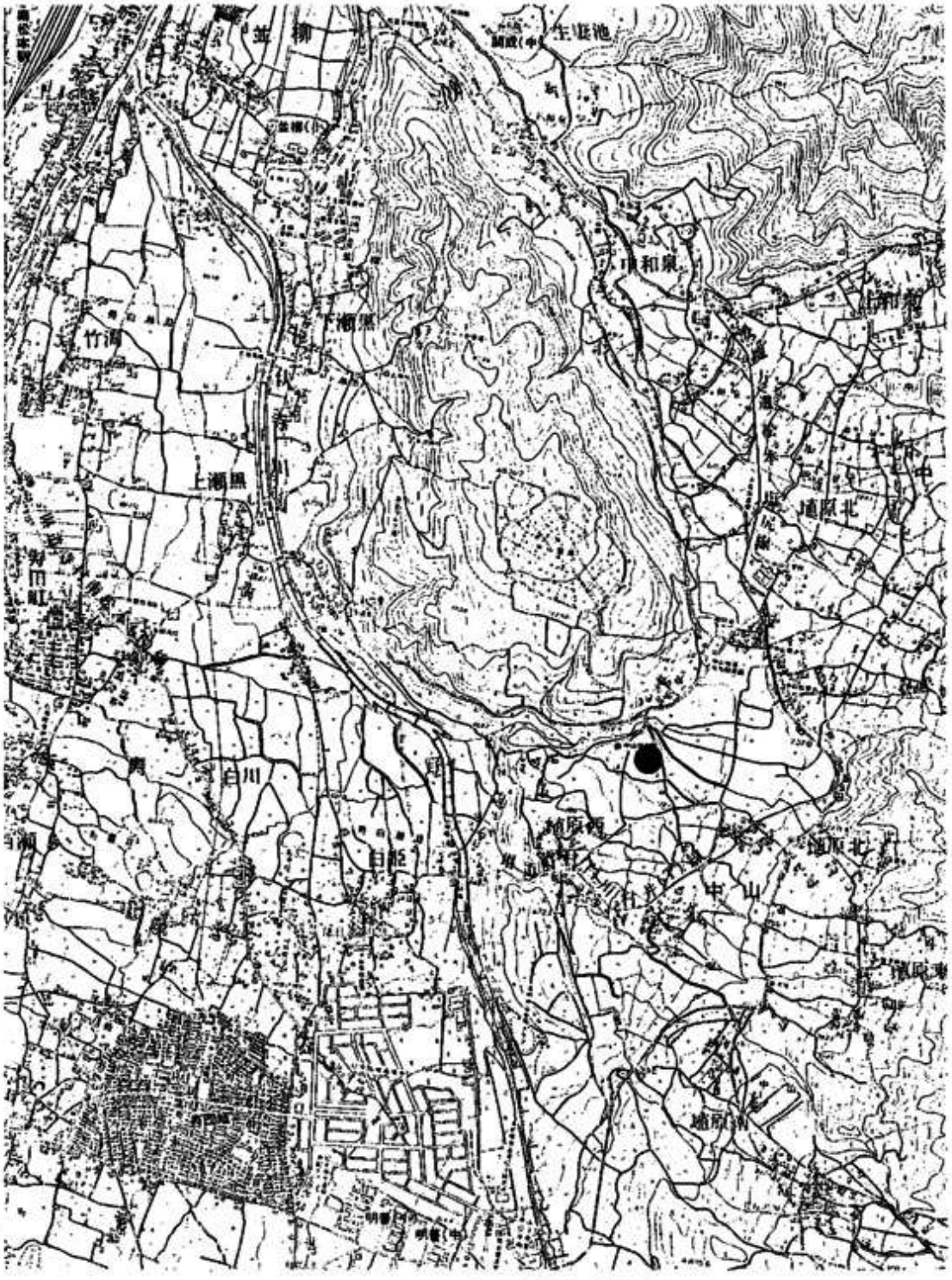
表１　作業の経過……4
表２　住居址一覧表……36
表３　土壙一覧表……70
表４　土壙分類相関表(1)〜(3)……78
表５　古墳時代土器一覧表……109
表６　石器一覧表……131
付図　全体図

第１章　調査経過

第１節　調査に至る経過

本遺跡調査については昭和61年に中山住宅団地関連道路改良工事に伴い、向畑遺跡内に予定路線がかかるためその保護について長野県松本建設事務所より問い合わせがあり、現地協議を行った。向畑遺跡は向畑古墳群に接しており、現在でも遺物の採集の出来ること、また市では隣接の中山保育所建設時にも事前の発掘調査をしている経過もあって、本遺跡を昭和62年度中に行われる県営ほ場整備事業に伴う発掘調査と並行して行うこととした。

委託契約は昭和62年７月10日に取り交し、８月27日より発掘調査にかかったが調査の結果、当初の予算にゆとりを生じたため昭和63年１月19日に委託料の減少額に伴う変更委託契約をかわした。



第1図　遺跡の位置

第2節　調査体制

この調査に関する体制は、次のとおりである。

団長：中島俊彦　（松本市教育長）**調査担当者**：神沢昌二郎　**現場担当者**：三村竜一　**調査員**：太田守夫、三村　肇、西沢寿晃、土橋久子、森義直、横田作重

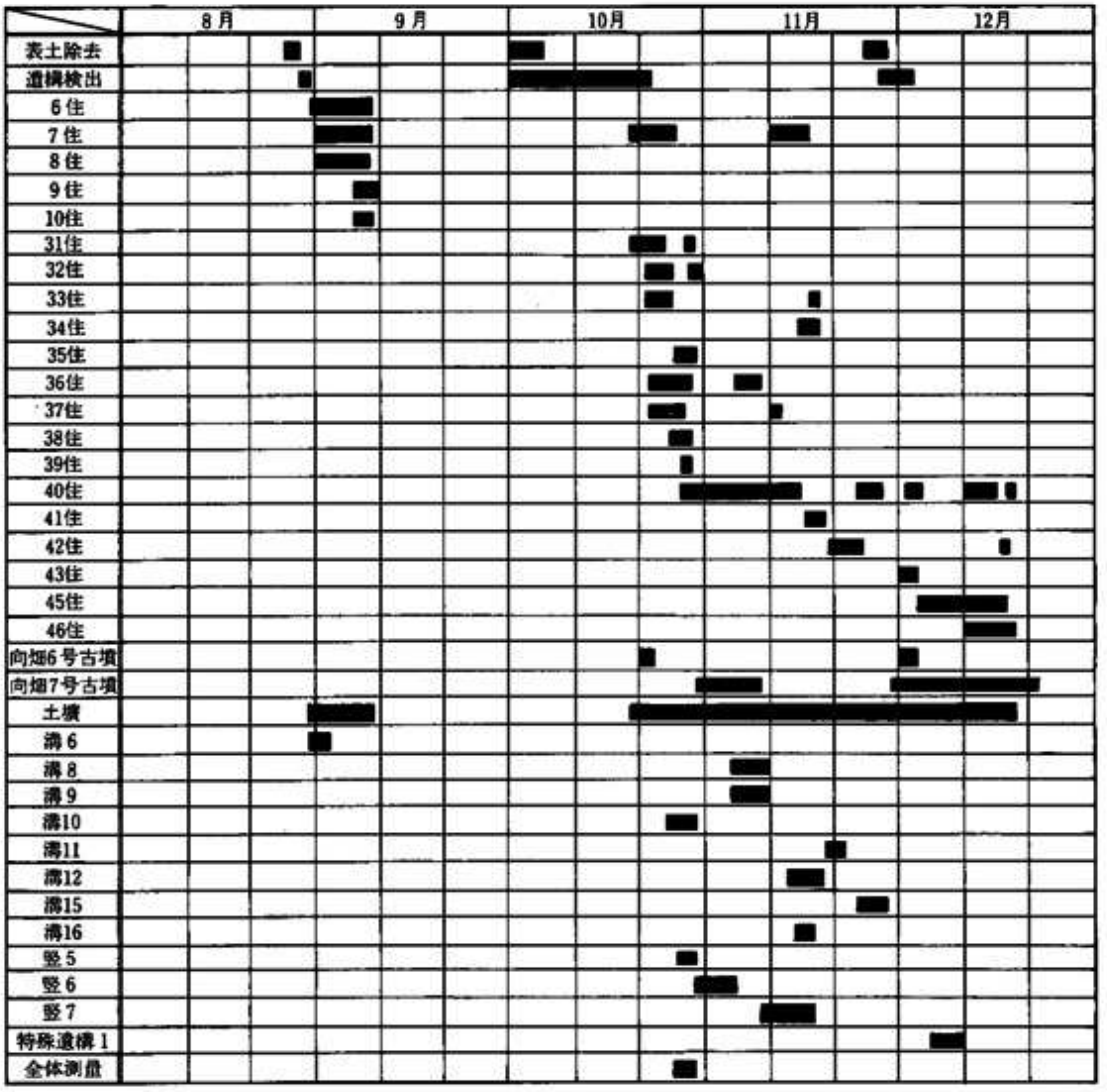
発掘作業参加者：青柳洋子、赤羽章、赤羽包子、朝倉定人、荒井唯邦、飯沼富夫、石合英子、石川未四郎、伊丹早苗、岩野公子、臼井美枝子、小野光信、大出六郎、大久保忠光、太田千尋、大谷成嘉、大塚袈裟六、奥原富蔵、開嶋八重子、葛原武善、金子富人、唐沢友子、小池直人、小岩井美津子、児玉春紀、小林謙次、小松啓吾、小松正子、神戸巌、沢柳秀利、荘秀也、瀬川長広、袖山勝美、田中泉造、土橋久美子、鶴川登、中島新嗣、中島督郎、中島治子、中島直美、中村恵子、中村文一、西原明子、西原いさ子、西原千代子、巾崎助治、林昭夫、林伊和夫、林源吾、藤本嘉平、降旗大太郎、穂刈真巳、町田庄司、真々部松子、丸山よし子、丸山愛徳、丸山久司、丸山誠、南山久子、見村ふじ子、村山正人、百瀬八江、横山篤美、横山倍七、横山保子、若井七十郎、若井孝夫

整理作業協力者：滝沢智恵子、大木たかみ、後藤ひとみ、開嶋八重子、若井孝夫、岩野公子、土橋久子、町田庄司、林佳孝、土屋君子、五十嵐周子、百瀬利子、西川卓志、山下泰永

事務局：浅輪幸市（社会教育課長）　小松　晃（文化係長）　柳沢忠博、大村敏博（主査）　熊谷康治、直井雅尚（主事）　洞田睦子

第3節　作業の経過

表1　作業の経過



第２章　遺跡の環境

第１節　向畑遺跡の地形と地質

１．位置と地形

本遺跡のある松本市中山向畑地籍（標高720m）は鉢伏山地西側の最も起伏に富む山ろく面にある。鉢伏山地西側の山ろく面のほとんどが小河川による扇状地の斜面形からなっているなかで、中山丘陵をはじめとする台地状・丘状の山地、傾斜度の高い斜面、浸食を受けた谷、盆状の凹地など複雑な地形からなっている。向畑一帯は、その中で丘状の地形面として存在する。ただ視点によっては、平たん面とも、丘とも、台地とも見える。

２．地層と土壌

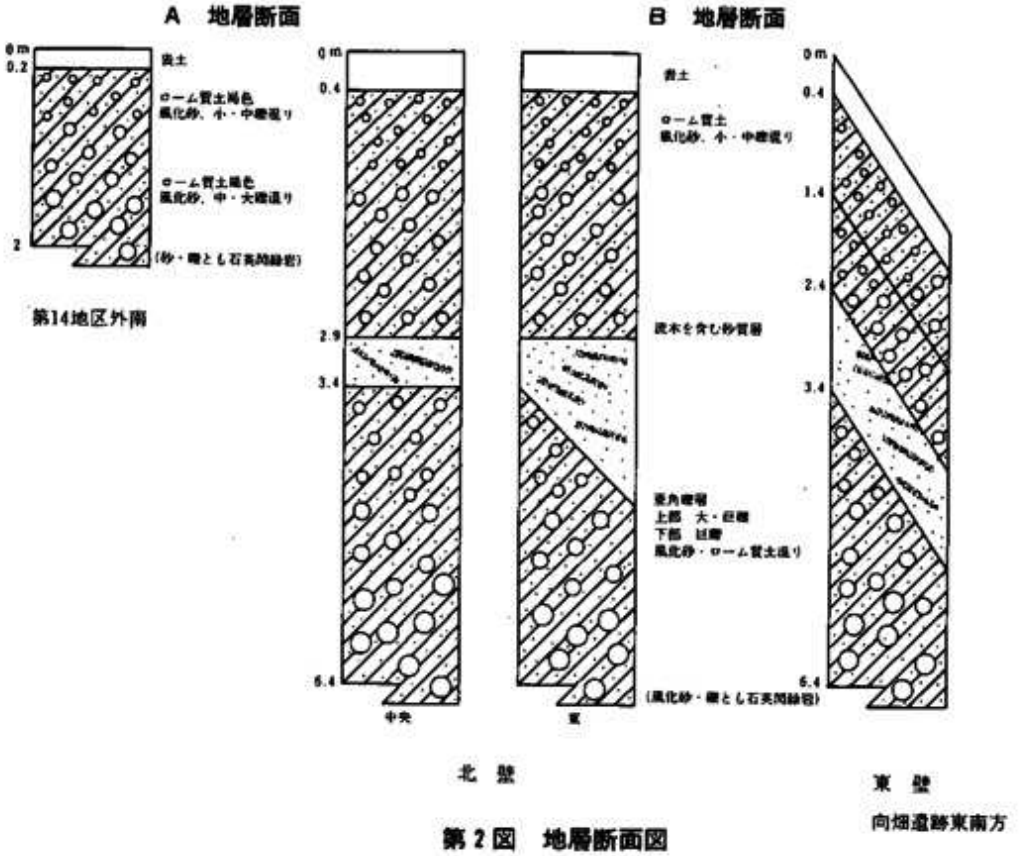
向畑遺跡の地表面や、発掘規模の深さの土層でみられる土壌は、石英閃緑岩の風化砂礫と、これを混えたローム質土壌である。従って、石英閃緑岩の含有鉱物である石英・長石・角閃岩・黄鉄鉱等を含む。長石は風化して、白っぽい部分が層をなしたり、粘土化してローム質土壌と混じ団塊状となる。一方石英粒に富むローム質土壌は、砂質化し砂層と間違えられる。

土壌の色は、黄褐色・赤褐色・暗褐色である。赤褐色土の赤味は風化した石英閃緑岩の鉄分の影響らしく、その土壌中や周辺に石英閃緑岩の風化団塊が多い。黄褐色土と成分的に違いはない。暗褐色土は腐植物がまじったもので、耕起によりさらさらしている。

これらの土壌の起源をみると、母材の石英閃緑岩は、東側の宮入山・高遠山など石英閃緑岩の山から、ローム質土は、千石や中山丘陵頂上部にみられる降下ロームと考えられる。向畑台地の基底は、更新世（洪積世）にこの岩石とロームによって形成され、後に断層をともなう構造運動や、河川の浸食により今日の姿となっている。

第２図Ａは発掘第ＸＩＶ地区の南に続く、ほ場整備中の畑地の北壁の地層面である。地表から２ｍほどの深さであるから、この土層の上部は向畑遺跡面と考えてよい。従って深さ１ｍ以下は地山といえる。上部は風化砂や小・中礫混りのローム質土壌で、下部に行くに従い、中・大礫となる。砂・礫はいずれも石英閃緑岩で礫は亜角～亜円礫である。

第２図Ｂは向畑遺跡東南方約150m、ほ場整備中の水田地帯の北壁及び東壁にあらわれた地層である。かつての向畑の畑地と北中島の水田との地形変換線の段差の斜面にあらわれたもので、高さ５ｍにも及んでいる。この露頭で注目されることは、基底が礫径３ｍにおよぶ石英閃緑岩の大・巨礫



第2図 地層断面図

（亜角礫）であることと、石英閃緑岩の小・中・大礫を含むローム質土壌の成層である。このような大巨礫や成層は現在、カニ堀沢右岸（中山丘陵南側）の農免道路沿いの露頭にみられるほか、大・巨礫はかつて宮入川（千石沢）の下流、尾池付近の浸食谷でもみられた。

3．地形の形成

中山地区の山ろく面をつくっている地層は、この基底礫層とその上部の風化砂、小・中・大礫混りのローム質土壌からなっている。現在、更新世（洪積世）の台地として、中山丘陵南面・向畑・坪の内・大久保山・棚峯・小丸山等の地形面、千石など東側の山ろく面となって残っている。向畑地籍の面の形成はこのころと考えられ、後の断層や浸食活動により、宮入川（千石沢）の谷、沖田の湖盆状の凹地、カニ堀沢等との間に段差が生れた。

中山地域の地形の形成は、中山丘陵をはじめとして、地層の露頭に計測できるものや、連続したものが少ないので、地形観察や推定による場合が多い。以下参考に概括的事項をあげておく。向畑遺跡はほとんどこの地形面の形成後に、成り立ったものと考えられる。

地殻運動等	地形の形成	地質年代
断層活動 大・巨礫の流下 火山灰の降下（波田ローム）	中山丘陵及び相当面の分離 基底層 千石のローム、中山丘陵のローム　山ろく面の形成（旧河床礫層）	更新世 （洪積世）
断層活動 （中山丘陵西部ー大久保山ー） ケイト山断層	ゴルフ場面、中山丘陵南面、向畑 坪の内、小九山、標峯、大久保山 等の地形面の形成	
浸食作用 （宮入川、和泉川等）	宮入川、和泉川の谷、沖田の凹地 新山ろく面の形成（新河床礫層）	完新世 （沖積世）

4．第IV地区で発見された溝　（第48図）

第IV地区は出土物がなく、一般に礫の多いしまった土層である。ここにN20°E、南西へ傾く集石状の溝が4本とその西側にN10°E、南南西へ傾く同じ集石状の溝が発見された。いずれも上方は地区内の北端で切れており、下方は南端付近で不明のようになったり、地区外に没している。N10°Eの溝15は石積みからみて、明らかに暗きょ排水溝であった。N20°Eの4つは集石にやや違いが見えるが、その下方を地区外まで追ってみると、Y状の溝となり、さらに延長はほ場整備中の畑地のなかに続いていた。このような溝は、先年保育園敷地（遺跡）発掘の際にも発見されており、土地の人によると地表面上の凹状の地下に、排水溝として入れているということである。恐らく雨水の排水と考えられるが、下方で湿地となっている。第IV地区の場合もY状の周辺に湿地性の植物があり、地面が湿っていた。

●向畑遺跡
1．林山腰遺跡
2．千鹿頭北遺跡
3．出川遺跡
4．出川南遺跡
5．百瀬遺跡
6．えり穴遺跡
7．赤木山遺跡群
8．雨堀遺跡
9．大久保山遺跡
10．古屋敷遺跡
11．南中島遺跡
12．坪ノ内遺跡
13．千蔵屋敷遺跡
14．坪ノ内古墳群
15．向畑古墳群
16．西越古墳群
17．鍬形ヶ原古墳群
18．小丸山古墳
19．棺護山古墳群
20．弘法山古墳
21．埴原牧
22．千石牧
23．推定信濃牧監庁跡

第3図　周辺遺跡

第2節　周辺遺跡

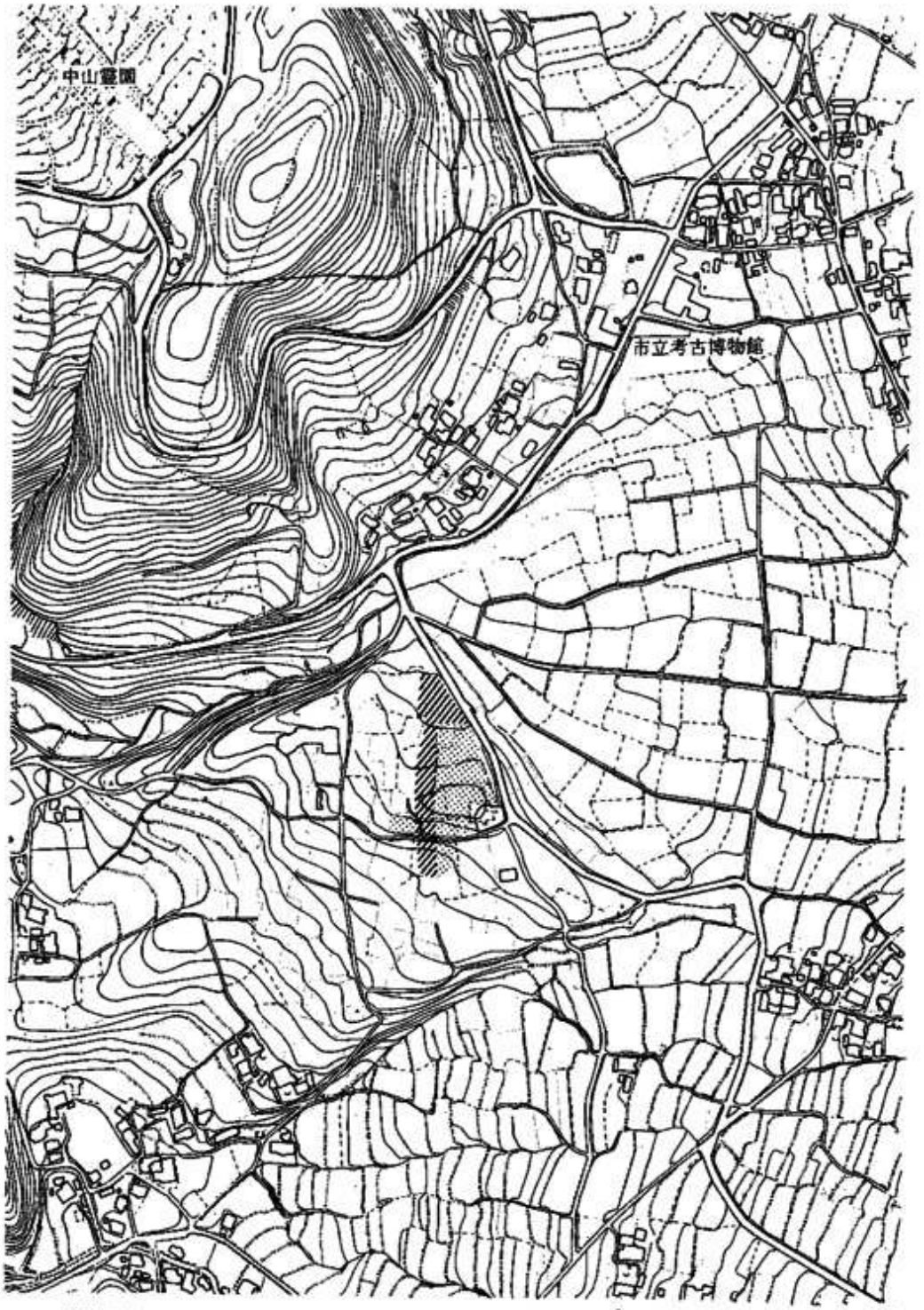
本遺跡は広域的に見れば東山山麓一帯に属する遺跡である。松本市の東南部分の主要遺跡を北から見ると、薄川左岸の山裾に縄文時代中期初頭と後期前半を中心とする林山腰遺跡があり、その南西に古墳時代を主とする千鹿頭北遺跡がある。西側の田川の近くには弥生時代から平安時代にかけての出川・出川南遺跡があり、それを上流に遡ると弥生時代中期の百瀬遺跡がある。さらに南に遡ると赤木山の山塊があり、この山は縄文から中世に至る16あまりの遺跡を擁している。田川に注ぐ塩沢川の右岸には縄文後・晩期の土製耳飾りを多出したえり穴遺跡がある。この川を遡り東に進むと山麓斜面に縄文中期の集落、雨堀遺跡がある。このように多くの遺跡に取り囲まれた中山であり、さらに中山の地籍の中だけでも数多くの遺跡がある。『長野県史』によれば13遺跡、61古墳の記載がある。松本市合計では462遺跡、うち古墳は143基であるから、ほぼ半数を占めている。地区内から採集された遺跡をみると小字よりも細かい地名で表示してあるため34遺跡にも及ぶ。

時代別にみれば縄文早期に坪ノ内、万蔵屋敷、大久保山、向畑。前期では坪ノ内、古屋敷、埴原、南中島、北中島、沖田。中期には生妻、弥生前、麦尾、八郎田、小山下、清水畑、反町、千蔵屋敷、万蔵屋敷、行応寺沢、中澗、洞入、平林、鍬形ケ原、西越、向畑、坪ノ内、山岸、沖田、北中島、久保添、深沢、古屋敷、仁王堂、千石、大久保山、沢尻、尾池平田。後期には坪ノ内、天王原の各遺跡があるが、特に中期が多く、その中でも昭和40年に発掘調査された坪ノ内遺跡は縄文時代の中期中半から後期前半を主体とする大遺跡である。その他深沢遺跡でも昭和40年に発掘調査をしており、縄文時代中期中半の住居址2、平安時代の住居址1軒を出している。

弥生時代の遺物は過去数点しか出土していない。しかし今回調査の向畑遺跡からも石庖丁が出ており、今後の調査によっては増える可能性がある。

古墳時代では弘法山古墳と和泉川を隔てて、中山36号古墳がある。この二つの古墳は4C中半に位置し県内でも最古の古墳の一つである。中山36号古墳周辺は棺護山古墳群と呼ばれ後期の古墳がある。後期の古墳は東山山麓の集落内にも点々として存在している。小丸山古墳のつづきに煙滅してしまったが柏木古墳があり、大正14年の発掘調査によって玉類、金環・銀環・鉄刀などの他土師器の高坏、須恵器の高坏・蓋・坏等多量の優品が副葬されていた。本遺跡そのものは向畑古墳群に含まれており、そのすぐ西側には坪ノ内古墳群がある。向畑遺跡の北側の沢を隔てた中山霊園周辺は鍬形ケ原古墳群としてまとめられ、その東側には西越古墳群がある。

奈良時代から平安時代になると直営の牧場がつくられ、南側山麓に埴原の牧と千石の牧が残っている。またそれらの牧をも含めて信濃全体の牧の統括官庁としての牧監庁が本遺跡の北側、市立考古博物館脇にある。このように本遺跡は中山地区の遺跡群の中にあり、その中でも広範囲に広がる遺跡としては最大である。



県道改良工事に伴う調査範囲

県営ほ場整備事業に伴う調査範囲

第4図　遺跡範囲図

第3章　調　査

第1節　　調査の概要

発掘調査は遺跡の範囲内で県道建設用地にかかる畑地を調査地として設定し、県営ほ場整備事業による発掘調査と並行して行った。そのため遺跡の調査方法は全体の流れに従っているので、非能率な点もあるかも知れない。調査結果についても向畑遺跡全体の評価に基づいて行っているため、本調査範囲のみでは把握出来ない点についても言及することがあるかと思うが予めご了承いただきたい。

a 調査の方法

・該当の畑6枚について、畑作の休耕に合わせて調査を行った。

・畑の形状を損なわない事が前提であったので、掘り出した順に畑の区割りごとの番号Ⅰ～Ⅵまでをつけた。

・実質調査面積はⅠ区250㎡、Ⅱ区460㎡、Ⅲ区1,600㎡、Ⅳ区280㎡、Ⅴ区60㎡、Ⅵ区260㎡、計2,900㎡である。

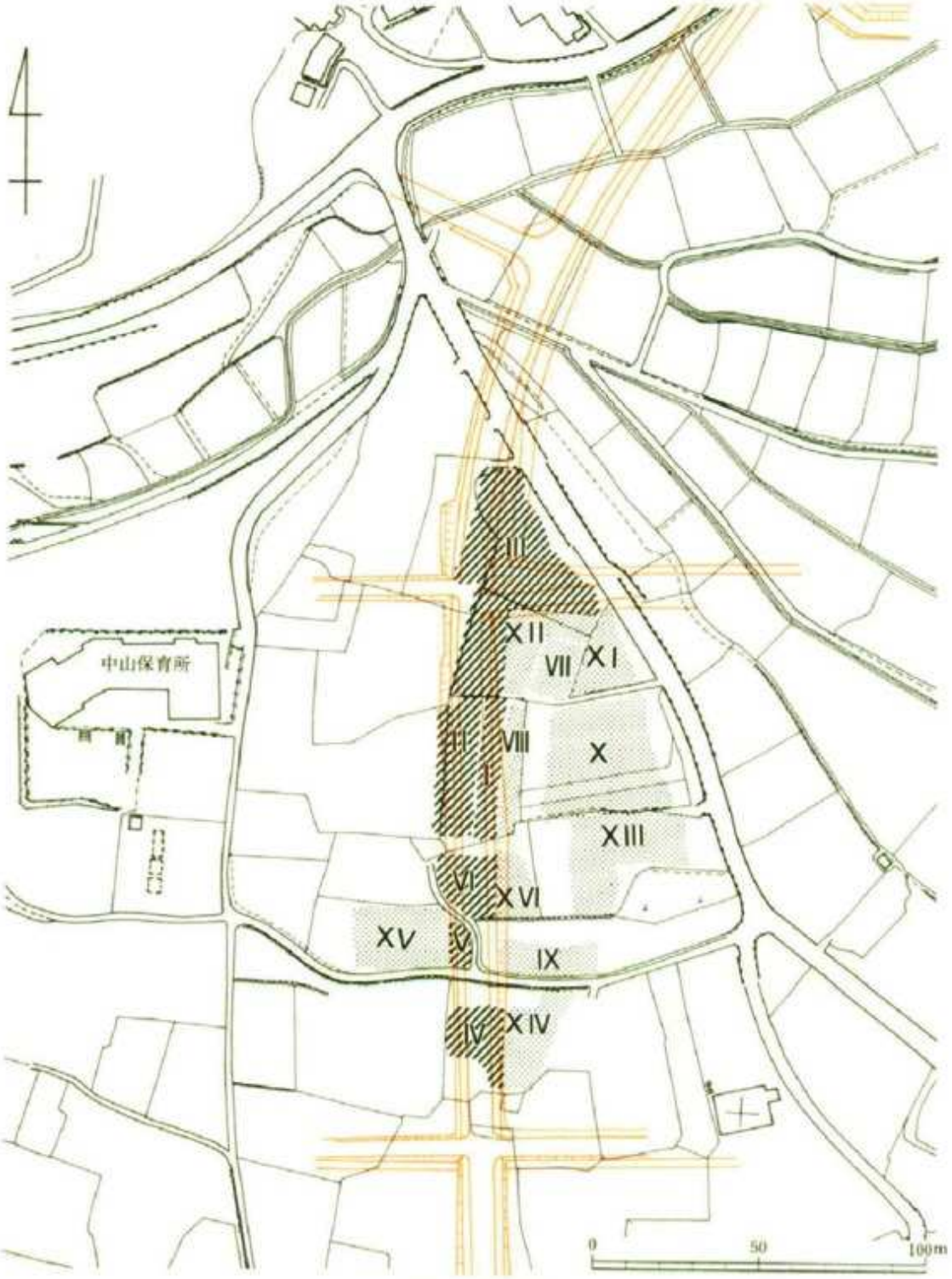
・ほ場整備事業にかかわる発掘調査は県道の東側とし、西側は63年度調査分とした。

・調査は重機による表土除去後、人力により遺構の検出作業を行い、確認された遺構から掘り下げを開始した。

・測量についてはⅢ区東側に設定した基準点から南北・東西に基準線を振り出し、そこから3m間隔に直交する線を振り、調査地内を3×3mのメッシュで覆い、調査地内の求める位置を基準点からの方向と距離の組み合わせ、N・S・E・Wと数字によって表現できるようにした。ただしⅠ区については平板測量を行い、後の遺構図整理の段階で平面図上にメッシュを移し、他の調査区と同様に標記できるようにした。標高は調査区が南北に長く、高低差も大きいため5本の杭を埋設して基準とした。

・遺構の命名については各地区の検出が終了し、掘下げが開始された時点でその性格を推定してつけた。尚、本調査とほ場整備事業に伴う調査は開発起因が異なるために別々の調査報告書となるが、本来は一つの遺跡であるので遺構番号については一連のものを付した。今回の調査で新たに発見された2基の古墳については、1966年松本市教育委員会作成の中山地区古墳調査表に向畑1～5号墳が掲載されているので、これを踏襲して向畑6・7号古墳と命名した。

・竪穴住居址・竪穴状遺構は土層観察用の畔を十字に残して掘り下げた。土壙は2分割して先ず


中山保育所
III
XII
VII
XI
II
VIII
I
X
XIII
VI
XVI
XV
V
IX
IV
XIV
0
50
100m

第5図　調査範囲図

半分を掘り下げ、土層観察を行った後全掘した。古墳については既に墳丘部が削平されていたため、周溝のみで主体部は検出されなかった。

b 調査結果

・遺構　竪穴住居址　20軒（古墳時代前期19、古墳時代中期１）

古墳　　２基（６号古墳は過去の削平により地山のマウンドを検出するにとどまったが、直径16mの円墳と考えられる。７号古墳は６号古墳の南東に隣接する。周溝のみが残り、周溝から供献用の一括土器が出土した。直径22mの円墳である。）

土壙　　366基（縄文時代約30、古墳時代約10、その他は中世から近世に属する。）

溝　　８基（縄文時代２、他は時期不明）

竪穴状遺構　３基

特殊遺構　　１基（７号古墳周溝を切る長方形の遺構）

・遺物　竪穴住居址を中心として各種遺構から土器・石器・石製品・鉄器・銭貨等が出土した。土器には縄文土器・土師器・陶磁器があり、石器・石製品には石鏃・石錐・石匙・スクレイパー・打製石斧・磨製石斧・凹石等がある。鉄器は釘・刀子・把手等５点が出土。銭貨は宋銭７枚が出土。

c 成果

・古墳時代前期の大集落の一部が検出されたこと。

・古墳２基が検出されたこと。

・中世の大墓址群を検出したこと。

第２節　遺構

1　住居址

(1)　第６号住居址　（第６図）

遺構　Ⅰ区南側S27～36、W39～43に位置する。７住・８住を切り、土壙55・56・124・125に切られている。調査は畑の形状を損なわないことが前提であったので、Ⅰ区・Ⅱ区の間に未調査部分が生じてしまい、本址西側部分は検出されなかった。長軸方向はN－0°を示し、南北5.0m、東西4.0m程の隅丸方形プランを推定する。壁の傾斜は外傾気味に立ちあがり、壁高は40cmを測る。覆土下層の黄褐色土から床面にかけては、20～30cm大の角礫が数個みられた。床面は二次堆積砂質ロームを叩き締めた堅緻なもので、比較的平坦であった。床面を精査したが、ピットはP_1を検出したのみであった。P_1は南北180cm、東西40cmの規模をもち、東壁際中央に設けられて溝状を呈するものであ

る。土壙55に切られるものの断面形は台形で、50cmと深く掘り込まれ、遺物出土状態からも貯蔵穴とみて間違いない。

遺物　床面上及び貯蔵穴から土師器が出土している。床面上からは高坏・鉢・甕・手づくねが確認されている。貯蔵穴からは、底面から直口壺など一括土器が出土した。土師器は、いずれも古墳時代前期の様相をもっており、本址の時期もそこに求められる。(第55図)

(2)　第8号住居址　(第6図)

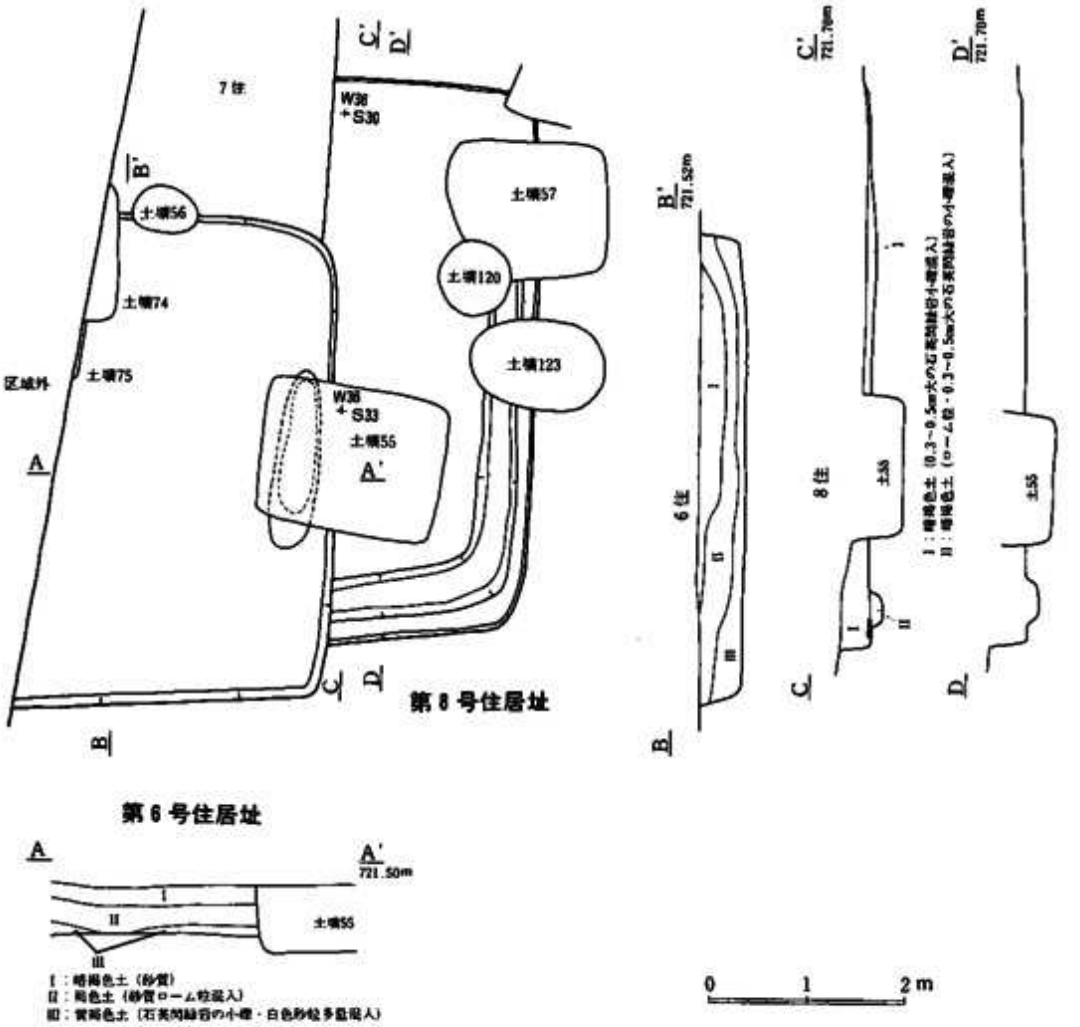
遺構　I区南側S30～36、W37～39に位置する。本址は西側を6住・7住に切られ、更に東側でも土壙55・57・59・120・123に切られているため大部分を失っている。6住・7住との切り合い関係は本址がもっとも古く7住、6住の順で新しい。長軸方向はN－0°を示し、南北5.7mの隅丸方形または隅丸長方形プランが推定される。壁は南側での残存状態が良好であり、垂直に近く立ちあがり壁高は50cmを測る。二次堆積砂質ロームを掘り込んだ床面は、平坦で堅緻であった。床面精査の結果、東壁から南壁にかけて壁より20cm程内側を廻る幅50cm、深さ15cmの周溝が検出された。ピット・炉は検出されなかった。

遺物　覆土～床面にかけて土器片が少量みられた。土器は古墳時代前期に属する土師器で、鉢・壺などが出土している。南壁際、周溝内から甕など一括土器が確認された。(第56図)土師器より本址の時期は、古墳時代前期に比定できる。

(3)　第7号住居址　(第7図)

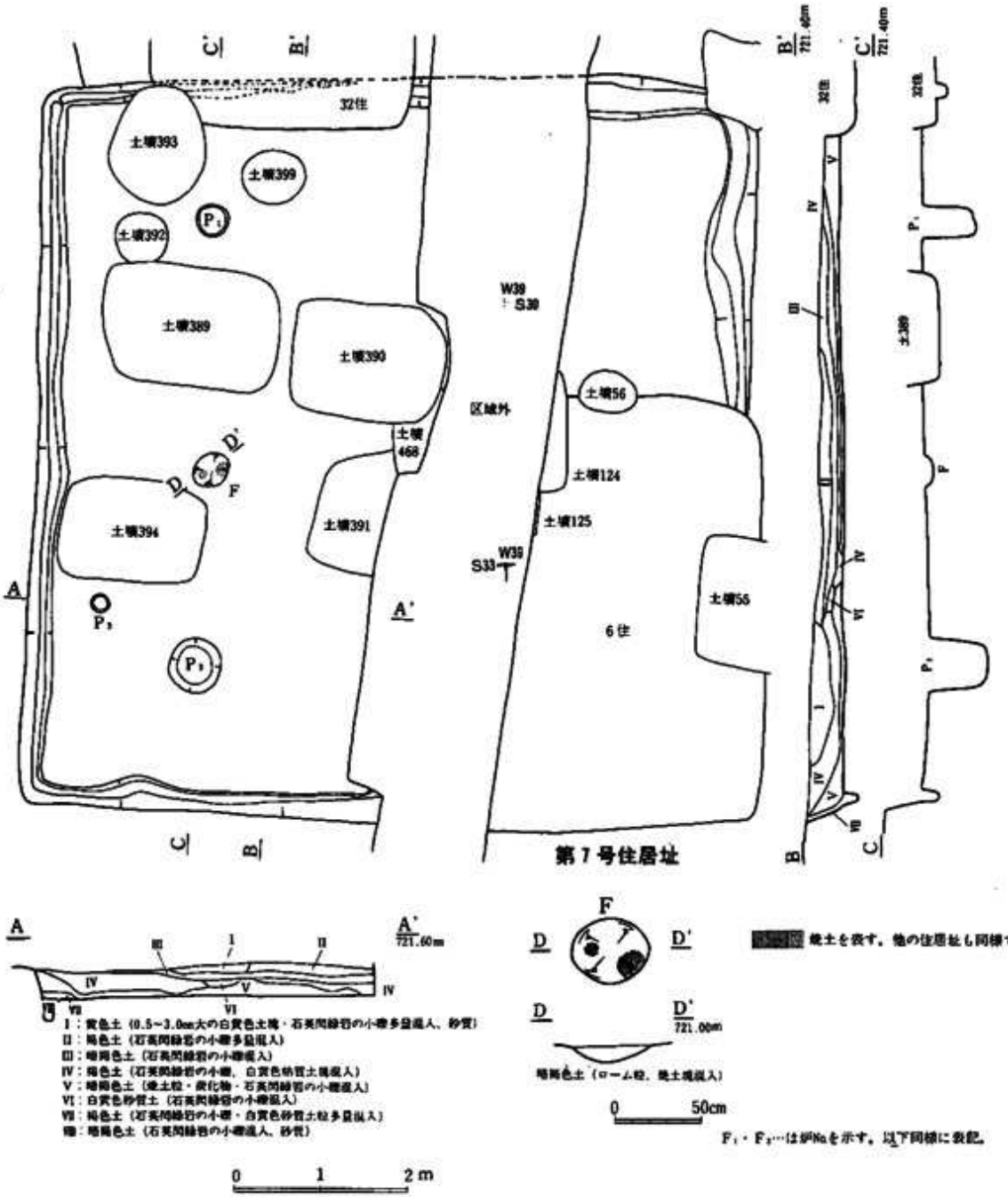
遺構　I区S27～36、W39～41、II区S27～36、W43～48に位置する。8住・41住、土壙382、388を切り、6住・32住、土壙56・60・124・125・389・390・391・392・393・394・468に切られる。住居址の前後関係は、古い順に41住→7住→32住と8住→7住→6住となる。南北が8.6m、東西が8.2mと本遺跡の中では最も規模の大きい住居址であったが、畑地の形状を維持するため本址中央部が未調査となってしまった事は非常に遺憾である。平面形は方形を呈し、主軸方向は出入口を東側と想定してN－90°－Eとなる。壁は外傾して立ち上がり、30～40cmの高さをもつ。覆土は、石英閃緑岩の小礫が多量に混入する二次堆積ロームと暗褐色土であった。本址に伴う施設として周溝・ピット・炉を検出した。周溝は、幅20～50cm、深さ20～30cm程でほぼ壁直下を全周すると考えられるものである。ピットはP_1～P_3を検出した。P_1・P_2は、いずれも深さ66cmを測り円形を呈しており、位置からみても主柱穴に間違いない。東側に2本の柱を想定し4本柱の住居と考えられる。炉はP_1・P_2の間にある。45×37cmの楕円形を呈する地床炉で、半円状に20cm程掘り込まれている。炉址の覆土は、砂質ロームで焼土塊を混入していたが、板状にされた粘土塊が数片確認され、炉底面に貼られたものではないかと考える。

遺物　土師器がII区からのみ出土した。高坏・坩・鉢・甕・壺などがみられ、炉付近からは一括土器の出土も確認された。土師器は古墳時代前期のもので、本址の時期もそこに求める。(第55図)



第6号住居址

第6図　第6・8号住居址


第7号住居址
32住
6住
区域外
土壙393
土壙399
土壙392
土壙389
土壙390
土壙468
土壙394
土壙391
土壙56
土壙124
土壙125
W39
S30
S33
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
F
P₁
P₂
P₃
721.40m
721.60m
721.00m
焼土を表す。他の住居址も同様である。
Ⅰ：黄色土（0.5～3.0cm大の白黄色土塊・石英閃緑岩の小礫多量混入、砂質）
Ⅱ：褐色土（石英閃緑岩の小礫多量混入）
Ⅲ：暗褐色土（石英閃緑岩の小礫混入）
Ⅳ：褐色土（石英閃緑岩の小礫、白黄色砂質土塊混入）
Ⅴ：暗褐色土（焼土粒・炭化物・石英閃緑岩の小礫混入）
Ⅵ：白黄色砂質土（石英閃緑岩の小礫混入）
Ⅶ：褐色土（石英閃緑岩の小礫・白黄色砂質土粒多量混入）
暗褐色土（ローム粒、焼土塊混入）
暗褐色土（ローム粒、焼土塊混入）
0 50cm
0 1 2 m
F₁・F₂…は炉Noを示す。以下同様に表記。

第7図　第7号住居址

(4) 第9号住居址　(第8図)

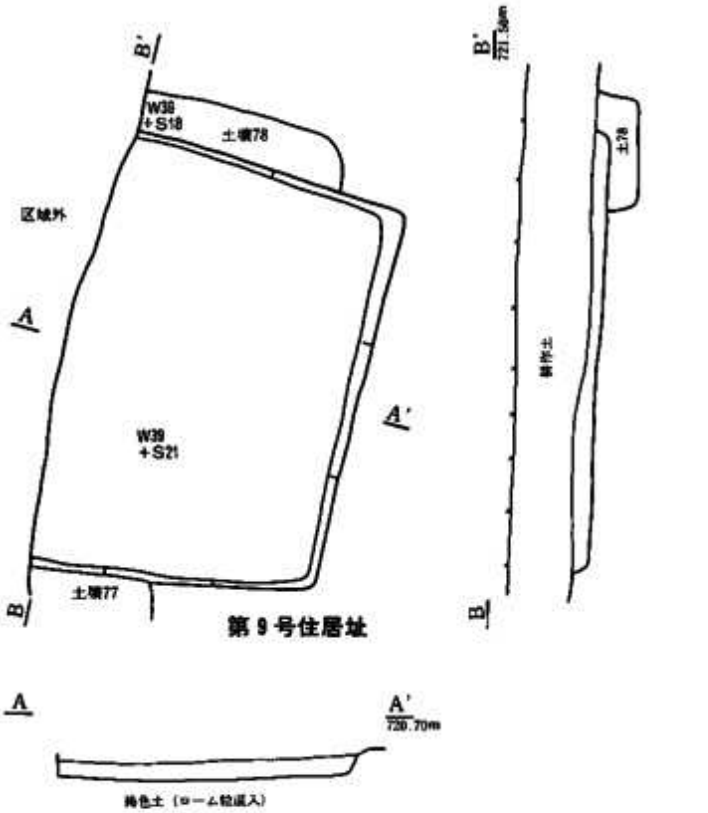
遺構　Ⅰ区中央西側S18～22、W36～39に位置する。土壙78を貼り、土壙77に切られる。西側は調査区域外にかかり、東側半分を検出したのみである。長軸方向はN－104°－Eを示し、南北4.1mを測り方形プランを推定する。覆土の褐色土には、ローム粒が混入する。壁は二次堆積砂質ローム中に掘り込まれ、壁高は15～30cmを測る。壁の立ちあがりは緩やかであった。床面は比較的平坦だが、北に向かって僅かに傾斜をもつ堅緻なものである。丁寧に床面精査を行なったが、周溝・ピット・炉等住居址に伴う遺構は検出されなかった。

遺物　極めて少量の縄文土器・土師器が出土した。いずれも小破片であり、縄文土器は混入品であると考えられる。土師器は古墳時代前期の様相をもっており、本址の時期もそこに求めたい。

(5) 第10号住居址　(第8図)

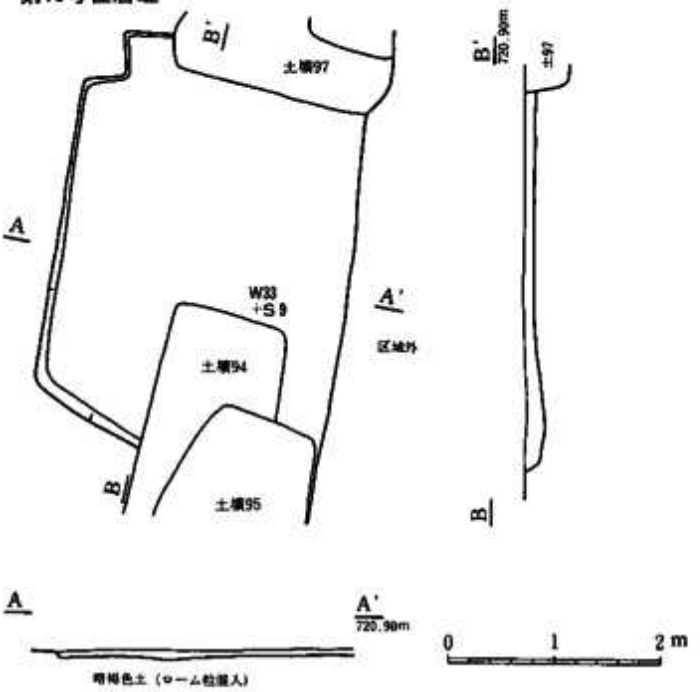
遺構　Ⅰ区北側S6～10、W32～36に位置する。東側は調査区域外にかかるため、西側半分の検出をしたのみである。また南北の壁も土壙94・95・97に切られているため、ごく限られた部分の調査となった。長軸方向はN－101°－Eを示し、規模は南北で4.0mを測る。平面形は北東・南東の隅を確認したのみであるが、方形あるいは長方形を呈すると考えられる。また、北壁には張り出し部をわずかに残すが、今回の調査で31号住居址に同様の張り出し部を検出している。壁高は10～16cmと低いため不明瞭ながら緩やかに立ち上がるものと想定できる。床面は粘性の強い二次堆積ロームに掘り込まれている。非常に堅緻であり、起伏をもち南に向かって傾斜している。本址に伴うピット・炉・周溝等は検出されなかった。

遺物　少量の土器片が出土しているにすぎない。古墳時代前期の土師器であり本址の時期もそこに求める。

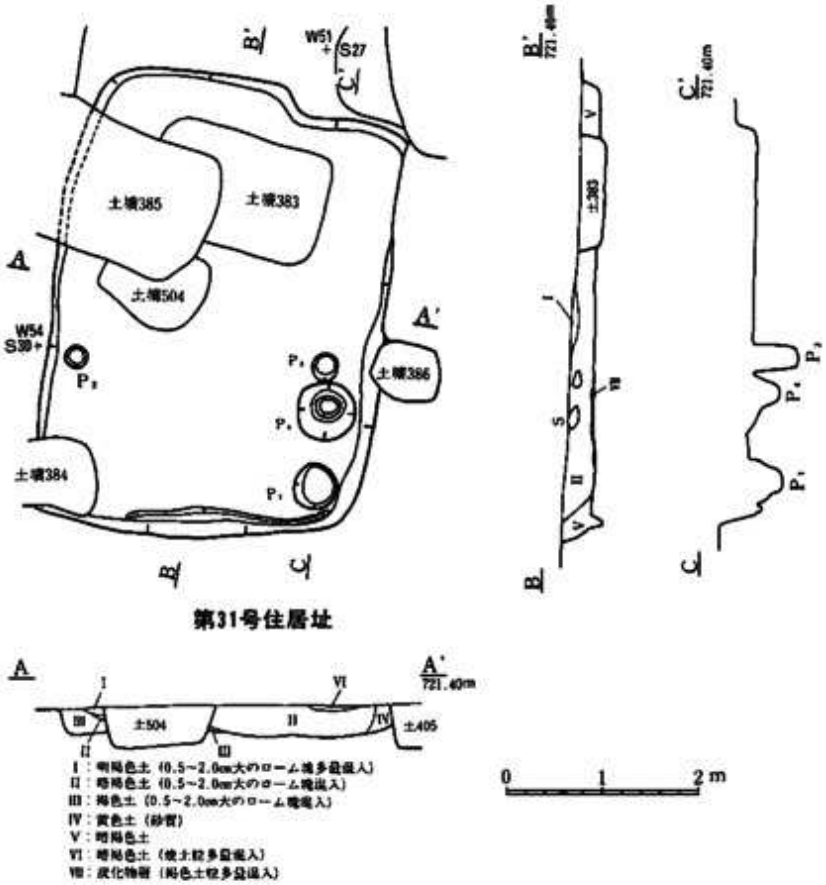


第9号住居址

第10号住居址



第8図　第9・10号住居址



第 9 図　第31号住居址

(6)　第31号住居址　（第 9 図）

遺構　II区南側S27～32、W50～54に位置する。土壙383・384・385・386・408・504に切られている。やや粘質の二次堆積ローム中に掘り込まれ、南北4.8m、東西3.5mの規模をもつ。長軸方向が、N－10°－Eを示す隅丸方形のプランを呈するが、北壁西側には長さ200cm、幅30cmの張り出し部がある。覆土は明褐色～暗褐色土が堆積しており、上層から底面にかけて10～30cm大の角礫が20数個見られた。壁はいずれも30cm前後の高さを測り、緩やかに立ち上がる。床はやや起伏を持ち、南に向かって傾斜しているが地山を叩きしめ堅緻なものになっている。南壁直下では幅 6 ～14cm、長さ 2 mの小規模の周溝が検出された。ピットは 4 ヶ確認され床面からの深さは、それぞれP_1：30cm、P_2：6 cm、P_3：46cm、P_4：30cmを測る。P_1は南東隅にあり主柱穴の可能性がある。P_2・P_3は配置から支柱穴とも考えられるが、深さの点に問題がある。P_4は位置・断面形より貯蔵穴と思われる。

遺物　覆土上層～床面にかけて比較的多く出土した。土師器の壺・甕などで古墳時代前期の様相をもつ。（第56図）本址は遺物よりみて古墳時代前期に比定される。

(7) 第32号住居址 (第10図)

遺構 II区南側S24～28、W43～47に位置する。7号・41号住、土壙409を切り、土壙393に切られる。7号・41号住との切り合い関係は、41号住→7住→本址の順に新しくなる。主軸方向は、N－6°－Eをとり平面プランは、3.1mの隅丸方形を呈し本調査で最も小形の住居址である。壁は外傾して立ち上がり、壁高はいずれも30cmを測る。壁・床面ともに粘質二次堆積ローム中に掘り込まれており、床面は良好な状態で堅緻、平坦であった。尚、南側では7号住を切っているが、この部分では貼り床はされず7号住の覆土である暗褐色土をそのまま床面としていた。ピットは20cmの深さをもつP_1のみを検出したが、その性格は不明である。周溝・炉址は確認されなかった。

遺物 覆土から床面にかけて比較的多く見られた。坩・甕・壺などの土師器片がほとんどであった。(第56・57図) 土師器は古墳時代前期の様相をもつもので、本址の時期もそこに求める。

(8) 第33号住居址 (第10図)

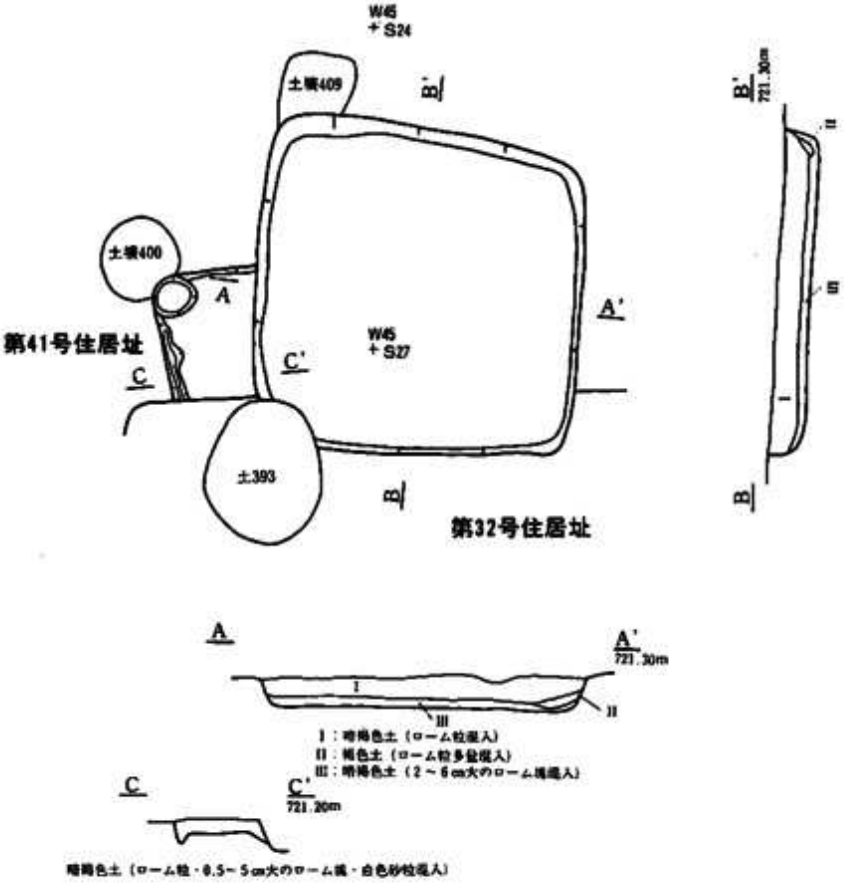
遺構 II区中央西側S20～23、W41～44に位置する。土壙412、414、415、416、436、439、502に切られ、大部分が破壊されている。また東側は調査区域外にかかる為、不明な点が多い。規模は南北で3.4mを測り、方形プランを推定する。壁は外傾気味に立ち上がり、壁高は20cmと浅い。床面は砂質ローム中に掘り込まれ、残存部分では平坦、堅緻な状態であった。ピット・周溝・炉など本址に伴う遺構は検出されなかった。今回は竪穴住居址として扱かったが、あるいは竪穴状遺構として捉えられるものかもしれない。

遺物 遺物は非常に少ない。いずれも土師器小片であり、古墳時代前期に属するもである。遺物より本址の時期もそこに比定される。

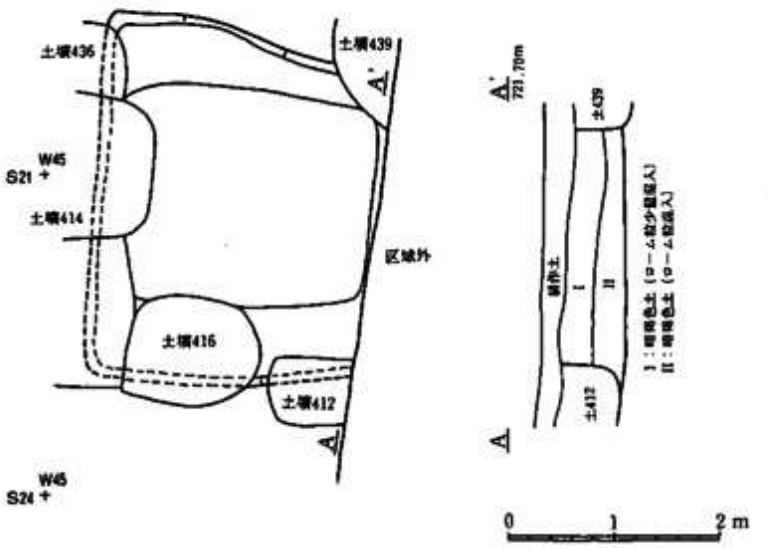
(9) 第41号住居址 (第10図)

遺構 II区南側S24～28、W43～46に位置する。土壙400を切り、7号・32号住に切られる。この切り合いは本址→7住→32住の順に新しい。その大半を7住と32住に切られ、僅かに北西コーナーを検出したのみである。平面形・規模は、不明瞭ながら平面プラン方形あるいは長方形が推定され、規模は北東コーナーが32住に切られている事から東西で3.6m以内の小形の住居址と考えられる。壁は垂直に近く立ち上がり、壁高は14cmを測る。床面は粘質の二次堆積ローム中に掘り込まれ、比較的軟弱で起伏が激しい。西壁際には幅15cm、深さ8cmの周溝が検出された。ピットは北西隅にP_1(45×40×35cm)が検出され、柱痕が確認できた。位置から見て主柱穴の1つと考えられる。

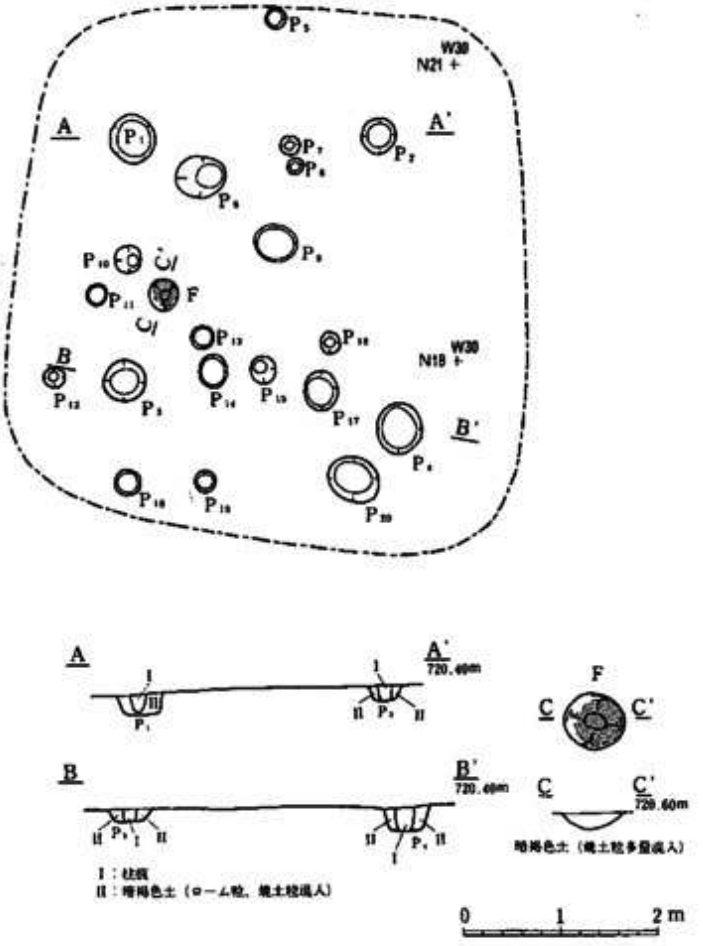
遺物 少量の土器が出土した。周溝北寄りより一括土器の出土が確認された。いずれも土師器片であり、鉢・坩と考えられる。(第61図) 土器よりみて本址の時期は、古墳時代前期と考えられる。



第33号住居址



第10図　第32・33・41号住居址

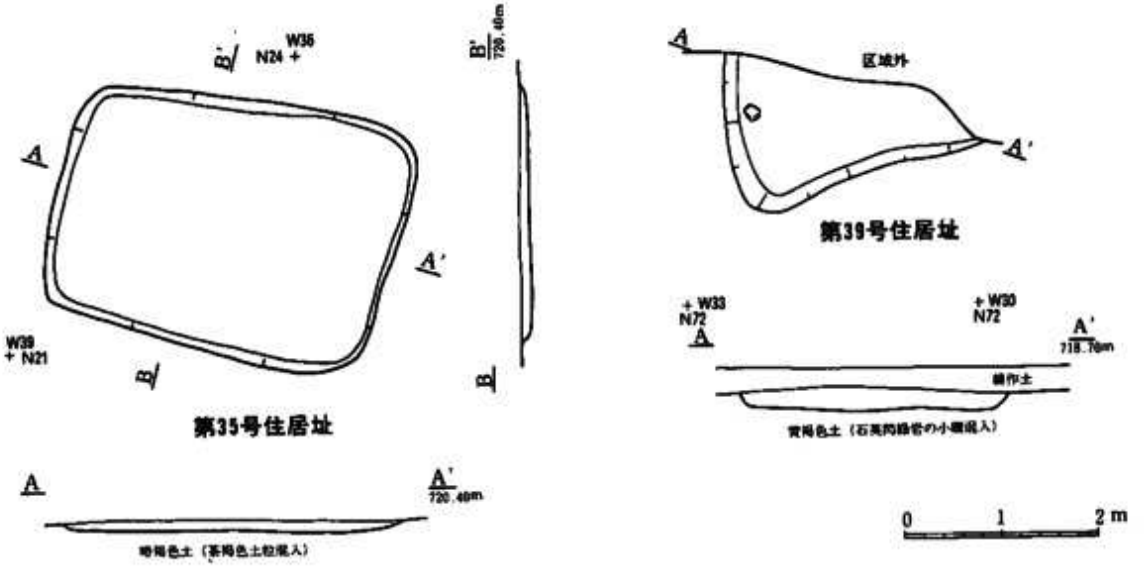


第11図　第34号住居址

(10)　第34号住居址　（第11図）

遺構　Ⅲ区南側N16～22、W29～34に位置する。本址は耕作の削平によって、床面が既に失われていたため平面形・規模は不明だが、炉址から主軸方向はN－81°－Eを示すと考える。検出の際に炉址を確認したことにより本址の存在を明らかにし、周囲に主柱穴を求めたところP_1～P_4が認められた。調査区南側では広範囲にわたりピットが集中しており、本址でも主柱穴を基に想定したプラン内に計16ヶが存在した。ピットは本址に伴う可能性もあると考え、それぞれP_5～P_{21}とした。土層観察の結果P_1～P_4は柱痕を認めたが、その他のピットの性格は明らかに出来なかった。炉址は直径60cmを測り円形を呈する地床炉で東柱穴間に位置する。

遺物　極めて少量の土師器片がピット内より出土した。遺物より古墳時代前期に属する。



第12図　第35・39号住居址

(11)　第35号住居址　（第12図）

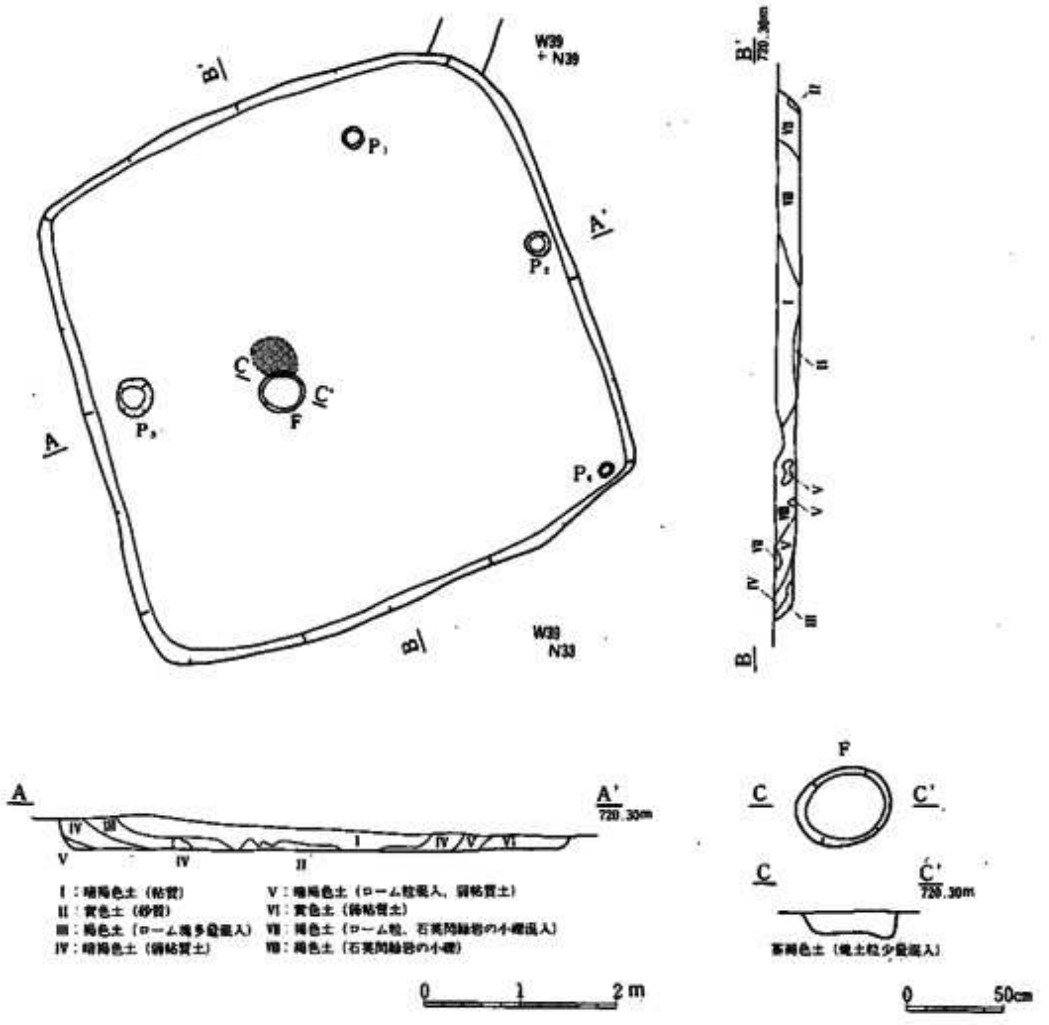
遺構　Ⅲ区南側の西寄りN21～24、W35～39に位置し、土壙545を貼る。砂質ローム中に掘り込まれ、南北2.6m、東西3.6mの規模を持つ小形の住居址である。隅丸方形プランを呈し、長軸方向はN－16°－Eを示す。壁高が12cmと浅く、壁の傾斜は不明確だが非常に緩やかに落ち込んでいる様子が窺える。床面はやや軟弱だが、平坦であった。尚、本址にはピット・周溝・炉などの施設は検出されず竪穴状遺構として捉えられるものかもしれない。

遺物　非常に少ない。土師器の壺と陶器の皿がある。（第57図）　陶器の皿は、覆土上層からの出土で混入品と考えられる。遺物より本址は古墳時代前期に比定される。

(12)　第39号住居址　（第12図）

遺構　Ⅲ区北端N69～71、W30～33に位置する。本址の大部分は区域外にかかり、僅かに南西コーナーを検出したのみである。平面形・規模など不明な点が多い。壁は外傾して立ち上がり、壁高は15cmを測る。床面は砂粒が大量に混入する軟質のローム質土でやや起伏がある。床面精査を行ったが、ピット等の施設は検出されなかった。

遺物　古墳時代中期に比定される土師高坏・壺・坏、須恵蓋が数点出土している。（第59図）今回の調査及びほ場事業に伴う調査でも、同時期の遺物は古墳２基からの出土品に見られるだけのものである。本址は住居址と断定するには不明瞭な部分が多く、遺物から古墳の周溝の可能性も考えられる。



第13図　第36号住居址

(3) 第36号住居址　（第13図）

遺構　Ⅲ区西側中央N34～39、W38～45に位置し、溝12を切る。一辺約5.4mの隅丸方形を呈する。主軸方向は西側に出入口を想定して、N－68°－Eを示す。壁はかなり外傾して立ち上がり、壁高は12～35cmを測る。床面は砂質ローム中に掘り込まれ、堅緻で平坦なものであった。ピットは、P_1～P_4の4ヶが確認されたが、位置、深さからいずれも主柱穴とは考え難い。炉址は中央部西寄りに設けられ、48×40cmの円形を呈する地床炉であり、断面形は皿形に12cm程掘り込まれる。炉の覆土には少量の焼土粒が混入していた。

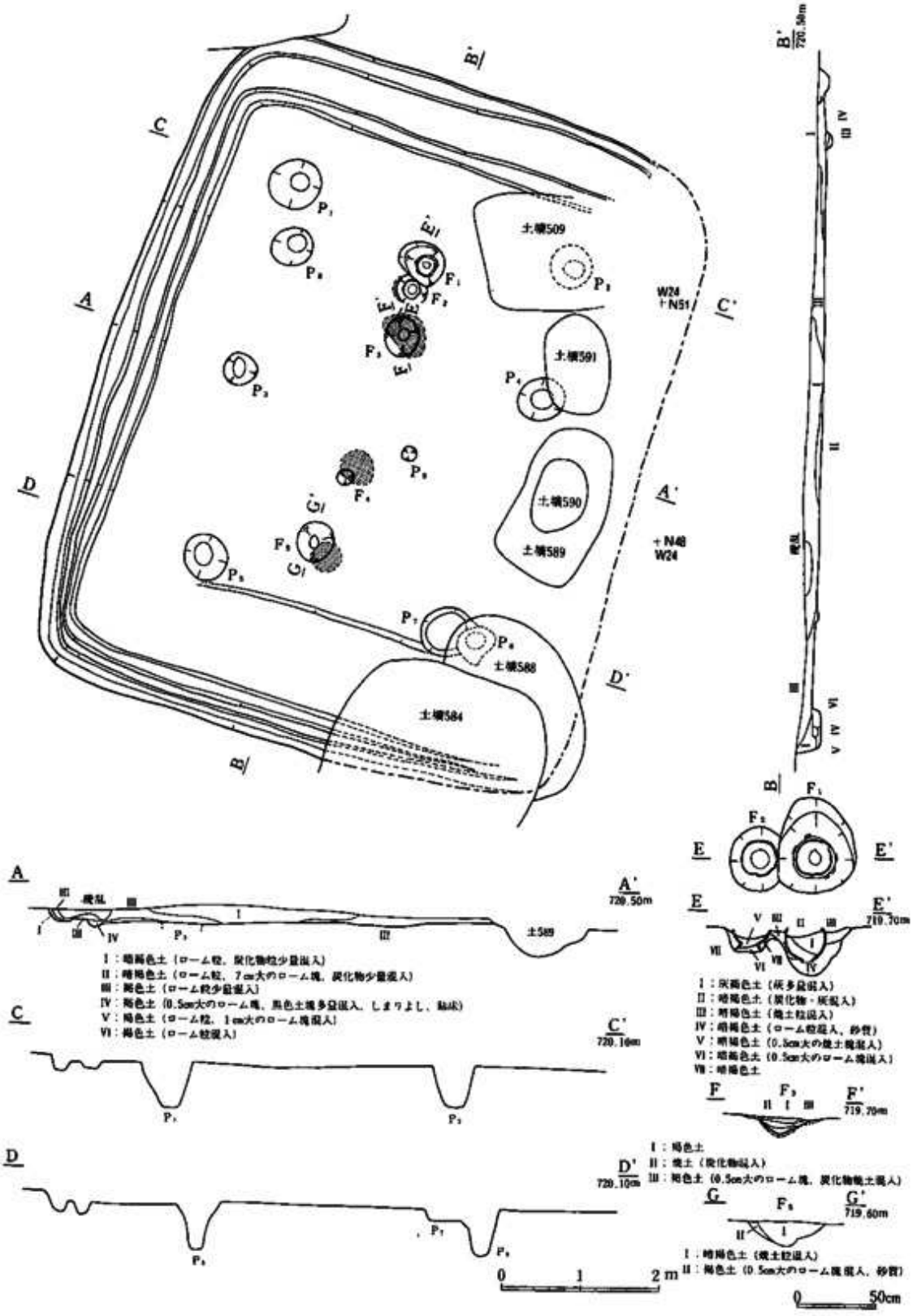
遺物　覆土上層～底面にかけて土器が出土した。土器は古墳時代の土師器で高坏、甕などがある。（第57・58図）本址は遺物より古墳時代前期に属すると推定される。

(14) 第37号住居址　(第14・15図)

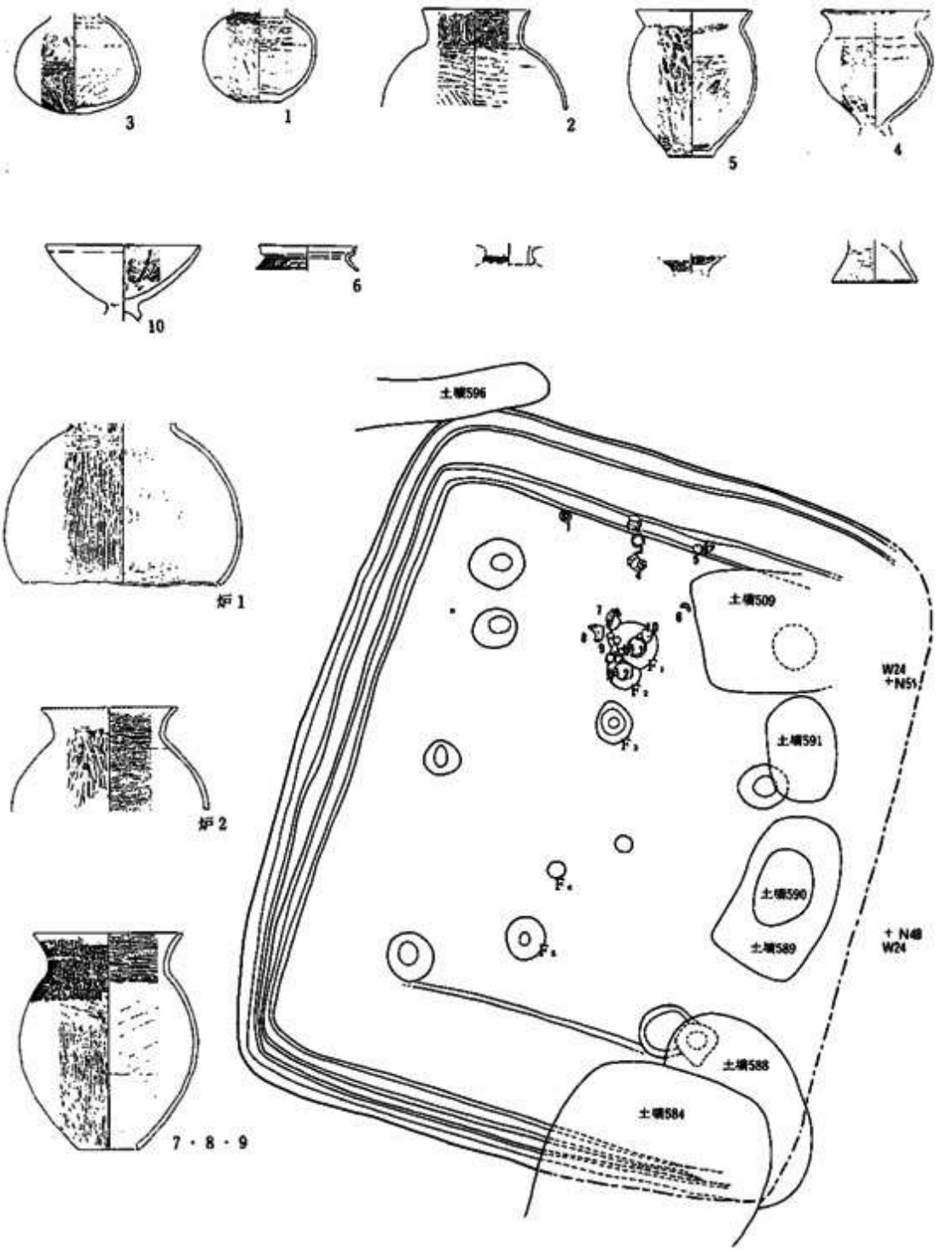
遺構　本址は東西に延びる尾根状台地の北東端にあり、調査地内ではⅢ区北側N45～55、W23～31に位置する。本址は向畑6号古墳が造られたためにその墳丘下にあり、土壙297に切られ、土壙290、295、298、299、304に貼られている。この一帯は調査開始以前より墳丘と思われる顕著な高まりがあり、古墳の存在が予想されていたところである。耕作土を除去したところ二次堆積ローム中に9×7m程の暗褐色土とローム塊の混入する明～暗褐色土の落ち込みを確認した。古墳主体部と他遺構との切り合いを想定しながら掘り進めたところ、古墳の墳丘と主体部は既に削平されており、6基の土壙と1軒の竪穴住居址が切り合った状態で検出された。本址は南北8.6m、東西7.0mの隅丸方形を呈し、本遺跡の中では大形住居址の部類に入るものである。南側に入口を想定すると主軸方向はN－22°－Eを示す。覆土は褐色土、暗褐色土の順で堆積している。西壁は垂直に立ち上がり、20cmの壁高があるが、東側は残存状態が悪く床面まで耕作が及んでいる。床面は地山のロームを固く叩き締めたもので、平坦・堅緻である。床面精査により古い住居址の壁の痕跡ではないかと思われる高さ4cmの段とともに2本の周溝・9基のピット・5基の炉址が検出され、数回拡張された住居址の状態を示していた。また内側の周溝と北東隅には貼り床がなされていた。外側の第2周溝は削平された東壁を除いて壁直下に確認され、おそらく全周していたものであろう。主柱穴はP_1～P_5とP_7の6本と考えられるが、他に適当なピットもないので新旧通じてこの柱穴を使用したものと判断する。第2周溝の内側に巡る第1周溝は厚さ4cmあまりの貼り床の下より検出された。この周溝は旧の住居に伴うものであり、第2周溝と同様に全周するものと考えられるが、第2周溝がやや外に膨らむのに対して、真っすぐに巡っている。

炉址は$炉_1$～$炉_5$が検出されたがそのうち$炉_{1,2}$は埋甕炉であり、$炉_1$は北側柱間にあって、直径50cm、深さ30cmを測る円形の掘り方の中に壺の胴部上半を逆位に埋設している。土器はかなり被熱しており縁は床面より3cm程高くなっていた。また炉体土器の周囲には数枚の土器破片が炉の補強として円形に貼り付けられていた。$炉_2$は$炉_1$に切られて直径40cm、深さ15cmの浅い窪みの中に壺の胴部上半を逆位に埋設している。土器は僅かに被熱しており縁は床面より2cmほど高くなっている。$炉_3$～$炉_5$は地床炉である。$炉_3$は$炉_2$の南隣に位置し、径45cmの規模で15cm程掘り込まれている。床面のローム層は被熱している。$炉_4$は南側柱穴間に位置する。$炉_5$は中央南寄りに位置し直径20cm、深さ13cmと小規模なものである。これら5つの炉址は長軸線上に存在する。これらの新旧の時間差については土器の形式分類では確定できない程の期間であるが、$炉_1$では周囲に土器片が散乱していたので一番新しいのではないかと推定している。$炉_2$は$炉_1$に切られているが同時に使用されていた可能性もあり、新旧差は付け難い。$炉_3$～$炉_5$についても新旧差は不明である。

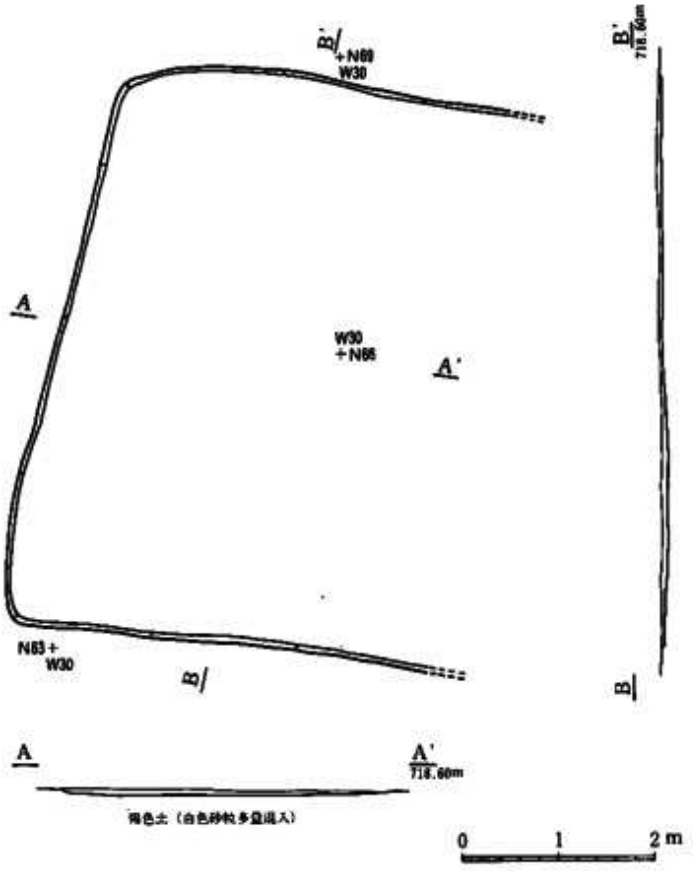
遺物　覆土中から床面にかけて多量に出土した。土器・土製品があり土器は床面からの出土が多く完形に近いものだけで甕2、台付き甕1、坩2の他、S字口縁の甕、高坏、土製品としては鏡の模造品1点等があり、古墳時代前期に比定される良好な資料である。(第57・58・67図)



第14図　第37号住居址



第15図　第37号住居址遺物出土図



第16図　第38号住居址

(15)　第38号住居址　（第16図）

遺構　III区北端N63～69、W27～33に位置する。この一帯は耕作による削平が最も激しいところで本址の東側は床面下まで破壊されていた。このためプランは明らかにならなかったが長軸方向にN－12°－Eをとる1辺5.9mの方形を推定する。壁は砂礫を含むローム中に6cm程の深さで掘り込まれている。覆土は白色砂粒が多量に混入する褐色土で、5～20cm大の角礫が30個あまり確認された。床面は非常に軟弱で、南に向かって緩やかに傾斜している。尚、本址に伴うピット・炉などの施設は検出されなかった。

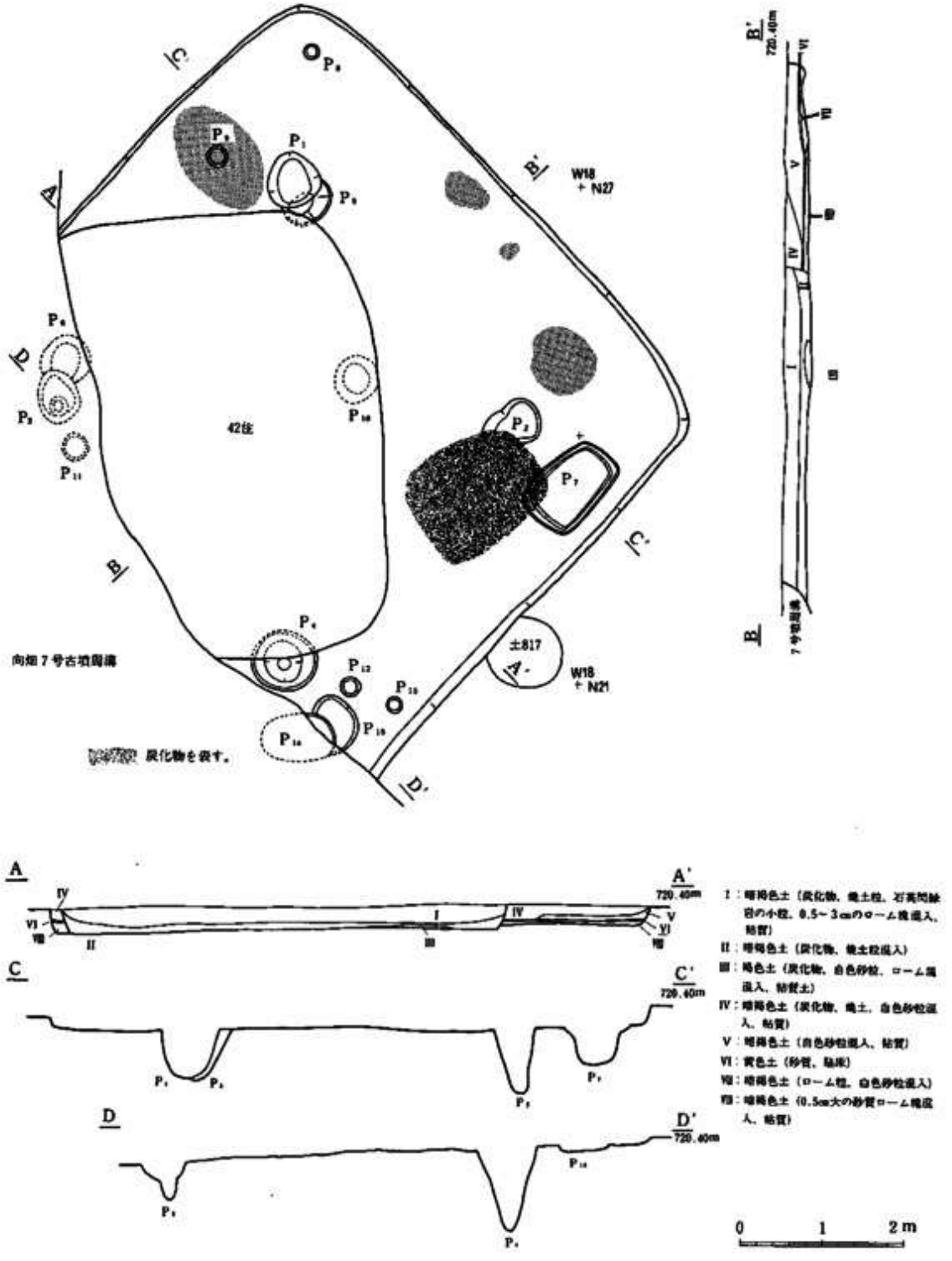
遺物　遺物は非常に少ない。床面南西隅より、土師器の高坏、甕が出土した。土師器は古墳時代前期に比定されるもので、本址の時期もそこに求めたい。（第59図）

⑯　第40号住居址　（第17・18図）

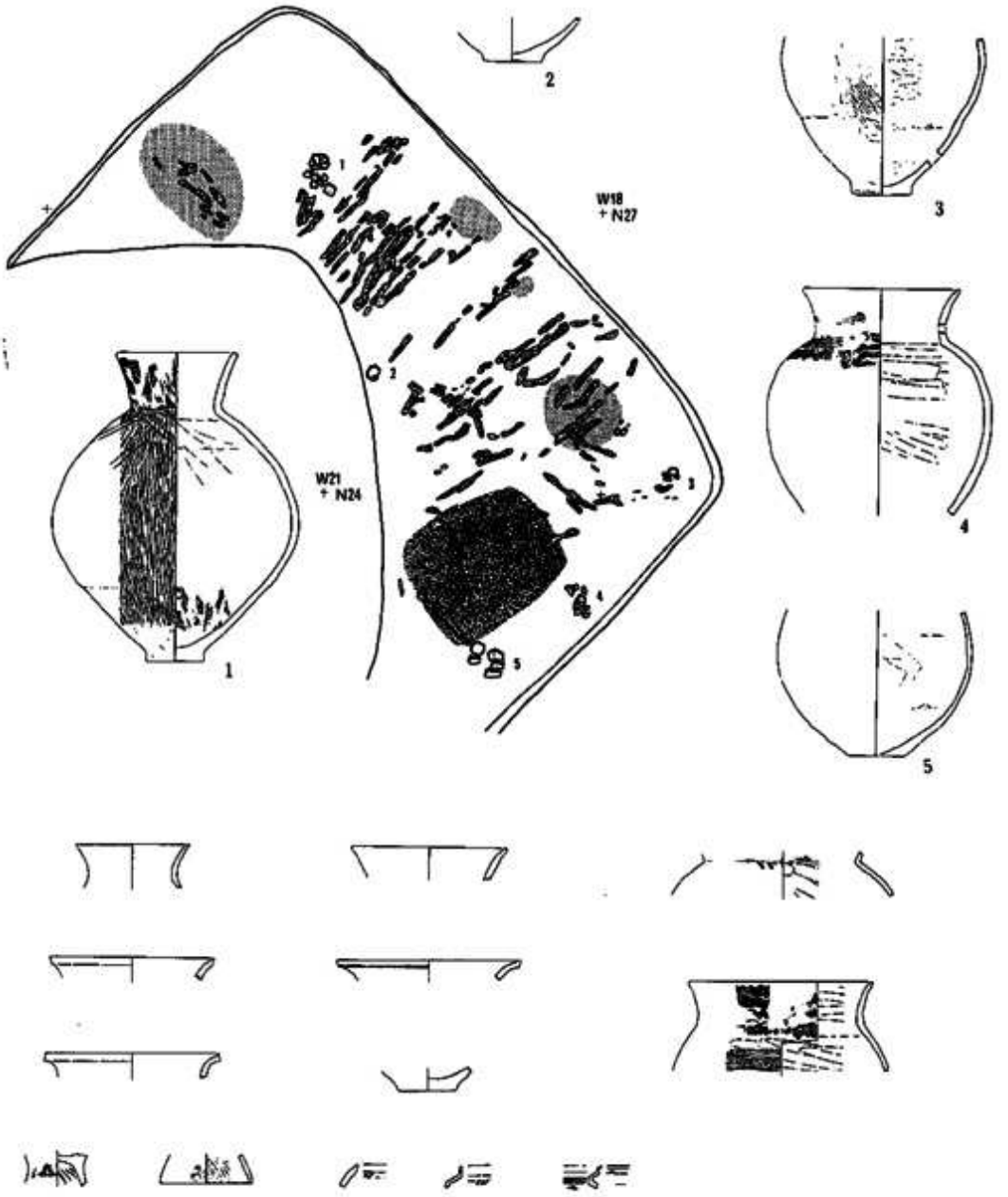
遺構　本址はIII区中央東側N20～29、W17～24に位置する。土壙794を切り中央部を第42号住居址、南西側を向畑７号古墳周溝に切られる。表土除去作業の段階で焼土を伴う暗褐色土の落ち込みを確認した。規模は切り合いのため不明確の部分もあるが一辺が7.5mの隅丸方形を呈し、本遺跡の中では大形住居址に属するもので、２時期にわたって使用されたものである。壁は垂直に近い角度で立ち上がり、壁高は30cmを測る。住居址内には30本を越す炭化材が放射状に遺存しており焼失住居の跡を示していた。炭化材の最大幅は約12cmで、長さは直線上のものを同一個体としてみると最大180cmに及ぶ。東北側には170×140cmの範囲に４cmの厚さで炭化物が散乱し、北側に沿って３箇所に厚さ10cmあまり焼土があった。床面は砂質の黄色土でやや軟弱だが平坦な貼り床である。貼り床は厚さ10cm余りで上面の黄色土の下はローム粒・ローム塊の混入する暗褐色土が堆積していた。東側のP_2脇には120×80cmの炭化物が充満していた貯蔵穴と思われる穴がある。ピットは新旧15本が検出された。このうちP_1：円形（80×70×70cm）P_2：不整円形（72×52×78cm）P_3：円形（66×54×60cm）P_4：円形（84×74×92cm）はその位置・規模及びピット内の断面に炭化物が観察されたことなどから新住居址に伴う柱穴と考えられる。遺物は壁近くに沿って配置されていた。旧床面は新床面より10cm余り下にあり砂質ロームで堅緻だが僅かに起伏がみられる。住居址の大きさは上面の住居址とほぼ同一であり、柱穴もP_2、P_4は共通でP_1に切られたP_5：円形(60×？×75cm) P_6：円形（60×60×41cm）の４本が考えられる。

これらのことから下部の旧住居址とほぼ同一箇所に建て直して貼り床をした住居址であり、柱穴も殆ど同一箇所に掘られたものと判断したい。旧住居址から遺物の出土はない。

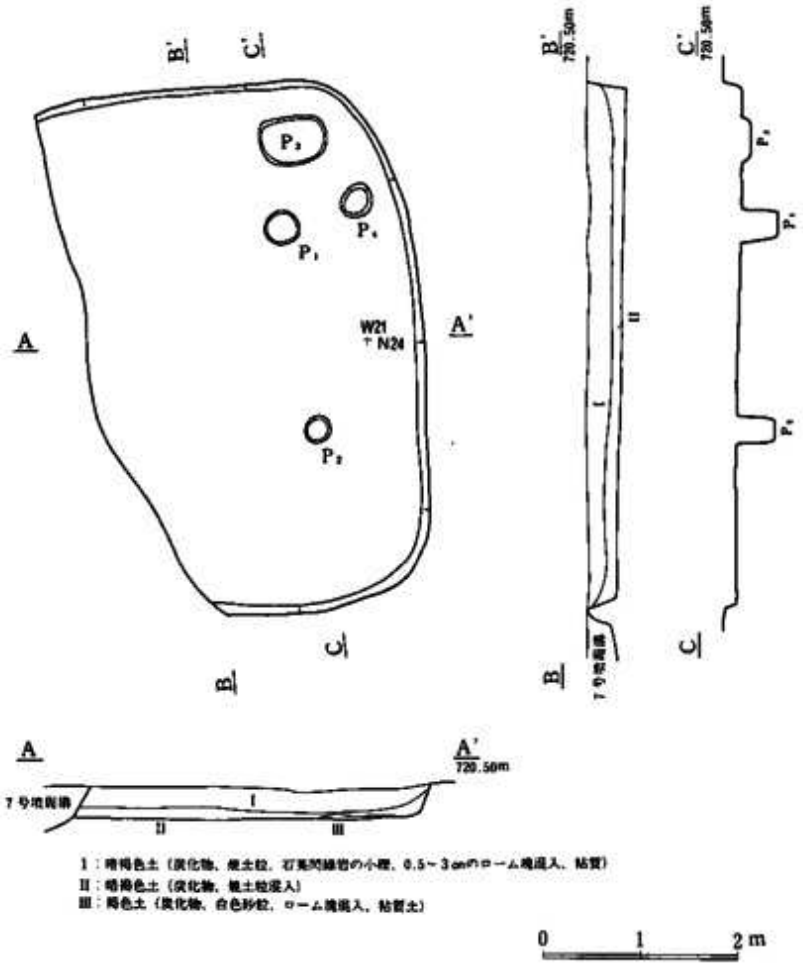
遺物　覆土中より土器・土製品が出土した他、上記のように新住居址から半完形以上の壺が４点出土している。特にP_1脇には完形の壺があり、この壺は頸部以下に籠目がついており、籠で保護されていたものとおもわれる。（第60・61図）覆土出土のものは小破片で器形の一部分しかわからないものが多い。これら出土土器から本址は古墳時代前期と比定できよう。ただ下部の旧住居址については直接時期決定となる資料はないが、第37号住居址の例もあり、新住居址との時間差は少ないものと思われる。



第17図　第40号住居址



第18図　第40号住居址遺物出土図

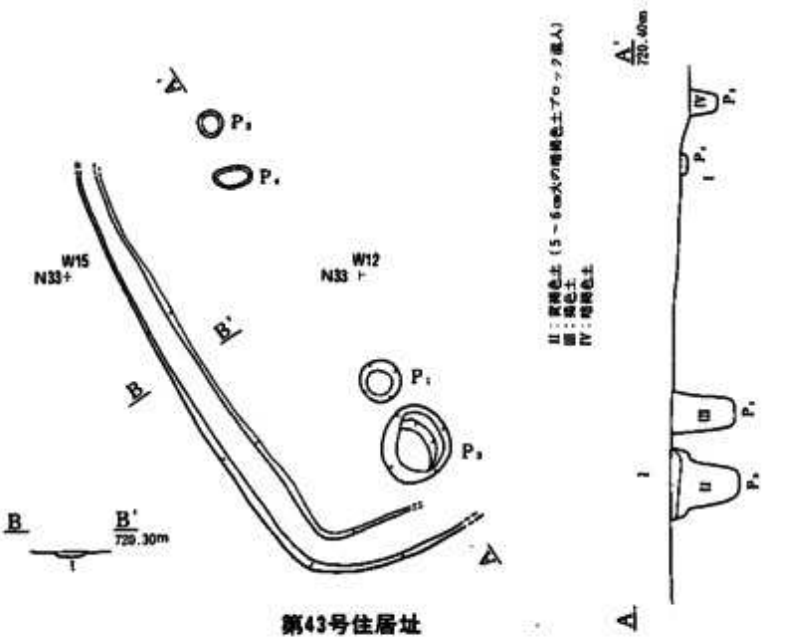


第19図　第42号住居址

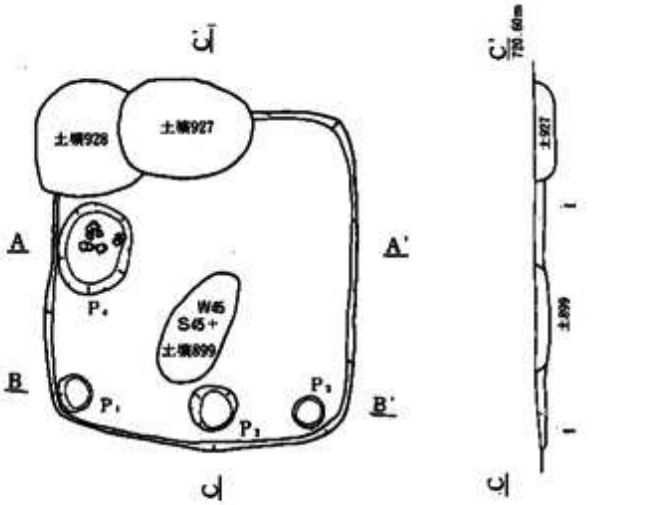
(17)　第42号住居址　（第19図）

遺構　III区中央東N21～27、W21～24に位置する。40号住居址を切り、西側½を向畑７号墳周溝に切られる。本址は40号住居址の覆土中に掘り込まれており、検出時に見落としてしまった。40住の掘り下げを開始した後、炭化物が見られない部分を確認し再検出を行なった結果、その存在が明らかになった。規模は南北で5.4mを測り、隅丸方形のプランが推定される。壁は外傾気味に立ち上がり、壁高は30～40cmを測る。床面は石英閃緑岩混入のローム層まで掘り込まれ、堅緻で平坦なものとなっており、40住のものより僅かに深い。ピットはP_1～P_4が検出され、このうちP_1、P_2は位置・深さから４本柱の主柱穴の２つと考えられる。

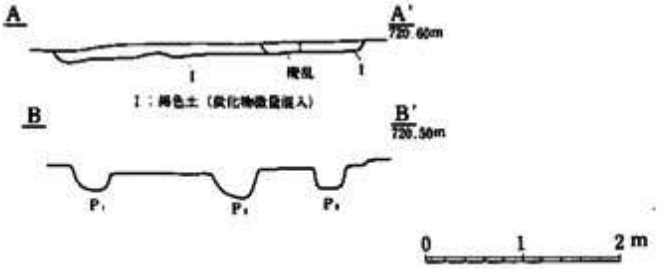
遺物　土師器小片が、少ないが出土している。遺物より、古墳時代前期の住居址と考えられる。



第43号住居址



第46号住居址



第20図　第43・46号住居址

⒅ 第43号住居址　（第20図）

遺構　Ⅲ区東側N30～35、W11～15に位置し、向畑7号古墳墳丘下にある。耕作による削平の為、既に床面は破壊されており、周溝の一部とピットを検出したのみである。規模は南北で5.4mを推定するが、不明瞭である。周溝は西側のみが、僅かに残っており幅30cmを測る。ピットは4ヶ検出されており、P_1(40×40×60cm)・P_2(25×25×30cm)は位置、深さから主柱穴と考えられる。P_3(80×60×70cm）は二段に掘られたもので、貯蔵穴の可能性がある。

遺物　少量の土師器と石製品1点が出土している。土師器はほとんどがP_3出土の一括土器で、器台、坩等（第61図）がある。石製品は完形の管玉（第74図）が確認されている。本址は遺物より古墳時代前期に比定される。

⒆ 第46号住居址　（第20図）

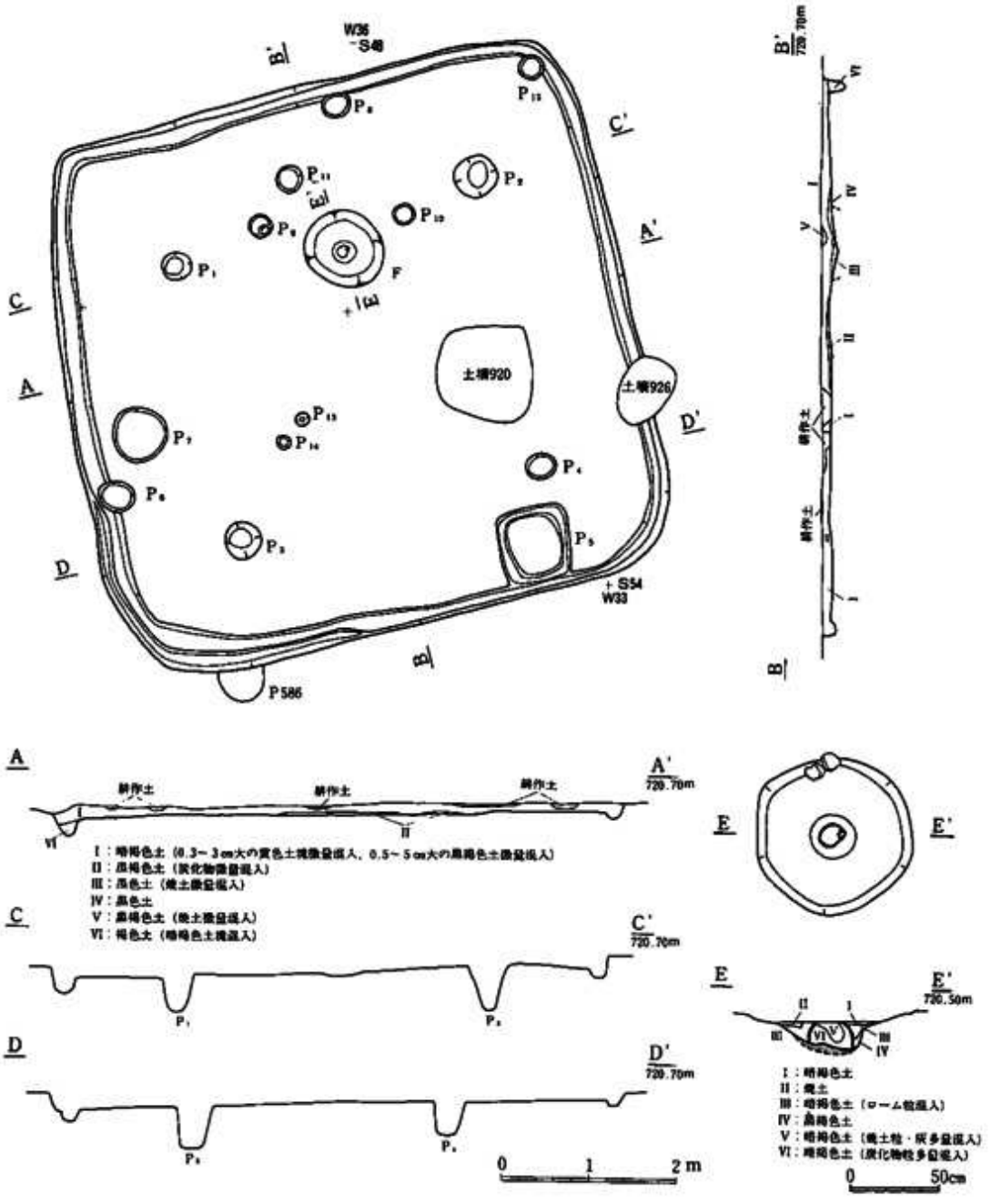
遺構　Ⅵ区北側S42～46、W43～46に位置する。土壙930を切り、土壙899、927、928に切られる。南北3.4m、東西3.2mの隅丸方形プランを呈する、小形の住居址である。長軸方向はN－5°－Eを示す。壁は外傾気味に立ち上がり、検出面からの壁高は5～10cmと非常に浅い。床は、二次堆積ローム中に掘り込まれ、堅緻で緩やかな起伏を持つ。ピットは4ヶ確認された。南東隅のP_1(38×36×20cm)、P_2(32×30×20cm)は位置、深さから主柱穴の可能性がある。西壁際のP_4(87×76×24cm)は楕円形を呈する貯蔵穴である。尚、炉址は検出されなかった。

遺物　少量の土師器がある。土師器は貯蔵穴内から、壺、坩、鉢が出土している。(第62図)　土師器は古墳時代前期の様相をもつもので、本址の時期もそこに求める。

⒇ 第45号住居址　（第21図）

遺構　Ⅵ区西端S48～53、W32～39に位置する。土壙930を貼り、土壙899、927、928に切られる。南北6.2m、東西6.4mの隅丸方形プランを呈し、炉址の位置からみて南側に出入口を想定でき、主軸方向はN－14°－Wを示す。壁は、ほぼ垂直に近く立ち上がり、壁高は10～20cmを測る。床面は二次堆積ローム中に掘り込まれ、平坦で堅緻なものになっている。床面精査の際に、周溝・ピット・炉址が確認された。周溝は深さ10～20cm程で、壁際を全周する。ピットは14ヶ検出された。P_1～P_4は、いずれも50cm前後の深さで、方形に配列されており、主柱穴と考える。南壁直下東側にあるP_5は二段に掘り込まれており、貯蔵穴と考えられる。炉址は北側柱穴間に設けられ、直径45cmの円形を呈する埋甕炉であり、その掘り方の中に壺の胴部上半を正位に埋設している。底面の砂質黄色土は被熱層として残る。埋甕炉の周囲は浅く窪み、床面から6cm程掘り下げられている。

遺物　土師器と石器が出土している。土師器は古墳時代前期の様相をもつもので、床面北東部に集中して高坏・甕・手づくねなどが出土している。(第62図)　石器は砥石が3点確認されている。（第74図）遺物よりみて本址は古墳時代前期に比定される。



第21図　第45号住居址

住居址一覧表

表2

住居No	図No	主軸	平面形(cm)	炉位置	炉形態・規模(cm)	出土遺物	備考
6	6	(N − 0°)	隅丸長方形 500×(330以上)			土師器高坏、鉢、壺 直口壺、手づくね	7、8住を切る。土壙55,56,124,125に切られる。土壙55床面下に貯蔵穴あり
7	7	N − 90°− E	方形 860×820	柱穴間	地床炉・楕円形 45×36	土師器高坏、鉢、壺 鉢壺、壺	8,41住,土壙382,388 を切る。6,32住,土壙56,60,124,125,389,390,391,392,393,394,468に切られる。
8	6	(N − 0°)	隅丸方形 570×(200以上)			土師器鉢、壺、壺 台付壺	6、7住に切られる。土壙55,57,59,120,123に切られる。
9	8	(N−104°−E)	方形 410×(280以上)				土壙78を貼る。土壙77に切られる。
10	8	(N−101°−E)	不整方形 (400)×?				土壙94,95,97に切られる
31	9	(N−10°−E)	隅丸長方形 480×350			土師器高坏、壺 壺	土壙383,384,385,386,408,504に切られる
32	10	(N−6°−E)	隅丸方形 310×310			土師器甕、鉢、壺	7,41住を切る。土壙409を切る 土壙393に切られる
33	10	(N−6°−E)	方形 340×(260以上)				土壙412,414,415,416,436,439,502に切られる
34	11	(N−81°−W)		柱穴間	地床炉・円形 30×34		床面まで削平され、ピット・炉跡のみ残る
35	12	(N−16°−E)	隅丸長方形 350×260			土師器壺、丸瓶	土壙545を貼る
36	13	N−68°−E	隅丸方形 540×530	中央	地床炉・円形 48×40	土師器高坏、壺 台付甕、壺	溝12を切る
37	14 15	N−22°−E	隅丸長方形 860×(700以上)	柱穴間	焼壁炉2 地床炉2	土師器高坏、壺 台付甕、壺	土壙590に切られる。土壙584,588,589,590,591,509,596に切られる。6号墳丘下に存在。東側削平
38	16	(N−12°−E)	方形 590×(430以上)			土師器高坏	
39	12	(N−160°−E)	?			須恵器壺 土師器高坏、坏、壺	古墳時代中期
40	17 18	(N−46°−E)	隅丸方形 750×(680以上)			土師器壺、台付壺 壺	土壙817を切る。42住に切られる
41	10	(N−168°−E)				土師器鉢、甕	土壙400を切る。7、32住に切られる
42	19	(N−175°−E)	隅丸方形 540×(350以上)				40住を切る 7号墳周溝に切られる 土壙549に切られる
43	20	(N−146°−E)	隅丸方形 (520以上)×?			土師器器台、甕 直口壺、壺	床面まで削平され、ピット・周溝の一部のみ残る
45	21	N−14°−W	隅丸方形 640×620	柱穴間	焼壁炉	土師器高坏、壺 台付甕、手づくね	P.586を切る 土壙920,926に切られる
46	20	(N−5°−E)	隅丸方形 340×320			土師器直口壺、甕 鉢、壺	土壙938を貼る 土壙899,927,928に切られる

2　古墳

今回の調査では２基の古墳が発見された。これらは従来より知られている向畑古墳群と一連のもので、向畑６・７号古墳と命名した。

(1)　向畑６号古墳　（第22図）

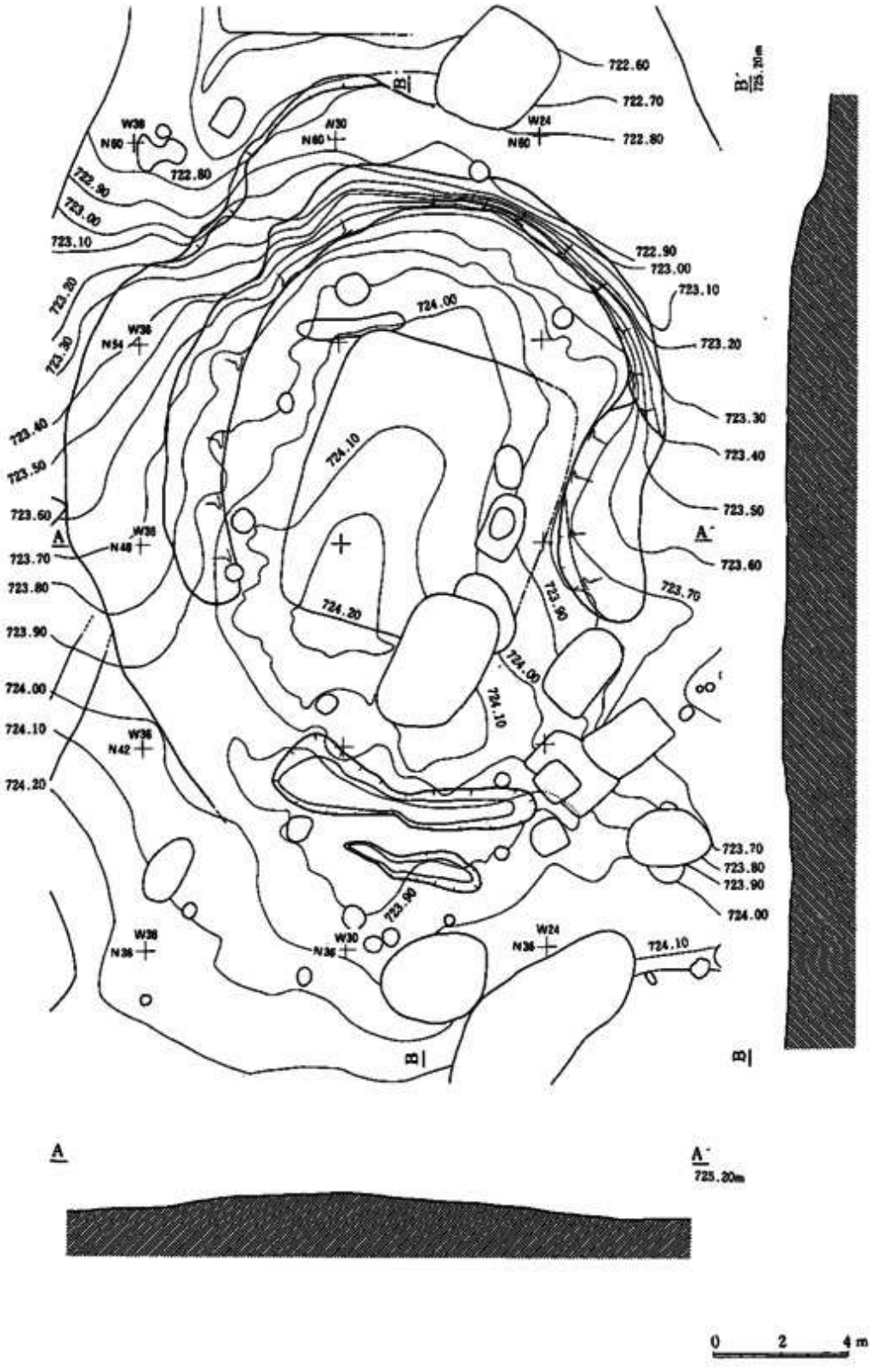
Ⅲ区北側に位置し、地形上では西から東へ延びる丘陵の緩らかな北斜面にあたる。調査開始以前より墳丘と思われる顕著な地形の高まりがあり、本古墳の存在は予想されていた。重機による耕作土除去作業の後に慎重に検出を行なった結果、墳丘部が開墾・耕作によって地山迄破壊されている円墳と判明した。推定される規模は南北16m、東西14mである。構築は整地後に周溝を掘り下げ、墳丘をマウンド状に盛土したものと考える。今回の調査では削り出された墳丘の地山、及び周溝の基底部と思われる褐色土の窪みを検出するに留まった。

遺物は検出時に少量の土器が確認された。土器は古墳時代前期と中期の土師器だが、前期のものは混入品である。遺物より本古墳は古墳時代中期に比定される。（第63図）

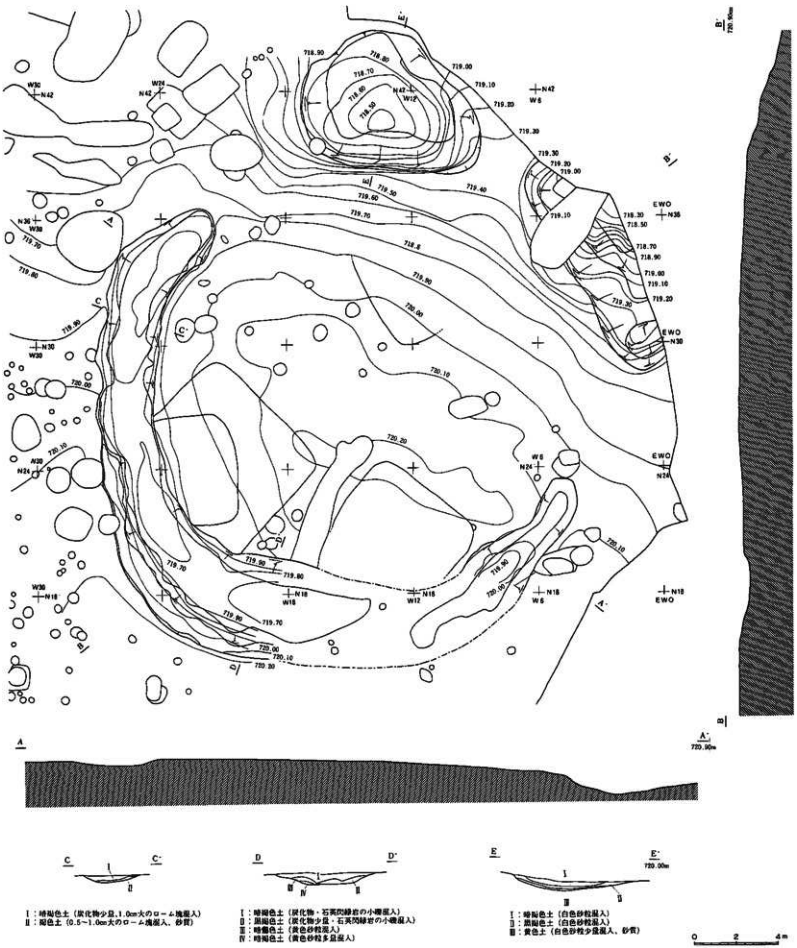
(2)　向畑７号古墳　（第23図）

Ⅲ区東側に位置する。丘陵上の台地の北はずれにあたり、６号古墳の南東に隣接する直径22mの円墳である。調査開始以前には墳丘と思われる顕著な高まりはなく、本古墳の存在は予想されていなかったが、Ⅲ区検出時に弧状に巡る周溝を確認し、古墳の存在が明らかになった。本古墳の墳丘は地山の二次堆積ロームまで完全に破壊され、周溝部分の他に本古墳を推測させるものはない。周溝は３ヶ所で途切れている。南側周溝は平坦な台地上を掘り込み、およそ半周を巡る。検出面での最大幅は480cm、最深部は52cmを測り、断面形はＵ字形を呈する。覆土は砂質の褐色土～暗褐色土が堆積しており、下層～底面には拳～人頭大の礫が僅かに見られた。これらが墳丘の葺石として利用されていたものか否かは明らかではない。底面は砂質の二次堆積ロームであった。周溝の両端は台地のはずれにあたり、ここから自然地形は北側に傾斜をまして下方に向っており、北側、東側の周溝部分では急激な傾斜となっている。北側周溝は、最大幅640cm、最深部90cmを測る。壁は急斜面を掘り込んでいる為、内側ではやや急に立ち上がるが外側では確認されなかった。東側周溝は東半が調査対象地外となるが北側周溝と類似すると考える。

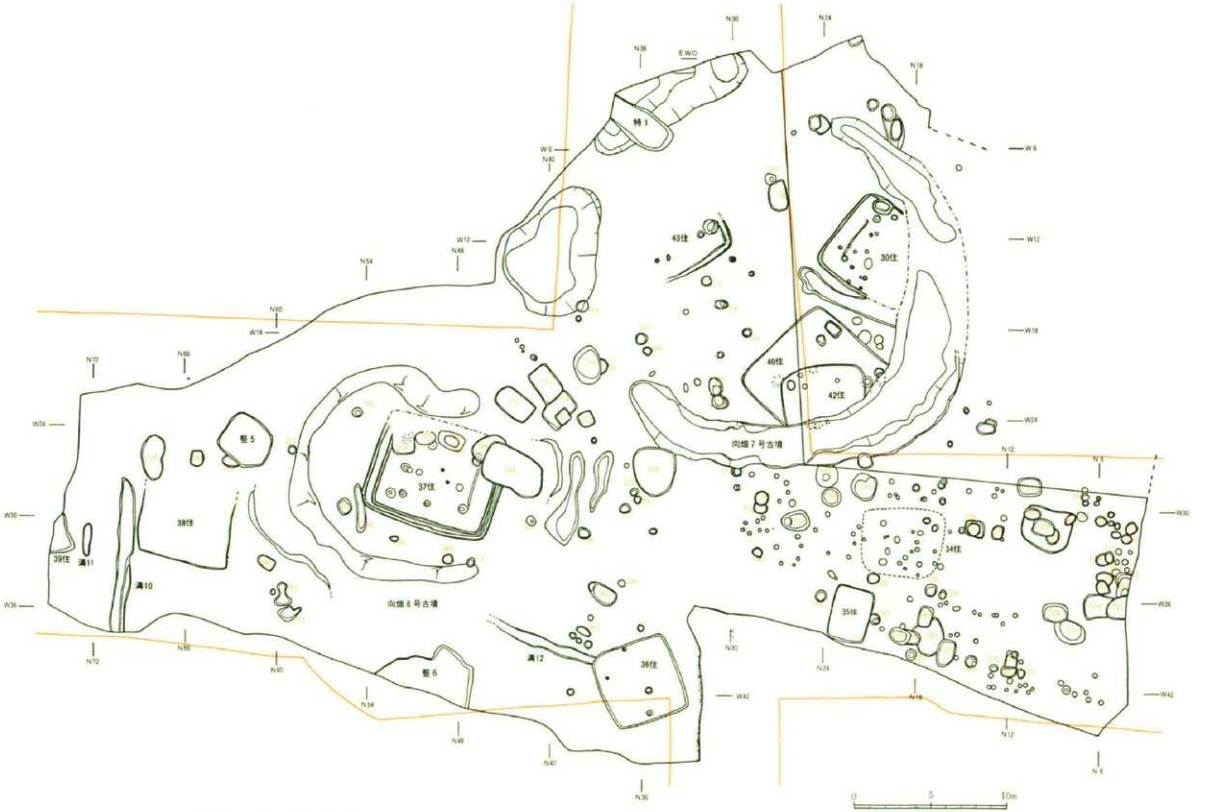
遺物は周溝内、検出面から土師器・須恵器・石庖丁等が確認された。土師器では、南側周溝の東端から供献用土器10個体（第63図131～140）がまとまった状態で押し潰され出土している。須恵器は瑠・壺が周溝から確認された。石庖丁（第72図42）は弥生時代のもので混入品と考えられる。遺物より本古墳は古墳時代中期に比定されるものである。


722.60
722.70
722.80
722.90
723.00
723.10
723.20
723.30
723.40
723.50
723.60
723.70
723.80
723.90
724.00
724.10
724.20
A
A'
B
B'
725.20m
0 2 4 m

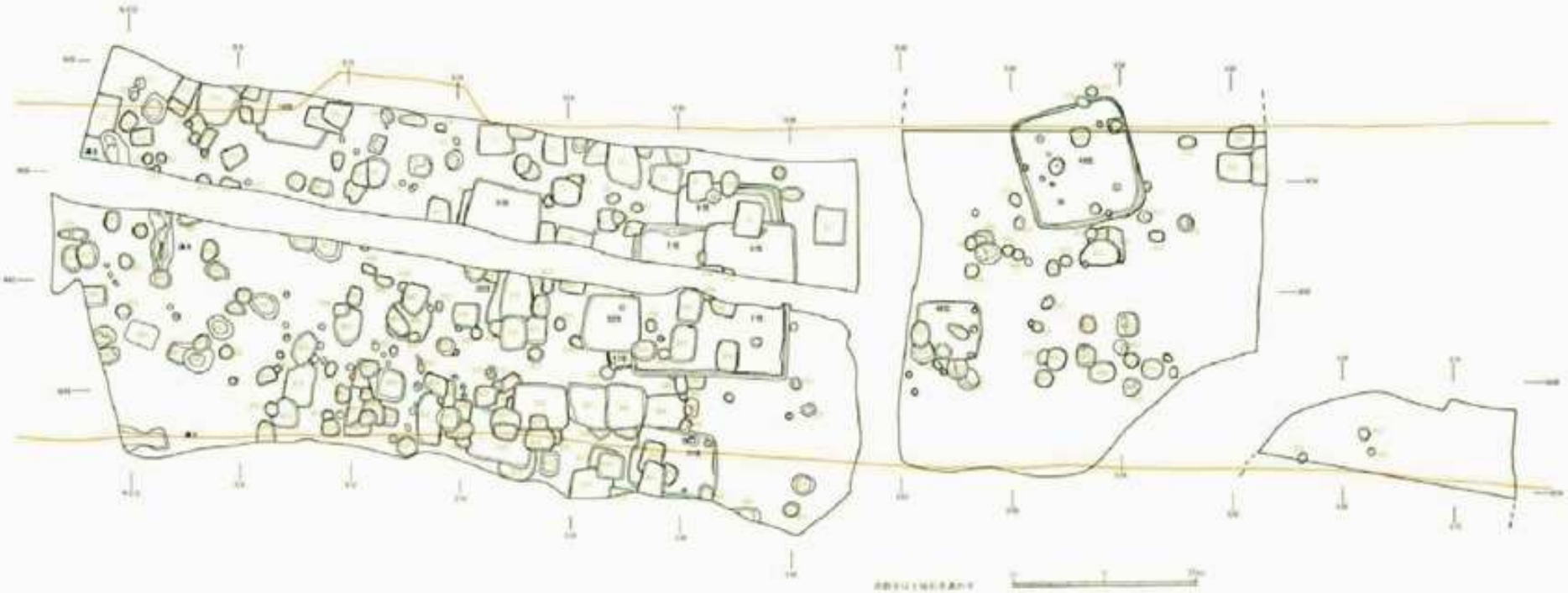
第22図　向畑６号古墳


A
A'
720.90m
C
C'
D
D'
E
E'
720.00m
Ⅰ：暗褐色土（炭化物少量,1.0cm大のローム塊混入）
Ⅱ：褐色土（0.5～1.0cm大のローム塊混入，砂質）
Ⅰ：暗褐色土（炭化物・石英閃緑岩の小礫混入）
Ⅱ：黒褐色土（炭化物少量・石英閃緑岩の小礫混入）
Ⅲ：暗褐色土（黄色砂粒混入）
Ⅳ：暗褐色土（黄色砂粒多量混入）
Ⅰ：暗褐色土（白色砂粒混入）
Ⅱ：黒褐色土（白色砂粒少量混入，砂質）
Ⅲ：黄色土（白色砂粒少量混入，砂質）
0 2 4m

第23図　向畑７号古墳



第24図　土壙配置図1）土壙



第250図 土器配置図(7)

3　土壙　（第26～47図）

今回の調査では多数の穴が検出された。このなかで竪穴住居址に伴わない穴で直径50cmを越すものを土壙とし、それ未満をピットとして扱った。その数は発見された各種遺構の中ではとりわけ多く、本遺跡を代表する遺構と云えよう。

①分布　今回の調査で土壙は366基が確認された。地区別にはⅠ区63基、Ⅱ区118基、Ⅲ区91基、Ⅳ区18基、Ⅴ区３基、Ⅵ区46基で、土壙の分布は平坦なⅠ・Ⅱ区に集中し、Ⅲ区は南側に拡がっている。位置的にはⅠ・Ⅱ区が中央にあり、北側にⅢ区、南側にⅣ～Ⅵ区があるので、ほ場整備事業に伴う発掘調査結果を含めても中央が中心部となった状況になる。（図５参照）　Ⅳ区の土壙については他の土壙とやや趣が異なり、平面形・断面形・遺物の有無等から、あるいは樹木の根痕または耕作による伐根の痕かも知れない。

②規模　長径は最大447cm、最小50cmとかなりの差がある。平均は122cmである。（表４参照）

③平面形態　おおむね円形、方形、楕円形、長方形の４つに分けられるが、それぞれにやや不整形のものがある。円形･楕円形を呈するものはⅡ区北端、Ⅵ区に集中している。Ⅴ区は円形が100％だが全体数が３基しかないので、総体的には僅かでしかない。（表４参照）

これらの表から云えることは、100cm未満のものには円形をしたものが多く、大形のものは方形あるいは長方形のものが多い。地区別ではⅠ・Ⅱ区は各種の平面形をしたものがあり変化に富むが、Ⅳ～Ⅵ区では円形が多く、方形は少ない。特に台形のものはⅡ区に多い。

④断面形

Ａ方形・長方形を呈するもの

底面が方形で壁が垂直に近い角度（斜度が85°～90°）で立ち上がるもの。

Ｂ台形を呈するもの

底面が平坦で壁の斜度が85°以内で外傾して立ち上がるもの。浅いものはＡ類と近似性を持つ。

Ｃ半円形を呈するもの

底面が徐々に浅くなり、ゆるやかに立ち上がっていくもので、底面と壁面との区別がつきにくいもの。

Ｄフラスコ状を呈するもの

検出面より下に最大径を持つもの。袋状をしたもの。

Ｅ二段底のもの

底面が二段になっているもの。

Ｆその他

上記Ａ～Ｅに当てはまらないもの、底面の凹凸の激しいもの、三角形を呈するもの等。またＡ～Ｆの他にそれらの中間型があるが、そのような土壙に複数の分類を与えることは避けた。

⑤覆土　次の３つに分けた。

a 自然堆積を示すもの。各土層が土壙の形状に合わせて層的に重なり合って堆積しているもの。

b 一時的または短期的にかなりまとまった埋没状況を示すもの。かなり深い土壙でも単層であるか、ないしは不規則な土層が観察されるもので、ローム粒・ローム塊が混入している例が多い。このような覆土はかなり特殊な状況下で形成されたものである。人為的な埋め込みが考えられる。

c 土層の区分が不明瞭で漸移的に土色・土質が変化するもの。数は非常に少ない。中には土壙の壁と覆土の識別さえ困難なものもある。

⑥特徴的な土壙

土壙480　II区北部に位置する。縄文時代の土壙の集中地域は二箇所あるが、ここも集中地域の一つにあたる。規模は153×131cmを測り楕円形を呈する。覆土は暗褐色土である。覆土より壁から床面にかけて被熱した13個の15～40cm大の角礫が壁直下に北壁を除き整然と『コ』の字形に並べられている。底面は堅緻な二次堆積ロームである。以上の状況から石棺墓の可能性も考えられる。遺物は叩き石１点が出土しているが、これも被熱している。遺物および覆土から見て縄文時代に属するものと思われる。同類としては土壙193、196、310、480、481、488等がある。

土壙930　VI区の北西に位置する。規模は113×106cmの円形プランを呈し、黄色土中に60cm程掘り込まれ、覆土は褐色土であった。断面はフラスコ状を呈するものでD類に属する。遺物は縄文土器の小片のみである。類似するものには本土壙に切られる931がある。

V～VI区とほ場調査地区のIX区にかけては縄文時代の土壙が集中している。土壙866からは縄文時代中期の一括土器が出土している。

土壙553　III区中央に位置し向畑７号古墳の周溝に切られる。規模は63×56cmの円形プランを呈し、その中に土師器壺が正位で埋設されていた。当初竪穴住居址の炉址とも考えたが、覆土に焼土・炭化物が混入せず、周囲に主柱穴と考えられるピットも検出されなかったため土壙の一種とした。壁はやや外傾して立ち上がり、底面は中央でやや窪んでいる。埋設土器から古墳時代前期に属すると思われる。

土壙505　II区北側に位置する。土壙405・406・407・419・421・424と切り合い、黄色砂質土中に掘られている。南北340cm東西260cmの長方形のプランを呈している。長軸方向はN－5°－Eを示す。壁はほぼ垂直に立ち上がり34cmの高さをもつ。覆土はローム粒を多量に混入する暗褐色土である。底面は平坦で堅緻なものである。本遺構に伴う遺物はなかったが覆土の状況から中世の墓壙と考えられる。本遺構と同様の性格を持つものには土壙396, 397等数多くあり、検出した土壙の大多数を占める。

土壙385　II区西南端に位置する。31号住居址の中にあり、土壙383, 504を切っている。長軸方向はN－70°－Eで東西157cm、南北135cmの方形のプランを示す。壁は67°で緩やかに立ち上がり底面は平坦で底に密着して咸平元宝１枚がふたつに割れて検出された。東側には長さ50cmの長めの石が２個床面より20cm上がってあった。覆土は白色砂粒とローム粒の混入した暗褐色土で風化した石英閃

緑岩が入っていた。遺物（宋銭）から見て中世の土壙と考えられる。

⑦出土遺物と時期

多数の土壙からは土器・石器・銭等の遺物が出土した。土器は殆どが小破片である。他の遺構から混入したと思われるものも多い。土器には縄文時代の早期・前期・中期、古墳時代前期・中期のものが見られる。石器は石鏃・石錐・石匙・打製石斧・凹石・敲石・磨石・磨製石鏃等が出土している。中近世の遺物は陶磁器・宋銭等僅少である。しかしこれらの出土遺物と攪乱された覆土の状況等から各土壙の所産時期を推定する手掛りとした。

⑧墓道について

中世以降の土壙は比較的規模が大きく、方形・長方形を呈し次の３箇所に集中が見られる。その集中区域にははっきりと土壙と空地と識別出来るものがあり、これは墓道として使用されたものではないかと判断している。

a　Ⅰ区南半

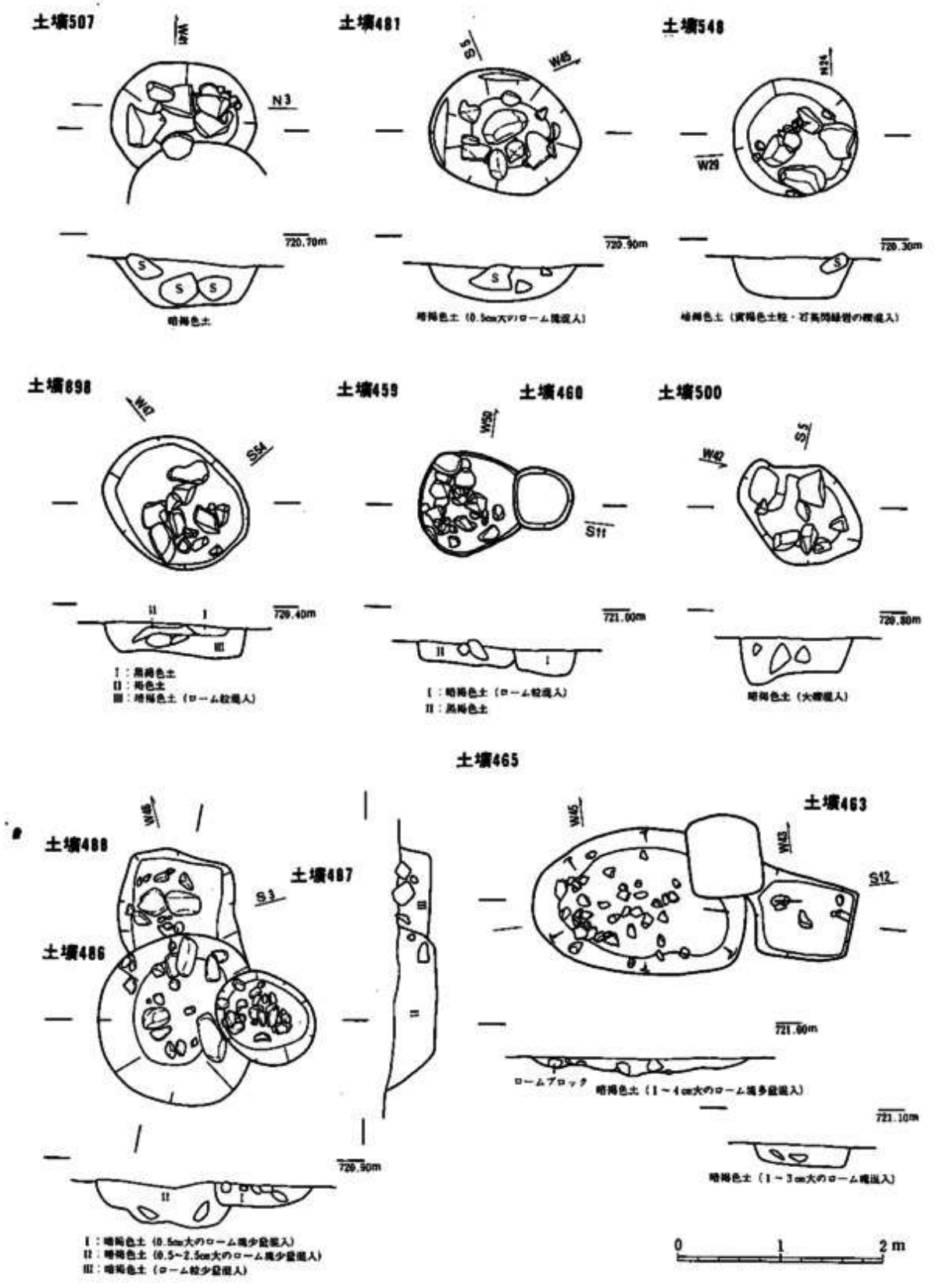
南側に集中している。その中には土壙の検出のない空間が幅１ｍ弱、長さ10mあまりで南北に連なっている。空地の両側にはほぼ軸を揃えて土壙が並んでいる。南側は土壙52を境にして検出されず、北側は分布が激少し小ピット群が形成される。東側では規模が小さくなり数が減る。西側ではⅡ区の集中区域に隣接する。この空地は形状から墓道と判断したい。しかし石敷き・踏み固め等はなく他の覆土と同じ状態である。

b　Ⅱ区中央

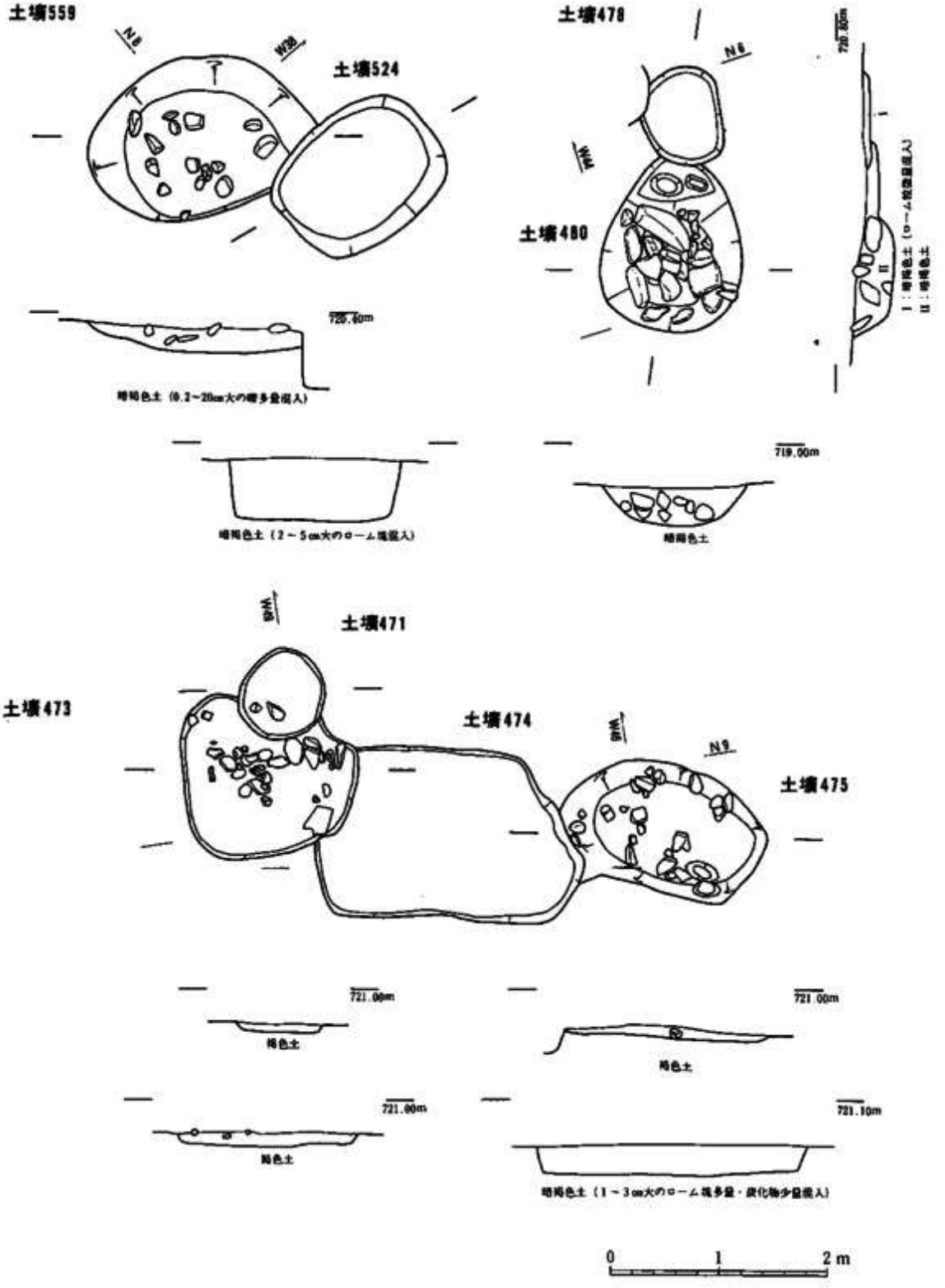
ａと同様に幅１ｍ弱、長さ15mあまりの空間があって、その両側に軸を揃えて土壙が並んでいる。北側は中世のものはなく縄文時代の土壙集中区域になり、その北側は小ピット群になる。南側はⅥ区南の縄文時代の土壙集中区域に到るまで15mあまりの間土壙の分布はない。

c　Ⅲ区中央

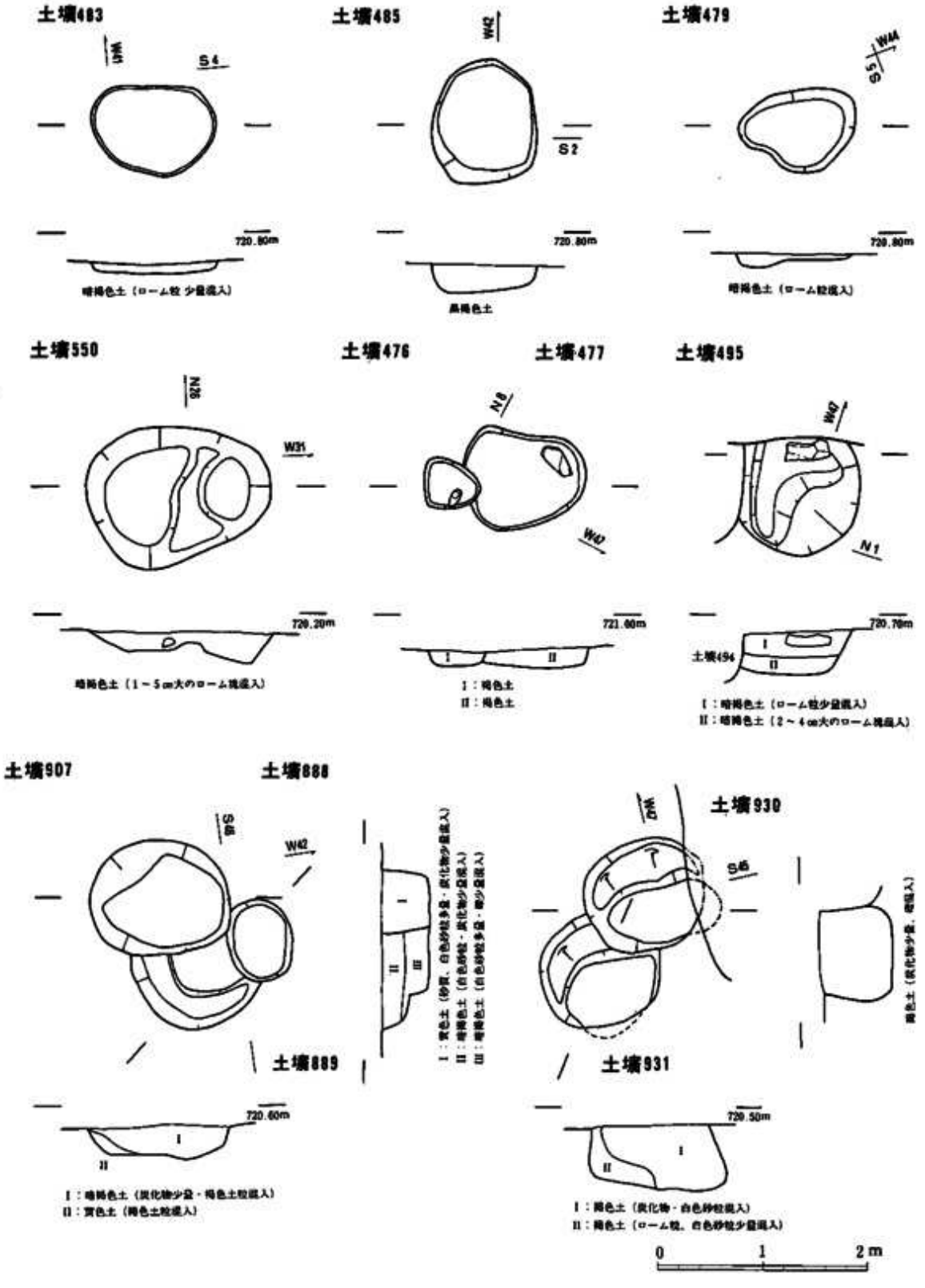
向畑６号古墳の南側にあたる。ＮＳ０軸を境に上記のａ、ｂの分布はあるがｃはＮＳ30以北であり分布状況が異なっている。ここでは墓道にあたるものはない。


土壌507
N3
720.70m
暗褐色土
土壌481
S5
W45
720.90m
暗褐色土（0.5cm大のローム塊混入）
土壌548
W24
W29
720.30m
暗褐色土（黄褐色土粒・灯高岡緑岩の礫混入）
土壌898
W40
S54
720.40m
Ⅰ：黒褐色土
Ⅱ：褐色土
Ⅲ：暗褐色土（ローム粒混入）
土壌459
土壌460
W50
S11
721.00m
Ⅰ：暗褐色土（ローム粒混入）
Ⅱ：黒褐色土
土壌500
W42
S5
720.80m
暗褐色土（大礫混入）
土壌465
土壌488
W45
土壌487
S3
土壌486
720.90m
Ⅰ：暗褐色土（0.5cm大のローム塊少量混入）
Ⅱ：暗褐色土（0.5～2.5cm大のローム塊少量混入）
Ⅲ：暗褐色土（ローム粒少量混入）
土壌463
W45
W43
S12
721.60m
ロームブロック
暗褐色土（1～4cm大のローム塊多量混入）
721.10m
暗褐色土（1～3cm大のローム塊混入）
0
1
2 m

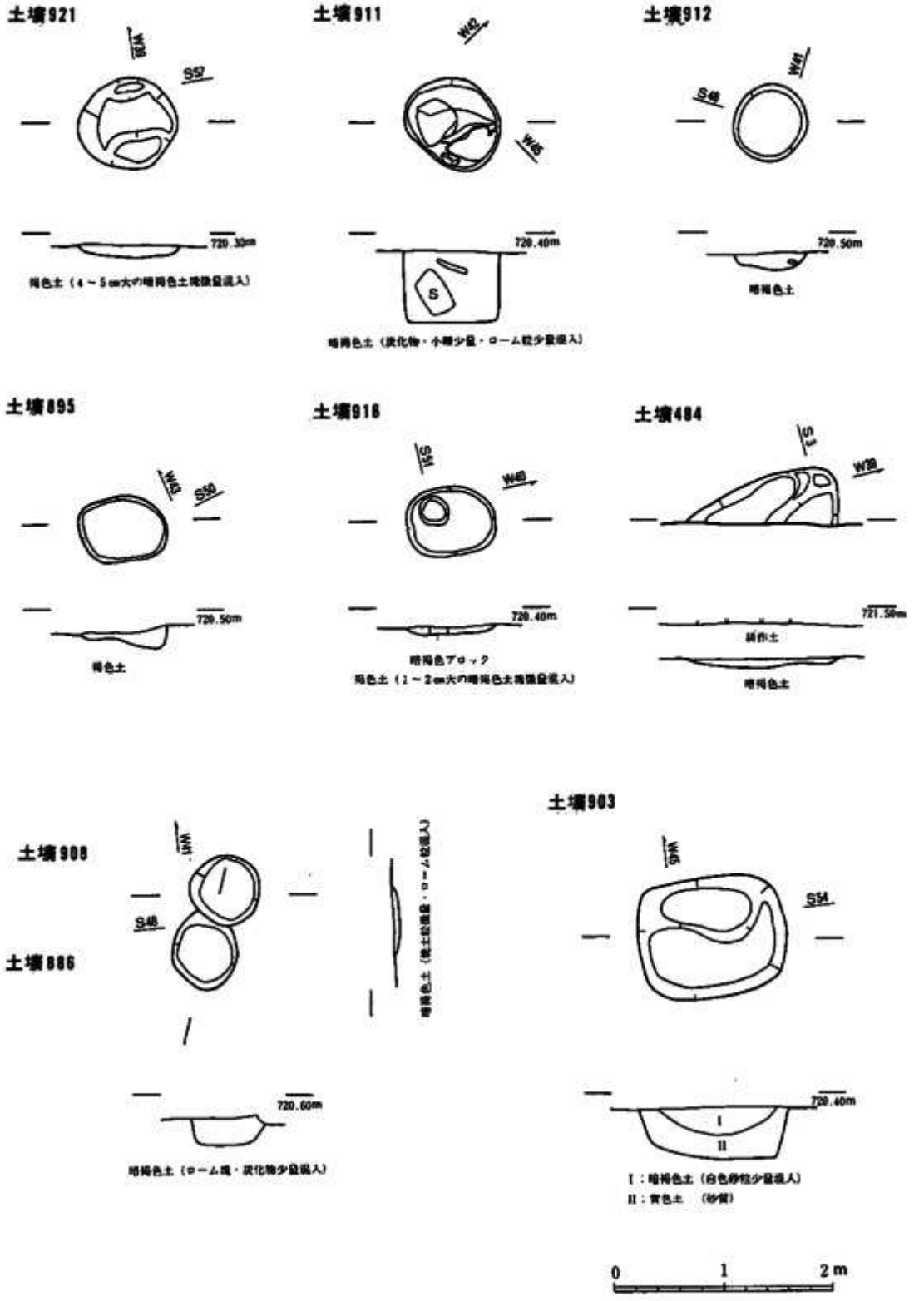
第26図　土壌(1)


土壌559
土壌524
土壌478
土壌480
土壌471
土壌473
土壌474
土壌475
N8
W28
N6
W4
W8
N9
720.40m
719.00m
721.00m
721.00m
721.00m
721.10m
暗褐色土
暗褐色土（2～5cm大のローム塊混入）
暗褐色土
暗褐色土
暗褐色土
暗褐色土
暗褐色土（1～3cm大のローム塊多量・炭化物少量混入）
0
1
2 m

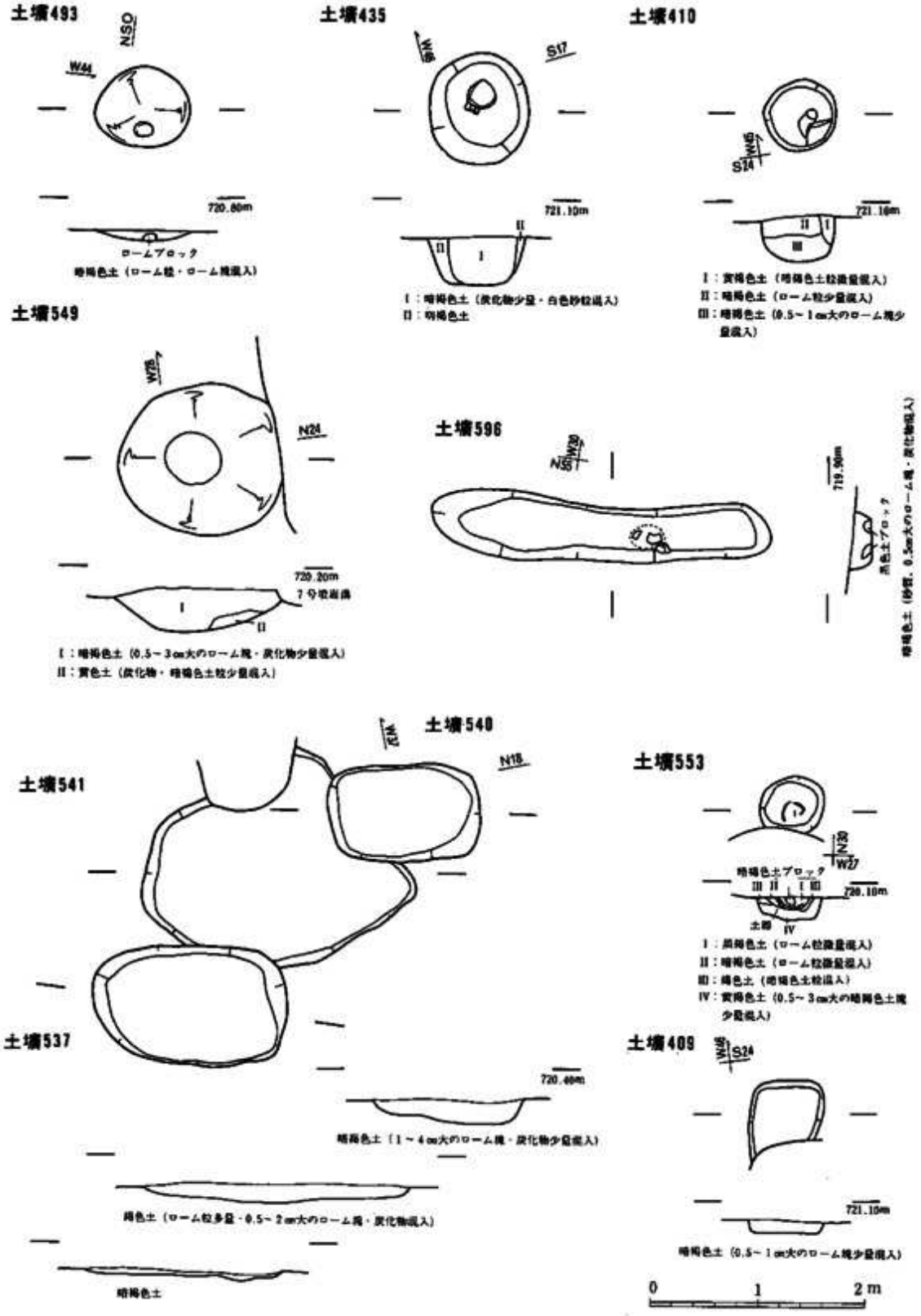
第27図　土壌(2)


土壌483
W41
S4
720.80m
暗褐色土（ローム粒 少量混入）
土壌485
W42
S2
720.80m
黒褐色土
土壌479
W44
S5
720.80m
暗褐色土（ローム粒混入）
土壌550
N26
W31
720.20m
暗褐色土（1～5cm大のローム塊混入）
土壌476
N8
W47
721.60m
I：褐色土
II：褐色土
土壌477
土壌495
W47
N1
720.70m
土壌494
I：暗褐色土（ローム粒少量混入）
II：暗褐色土（2～4cm大のローム塊混入）
土壌907
S8
W42
土壌888
土壌889
720.60m
I：暗褐色土（炭化物少量・褐色土粒混入）
II：黄色土（褐色土粒混入）
土壌930
W42
S6
土壌931
720.50m
I：褐色土（炭化物・白色砂粒混入）
II：褐色土（ローム粒、白色砂粒少量混入）
0
1
2 m

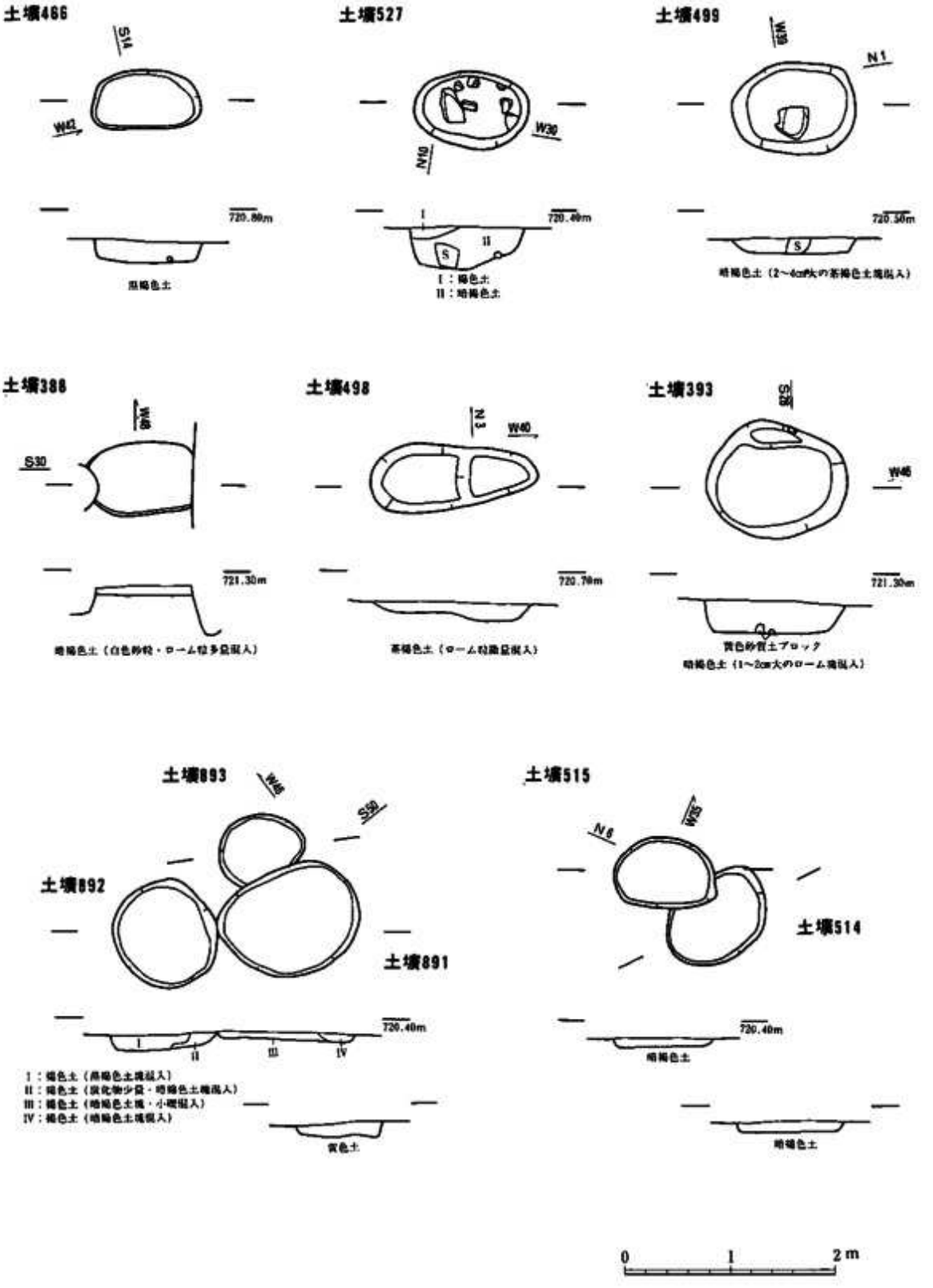
第28図　土壌(3)


土壌921
W38
S52
720.30m
褐色土（4～5cm大の暗褐色土塊微量流入）
土壌911
W42
W45
S53
720.40m
S
暗褐色土（炭化物・小礫少量・ローム粒少量流入）
土壌912
W41
S49
720.50m
暗褐色土
土壌895
W43
S50
720.50m
褐色土
土壌916
S51
W40
720.40m
暗褐色ブロック
褐色土（1～2cm大の暗褐色土塊微量流入）
土壌484
S3
W39
721.50m
耕作土
暗褐色土
土壌908
土壌886
W44
S48
暗褐色土（焼土粒微量・ローム粒流入）
720.60m
暗褐色土（ローム塊・炭化物少量流入）
土壌903
W46
S54
720.40m
I
II
I：暗褐色土（白色砂粒少量流入）
II：黄色土　（砂質）
0
1
2 m

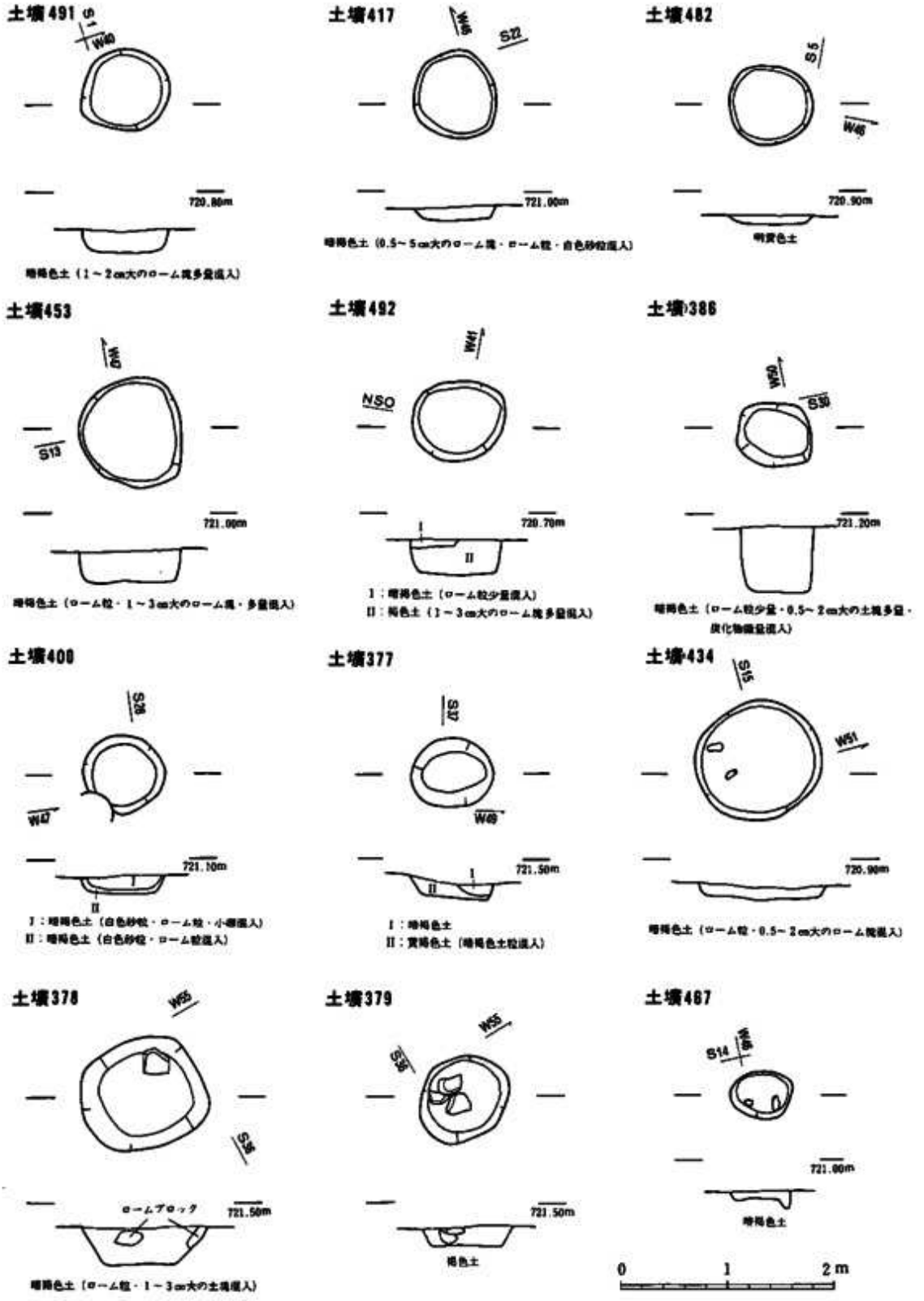
第29図　土壌(4)


土壌493
N50
W44
720.80m
ロームブロック
暗褐色土（ローム粒・ローム塊混入）
土壌435
W18
S17
721.10m
Ⅰ：暗褐色土（炭化物少量・白色砂粒混入）
Ⅱ：明褐色土
土壌410
S14
W46
721.10m
Ⅰ：黄褐色土（暗褐色土粒微量混入）
Ⅱ：暗褐色土（ローム粒少量混入）
Ⅲ：暗褐色土（0.5～1cm大のローム塊少量混入）
土壌549
W75
N24
720.20m
7号墳南溝
Ⅰ：暗褐色土（0.5～3cm大のローム塊・炭化物少量混入）
Ⅱ：黄色土（炭化物・暗褐色土粒少量混入）
土壌596
N58
W30
719.90m
黒色土ブロック
暗褐色土（砂質、0.5cm大のローム塊・炭化物混入）
土壌548
W34
N18
土壌541
土壌537
720.40m
暗褐色土（1～4cm大のローム塊・炭化物少量混入）
褐色土（ローム粒多量・0.5～2cm大のローム塊・炭化物混入）
暗褐色土
土壌553
N30
W27
暗褐色土ブロック
720.10m
土器
Ⅰ：黒褐色土（ローム粒微量混入）
Ⅱ：暗褐色土（ローム粒微量混入）
Ⅲ：褐色土（暗褐色土粒混入）
Ⅳ：黄褐色土（0.5～3cm大の暗褐色土塊少量混入）
土壌409
W46
S24
721.10m
暗褐色土（0.5～1cm大のローム塊少量混入）
0
1
2 m

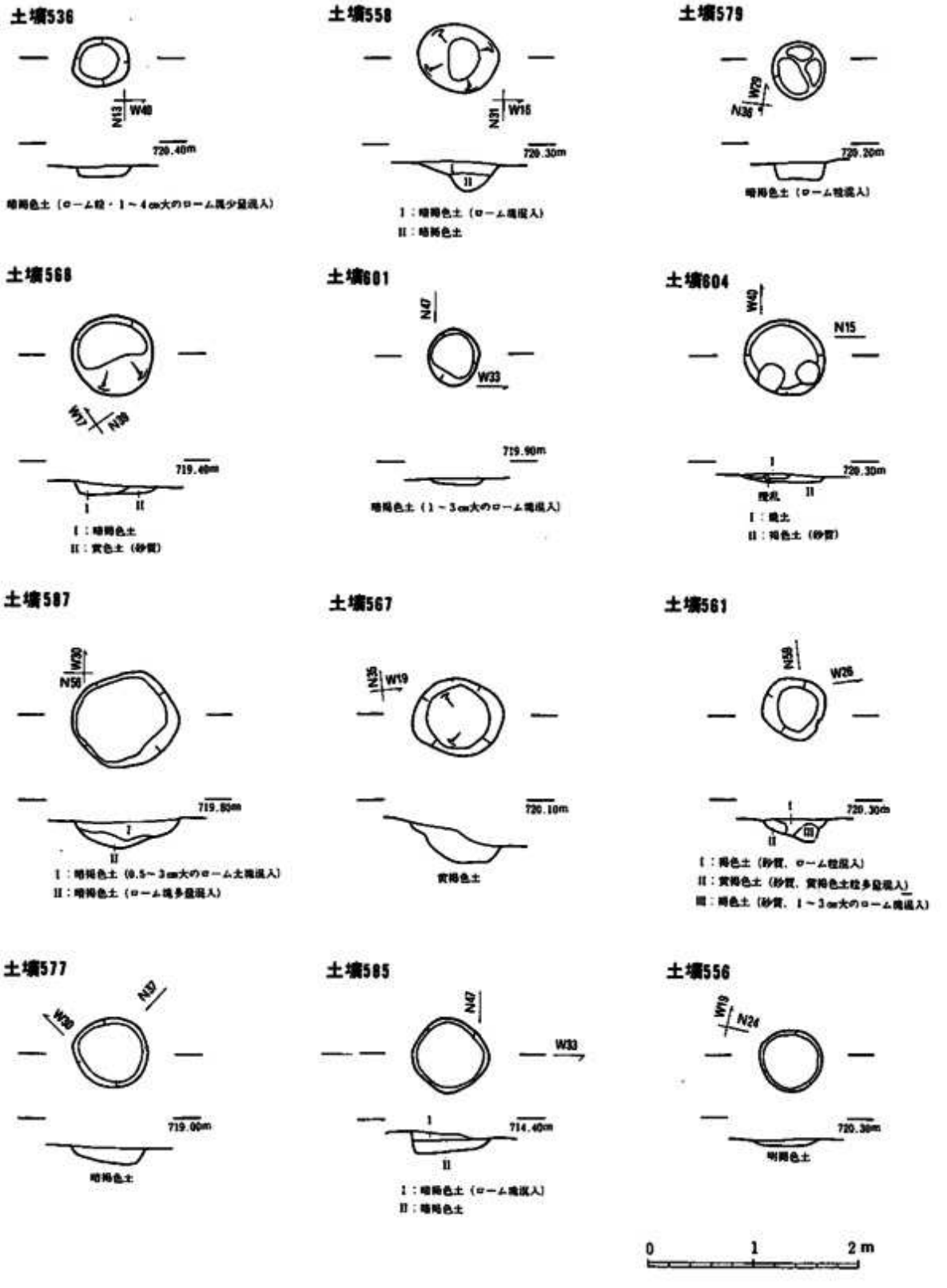
第30図　土壌(5)


土壌466
S14
W42
720.80m
黒褐色土
土壌527
W30
N10
720.40m
I：褐色土
II：暗褐色土
土壌499
W39
N1
720.50m
暗褐色土（2～6cm大の茶褐色土塊混入）
土壌388
W48
S30
721.30m
暗褐色土（白色砂粒・ローム粒多量混入）
土壌498
N3
W40
720.70m
茶褐色土（ローム粒混入）
土壌393
S26
W46
721.30m
黄色砂質土ブロック
暗褐色土（1～2cm大のローム塊混入）
土壌893
W48
S50
土壌892
土壌891
720.40m
I：褐色土（黒褐色土塊混入）
II：褐色土（炭化物少量・暗褐色土塊混入）
III：褐色土（暗褐色土塊・小礫混入）
IV：褐色土（暗褐色土塊混入）
黄色土
土壌515
N6
W35
土壌514
720.40m
暗褐色土
暗褐色土
0
1
2 m

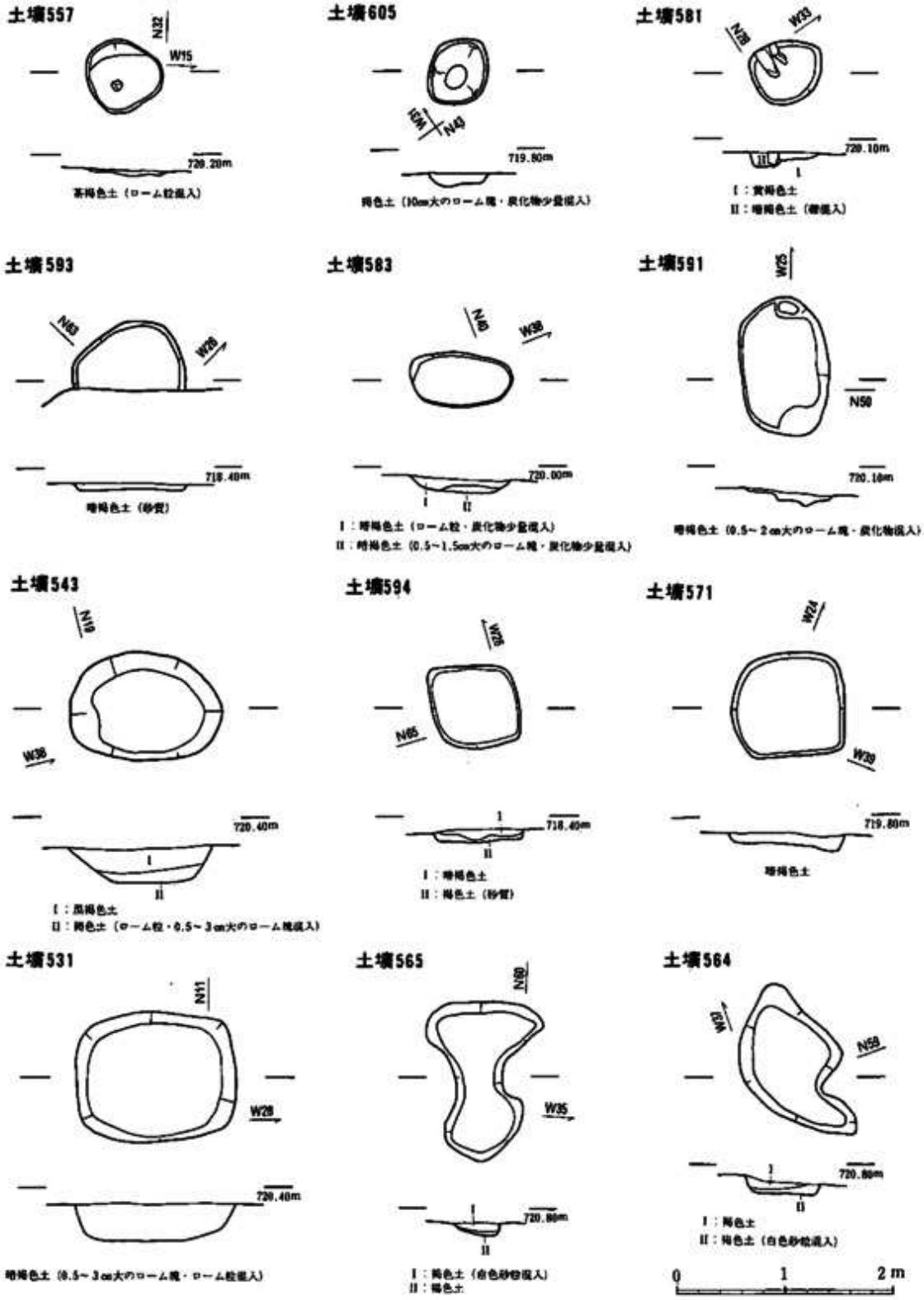
第31図　土壌(6)


土壌491
S1
W40
720.80m
暗褐色土（1～2cm大のローム塊多量混入）
土壌417
W48
S22
721.00m
暗褐色土（0.5～5cm大のローム塊・ローム粒・白色砂粒混入）
土壌482
S5
W46
720.90m
明黄色土
土壌453
W40
S13
721.00m
暗褐色土（ローム粒・1～3cm大のローム塊・多量混入）
土壌492
W41
NS0
720.70m
I：暗褐色土（ローム粒少量混入）
II：褐色土（1～3cm大のローム塊多量混入）
土壌386
W50
S30
721.20m
暗褐色土（ローム粒少量・0.5～2cm大の土塊多量・炭化物微量混入）
土壌408
S26
W47
721.10m
I：暗褐色土（白色砂粒・ローム粒・小礫混入）
II：暗褐色土（白色砂粒・ローム粒混入）
土壌377
S37
W49
721.50m
I：暗褐色土
II：黄褐色土（暗褐色土粒混入）
土壌434
S15
W51
720.90m
暗褐色土（ローム粒・0.5～2cm大のローム塊混入）
土壌378
W55
S35
ロームブロック
721.50m
暗褐色土（ローム粒・1～3cm大の土塊混入）
土壌379
W55
S36
721.50m
褐色土
土壌487
S14
W46
721.00m
暗褐色土
0
1
2 m

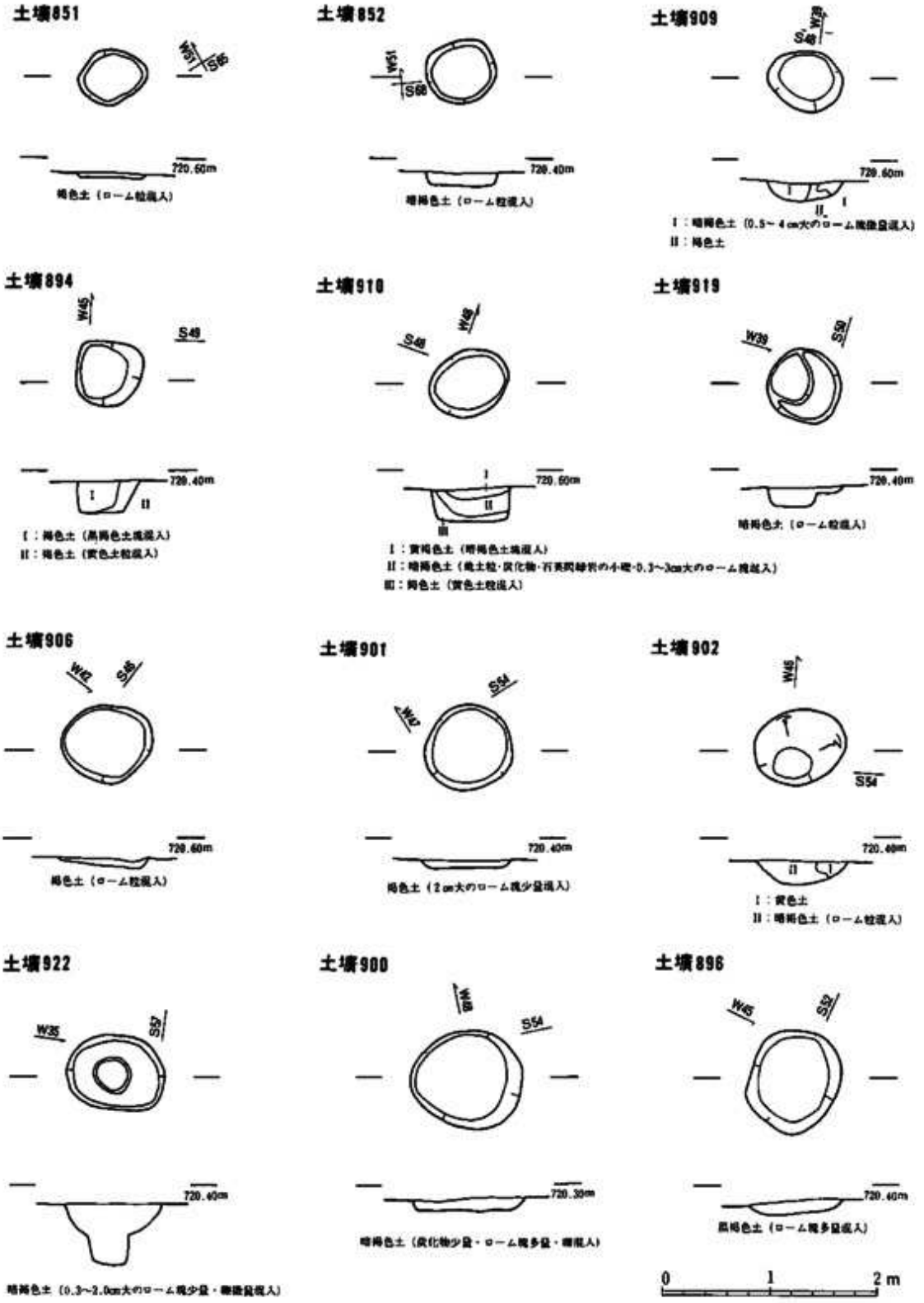
第32図　土壌(7)


土壌536
N13
W40
720.40m
暗褐色土（ローム粒・1～4cm大のローム塊少量混入）
土壌558
N31
W16
720.30m
II
I：暗褐色土（ローム塊混入）
II：暗褐色土
土壌579
W29
N36
720.20m
暗褐色土（ローム粒混入）
土壌568
W17
N38
719.40m
I
II
I：暗褐色土
II：黄色土（砂質）
土壌601
N47
W33
719.90m
暗褐色土（1～3cm大のローム塊混入）
土壌604
W40
N15
I
720.30m
II
I：黒土
II：褐色土（砂質）
土壌587
W30
N56
719.80m
I
II
I：暗褐色土（0.5～3cm大のローム土塊混入）
II：暗褐色土（ローム塊多量混入）
土壌567
N35
W19
720.10m
黄褐色土
土壌561
N59
W26
I
720.30m
II
III
I：褐色土（砂質、ローム粒混入）
II：黄褐色土（砂質、黄褐色土粒多量混入）
III：暗色土（砂質、1～3cm大のローム塊混入）
土壌577
N37
W38
719.00m
暗褐色土
土壌585
N47
W33
I
714.40m
II
I：暗褐色土（ローム塊混入）
II：暗褐色土
土壌556
W19
N24
720.30m
暗褐色土
0
1
2 m

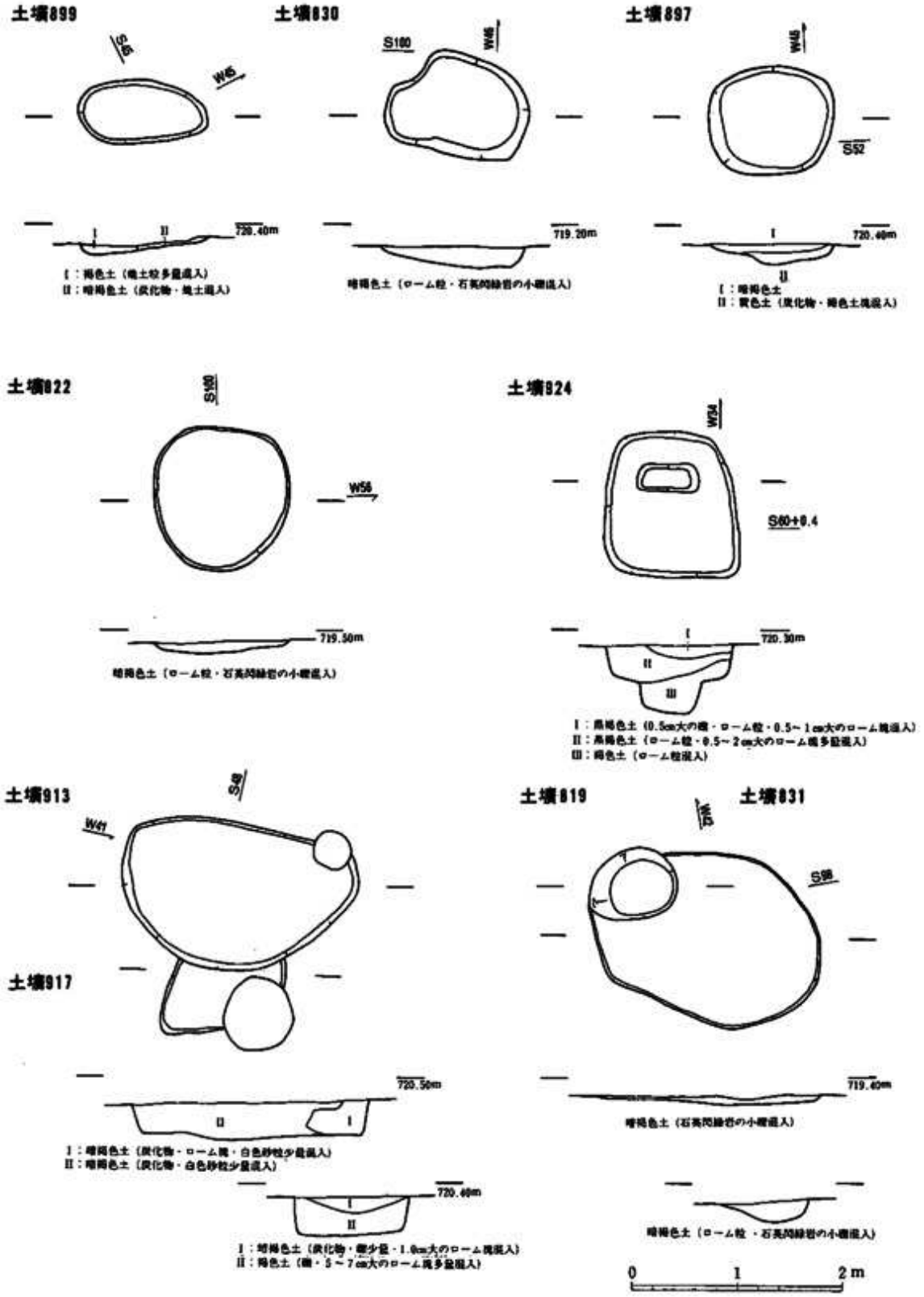
第33図　土壌(8)


土壌557
N32
W15
720.20m
茶褐色土（ローム粒混入）
土壌605
N43
719.80m
褐色土（10cm大のローム塊・炭化物少量混入）
土壌581
N28
W23
720.10m
I：黄褐色土
II：暗褐色土（砂質混入）
土壌593
N63
W28
718.40m
暗褐色土（砂質）
土壌583
N40
W38
720.00m
I：暗褐色土（ローム粒・炭化物少量混入）
II：暗褐色土（0.5～1.5cm大のローム塊・炭化物少量混入）
土壌591
W25
N50
720.10m
暗褐色土（0.5～2cm大のローム塊・炭化物混入）
土壌543
N19
W38
720.40m
I：黒褐色土
II：褐色土（ローム粒・0.5～3cm大のローム塊混入）
土壌594
W28
N65
718.40m
I：暗褐色土
II：褐色土（砂質）
土壌571
W24
W39
719.80m
暗褐色土
土壌531
N11
W28
720.40m
暗褐色土（0.5～3cm大のローム塊・ローム粒混入）
土壌565
N80
W35
720.80m
I：褐色土（白色砂粒混入）
II：褐色土
土壌564
W32
N58
720.80m
I：褐色土
II：褐色土（白色砂粒混入）
0
1
2 m

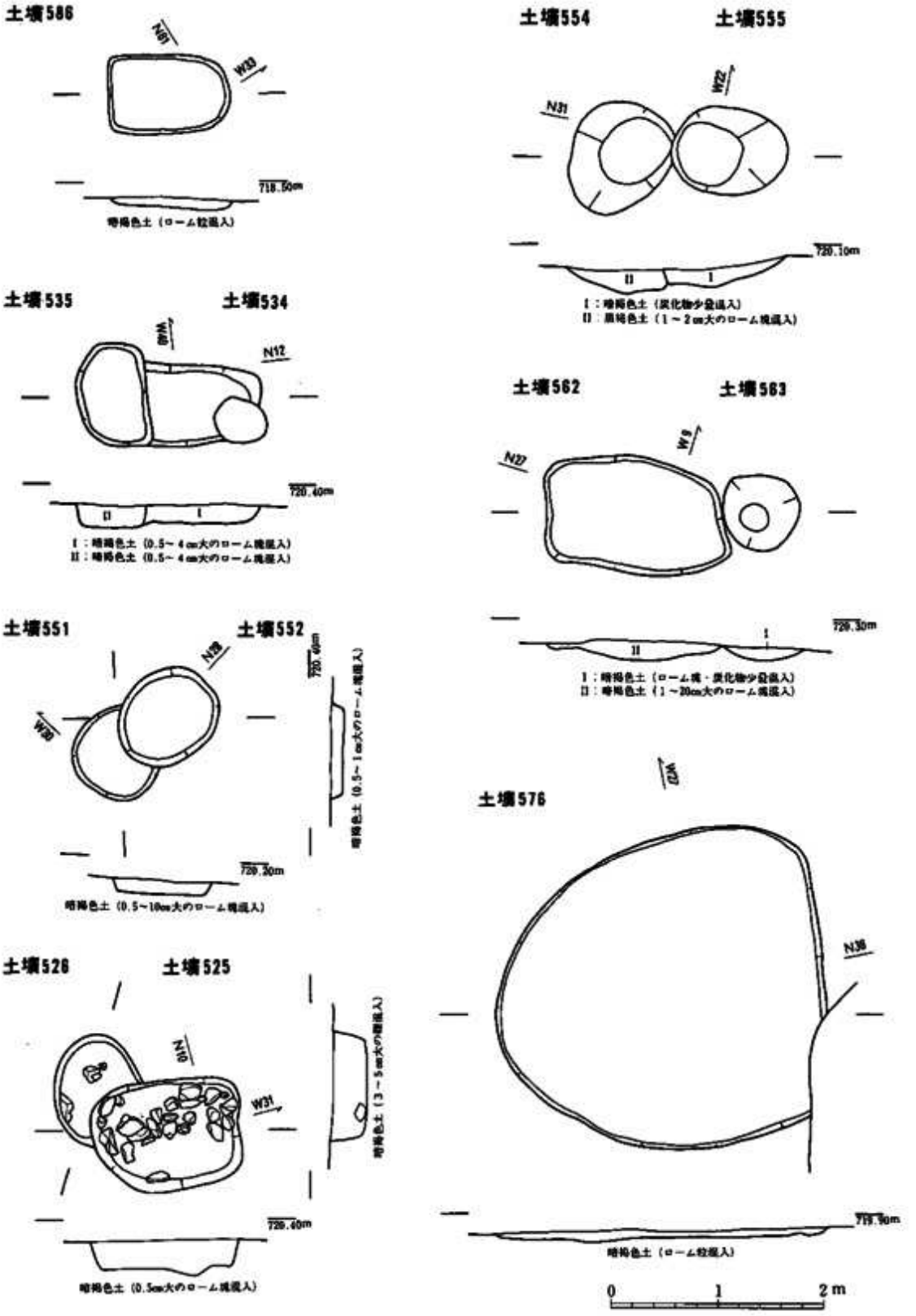
第34図　土壌(9)


土壌851
W51
S66
720.60m
褐色土（ローム粒混入）
土壌852
W51
S68
720.40m
暗褐色土（ローム粒混入）
土壌909
S48
W28
720.60m
Ⅰ：暗褐色土（0.5～4cm大のローム塊微量混入）
Ⅱ：褐色土
土壌894
W45
S48
720.40m
Ⅰ：褐色土（黒褐色土塊混入）
Ⅱ：褐色土（黄色土粒混入）
土壌910
W48
S48
720.60m
Ⅰ：黄褐色土（暗褐色土塊混入）
Ⅱ：暗褐色土（焼土粒・炭化物・石英閃緑岩の小礫・0.3～3cm大のローム塊混入）
Ⅲ：褐色土（黄色土粒混入）
土壌919
W39
S50
720.40m
暗褐色土（ローム粒混入）
土壌906
W42
S46
720.60m
褐色土（ローム粒混入）
土壌901
W42
S54
720.40m
褐色土（2cm大のローム塊少量混入）
土壌902
W45
S54
720.40m
Ⅰ：黄色土
Ⅱ：暗褐色土（ローム粒混入）
土壌922
W35
S57
720.40m
暗褐色土（0.3～2.0cm大のローム塊少量・礫微量混入）
土壌900
W48
S54
720.30m
暗褐色土（炭化物少量・ローム塊多量・礫混入）
土壌896
W45
S52
720.40m
黒褐色土（ローム塊多量混入）
0
1
2 m

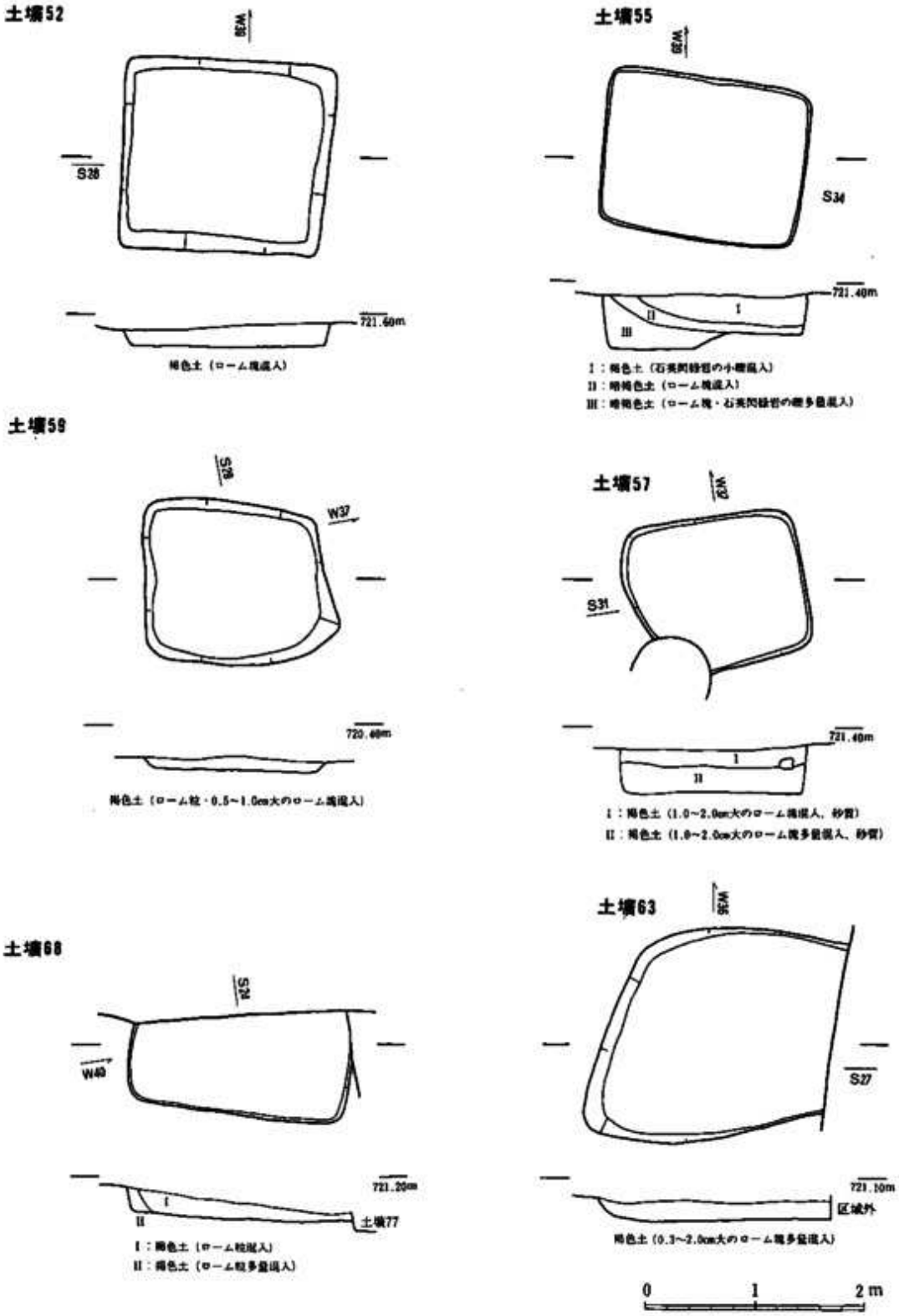
第35図　土壌(10)


土壌899
S46
W45
720.40m
I：褐色土（地土粒多量混入）
II：暗褐色土（炭化物・地土混入）
土壌830
S100
W46
719.20m
暗褐色土（ローム粒・石英閃緑岩の小礫混入）
土壌897
W48
S52
720.40m
I：暗褐色土
II：黄色土（炭化物・褐色土塊混入）
土壌822
S100
W56
719.50m
暗褐色土（ローム粒・石英閃緑岩の小礫混入）
土壌824
W34
S60+0.4
720.30m
I：黒褐色土（0.5cm大の礫・ローム粒・0.5～1cm大のローム塊混入）
II：黒褐色土（ローム粒・0.5～2cm大のローム塊多量混入）
III：褐色土（ローム粒混入）
土壌913
S48
W41
土壌917
720.50m
I：暗褐色土（炭化物・ローム粒・白色砂粒少量混入）
II：暗褐色土（炭化物・白色砂粒少量混入）
720.40m
I：暗褐色土（炭化物・礫少量・1.0cm大のローム塊混入）
II：褐色土（礫・5～7cm大のローム塊多量混入）
土壌819
土壌831
W45
S98
719.40m
暗褐色土（石英閃緑岩の小礫混入）
暗褐色土（ローム粒・石英閃緑岩の小礫混入）
0
1
2 m

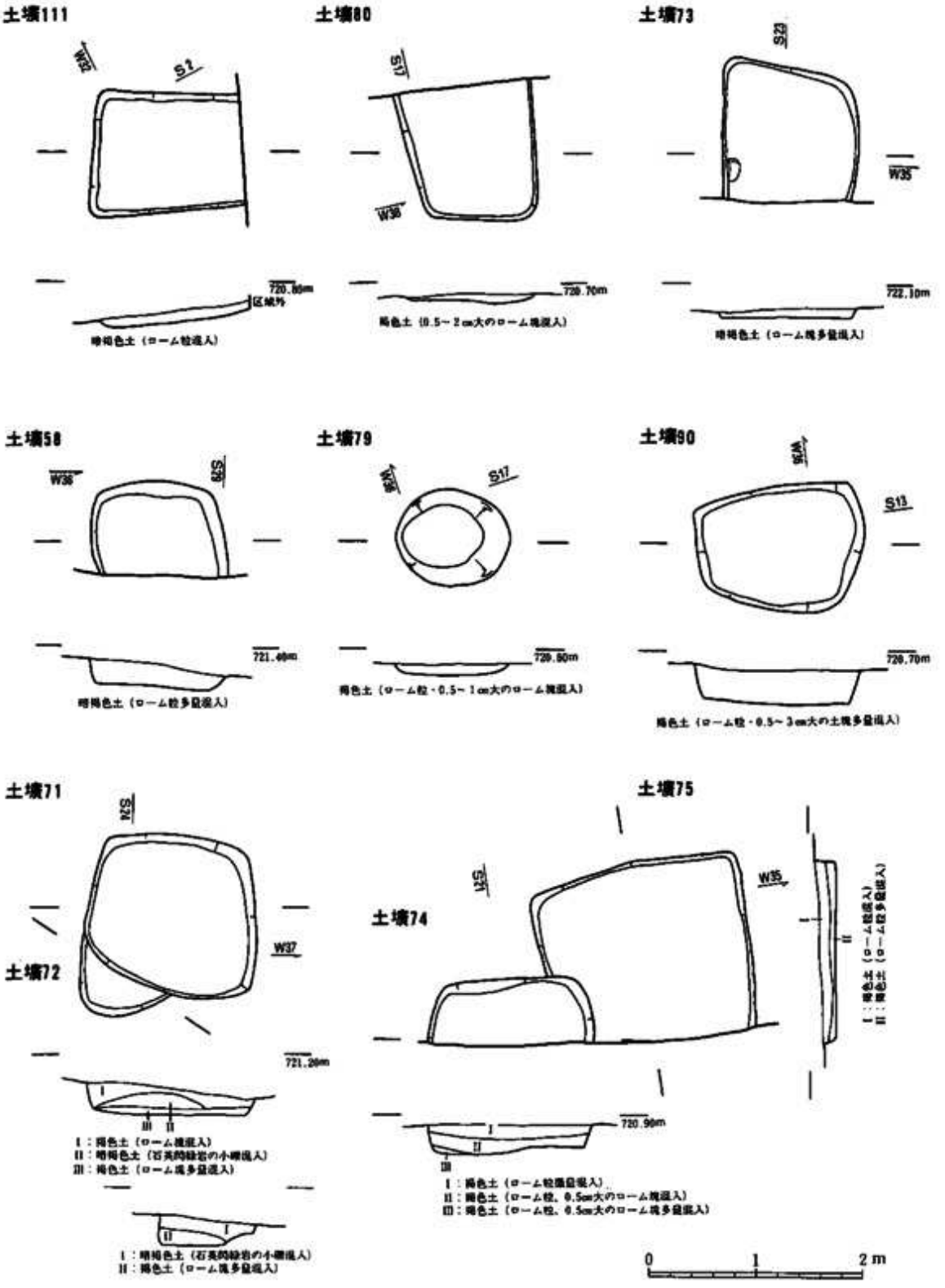
第36図　土壌(1)


土壌586
N31
W33
718.50m
暗褐色土（ローム粒混入）
土壌554
土壌555
N31
W22
720.10m
Ⅱ
Ⅰ
Ⅰ：暗褐色土（炭化物少量混入）
Ⅱ：黒褐色土（1～2cm大のローム塊混入）
土壌535
土壌534
W40
N12
720.40m
Ⅱ
Ⅰ
Ⅰ：暗褐色土（0.5～4cm大のローム塊混入）
Ⅱ：暗褐色土（0.5～4cm大のローム塊混入）
土壌562
土壌563
N27
W9
720.30m
Ⅱ
Ⅰ
Ⅰ：暗褐色土（ローム塊・炭化物少量混入）
Ⅱ：暗褐色土（1～20cm大のローム塊混入）
土壌551
土壌552
N28
W30
720.40m
暗褐色土（0.5～1cm大のローム塊混入）
720.30m
暗褐色土（0.5～10cm大のローム塊混入）
W20
土壌576
N38
719.90m
暗褐色土（ローム粒混入）
土壌526
土壌525
N10
W31
暗褐色土（3～5cm大の塊混入）
720.40m
暗褐色土（0.5cm大のローム塊混入）
0
1
2 m

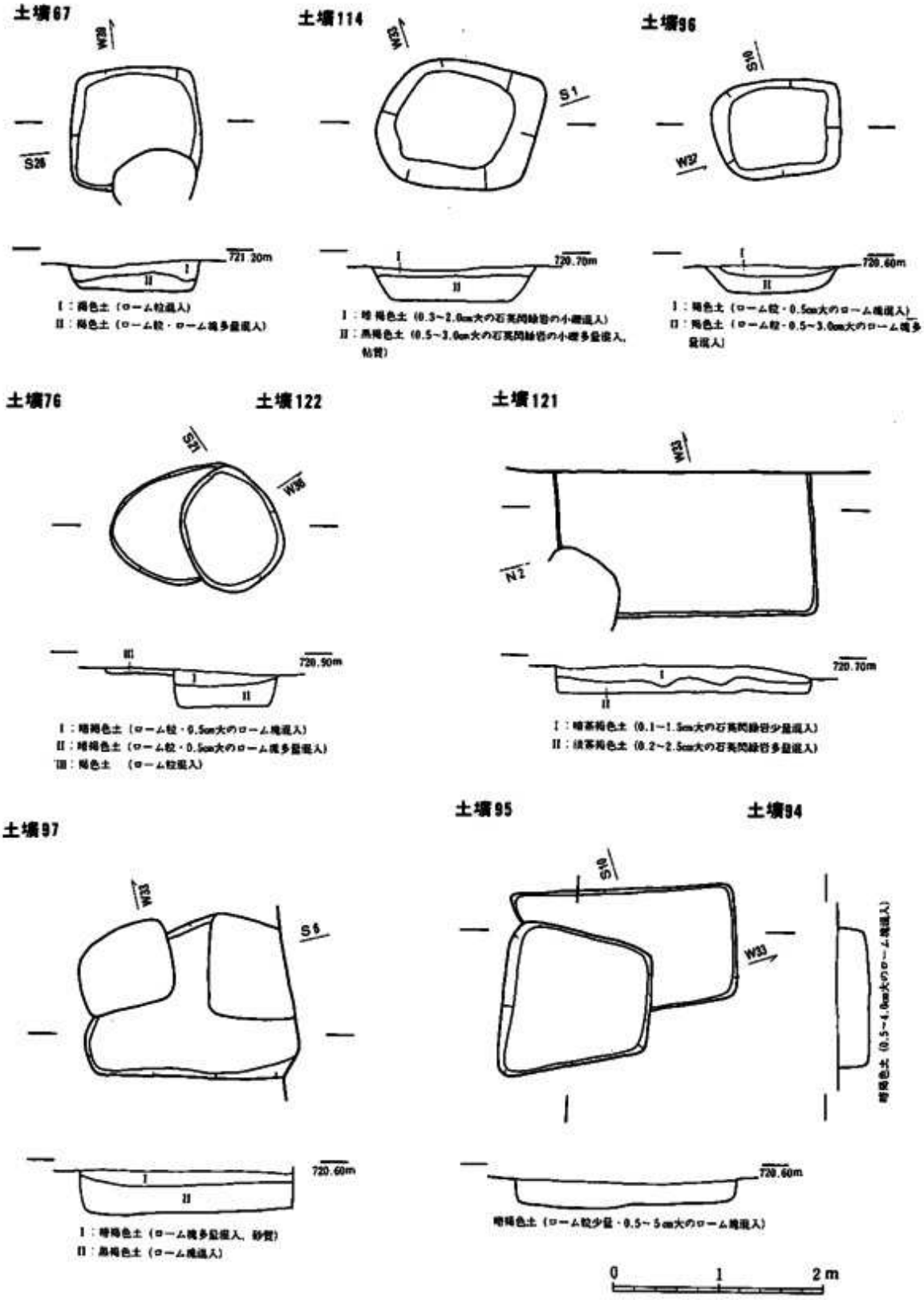
第37図　土壌(12)


土壌52
W38
S28
721.60m
褐色土（ローム塊混入）
土壌55
W39
S34
721.40m
I
II
III
I：褐色土（石英閃緑岩の小礫混入）
II：暗褐色土（ローム塊混入）
III：暗褐色土（ローム塊・石英閃緑岩の礫多量混入）
土壌59
S36
W37
720.40m
褐色土（ローム粒・0.5～1.0cm大のローム塊混入）
土壌57
W32
S31
721.40m
I
II
I：褐色土（1.0～2.0cm大のローム塊混入、砂質）
II：褐色土（1.0～2.0cm大のローム塊多量混入、砂質）
土壌68
S24
W40
721.20m
I
II
土壌77
I：褐色土（ローム粒混入）
II：褐色土（ローム粒多量混入）
土壌63
W36
S27
721.10m
区域外
褐色土（0.3～2.0cm大のローム塊多量混入）
0
1
2 m

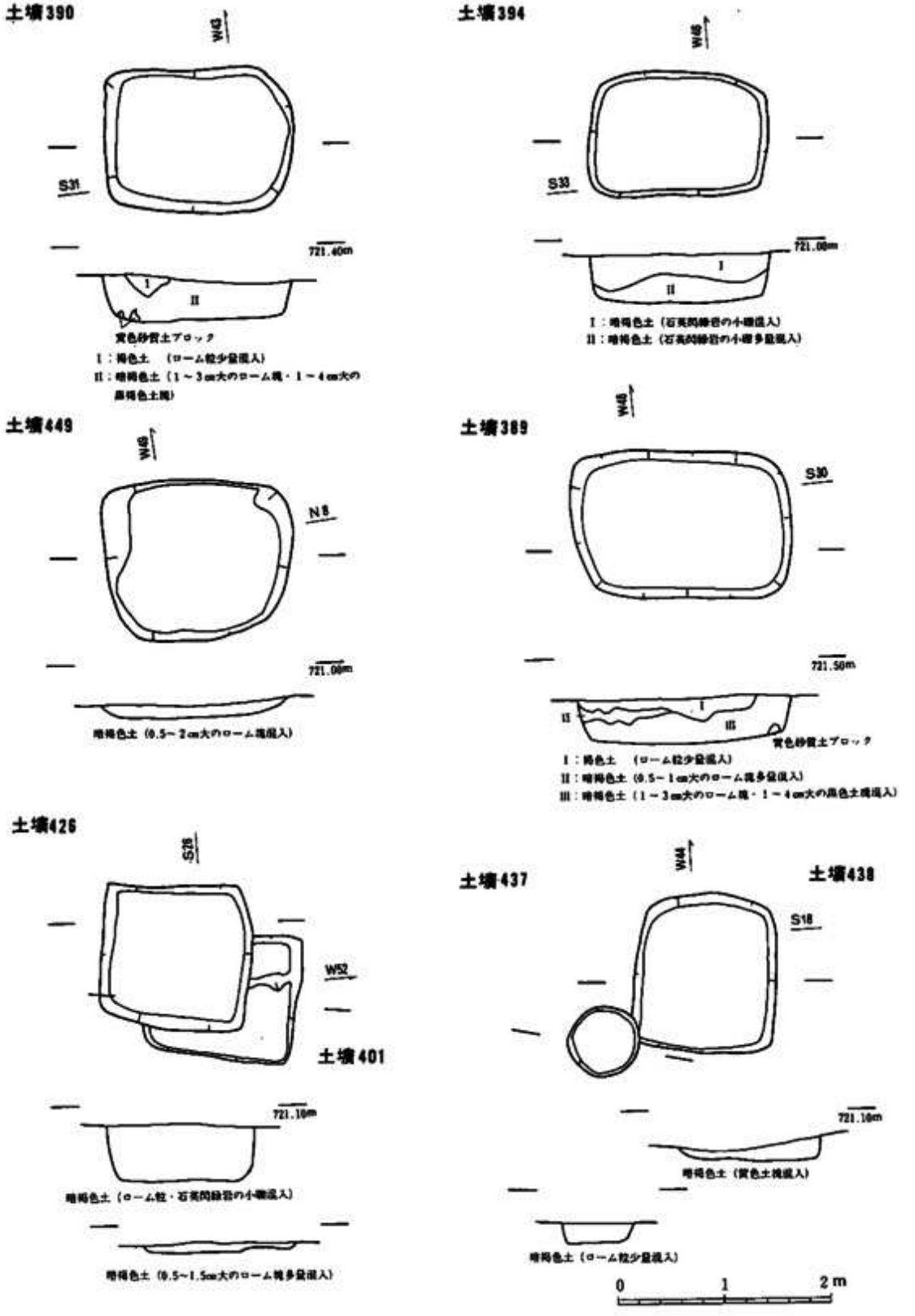
第38図　土壌(13)


土壌111
W32
S2
720.80m
区域外
暗褐色土（ローム粒混入）
土壌80
S17
W36
720.70m
褐色土（0.5～2cm大のローム塊混入）
土壌73
S23
W35
722.10m
暗褐色土（ローム塊多量混入）
土壌58
W38
S26
721.40m
暗褐色土（ローム粒多量混入）
土壌79
W36
S17
720.80m
褐色土（ローム粒・0.5～1cm大のローム塊混入）
土壌90
W36
S13
720.70m
褐色土（ローム粒・0.5～3cm大の土塊多量混入）
土壌71
S31
W37
土壌72
721.20m
Ⅰ：褐色土（ローム塊混入）
Ⅱ：暗褐色土（石英閃緑岩の小礫混入）
Ⅲ：褐色土（ローム塊多量混入）
Ⅰ：暗褐色土（石英閃緑岩の小礫混入）
Ⅱ：褐色土（ローム塊多量混入）
土壌75
S34
W35
土壌74
720.90m
Ⅰ：褐色土（ローム粒混入）
Ⅱ：褐色土（ローム粒、0.5cm大のローム塊混入）
Ⅲ：褐色土（ローム粒、0.5cm大のローム塊多量混入）
Ⅰ：褐色土（ローム粒混入）
Ⅱ：褐色土（ローム粒多量混入）
0
1
2 m

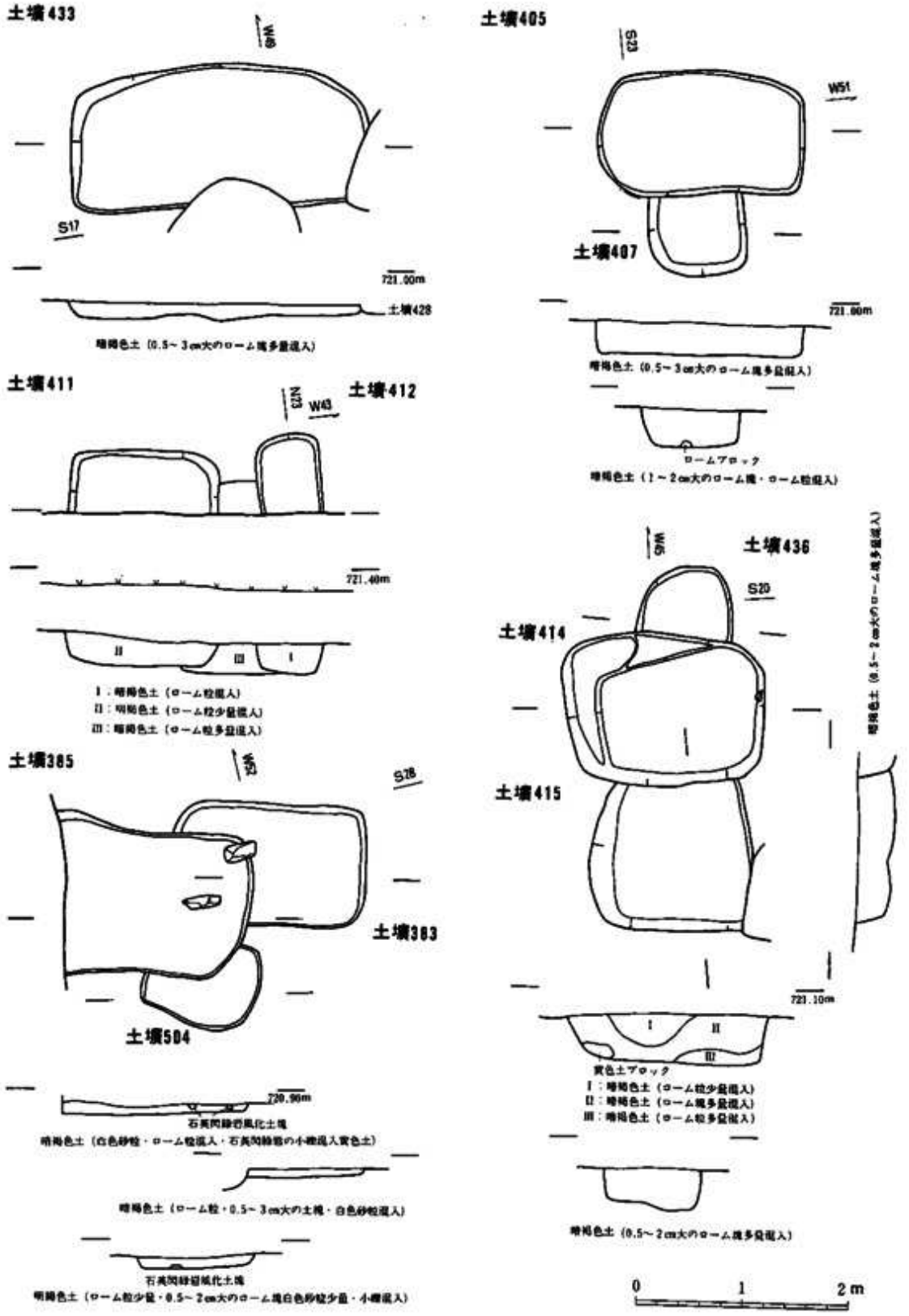
第39図　土壌(4)


土壌67
W29
S26
721.20m
Ⅰ：褐色土（ローム粒混入）
Ⅱ：褐色土（ローム粒・ローム塊多量混入）
土壌114
W32
S1
720.70m
Ⅰ：暗褐色土（0.3～2.0cm大の石英閃緑岩の小礫混入）
Ⅱ：黒褐色土（0.5～3.0cm大の石英閃緑岩の小礫多量混入、粘質）
土壌96
S10
W32
720.60m
Ⅰ：褐色土（ローム粒・0.5cm大のローム塊混入）
Ⅱ：褐色土（ローム粒・0.5～3.0cm大のローム塊多量混入）
土壌76
S25
W36
720.90m
Ⅰ：暗褐色土（ローム粒・0.5cm大のローム塊混入）
Ⅱ：暗褐色土（ローム粒・0.5cm大のローム塊多量混入）
Ⅲ：褐色土　（ローム粒混入）
土壌122
土壌121
W33
N2
720.70m
Ⅰ：暗茶褐色土（0.1～1.5cm大の石英閃緑岩少量混入）
Ⅱ：淡茶褐色土（0.2～2.5cm大の石英閃緑岩多量混入）
土壌97
W32
S5
720.60m
Ⅰ：暗褐色土（ローム塊多量混入、砂質）
Ⅱ：黒褐色土（ローム塊混入）
土壌95
土壌94
S10
W33
暗褐色土（0.5～4.0cm大のローム塊混入）
720.60m
暗褐色土（ローム粒少量・0.5～5cm大のローム塊混入）
0
1
2m

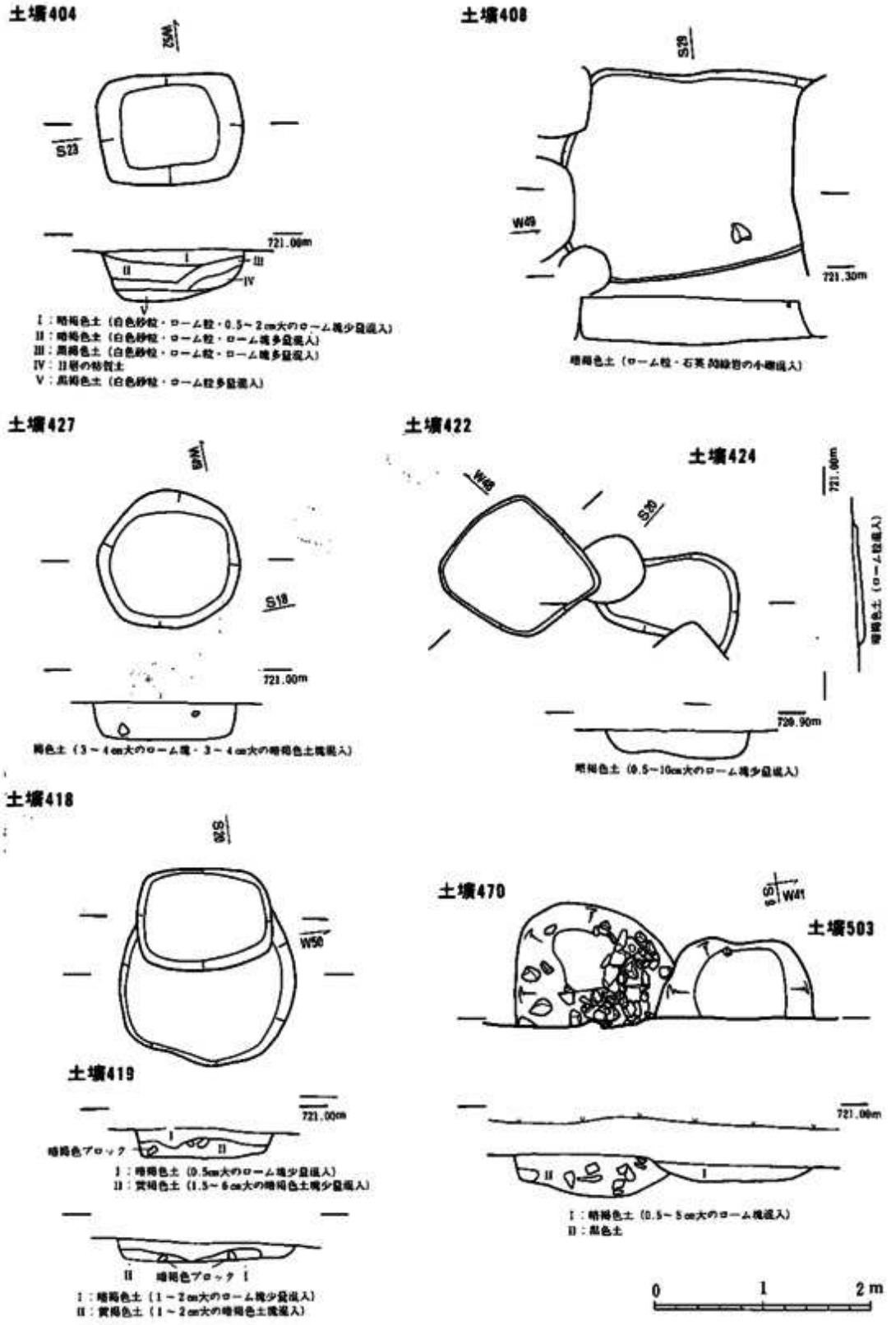
第40図　土壌(15)


土壙390
W43
S31
721.40m
I
II
黄色砂質土ブロック
I：褐色土　（ローム粒少量混入）
II：暗褐色土（1～3cm大のローム塊・1～4cm大の黒褐色土塊）
土壙394
W48
S33
721.00m
I
II
I：暗褐色土（石英閃緑岩の小礫混入）
II：暗褐色土（石英閃緑岩の小礫多量混入）
土壙449
W49
N8
721.00m
暗褐色土（0.5～2cm大のローム塊混入）
土壙389
W48
S30
721.50m
I
II
III
黄色砂質土ブロック
I：褐色土　（ローム粒少量混入）
II：暗褐色土（0.5～1cm大のローム塊多量混入）
III：暗褐色土（1～3cm大のローム塊・1～4cm大の黒色土塊混入）
土壙426
S25
W52
土壙401
721.10m
暗褐色土（ローム粒・石英閃緑岩の小礫混入）
暗褐色土（0.5～1.5cm大のローム塊多量混入）
土壙437
W44
土壙438
S18
721.10m
暗褐色土（黄色土塊混入）
暗褐色土（ローム粒少量混入）
0
1
2 m

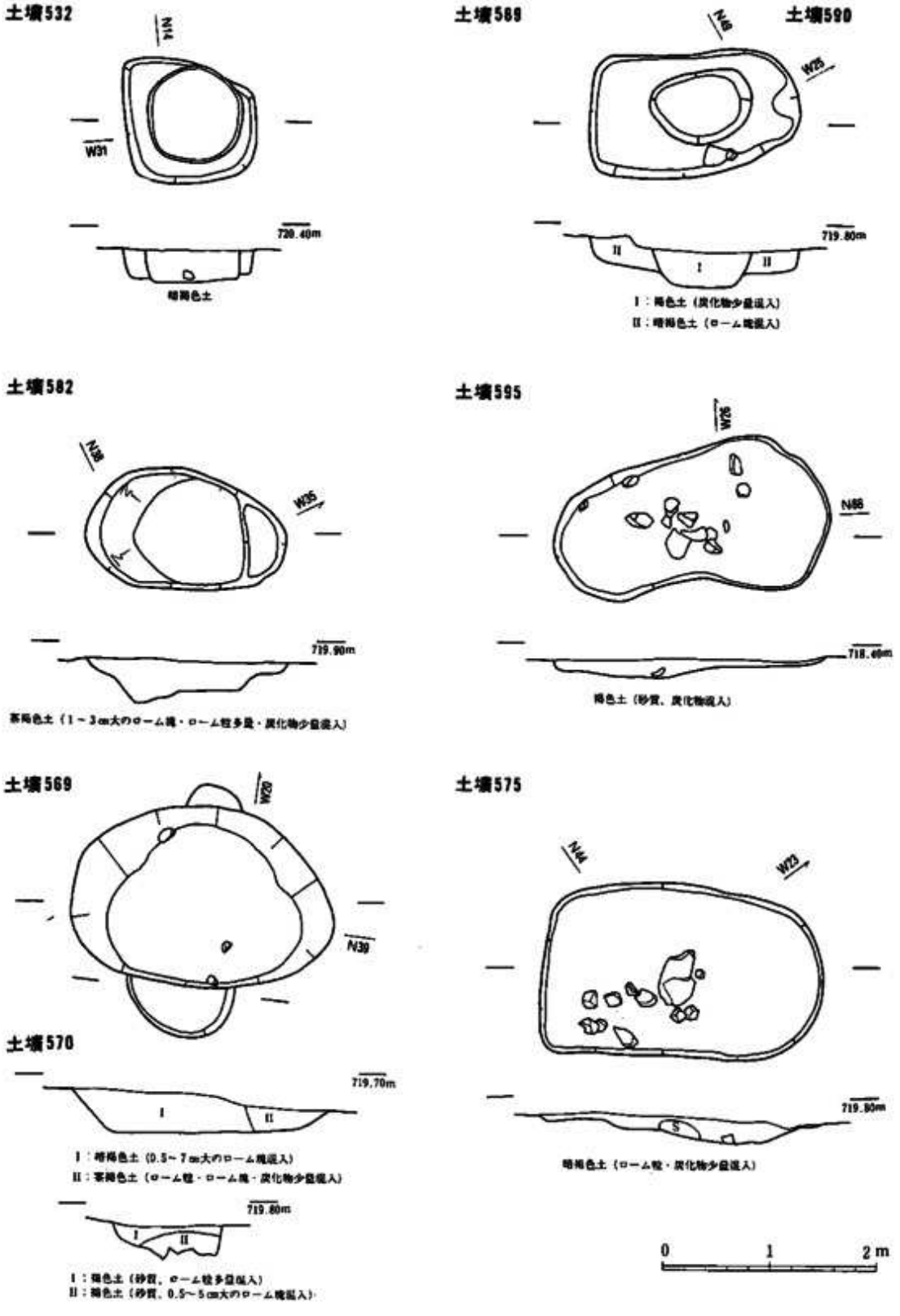
第41図　土壙(6)


土壌433
W49
S17
721.60m
土壌428
暗褐色土（0.5～3cm大のローム塊多量混入）
土壌411
土壌412
S23
W43
721.40m
Ⅱ
Ⅲ
Ⅰ
Ⅰ：暗褐色土（ローム粒混入）
Ⅱ：明褐色土（ローム粒少量混入）
Ⅲ：暗褐色土（ローム粒多量混入）
土壌385
W52
S28
土壌383
土壌504
720.90m
石英閃緑岩風化土塊
暗褐色土（白色砂粒・ローム粒混入・石英閃緑岩の小礫混入黄色土）
暗褐色土（ローム粒・0.5～3cm大の土塊・白色砂粒混入）
石英閃緑岩風化土塊
明褐色土（ローム粒少量・0.5～2cm大のローム塊白色砂粒少量・小礫混入）
土壌405
S23
W51
土壌407
721.60m
暗褐色土（0.5～3cm大のローム塊多量混入）
ロームブロック
暗褐色土（1～2cm大のローム塊・ローム粒混入）
W45
土壌436
S20
土壌414
土壌415
暗褐色土（0.5～2cm大のローム塊多量混入）
721.10m
Ⅰ
Ⅱ
Ⅲ
黄色土ブロック
Ⅰ：暗褐色土（ローム粒少量混入）
Ⅱ：暗褐色土（ローム塊多量混入）
Ⅲ：暗褐色土（ローム粒多量混入）
暗褐色土（0.5～2cm大のローム塊多量混入）
0
1
2 m

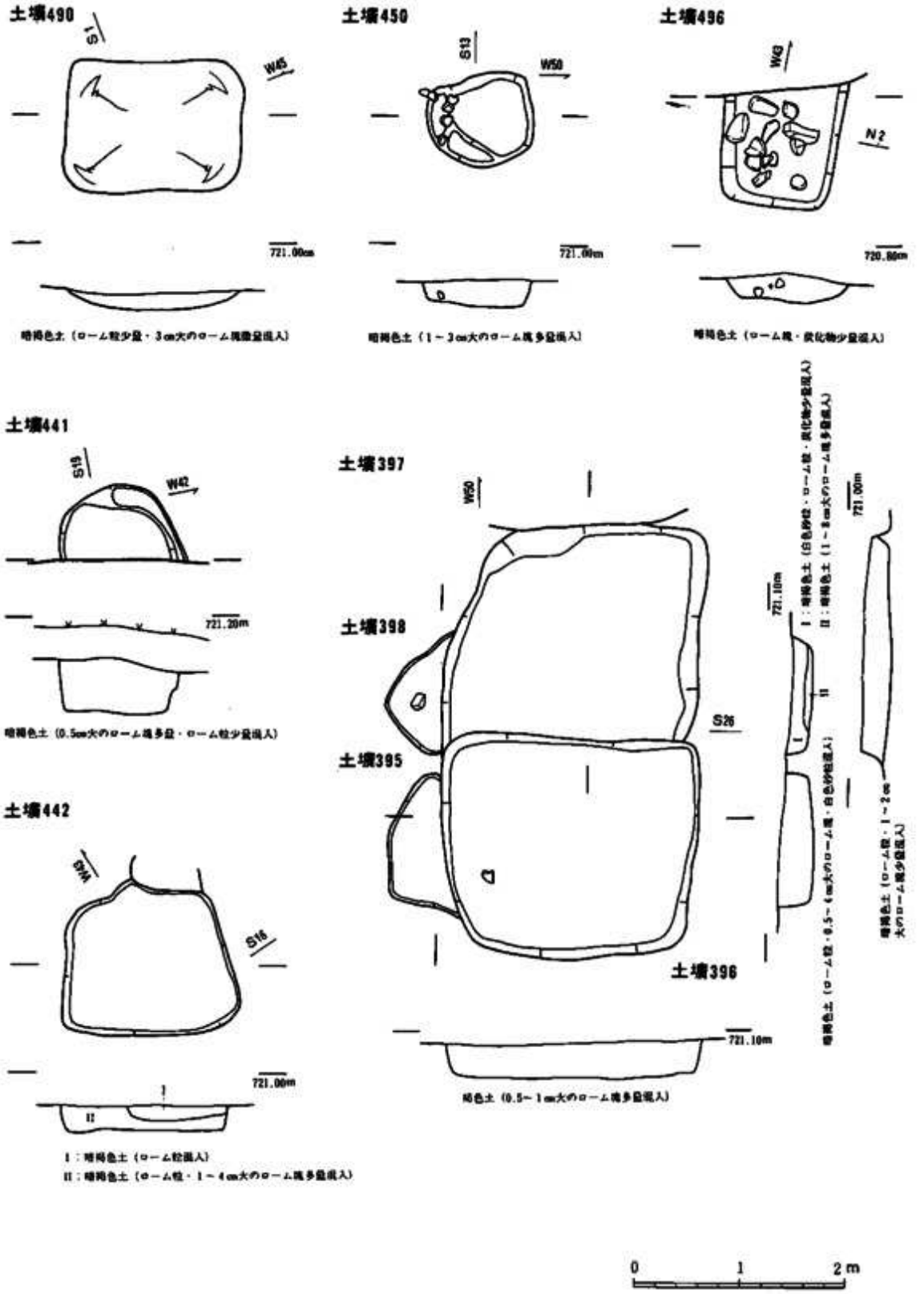
第42図　土壌(17)


土壌404
W52
S23
721.00m
I：暗褐色土（白色砂粒・ローム粒・0.5～2cm大のローム塊少量混入）
II：暗褐色土（白色砂粒・ローム粒・ローム塊多量混入）
III：黒褐色土（白色砂粒・ローム粒・ローム塊多量混入）
IV：II層の粘質土
V：黒褐色土（白色砂粒・ローム粒多量混入）
土壌408
S29
W49
721.30m
暗褐色土（ローム粒・石英・砂粒・炭の小塊混入）
土壌427
W48
S18
721.00m
褐色土（3～4cm大のローム塊・3～4cm大の暗褐色土塊混入）
土壌422
土壌424
W48
S30
721.00m
暗褐色土（ローム粒混入）
720.90m
暗褐色土（0.5～10cm大のローム塊少量混入）
土壌418
S20
W50
土壌419
721.00cm
暗褐色ブロック
I：暗褐色土（0.5cm大のローム塊少量混入）
II：黄褐色土（1.5～6cm大の暗褐色土塊少量混入）
II　暗褐色ブロック　I
I：暗褐色土（1～2cm大のローム塊少量混入）
II：黄褐色土（1～2cm大の暗褐色土塊混入）
土壌470
S5
W41
土壌503
721.00m
I：暗褐色土（0.5～5cm大のローム塊混入）
II：黒色土
0　1　2m

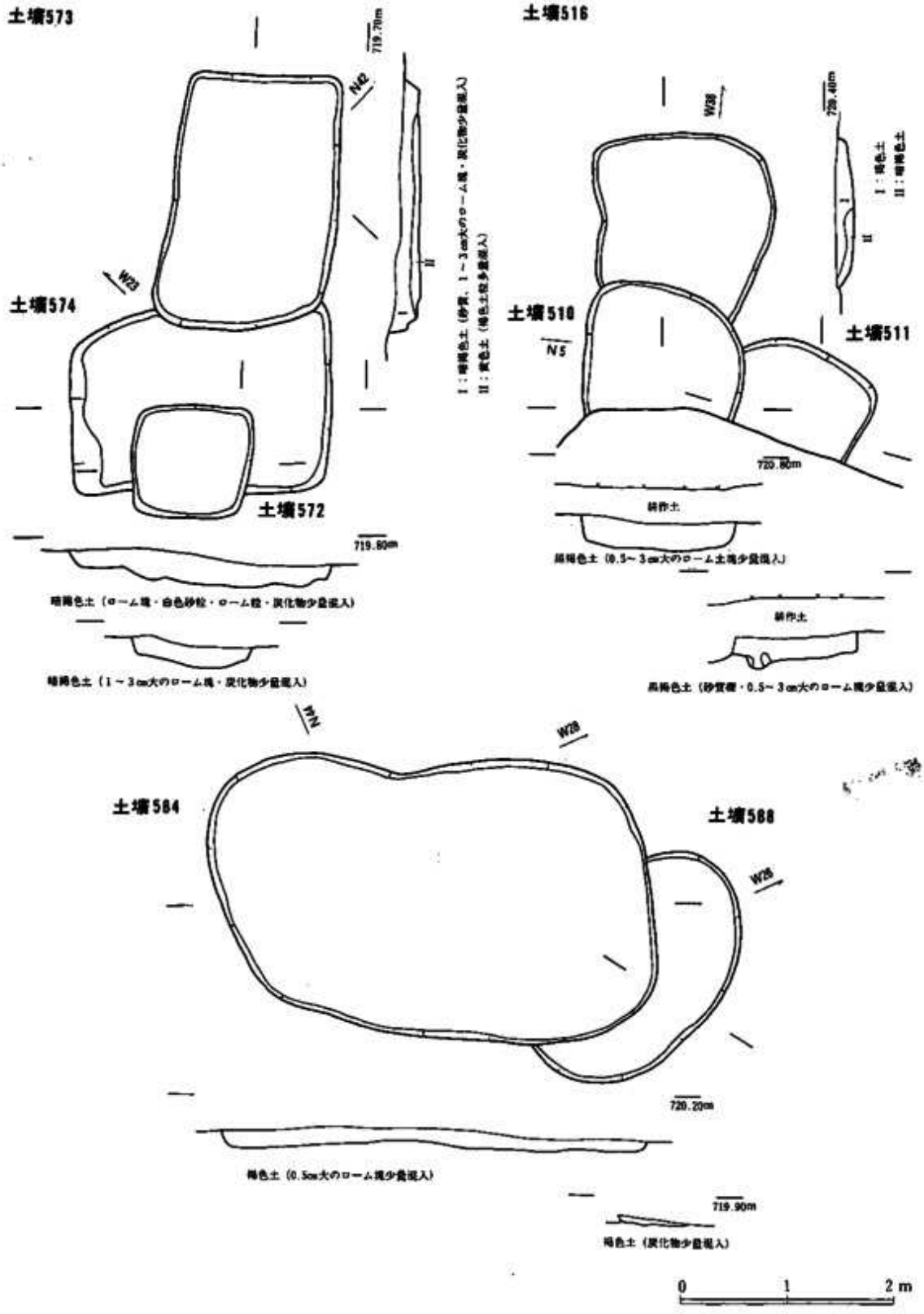
第43図　土壌(18)


土壌532
N14
W31
720.40m
暗褐色土
土壌589
土壌590
N48
W25
719.80m
I：褐色土（炭化物少量混入）
II：暗褐色土（ローム塊混入）
土壌582
N38
W35
719.90m
茶褐色土（1～3cm大のローム塊・ローム粒多量・炭化物少量混入）
土壌595
W26
N88
718.40m
褐色土（砂質、炭化物混入）
土壌569
W20
N39
土壌570
719.70m
I：暗褐色土（0.5～7cm大のローム塊混入）
II：茶褐色土（ローム粒・ローム塊・炭化物少量混入）
719.80m
I：褐色土（砂質、ローム粒多量混入）
II：褐色土（砂質、0.5～5cm大のローム塊混入）
土壌575
N44
W23
719.80m
暗褐色土（ローム粒・炭化物少量混入）
0
1
2 m

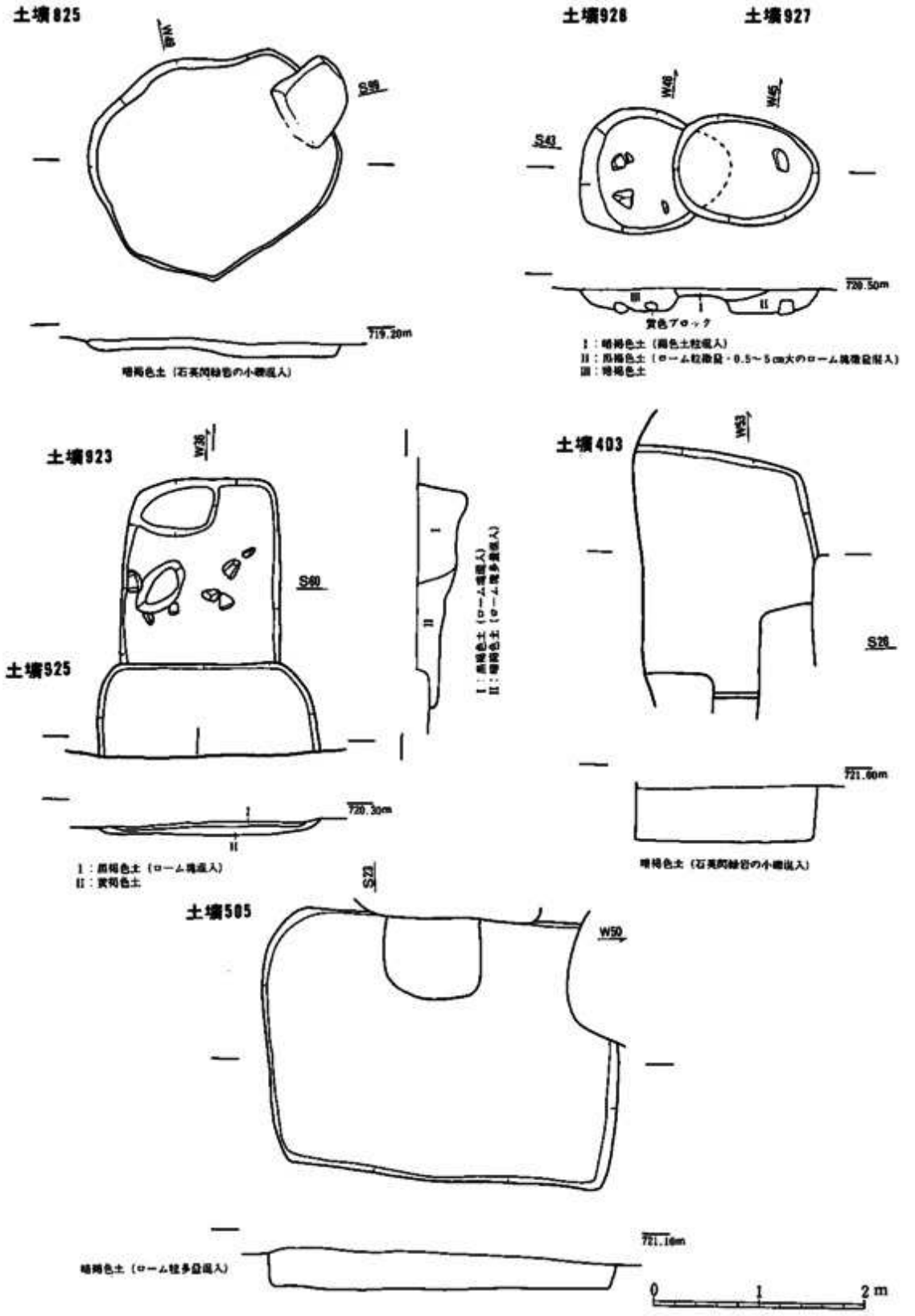
第44図　土壌(19)


土壌490
S1
W45
721.00m
暗褐色土（ローム粒少量・3cm大のローム塊微量混入）
土壌450
S13
W50
721.00m
暗褐色土（1～3cm大のローム塊多量混入）
土壌496
W48
N2
720.80m
暗褐色土（ローム粒・炭化物少量混入）
土壌441
S19
W42
721.20m
暗褐色土（0.5cm大のローム塊多量・ローム粒少量混入）
土壌397
W50
土壌398
S26
土壌395
土壌396
721.10m
721.00m
暗褐色土（0.5～1cm大のローム塊多量混入）
I：暗褐色土（白色砂粒・ローム粒・炭化物少量混入）
II：暗褐色土（1～3cm大のローム塊多量混入）
暗褐色土（ローム粒・0.5～4cm大のローム塊・白色砂粒混入）
暗褐色土（ローム粒・1～2cm大のローム塊少量混入）
土壌442
W43
S16
721.00m
I
II
I：暗褐色土（ローム粒混入）
II：暗褐色土（ローム粒・1～4cm大のローム塊多量混入）
0
1
2 m

第45図　土壌(20)


土壌573
719.70m
N42
W23
土壌574
土壌572
719.80m
I：暗褐色土（砂質、1～3cm大のローム塊・炭化物少量混入）
II：黄色土（褐色土粒多量混入）
暗褐色土（ローム塊・白色砂粒・ローム粒・炭化物少量混入）
暗褐色土（1～3cm大のローム塊・炭化物少量混入）
土壌516
W28
720.40m
I：褐色土
II：暗褐色土
土壌510
N5
土壌511
720.80m
耕作土
黒褐色土（0.5～3cm大のローム土塊少量混入）
耕作土
黒褐色土（砂質層・0.5～3cm大のローム塊少量混入）
N14
W28
土壌584
土壌588
W26
720.20m
褐色土（0.5cm大のローム塊少量混入）
719.90m
褐色土（炭化物少量混入）
0
1
2 m

第46図　土壌(21)


土壌825
W48
S55
719.20m
暗褐色土（石英閃緑岩の小礫混入）
土壌928
土壌927
W46
W45
S43
720.50m
黄色ブロック
Ⅰ：暗褐色土（褐色土粒混入）
Ⅱ：黒褐色土（ローム粒散見・0.5～5cm大のローム塊散見混入）
Ⅲ：暗褐色土
土壌923
W26
S60
土壌925
720.30m
Ⅰ：黒褐色土（ローム塊混入）
Ⅱ：黄褐色土
Ⅰ：黒褐色土（ローム塊混入）
Ⅱ：暗褐色土（ローム粒多量混入）
土壌403
W53
S26
721.60m
暗褐色土（石英閃緑岩の小礫混入）
土壌505
S23
W50
721.10m
暗褐色土（ローム粒多量混入）
0
1
2 m

第47図　土壌(22)

表3

向畑Ⅰ土壙一覧表

番号	掲載図	位置	平面形 規模(cm)	断面形 深さ(cm)	覆土の特徴	切り合い関係 >…は切る <…は切られる	備考
52	38	S36－W36	方形191×174	B23	b		
53		S30－W36	楕円形114×71	B50	a		
54		S30－W36	円形70×69	B 8	a		
55	38	S30－W36	長方形187×148	B50	b	＞6住・8住	
56		S30－W36	楕円形66×47	B18	a	＞6住・7住	
57	38	S30－W36	不整方形164×138	B45	b	＞8住，＜土壙120	
58	39	S24－W30	方形126×78	B28	b		
59	38	S24－W36	方形168×148	B13	b		
60		S24－W36	方形90×80	B25	b	＞7住	
61		S24－W36	隅丸方形51×51	B15	b		
62		S24－W30	不整方形80×51	B13	b	＜土壙63	
63	38	S24－W36	不整方形(208)×203	B20	b	＞土壙62・126	
64		S24－W30	方形81×(67)	C25	b		
65		S24－W36	楕円形78×59	B21	a		縄文
66		S24－W36	不整方形76×72	B20	b	＞土壙67	
67	40	S24－W36	方形127×117	B30	b	＜土壙77	
68	38	S18－W36	長方形205×(91)	B34	b	＞土壙69	
69		S24－W36	楕円形81×(70)	B24	b	＜土壙72	
70		S18－W36	隅丸方形63×56	B 4	b	＜土壙71	
71	39	S18－W36	方形159×149	B35	b	＞土壙70・72	
72	39	S24－W36	不整方形(55)×(41)	B30	b	＜土壙71，＞土壙69	
73	39	S18－W30	方形127×(123)	B13	b		
74	39	S18－W30	長方形154×(62)	B28	b	＞土壙75	
75	39	S18－W30	方形194×(167)	B18	b	＜土壙74	
76	40	S18－W36	楕円形105×58	B15	b	＜土壙122	
77		S18－W36	長方形108×92	B22	b	＞土壙68	
78		S12－W36	方形(197)×44	B33	a	＜9住	古墳
79	39	S12－W30	楕円形107×85	C10	b		
80	39	S12－W36	方形128×(126)	B10	b		
81		S 6－W36	円形101×98	B2	b or a		
82		S12－W30	隅丸方形127×116	C17	b		
85		S12－W30	楕円形45×28	－			
86		S12－W30	方形58×42	B15	b		
87		S12－W30	楕円形150×63	－			
88		S12－W30	円形81×67	B10	b		
89		S12－W30	方形98×67	B13	b		
90	39	S12－W36	不整方形156×118	B37	b	＞土壙92	
91		S 6－W36	方形(331)×265	B45	b	＜土壙92	
92		S12－W36	円形146×84	B25	b	＜土壙90・91	
93		S 6－W30	楕円形101×72	B30	a		縄文
94	40	S 6－W30	長方形(200)×115	B25	b	＜土壙95	
95	40	S 6－W30	台形148×142	A31	b	＞土壙94	
96	40	S 6－W36	隅丸方形123×91	B25	b		
97	40	S 6－W30	楕円形(204)×151	B35	b	＜土壙98・99，＞5住	

98		S 6 −W30	方形92×78	B40	a	>土壙97	
99		NS 0 −W30	隅丸方形98×77	B40	b	>土壙97	
100		NS 0 −W30	長方形140×102	B10	b		
101		NS 0 −W36	方形109×50	B 8	b		
102		S 6 −W36	円形33×32	−			
103		NS 0 −W36	円形83×(45)	−			
104		NS 0 −W30	隅丸方形207×(219)	B16	b	<土壙105	
105		NS 0 −W30	長方形(116)×97	B13	b	<土壙106・107・109, >土壙104	
106		NS 0 −W30	円形71×(61)	A 8	b	<土壙107, >土壙105	
107		NS 0 −W30	長方形132×70	B 6	b	<土壙108, >土壙105, 106	
108		NS 0 −W30	円形51×45	B 8	b	>土壙107	
109		NS 0 −W30	円形50×40	B 5	b	>土壙105	
110		NS 0 −W30	方形115×64	−		<土壙111・114	
111	39	NS 0 −W30	長方形141×111	B10	b	>土壙110	
112		NS 0 −W30	隅丸方形56×50	−			
113		NS 0 −W36	楕円形41×30	−			
114	40	NS 0 −W30	隅丸方形150×123	B33	a	>土壙110	
115		NS 0 −W30	円形65×56	−	b		縄文
116		NS 0 −W30	長方形126×96	A12	b		
117		NS 0 −W30	円形(65)×61	−		<土壙118	
118		N 6 −W30	楕円形78×57	−		>土壙117	
119		N 6 −W30	隅丸方形108×85	B10	b		
120		S30−W36	円形76×74	C74	b	>8住・土壙57	
121	40	N 6 −W30	長方形246×(136)	A13	a	<溝6	
122	40	S18−W30	楕円形122×83	B35	b	>土壙76	
123		S30−W36	楕円形139×92	B50	b	>8住	
124		S30−W36	不明(125)×(25)	B73	b	>6住・7住・土壙125	
125		S30−W36	不明(58)×(3)	B47	b	<土壙124	
126		S24−W30	不整方形124×114	B20	b	<土壙63	
376		S36−W42	円形73×64	B 9	b		
377	32	S36−W48	円形76×65	B18	a		
378	32	S36−W48	円形115×105	B45	b		
379	32	S30−W54	円形92×78	B20	a or b		
380		S30−W54	楕円形(150)×(62)	C38	b		
381		S30−W48	円形49×47	B24	b	>土壙388・408	
382		S30−W42	隅丸方形(198)×(73)	−		<7住・土壙388	
383	42	S24−W48	方形183×132	B(10)	b	>31住, <土壙385	
384		S30−W54	方形83×72	B38	b	>31住	
385	42	S24−W48	方形(197)×140	B(10)	b	>31住・土壙383, 504	
386	32	S30−W48	隅丸方形70×58	A60	b	>31住・土壙408	
387		S30−W48	円形100×77	C60	b	>土壙408	
388	31	S30−W42	楕円形111×69	不明10	b	>土壙382, <7住・土壙381	古墳
389	41	S30−W42	長方形207×139	B45	b	>7住・土壙392	
390	41	S30−W42	方形178×135	B45	b	>7住・土壙468	
391		S30−W42	方形147×82	B 6	a or b	>7住, <土壙468	
392		S24−W42	円形61×61	B10	b	>7住, <土壙389	
393	31	S24−W42	円形135×114	B35	b	>7住・32住・41住	

394	41	S30－W42	長方形168×116	B47	a	＞7住	
395	45	S24－W42	方形124×(57)	A32	b	＜土壙396	
396		S24－W48	方形244×209	B37	b	＞土壙395・397・408	
397	45	S24－W48	台形243×(202)	B30	b	＜土壙396・505，＞土壙398	
398	45	S24－W48	方形(77)×(50)	B23	b	＜土壙397	
399		S24－W42	円形75×62	B21	b	＞7住	
400	32	S24－W42	円形77×74	B18	b or a	＜41住	
401	41	S24－W48	方形143×117	B12	b	＜土壙426，＞土壙403	
402		S24－W48	長方形130×(67)	B39	b	＞土壙403	
403	47	S24－W48	方形235×(167)	A55	b or a	＜土壙401・402・426	
404	43	S18－W48	方形144×102	B47	b		
405	42	S18－W48	長方形200×115	A31	b	＞土壙406・407・420・505・506	
406		S18－W48	方形(83)×(37)	－		＜土壙405・505	
407	42	S18－W48	方形93×78	B37	b	＜土壙405，＞土壙505	
408	43	S24－W48	方形(223)×197	A43	b	＜土壙381・386・387・396，＞31住	
409	30	S24－W42	方形67×(66)	B14	a or b	＜32住	古墳
410	30	S18－W42	円形68×65	B42	b		縄文
411	42	S24－W42	方形142×(60)	B30	b	＞土壙413	
412	42	S18－W42	方形(75)×61	B24	b	＞33住・土壙413	
413		S18－W42	方形(40)×(32)	B27	b	＜土壙411・412	
414	42	S18－W42	方形192×140	B47	b	＞33住・土壙415・436・502	
415	42	S18－W42	台形154×(141)	B38	b	＜土壙414・416，＞33住・土壙502	
416		S18－W42	隅丸方形125×102	B48	b	＞33住・土壙415・502	
417	32	S18－W42	円形85×80	B15	b		
418	43	S18－W48	方形125×96	B35	a or b	＞土壙419・506	
419	43	S18－W48	円形163×151	B20	b or a	＜土壙418，＞土壙421・505・506	
420		S18－W48	隅丸方形252×(65)	－		＜土壙405・506	
421		S18－W48	方形60×32	B 9	b	＜土壙419・505	
422	43	S18－W48	方形122×117	B10	a or b	＞土壙423・506	
423		S18－W42	円形69×58	B38	b or a	＜土壙422，＞土壙424	縄文
424	43	S18－W42	台形135×(83)	B25	b or a	＜土壙423・505	縄文
425		S18－W42	円形60×51	B36	b	＞P392	
426	41	S24－W48	方形141×134	B55	b	＞土壙401・403	
427	43	S12－W48	円形130×130	B32	a	＞土壙429・403・433・501	
428		S12－W48	台形142×104	B10	b	＞土壙433・501	
429		S12－W48	方形112×(104)	B25	b	＜土壙427・501，＞土壙430・506	
430		S12－W48	隅丸方形159×105	B36	b	＜土壙427・429，＞土壙431・432・506	
431		S 9－W48	方形78×(43)	－		＜土壙430，＞土壙432・506	
432		S12－W48	方形233×(102)	－		＜土壙430・431・506・P387	
433	42	S12－W48	長方形277×134	B15	b	＜土壙428・427，＞土壙501	
434	32	S12－W48	円形103×95	B18	a		
435	30	S12－W42	円形103×95	B45	a	＞P390	縄文
436	42	S18－W42	円形92×(65)	A40	b	＜土壙414，＞33住	
437	41	S18－W42	円形69×65	B23	b	＞土壙438	
438	41	S18－W42	方形150×135	B20	b	＜土壙437，＞P391	
439		S18－W36	円形(63)×(62)	－		＜33住・土壙441	
440		S12－W42	楕円形62×39	F23	b		

441	45	S18－W36	円形118×(72)	B50	b	＞土壙439	
442	45	S12－W42	方形164×145	B26	b	＞土壙444・445・446・489	
443		S12－W42	台形158×98	B24	b	＞土壙446・489	
444		S12－W42	方形70×(65)	B26	b	＜土壙442，＞土壙445	
445		S12－W42	方形73×(30)	B23	b	＜土壙442・444・446，＞489	
446		S12－W42	台形252×233	B17	b	＜土壙386・442・443・447，＞土壙445・489	
447		S12－W42	隅丸方形72×52	－		＞土壙446	
448		S12－W42	不整円75×43	B44	a or b		
449	41	S12－W42	方形181×150	B15	b	＞土壙451・454	
450	45	S12－W48	円形101×90	B25	b	＞土壙451・456・458	
451		S12－W48	隅丸方形138×137	B 8	b	＜土壙449・450・452，＞土壙454・455・456	
452		S12－W48	方形103×83	B17	b	＞土壙451	
453	32	S12－W42	円形104×98	B30	b	＞土壙454・457	
454		S12－W42	方形(169)×(60)	B27	b	＜土壙449・451・453・457	
455		S12－W48	隅丸方形83×(73)	B35	b	＜土壙451，＞土壙456・457	
456		S12－W48	不整方形222×(76)	－		＜土壙450・451・455，＞土壙457・458・461	
457		S12－W42	台形(158)×107	－		＜土壙453・455・P379，＞土壙454	
458		S12－W48	隅丸方形153×(96)	－		＜土壙450・456	
459	26	S 6－W48	円形105×103	B23	b	＜土壙460	縄文？
460	26	S 6－W48	円形67×63	B25	b	＞土壙459	
461		S 6－W48	台形151×(71)	B17	a	＜土壙456	
462		S 6－W42	楕円形83×65	B15	b		
463	26	S12－W42	方形(90)×86	B20	b	＜土壙464	
464		S 6－W42	方形83×72	B28	b	＞土壙463・465	
465	26	S 6－W42	楕円形209×144	C16	b	＜土壙464	縄文
466	31	S12－W42	楕円形104×67	B22	b or a		縄文
467	32	S12－W42	円形59×46	B15	a		
468		S30－W42	方形96×(47)	不明78	a	＜土壙390，＞7住・土壙391	
469		S12－W38	長方形83×47	A34	a		
470	43	S 6－W38	円形(160)×(116)	B38	b or a	＜土壙503	
471	27	S 6－W48	円形89×75	B10	a or b	＞土壙473	縄文
472		S 6－W48	楕円形(115)×105	－			
473	27	S 6－W48	隅丸方形168×158	B14	a	＜土壙471，＞土壙474	縄文
474	27	S 6－W42	台形251×156	B29	b	＜土壙473，＞土壙475	縄文
475	27	S 6－W42	隅丸方形180×165	B10	a or b	＜土壙474，＞P371・P369	縄文
476	28	S 6－W42	台形55×48	B15	a	＞土壙477	
477	28	S 6－W42	楕円形125×99	B20	a	＜土壙476	縄文
478	27	S 6－W42	隅丸方形90×76	B12	a or b	＜土壙479，＞土壙480	縄文
479	28	S 6－W42	不整円115×81	B15	a	＞土壙478	縄文
480	27	S 6－W42	円形(153)×131	B35	b or a	＜土壙478	縄文
481	26	NS 0－W42	円形149×118	C33	b or a		縄文
482	32	NS 0－W42	円形79×75	B 7	b		
483	28	NS 0－W36	楕円形120×87	B12	b		縄文
484	29	NS 0－W36	円形(136)×(53)	B 8	a		縄文
485	28	NS 0－W42	円形115×102	B28	a or b	＞溝8	縄文
486	26	NS 0－W42	楕円形153×150	B48	a or b	＜土壙487・488	縄文
487	26	NS 0－W42	円形103×81	B20	a or b	＞土壙486	縄文

488	26	NS0－W42	円形123×(102)	B35	a or b	＞土壙486	縄文
489		N12－W42	方形206×165	B40	b	＜土壙442・443・445・446・P386	
490	45	NS0－W42	方形170×123	C19	b	＞P354・355	
491	32	NS0－W36	円形79×79	B21	b		
492	32	N6－W36	円形89×76	B43	b		
493	30	N6－W42	円形90×75	C10	b or a		縄文
494		N6－W42	楕円形(100)×91	B20	a or b	＞土壙495	縄文
495	28	N6－W42	円形(113)×(112)	B43	a or b	＜土壙494	縄文
496	45	N6－W42	方形(118)×64	B35	b or a		縄文
497		N6－W36	楕円形143×115	B48	a	＞土壙507	縄文
498	31	N6－W36	楕円形164×67	B15	b	＞P364	
499	31	N6－W36	円形119×85	B16	a or b		
500	26	NS0－W36	不整形260×95	B44	a or b		縄文
501		S12－W48	隅丸方形(154)×78	A10	b	＜土壙427・428・433，＞土壙429	
502		S18－W42	方形248×226	B40	b	＜土壙414・415・416，＞33住	
503	43	S6－W36	方形146×(72)	B14	a	＞土壙470	
504	42	S24－W48	隅丸方形112×67	B14	b	＜土壙385，＞31住	
505	47	S18－W48	長方形340×245	B38	b	＜土壙405・407・419，＞土壙397・406・421・424・506	
506		S18－W48	方形(340)×280	－		＜土壙405・418・419・422・429・430・431・505，＞土壙420・432	
507	26	N6－W36	円形142×108	C46	a	＜土壙497	縄文
509		N54－W24	方形(153)×145	－		＞37住	
510	46	N6－W36	隅丸方形152×(118)	B22	b	＞土壙511・516	
511	46	N6－W30	隅丸方形(122)×(91)	A24	b	＜土壙510，＞土壙512	
512		N6－W30	方形(112)×(104)	－		＜土壙511，＞土壙513	
513		N6－W30	円形65×(47)	A8	a	＜土壙512	
514	31	N6－W36	隅丸方形101×(56)	B12	a	＜土壙515	
515	31	N6－W30	隅丸方形92×65	B8	a	＞土壙514	
516	46	N12－W30	方形164×(157)	B20	a	＜土壙510	
517		N6－W30	円形75×75	B10	a	＞土壙518	
518		N6－W30	円形80×(72)	A10	a	＜土壙517	
519		N6－W30	円形74×64	B13	a		
520		N6－W30	円形70×69	A7	a	＜土壙521	
521		N6－W30	円形86×80	B10	a	＞土壙520	
522		N12－W30	円形69×61	B10	a		
523		N12－W30	楕円形87×53	B8	a	＞竪穴状遺構7	
524	27	N12－W36	隅丸方形157×122	B58	b	＞土壙559	
525	37	N12－W30	隅丸方形139×108	B34	b	＞竪穴状遺構7・土壙526	
526	37	N12－W30	円形108×85	B44	b	＜土壙527，＞竪穴状遺構7	
527	31	N12－W30	楕円形110×75	B45	b	＞竪穴状遺構7・土壙526	
529		N18－W30	台形120×117	B28	b	＜土壙532，＞P449	
530		N18－W30	隅丸方形97×74	B12	b	＞P416	
531	34	N12－W24	方形147×119	B35	b		
532	44	N18－W30	方形90×89	B30	b	＞土壙529	
533		N12－W36	円形58×52	B6	a		
534	37	N12－W36	長方形(108)×77	B20	b	＜土壙535・P437	
535	37	N12－W36	隅丸方形95×66	B23	b	＞土壙534	
536	33	N12－W36	円形55×46	B12	b		

537	30	N18－W36	楕円形128×110	B 8	b or a	＞土壙541	
538		N18－W30	円形63×50	C15	c or b		
539		N18－W30	隅丸方形83×70	E38	b		
540	30	N18－W36	長方形143×90	B22	b	＞土壙541	
541	30	N18－W36	不整方形215×188	B20	a	＜土壙537・540・544	縄文
542		N24－W36	円形75×65	E33	a		
543	34	N24－W36	楕円形143×100	B35	a	＞土壙544	
544		N24－W36	楕円形(122)×98	B13	a	＜土壙543，＞土壙541	
545		N24－W36	円形73×72	E33	a	＜35住	古墳
546		N24－W30	円形76×72	B12	b		
547		N24－W24	隅丸方形168×156	B43	b		
548	26	N24－W24	円形122×119	B40	a or b		縄文
549	30	N24－W24	円形152×144	C40	b	＜向畑７号古墳周溝	古墳
550	28	N30－W30	楕円形177×146	F35	a or b		縄文
551	37	N30－W24	円形90×(71)	B13	b	＜土壙552	
552	37	N30－W24	円形99×90	B15	b	＞土壙551	
553	30	N30－W24	円形63×56	E30	a	＜向畑７号古墳周溝	古墳
554	37	N36－W18	円形107×94	C25	b	＜土壙555	
555	37	N36－W18	楕円形102×83	B30	a	＞土壙554	
556	33	N30－W18	円形72×69	C 6	a or b		
557	34	N36－W12	円形72×68	B 5	b		
558	33	N36－W12	円形76×64	C28	a or b		
559	27	N12－W36	楕円形216×148	C25	b	＜土壙524	縄文？
561	33	N60－W24	円形63×62	C20	b	＞向畑６号古墳墳丘裾部	
562	37	N30－W 6	長方形170×112	B17	b		
563	37	N30－W 6	隅丸方形73×69	C12	b		
564	34	N60－W36	不整形135×189	B15	a		
565	34	N60－W30	不整形147×109	B12	a		
566		N36－W18	円形62×51	B12	a		
567	33	N36－W18	円形88×75	C12	a or b		
568	33	N42－W12	円形78×77	B15	a	＞向畑７号古墳周溝	
569	44	N42－W18	楕円形250×168	B45	b	＞土壙570・P536	
570	44	N42－W18	円形104×(48)	F30	b	＜土壙569	
571	34	N42－W18	方形158×94	B18	a		
572	46	N42－W18	方形120×109	B35	a	＞土壙547	
573	46	N48－W18	長方形237×159	B30	b	＞土壙574	
574	46	N42－W18	長方形250×182	B36	b	＜土壙572・573	
575	44	N48－W18	長方形267×162	F30	b		
576	37	N36－W24	円形328×294	B12	b	＜向畑７号古墳周溝	
577	33	N42－W24	円形72×66	B15	a or b		
578		N42－W24	円形55×47	B16	b		
579	33	N42－W24	円形55×51	B18	b		
580		N42－W30	隅丸方形80×67	B20	a		
581	34	N30－W30	円形68×59	B14	b		
582	44	N42－W30	楕円形210×114	B40	b		
583	34	N42－W30	楕円形95×50	B15	a		
584	46	N48－W24	隅丸方形447×276	B25	b	＞37住・土壙588	

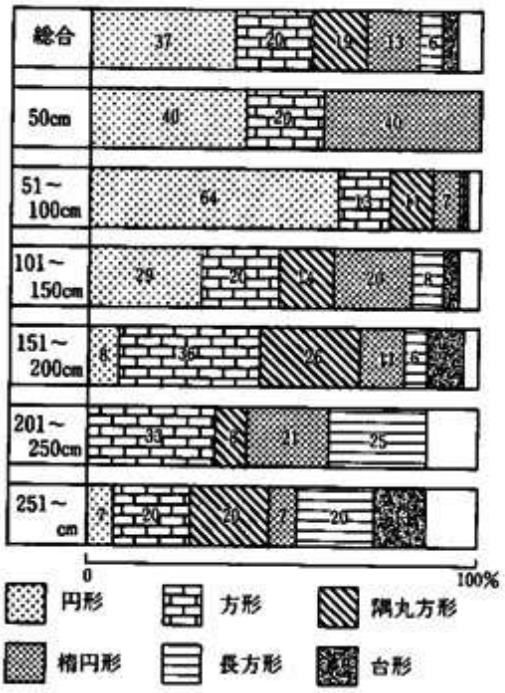
585	33	N54－W30	円形75×72	B20	b		
586	37	N66－W30	隅丸方形115×75	B12	b		
587	33	N60－W24	円形97×95	C38	b		
588	46	N48－W24	楕円形235×(100)	B 5	a	＜土壙584，＞37住	
589	44	N54－W24	隅丸方形196×114	B35	b	＜土壙590，＞37住	
590		N54－W24	円形95×68	B45	b	＞37住・土壙589	
591	34	N54－W24	楕円形127×83	B15	a or b	＞37住	
592		N60－W18	円形64×60	E25	b		
593	34	N66－W24	円形105×64	B 5	a	＜竪穴状遺構5	
594	34	N66－W24	方形106×73	B13	a		
595	44	N72－W24	隅丸方形282×145	B18	a	＞38住	
596	30	N60－W24	長楕円319×63	B22	b	＞37住	古墳
597		N12－W24	円形69×62	－	b	＜土壙795，＞P241	
598		N12－W24	円形54×50	B 7	b	＜P409	
599		N30－W30	円形81×74	C17	b		
600		N54－W30	円形59×45	B24	b		
601	33	N48－W30	円形55×50	C 6	b		
604	33	N12－W42	円形76×75	B10	b	＜P470・471	縄文
605	34	N48－W30	隅丸方形61×56	B12	b		
606		N24－W48	隅丸方形112×81	B50	b		
818		S102－W36	隅丸方形82×62	F45	c or a		
819	36	S96－W42	円形87×68	C25	c	＞土壙831	
820		S59－W42	円形72×65	B 9	c or a		
821		S102－W36	隅丸方形129×91	B25	c	＞土壙839	
822	36	S96－W54	円形135×80	B10	c or b		
823		S96－W48	円形91×83	B23	c or b		
824		S96－W48	隅丸方形161×101	B26	c or a	＞土壙827・828	
825	47	S96－W48	方形230×209	B21	c or a		
826		S96－W42	円形90×73	B10	b or c	＞土壙827・P537	
827		S96－W48	隅丸方形108×(95)	B15	c or b	＜土壙824・826，＞土壙828	
828		S96－W48	隅丸方形(155)×143	B23	c or a	＜土壙824・827・829	
829		S96－W42	隅丸方形 155 ×147	B17	c or b	＞土壙828	
830	36	S96－W42	隅丸方形137×95	B20	c or b		
831	36	S96－W42	楕円形227×185	B 8	c or b	＜土壙819	
832		S96－W42	円形78×61	B13	c or a	＞P572	
833		S96－W42	円形58×48	B 7	c or b	＜土壙835	
834		S96－W42	円形60×52	C10	c or b	＞土壙835	
835		S96－W42	楕円形105×73	B 5	c or b	＜土壙834，＞土壙833	
836		S96－W42	円形70×59	B20	c		
837		S102－W42	円形78×78	F 8	c or a	＞土壙838	
838		S102－W36	楕円形114×77	F40	c or a	＜土壙837・839	
839		S102－W36	隅丸方形129×125	B30	c	＜土壙821，＞土壙838	
851	35	S60－W48	円形65×54	B 5	b		
852	35	S66－W48	円形68×60	B17	b		
853		S66－W48	円形44×41	B27	b		
886	29	S48－W36	円形74×61	B27	a or b	＜土壙908	縄文
888	28	S42－W36	楕円形79×62	A49	a	＜土壙907，＞土壙889	縄文？

889	28	S42－W36	円形(69)×(75)	E47	a	<土壙888·907	縄文
891	31	S48－W18	楕円形135×102	B16	a or b	>土壙893	
892	31	S48－W42	円形103×96	B18	a		縄文
893	31	S48－W42	円形83×69	B16	b	<土壙891	
894	35	S48－W42	隅丸方形61×60	B33	b or a	>P580	
895	29	S48－W42	楕円形83×62	B33	a or b		縄文
896	35	S48－W42	円形97×84	B20	b	>P581	
897	36	S48－W42	隅丸方形120×100	B20	b		
898	26	S48－W42	円形148×123	B35	b		縄文
899	36	S42－W42	楕円形123×61	B(29)	b	>46住	
900	35	S54－W48	円形106×93	B12	b		
901	35	S54－W42	円形94×80	B10	b		
902	35	S48－W42	円形86×71	B38	b		
903	29	S54－W42	方形138×111	B48	a		縄文
904		S54－W42	円形121×166	B18	b		
906	35	S42－W36	円形87×77	B12	b		
907	28	S42－W36	円形135×112	B30	a or b	>土壙888·889	縄文
908	29	S42－W36	円形67×66	C7	b	>土壙886	
909	35	S48－W36	円形70×55	C19	b		
910	35	S48－W36	円形76×61	B33	b		
911	29	S48－W36	円形92×76	A64	b		縄文
912	29	S48－W36	円形72×67	B15	a or b		縄文
913	36	S48－W36	隅丸方形226×142	B36	b	<P585,>土壙916·917	
914		S48－W36	円形70×66	B45	b	>土壙917	
916		S48－W36	方形191×(86)	A48	b	<土壙913·917	
917	36	S48－W36	隅丸方形131×(5)	B37	b	<土壙913·914,>土壙916	
918	29	S54－W36	円形83×64	B5	a		縄文
919	35	S54－W36	円形70×68	B18	b		
920		S48－W30	方形109×105	B15	b	>45住	
921	29	S54－W36	円形93×85	B12	a or b		縄文
922	35	S54－W30	円形91×70	E58	b		
923	47	S54－W36	方形(175)×152	B47	b	<土壙925	
924	36	S60－W30	台形138×130	E65	b		
925	47	S60－W30	方形209×90	B20	b or a	>土壙923	
926		S48－W30	円形77×53	B17	b		
927		S42－W42	楕円形140×100	B23	b	>46住·土壙928	
928	47	S42－W42	円形144×118	B25	b	<土壙927,>46住	
929		S42－W42	楕円形63×48	D5	b or a		
930	28	S42－W42	円形113×106	D60	a	<46住,>土壙931	縄文
931	28	S42－W42	円形118×120	D73	a or b	<土壙930	縄文

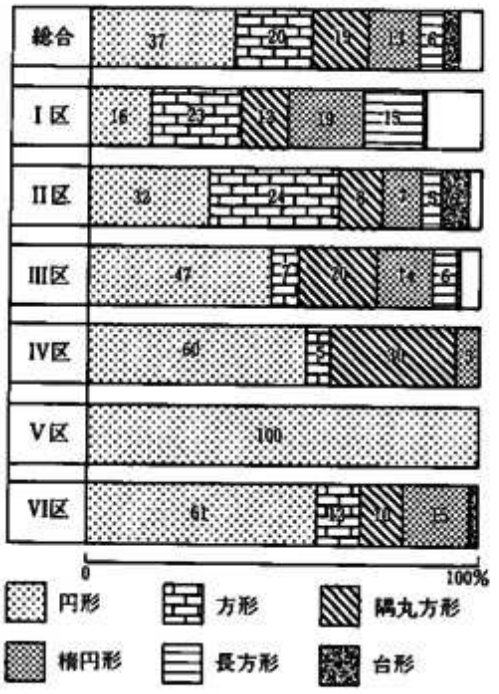
表 4

土壙分類相関表(1)

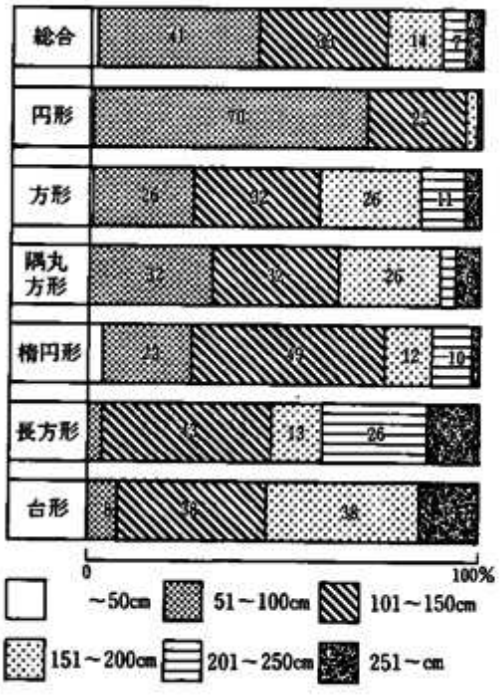
規模（長径）別の平面形比（%）



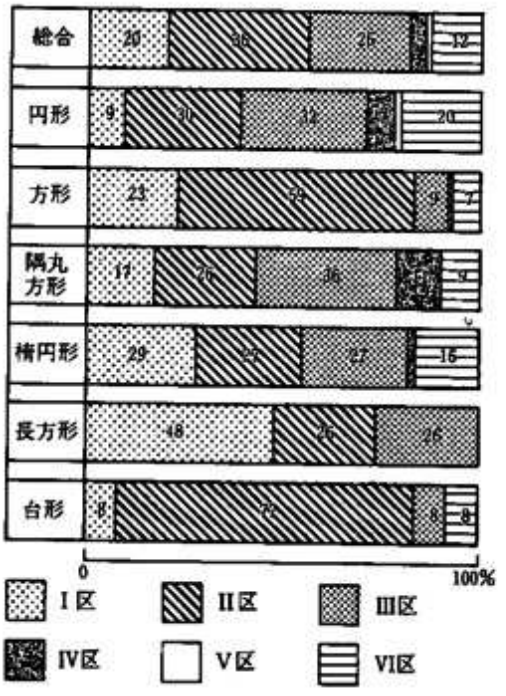
地区別の平面形比（%）



平面形別の規模（長径）比（%）

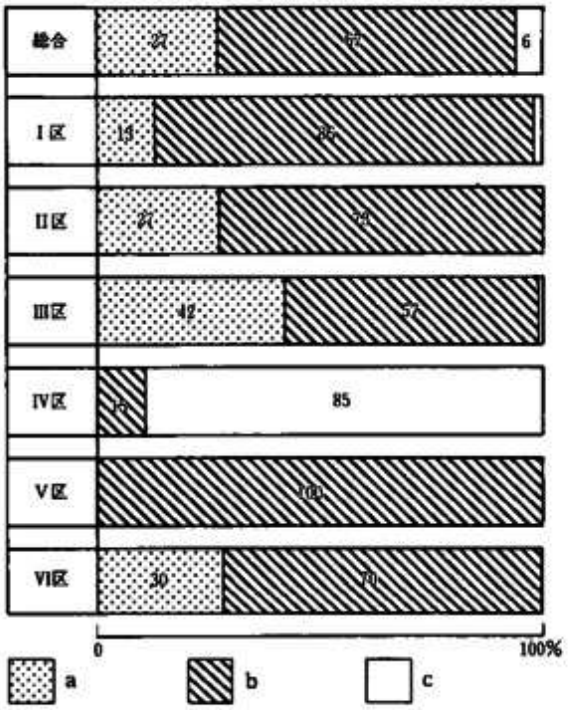


平面形別の地区比（%）

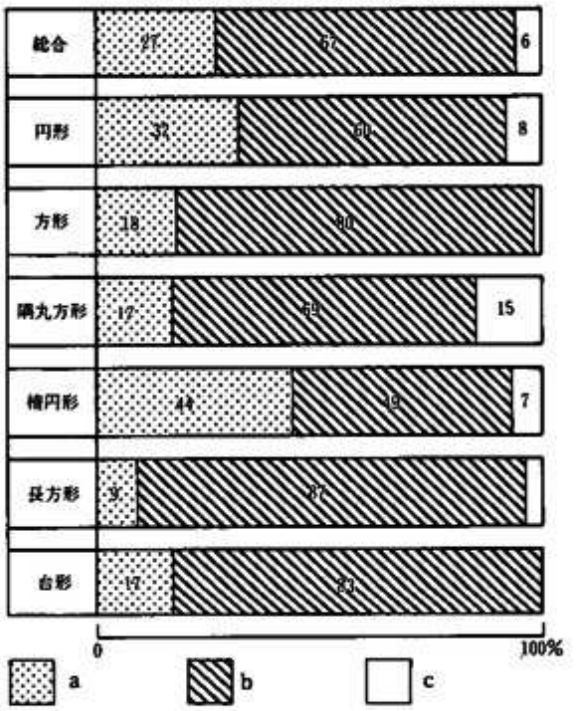


土壌分類相関表(2)

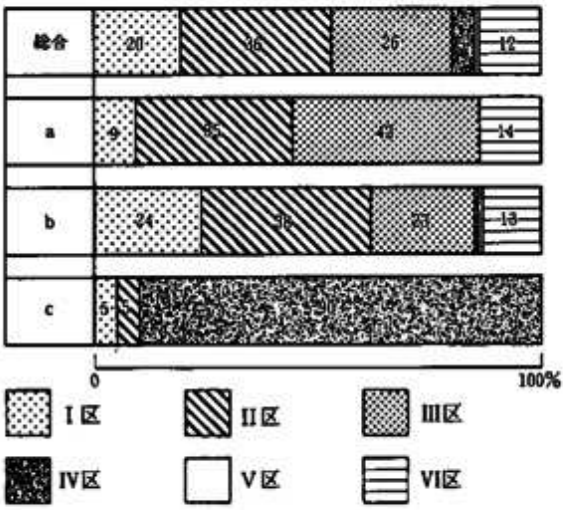
地区別の覆土の特徴（%）



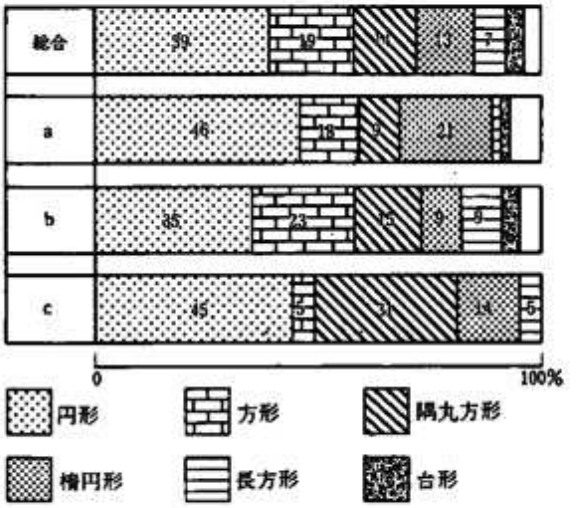
平面形別の覆土の特徴（%）



覆土の特徴別の地区比（%）



覆土の特徴別の平面形比（%）



土壌分類相関表(3)

地区別覆土の特徴

総合	I	II	III	IV	V	VI	計
a	8	32	38	—	—	13	91
b	54	86	52	3	3	28	226
c	1	—	1	20	—	—	22
計	63	118	91	23	3	41	339

円形	I	II	III	IV	V	VI	計
a	1	13	20	—	—	9	43
b	7	27	25	1	3	17	80
c	—	—	1	8	—	—	9
計	8	40	46	9	3	26	132

方形	I	II	III	IV	V	VI	計
a	2	5	4	—	—	1	12
b	14	33	1	—	—	5	53
c	—	—	—	1	—	—	1
計	16	38	5	1	—	6	66

隅丸方形	I	II	III	IV	V	VI	計
a	1	3	4	—	—	—	8
b	7	6	13	—	—	4	30
c	—	—	—	8	—	—	8
計	8	9	17	8	—	4	46

楕円形	I	II	III	IV	V	VI	計
a	4	4	8	—	—	3	19
b	6	7	6	—	—	3	22
c	—	—	—	3	—	—	3
計	10	11	14	3	—	6	44

長方形	I	II	III	IV	V	VI	計
a	—	2	—	—	—	—	2
b	10	5	6	—	—	—	21
c	1	—	—	—	—	—	1
計	11	7	6	—	—	—	24

平面形と断面形

	A	B	C	D	E	F	計
円形	6	97	19	2	5	3	132
方形	4	60	2	—	—	—	66
隅丸方形	3	39	2	—	1	1	46
楕円形	1	35	4	1	—	3	44
長方形	4	19	—	—	—	1	24
台形	1	10	—	—	1	—	12
他	—	15	—	—	—	—	15
計	19	275	27	3	7	8	339

断面形と覆土の特徴

	A	B	C	D	E	F	計
a	5	75	4	2	3	2	91
b	13	184	20	1	4	4	226
c	1	16	3	—	—	2	22
計	19	275	27	3	7	8	339

4　溝

今回の調査で確認された溝は、Ⅰ区1基、Ⅱ区2基、Ⅲ区3基、Ⅳ区2基の計8基である。このうち溝15・溝16は地形と地質の節に詳しく記述されている様に他の溝とは区別されるものである。次に各溝址について簡単に触れたい。

溝6　Ⅰ区北端ＮＳ０～Ｓ３、W29～34に位置し、西側は調査区域外にかかる。幅は最大で130cm、深さは70cmを測り、底面は西から東に向けて傾斜している。断面形はＶ字形を呈し、覆土には暗褐色土が堆積しているが。砂粒・小礫等は確認されなかった。底面には激しい起伏があり、その高低差は20cmに及んでいる、遺物は覆土上層～下層にかけて縄文土器が多量にみられた。すべて小破片で今回は図示し得なかった。遺物より本溝址は縄文時代中期に比定される。

溝8　Ⅱ区北端Ｓ１～３、W38～42に位置し、東側は調査区域外にかかる。幅は最大125cm、深さは50cmを測る。本溝址と溝6は、規模・方向・覆土の特徴等が酷似しており、一つにつながる可能性が高い。遺物は覆土上層～底面にかけて多量の縄文土器と２点の石器が出土している。縄文土器は小破片のみであった。石器は石錐（第69図15）とピエスエスキーユ（第70図23）である。遺物よりみて、本溝址は縄文時代中期に比定したい。

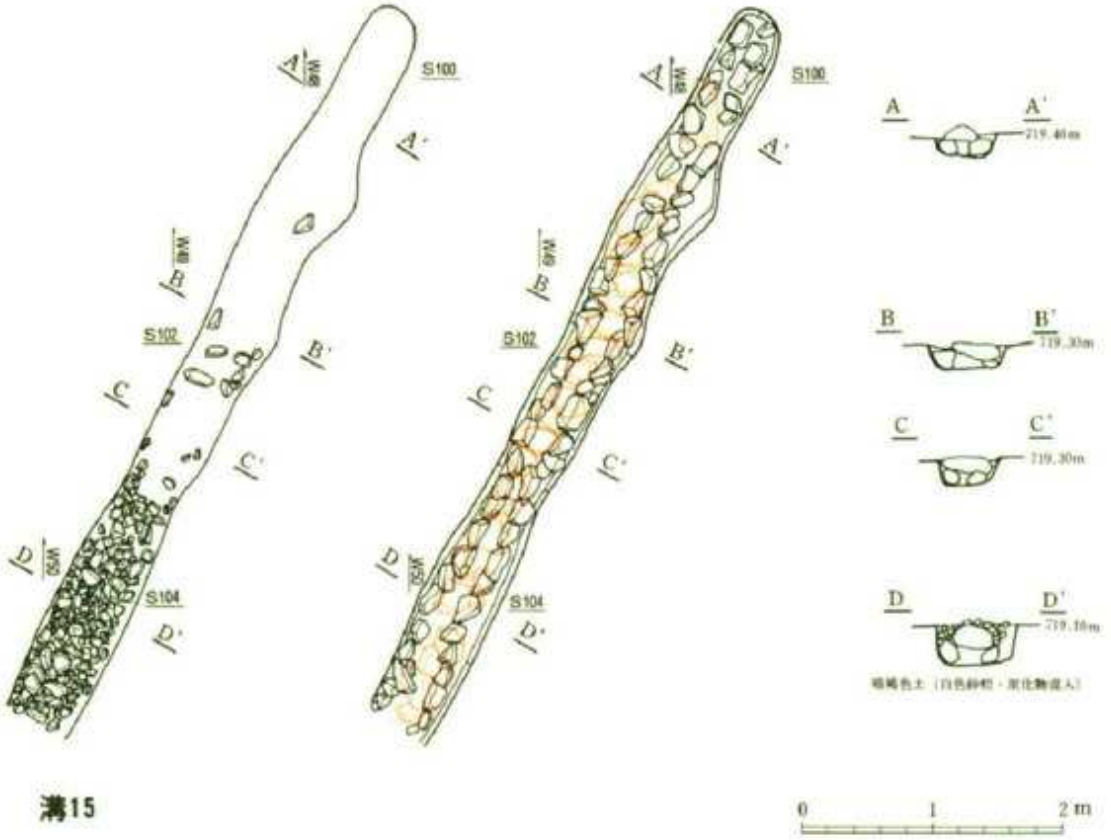
溝9　Ⅱ区北端ＮＳ０～Ｓ２、W50～52に位置し、北側は調査区域外にかかる。二次堆積ローム中に掘り込まれ、断面はＵ字形を呈している。起伏のない底面は南から北へ緩やかに傾斜して区域外へ続いている。覆土の暗褐色土中には砂粒・小礫は混入していなかった。本溝址からは遺物の出土はなく、所属時期は不明である。

溝10　Ⅲ区西側Ｎ69～71、W27～28に位置し西側は調査区域外にかかる。二次堆積砂質ローム中に掘り込まれ、底面は西～東に向かって傾斜している。断面はＵ字形を呈し、砂質暗褐色土が堆積していた。壁は緩やかに立ち上がるが、西側南壁ではテラス状の段が検出された。本溝址からは土師器と鉄器が出土している。土師器は数片の確認だが古墳時代に属する。鉄器は刀子（第75図４）が覆土中よりみられた。遺物が少量の為に明確ではないが、本溝址は古墳時代前期に属するものではないだろうか。

溝11　Ⅲ区西側Ｎ71～72、W30～32に位置し、溝10の北２ｍに平行する。長さ2.2m、幅60cmを測る小規模な溝である。断面はＵ字形に掘られ、砂質暗褐色土が堆積していた。遺物は確認されず所属時期は不明である。

溝12　Ⅲ区西側Ｎ39～45、W39～40に位置し、36号住居址に切られる。削平を受けて検出面から深さは12cmと浅く、南側では底面下迄破壊されていた。断面はＵ字形を呈し、褐色土の覆土が堆積していた。底面は南～北に傾斜をもち下方に向かっている。遺物は皆無であったが、36住との切り合い関係から本溝址は古墳時代以前に属すると考えられる。

溝15（第48図）　Ⅳ区西側Ｓ99～105、W47～50に位置する。自然地形に沿って北から南への方向を持ち、調査区域外へ続いている。地形と地質の節で詳しく記述している様に暗渠排水路と考える



溝15

第48図　溝

ものである。構築方法は、掘り込まれた溝の底面壁際に角礫を平行に並べ、その上に30cm程の平石を蓋石として渡し、更に上面の隙間を小礫を詰めてふさぐ、というものであった。

溝16　IV区南側S92～94、W40～41に位置する。南斜面上に掘り込まれ、幅は55cmを測る。断面は台形を呈し、暗褐色土が堆積していた。溝16の様な礫を用いた施設こそ認められなかったが、立地・規模等類似する点が多く同様の性格を持つものと考える。

以上、個々について概観してみたが、今回の調査で確認された溝は多様なあり方を示していた。これらの溝の所属時期は前述のとおり、縄文時代から近代に亘るものであった。その中で溝6・8・9が確認されたI・II区の北端には、石棺墓の可能性をもつものを含めて多数の縄文時代の土壙が集中して検出されている。I・II区の溝については、これらの土壙との繋がりを考えたい。また本遺跡を代表する中世土壙群と関連付けられる溝は検出されなかった。

5　竪穴状遺構

平面形は円形・方形あるいはその不整形を呈し、竪穴住居址程の規模で掘り込まれているが住居址ではないものを竪穴状遺構として扱った。今回の調査では３基を確認している。

(1)竪穴状遺構５　（第49図）

遺構　Ⅲ区北側N60～64、W23～27に位置し、土壙593を切る。黄色砂質土中にローム塊混入の暗褐色土の覆土を持つ遺構として検出した。不整な円形プランを呈し直径は3.8mを測る。壁高は10cmと浅く明確ではないが緩やかに立ち上がる。覆土から底面にかけては10～30cm程の大きさの礫がみられた。底面は軟弱で中央部が低く落ち込んでいる。

遺物　少量の土師器が出土している。これらは混入品の可能性もあり、本遺構の所属時期は明らかではない。

(2)竪穴状遺構６

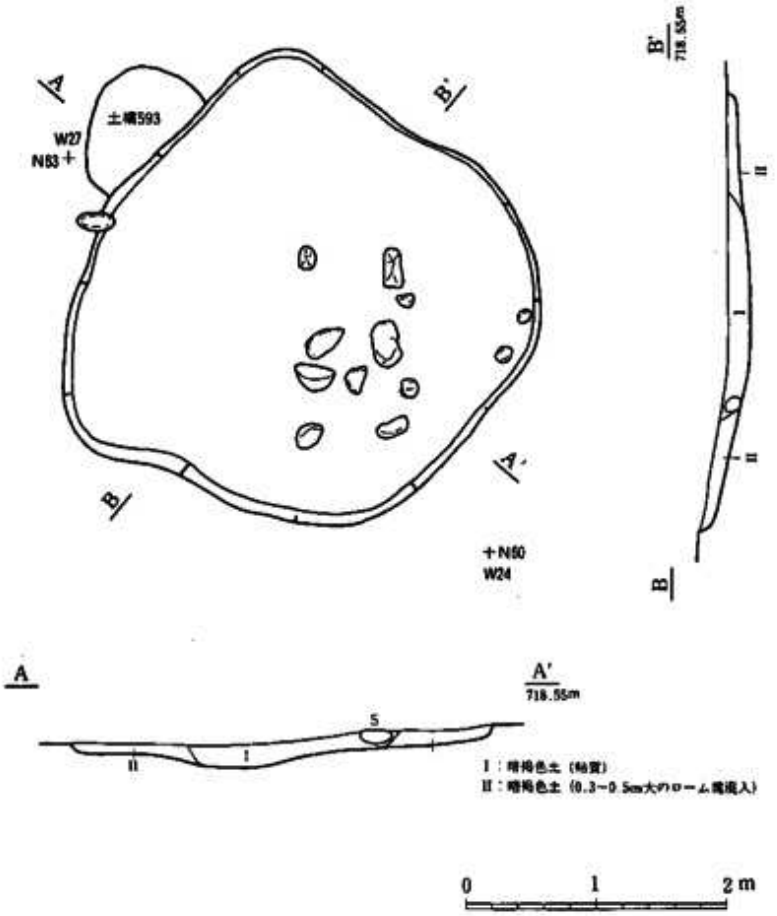
遺構　Ⅲ区西端N47～54、W38～43に位置する。地形は北側に向かって傾斜している。西側は発掘区域外にかかり平面形は明確ではないが不整形を呈する。壁は非常になだらかに立ち上がる。底面は斜面に沿った傾斜を持ち、高低差は40cmに及ぶ。覆土はローム粒混入の暗褐色土であった。

遺物　少量の土器が確認された。土器は古墳時代前期の土師器片と江戸時代以降と見られる素焼きの土器が出土したが、いずれも混入品と考えられる。以上の状況からみて近世以降の深い耕作の痕跡と考えたい。（第66図）

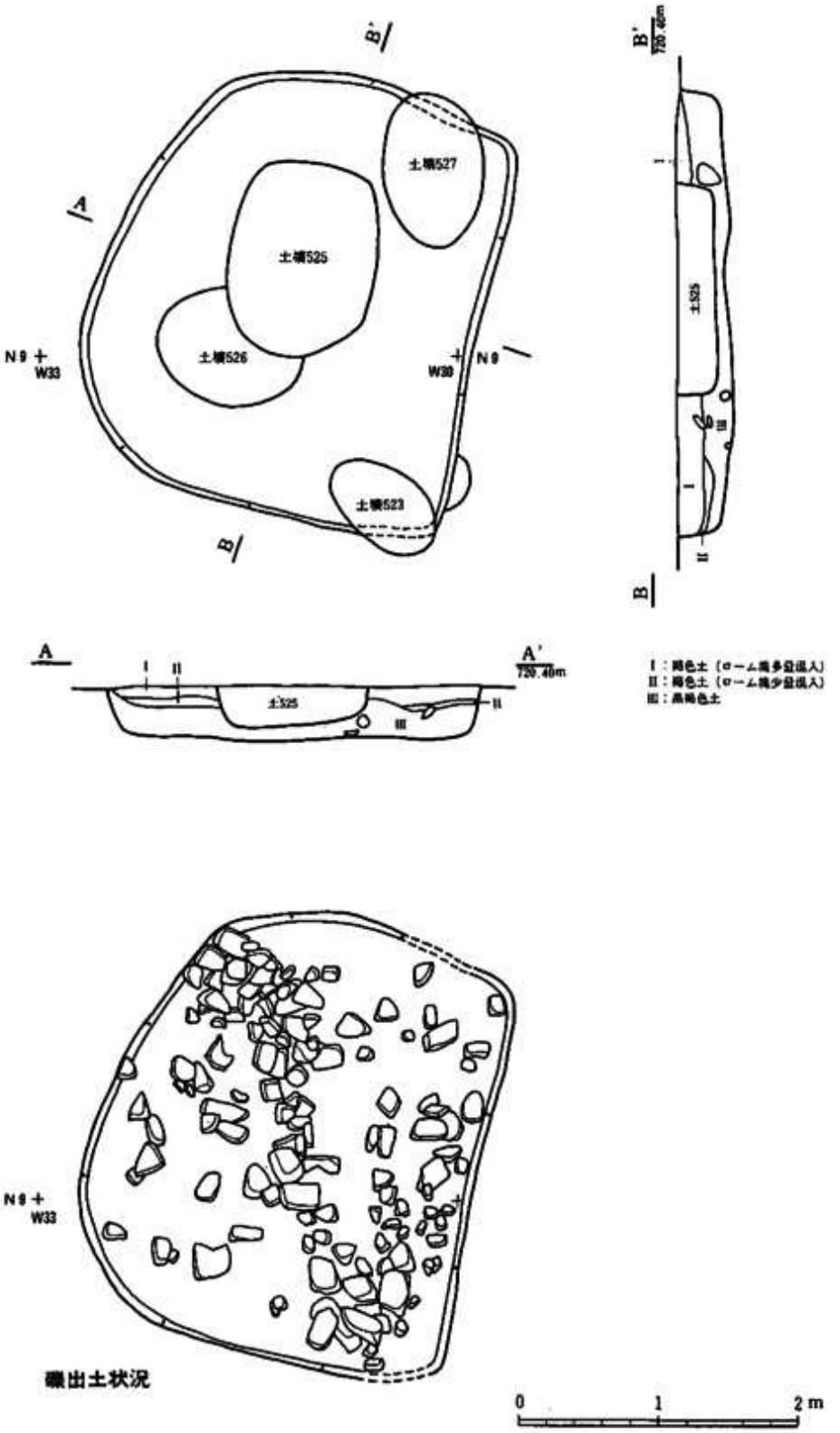
(3)竪穴状遺構７　（第50図）

遺構　Ⅲ区南側Ｎ８～11、W28～32に位置する。土壙300・302・303・304に貼られ、P_{442}を切る。南北3.4m、東西2.7mの規模をもち、やや不整な長方形プランを呈している。褐色土中に掘り込まれた壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高はそれぞれ40cmを測る。覆土は黒褐色土、ローム塊多量混入褐色土の順で堆積しており、黒褐色土中には10～30cm大の礫が多量に確認された。底面は堅緻な黄色土で比較的平坦である。

遺物　比較的多く、土器と石器がある。土器はいずれも小破片で、縄文土器と古墳時代前期の土師器が出土している。石器には石鏃１点と磨製石斧がある。（第71図）土器・石器はどちらも混入した可能性があり、本遺構の所属時期は不明である。

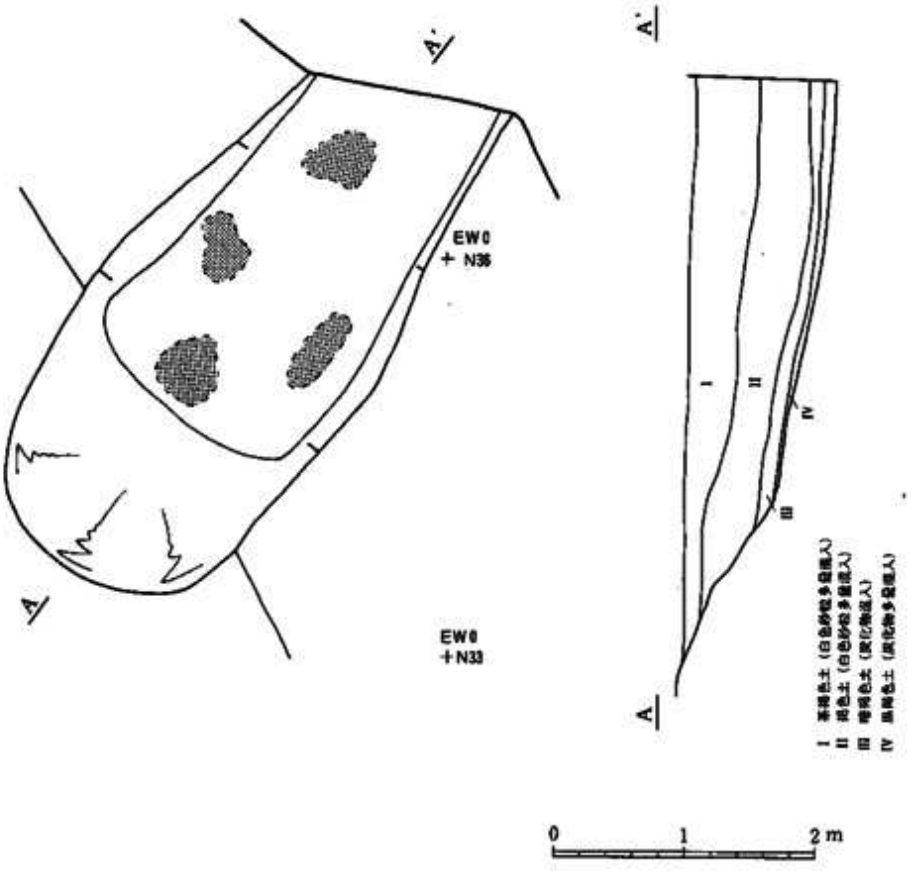

A
A'
B
B'
土壙593
W27
N83
N60
W24
718.55m
5
I
II
I：暗褐色土（粘質）
II：暗褐色土（0.3～0.5cm大のローム塊混入）
0
1
2 m

第49図　竪穴状遺構 5



礫出土状況

第50図　竪穴状遺構 7



第51図　特殊遺構Ⅰ

6　特殊遺構　（第51図）

特殊遺構1はⅢ区東端N33～38、W3～6に位置する。尾根状に広がる台地のはずれから急斜面にあり、向畑7号古墳周溝を切っている。北側は調査区域外にかかるため明確ではないが、長軸440cm以上、短軸220cmの規模を持ち、かなり細長いプランが推定できる。長軸方向はN－36°－Eを示す。覆土は黒褐色土・暗褐色土・褐色土・茶褐色土の順で堆積し、最下層の黒褐色土中には炭化物が多量に混入していた。壁の立ち上がりは南壁では非常に緩やかだが、東・西壁では垂直に近い。底面は堅緻な二次堆積ロームである。自然地形に沿って約10°の斜度をもち下方に向かっており、数ヶ所に薄い焼土の広がりがみられた。慎重に底面精査を行なったが本遺構に伴うピット等の施設は確認されなかった。遺物は覆土上層から下層にかけて少量の土器が確認された。土器はすべて土師器の小破片で、古墳時代前期のものを中心として平安時代のものも若干みられた。古墳時代のものは混入品と考えられ、本遺構の廃絶時期は平安時代以降に求められる。本遺構は古窯址あるいは土壙の一種とも考えてみたがいずれも特定できるものではない。

第3節　遺　物

1　土器・陶磁器

(1) 縄文時代の土器　（第52図～54図）

①早期末の土器（11・21～30）　所謂条痕文系土器で、11点が図示できた。21・22は外開する口縁部で、外面端部よりやや下がった位置に隆線を設ける。端部・隆線上には直交して絡縄体圧痕を付す。26・27はこれらの体部となるもので、横位に条痕を施した後絡縄体を横位・斜位に押圧する。26はℓの原体を用いている。他は器面が荒れるため観察できない。23～25・28～30は条痕等施されない。以上の土器は胎土に繊維を多量に含み、断面黒色、内外面黄褐色～暗褐色を呈する。

②前期の土器（32～34）　3片が該当するかと思われる。32はＬＲ縄文を横位に転がす。33はＬＲ・ＲＬの原体を交互に縦位回転し、羽状としている。器壁は薄く焼きは硬い。

③中期初頭の土器（1～9・12～20・35～50・53・54）　量的に最も多く、器形の判明するものも出土している。地文に縄文を多用し、弧線文や、Ｙ字状文を施文するものと、主に平行沈線により縦線文、格子目文等を描くものにわかれ、それぞれ1類・2類とする。

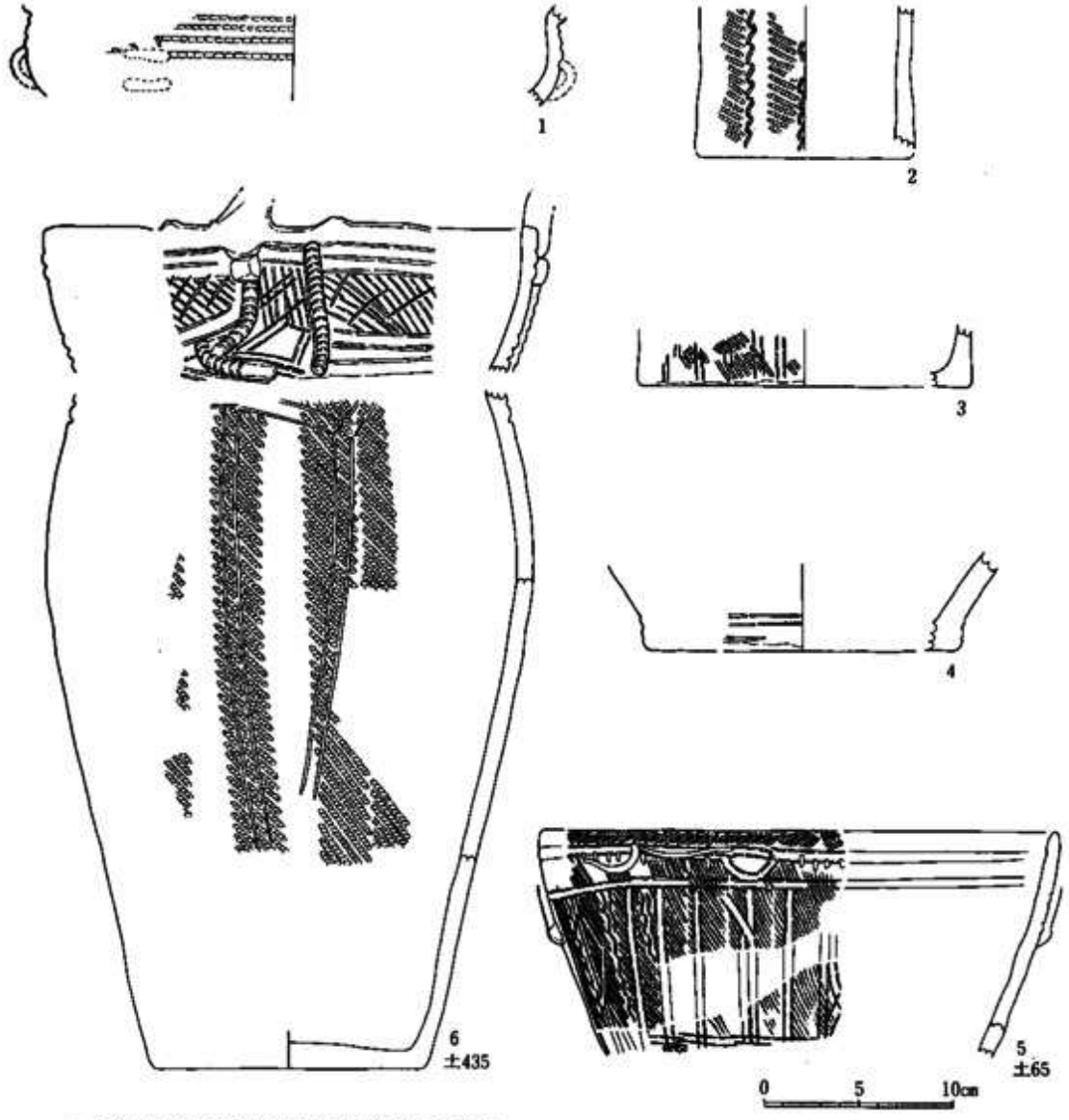
1類（6・7・13・15・18・19・35・36・42・43・44・45・46・47）　7・35・36はくの字状に口縁部が内折するもので、42・46・47はそれらの頸部であろう。文様帯は屈折を境に上下に分かれ、上段は横線文・斜線文等が充塡される。端部には爪形文を施す。下段は縦線文・格子目文が満たされる。6・45は内湾する口縁部で、格子目文を主体とした構図が展開される。6は端部に小突起を有し、対応して爪形文を施した隆線施文を行う。体部は直線的かゆるく張ると思われ、文様は上半に集中するようである。横線文・格子目文等が見られる。19は交互に相対させた弧線内に細かい格子目文に充塡している。6は縄文を縦位に施文し、Ｙ字状の懸垂文を加える点で2類の要素と言える。

2類（1～5・8・9・12・14・16・17・20・37～41・48～50・53・54）　口縁部がキャリパー形に内湾し、まっすぐか肩の張る体部を有する。1は頸が2段にくびれ、5は外開する深鉢である。縄文は口縁部は横位、体部は縦位に施文するのが原則だが、50は端部より縦位に行う。文様帯は端部に沿って沈線を引き、それ以下に種々の施文を展開している。37・38は波状口縁下に円ないし渦巻文を隆線か沈線で行う。12は19と同構図の弧線文を描く。5は端部に沿って横線・刺突文・弧線文を施し、以下間隔をおいて縦位の沈線を引く。なお5には無節ＬとＬ$\left\{\begin{matrix}R\\r\end{matrix}\right.$の2種の特殊な縄文が施されている。体部の文様はＹ字状文が多く見られるが53のそれは三角形を連続させ、他の弧線を連ねるものより古い様相を呈している。体部の縄文はＬＲで結節を付したものが一般的である。

④中期後葉の土器（49）　1片のみ存在する。縦位に細い沈線を綾杉状に施し、隆線により蛇行懸垂文を1条加えている。深鉢体部の破片であろう。

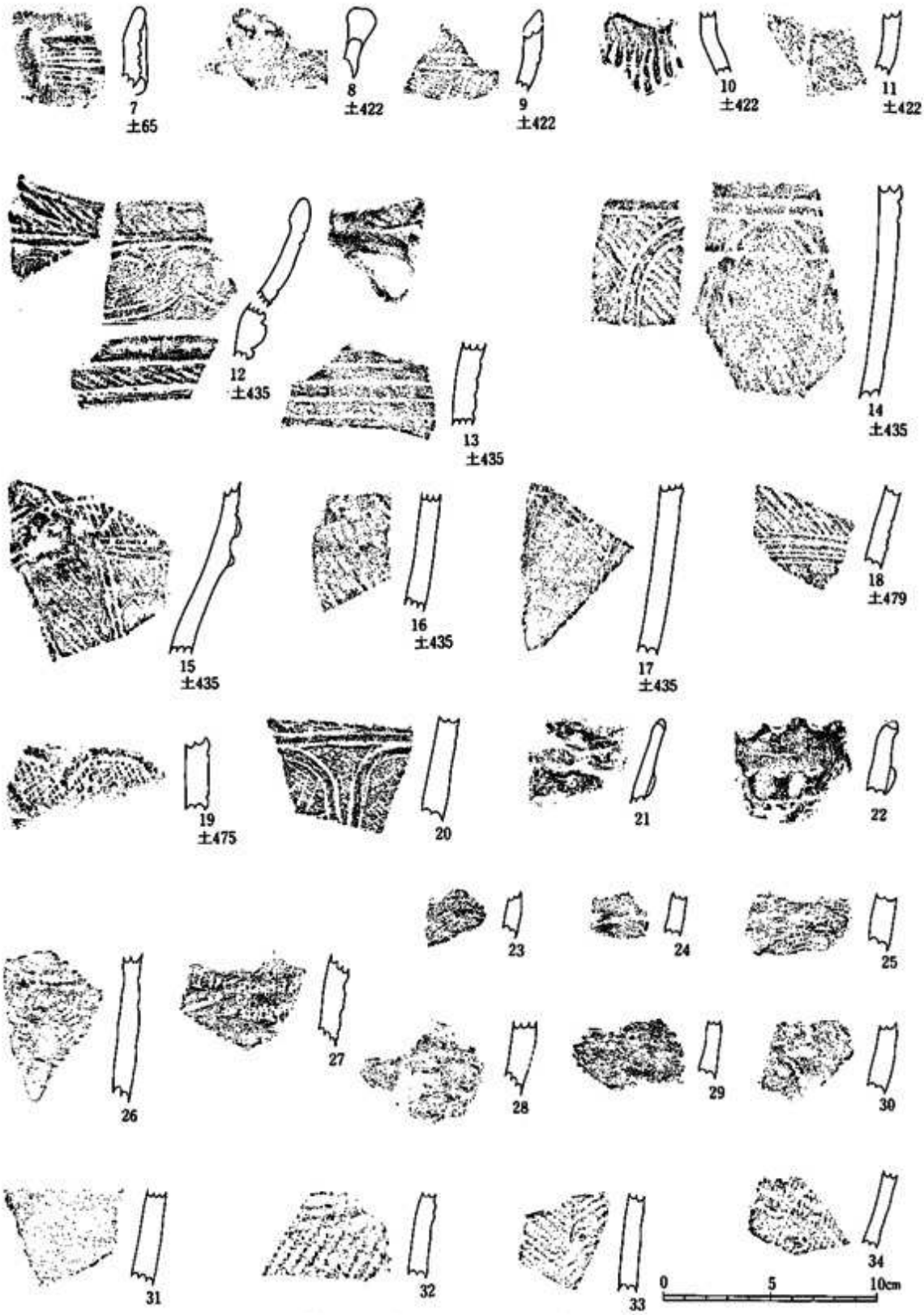
⑤後期の土器（51・52）　51は深鉢底部で底面に網代痕を残す。52は所謂８の字状貼付文で、器壁からは剥脱している。前葉～中葉のものであろうか。

以上、今回出土した縄文土器について時期毎に概観してきたが、図に示した如く遺構に結び付くものは中期初頭を除き見られない。量的にも他時期の遺物は少なく、その帰属する時期の遺構もない。これらは恐らく混入と考えられるが、付近に生活址が存在する可能性も示していよう。

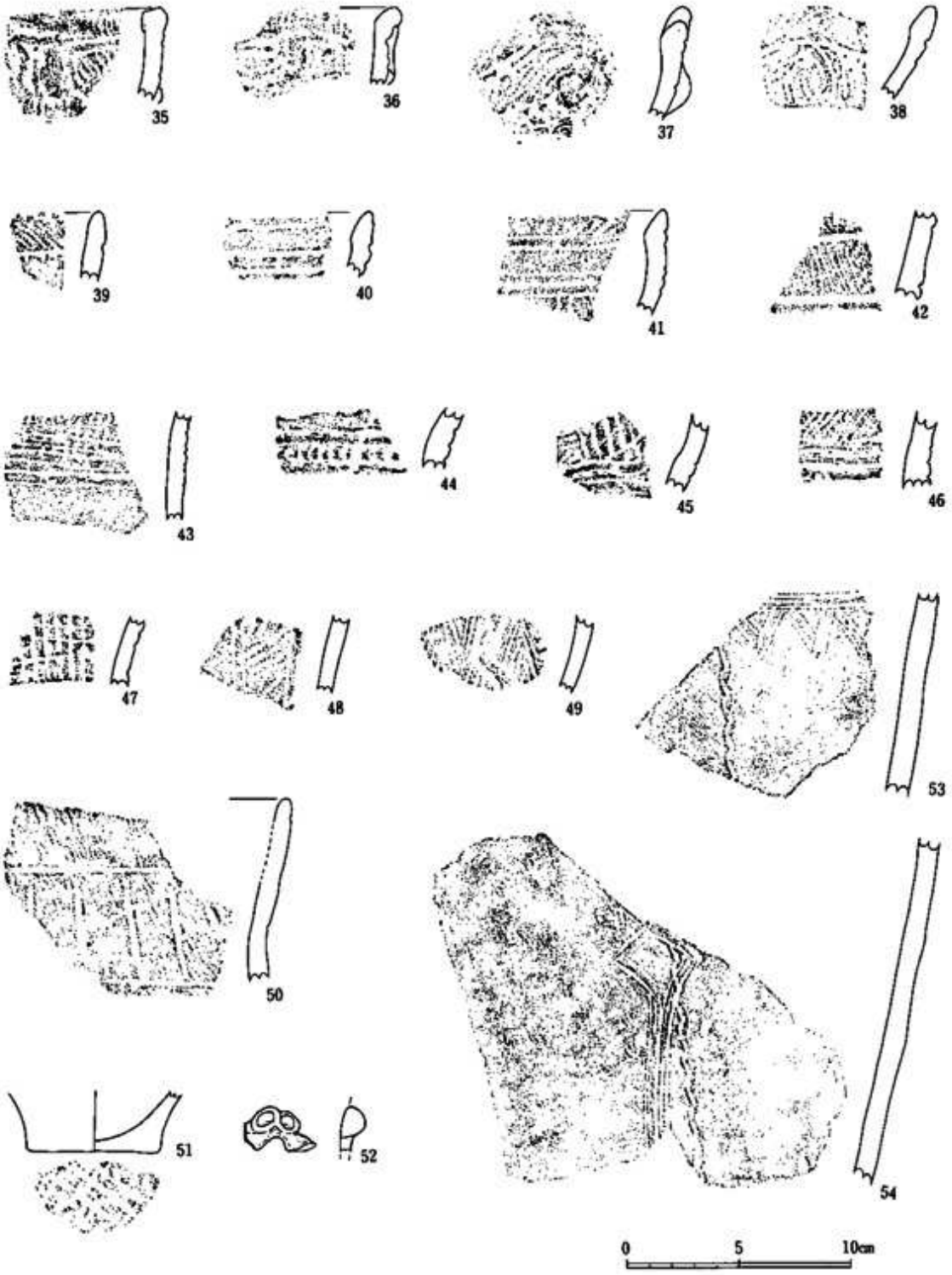


※　縄文時代の遺構に伴うもののみ遺構名を番号に併記している。

第52図　縄文時代出土土器



第53図　縄文時代出土土器拓影(1)



第54図　縄文時代出土土器拓影(2)

(2) **古墳時代の土器**　(第55～67図)

住居址・土壙・古墳周溝および検出面から多量に出土した。ほとんどは前期に属するものであり、その他には若干の混入はあるが、古墳周溝及び検出面より中期後半のものが少量出土している。種別は、須恵器の4点を除き他はすべて土師器である。住居址からは、出土量に多少があり、良好なものを多数出土した住居址がある反面、ごく小量で図示可能なものがなかったところもある。古墳は7号古墳の南側周溝で供献土器とみられる中期のものをまとまって出土したが、他地区では恐らく住居址にともなっていたであろう前期のものが出土量の大半を占める。

今回出土の古墳時代前期および少量の中期の土器は、当地方でこれまでに類例が少なく、資料の集積が緒に就いたばかりの分野といえる。このため器種組成の把握はおろか、小破片に至っては、器種・器形の推定すら困難な場合が多い。幸い今回は第1次報告なので、最終的な検討は次回以降に譲り、ここではおもに器種・器形について簡単に触れてみたい。

①古墳時代前期の土器

器種・器形　壺・甕・台付甕・高坏・小形高坏・鉢・小型丸底土器・器台などがみられる。

壺　　口縁部の形態から、単純に逆「ハ」の字状に開くもの、折り返し口縁をもつもの、有段口縁を持つもの、直口縁をもつもの、口縁端部に面をもつもの、などに分かれる。それぞれの系譜の違いにより、端部調整の手法も異なっている。

逆「ハ」の字状に単純に開く口縁をもつものとしては、20、34、91、94、147、148が該当する。比較的厚手のものが多く、口唇部の形態が僅かに外反、あるいは内湾するが、いずれも同様のヨコナデ調整により形成されたものと考える。全形がわかる類例は、石行遺跡14住、同9住(1)にあり、ここから推測すると、口縁部を欠く74あるいは40もこの仲間になるとみる。これらが、在地の弥生時代後期の壺の順当な型式変化によるものである可能性の示唆がなされている(2)。

有段口縁をもつものは、口縁の下段が上段同様に外反するものと、垂直に近く立ち上がるものの2種に分かれる。前者に、35、86、163が、後者に、71、104、149、174、が該当する。いずれも全形を知るものはない。71は頸部下端に断面三角形の突帯を一周させ、その頂部の稜を挟んで「く」の字に刻みが連続し、しかも突帯直下に僅かに櫛描波状文らしきものの存在が認められる。弘法山古墳出土品に類似し、上記の有段口縁とはやや形態を異にするものかもしれない。

折り返し口縁は、典型的なものとして191を挙げることができよう。また157、150もこの表現の範囲で捉えたい。157は折り返し部のみが剥落した破片であるが、この部分が厚く、下端は口縁部本体と段をなしており、その上面に棒状貼付け文らしいものがみられる。150は外反しながら大きく開く口頸部から折り返した端部が下方へ細く垂れ下がるため、口縁端部に面を有するようになるもので、その内側に顕著な指オサエの痕を残す。内面および口縁端部外面はミガキ・赤色塗彩され、他の外面にはハケメが施されるが、この下端の胴との接合部付近に僅かに櫛描文（T字文か？）がある。

口縁端部外面に面をもつものは、90、92、93、129、155、159、160、197が該当する。いずれも口

縁端部のみの破片で頸部までの形状も探り得ない。このため有段口縁の壺の端部や、北陸東北部系の端部をつまみ上げる甕(3)が混じった可能性がある。調整にミガキをもつものは129のみで、他はハケメの上をヨコナデすることにより端部を形成したままになっている。197は面が斜め上方を向き、その上を櫛描またはハケメ原体による刺突文で飾られる厚手のもので、他とは異なる系統のものであろうか。

直口縁の壺（直口壺）は、大形のものに、8、97、小・中形のものには103、118、119が該当する。形態は中形の119に代表される。図示していないが、これにはごく小さな上げ底の底部がつく。大形の8もおそらくは同様の球形の胴部がつくと考えられるが、97は口頸部が短めで厚く、口縁端部がやや平らになっており、この仲間に含めるのは問題があるのかもしれない。

頸部以下に櫛描文をもつものは、59・173の2点がある。173は文様部分以下を赤色塗彩される。全形を知るものはないが、他の壺にくらべて頸部のくびれが小さく、やや縦長の外形を呈するのではないかと推定する。59にみられる文様は在地の弥生時代後期の壺に一般的に施文される、いわゆるT字文に類似する。

壺はこれらのほかに、小形のものがいくつかある。平底で球形の胴部をもつ69は口縁部を欠き、あまり開かず外反しながら立ち上がる口縁の72は胴部下半を失っているが、両者は相似形を呈すようだ。下膨れの胴部に僅かに突出する小さな底部をもつ70は、口縁を欠いているが想定復元すると、有段口縁のところで触れた71のような頸部がつくか、内湾気味のものがついて瓢形の壺になると考えられる。17は内湾気味の口頸部で、小形の瓢形壺とみる。

甕・台付甕　口縁部の形態を中心にみていくと、甕・台付甕の区別が、現段階ではつけられないものも多い。そのため一つにして扱う。口縁が「く」の字形にくびれる頸部から単純に外反するだけのもの、口縁端部をつまみ上げて端部外面に内傾あるいは外傾する面を作るもの、短い口頸部が屈曲・内湾して受け口状になるもの、「S」字状の口縁部をもつもの、口縁端部内面が肥厚するもの、胴部にタタキをもつもの、などがある。

口縁が単純に外反するものには、調整にハケメが多用されて比較的薄手のものと、頸部から胴部にかけて櫛描波状文が施文されている厚手のものの2者がある。前者には、29、48、63、161、などが、後者には、68、83、84、が該当する。106も前者に含められるかもしれない。櫛描波状文をもつものは基本的には当地方の弥生後期の同様の甕に似るが、より胴部が張り、頸部のくびれ方があまくなっている。この他、ハケメ使用は前者と同じだが、やや厚手で台付甕になるとみられるもの、66もある。

口縁端部をつまみ上げて面を作り、その外面が内傾するものには、49、50、が該当する。いずれも口径の小さなもので、面にはヨコナデ時の沈線が残っている。同様に端部をつまみ上げて外傾する面を作るものに、80、165、がある。頸部が「く」の字に強く外反する形態を呈する。前述したように、壺の口縁端部外面に面をもつものとした中に、ここの仲間が混じっている可能性がある。

短い口頸部が屈曲・内湾しながら立ち上がり受け口状をなす甕は、89、146、が該当する。15を含めることも可能かもしれない。146は口縁端部内面に内側へ傾斜する面を有する。

S字状の口縁をもつものは、16、65、88、171、が該当する。いずれも口縁部やその周辺ばかりで全形を知り得るものはない。16は頸部内面にハケメをもつが、口縁部内面上段には沈線を伴うヨコナデがなされている。65は頸部外面の屈曲の谷部に太めの沈線がいれられ、肩部外面に横のハケメが残るもので、口径が少々小さい。88は口径の復元できなかった小片だが、頸部内面に横のハケメ、胴部内面に縦のハケメを残し、外面口縁部中段には刺突が連続する。雲母を含む胎土が暗灰色を呈す、当遺跡では珍しい土器である。これらは、「S字状口縁台付甕」と呼ばれているものに等しいと考える。113の台付甕脚部はこの甕のものとみる。この他、176・179は口縁外面がS字状を呈しており、ここに加えられよう。

口縁端部内面が肥厚するものは、30が1例あるのみである。肥厚した端部の上面は平らで、「く」の字にくびれる頸部外面のやや上部に僅かな稜をもつ。胴部外面は縦のハケメ、内面は頸部の1cmほど下から強いケズリとなる。「布留型甕」と呼ばれているものに等しい。

胴部外面にタタキをもつものは、図示したものが、166、拓影で示したものが198～205の8点である。これらは、全形や口縁部形態は不明だが、タタキの痕跡が特徴的なのでむしろそちらから抽出できた。166から小さな底部を有することがわかる。内面はナデ等の調整で仕上げられており、ケズリやハケメはみられない。

小形の甕・台付甕は53、55、110、187、がある。ほぼ全形のわかる53は内湾して先端の尖る口縁部をもつ。台付甕の110は丈の短い脚の端部が内側に肥厚している。

鉢・小型丸底土器　小形の鉢・坏・椀形の土器をまとめて概観してみたい。口縁・体部の形態で5種類くらいの器形がある。たいていのものは器面にミガキが施されているが、摩滅が進んでよく分からないものが多い。

平らな底部から体部が直線的に開き、逆台形を呈する鉢には、21、22が該当する。他の鉢類にくらべて若干器壁が厚く、口縁端部はヨコナデ調整により僅かに内湾する。底面は少し上げ底になる。

丸底の浅い体部に二段に屈曲する短い口縁部がつく鉢には、12、98、121、196、が該当する。12・98は摩滅してよくわからないが、121で観るとハケメ調整をした後、そのうえに横方向にミガキを施して、非常に丁寧に仕上げていることがわかる。196はやや深めだが口縁の形態からここに属するとみた。いずれの土器も器壁が薄い。

4は、中央部が僅かに上げ底の底部と半球状の体部をもつ小形の鉢で、口縁の屈曲は外面よりも内面の方が強く、体部との間に若干の稜をなす。

突出する上げ底の底部がつく内湾する体部と、そこから沈線1本で区画される外反する口縁部をもつ大きめの鉢には、13が該当する。ハケメ調整のあとミガキがなされるようだが器面の摩滅でよく分からない。

小型丸底土器（小型丸底坩）には、11、99、101、102、が該当する。11･101のような小形のものと99･102のやや大きめのものがあり、小形のものは口縁部が体部と同等か、それ以上を占める。最大径はいずれも口縁端部にあり、101は丸底、11、102は小さな平底をもつ。器面の摩滅が進行してはっきりしないが、ミガキ調整があるようだ。胎土、焼成が前2者の鉢とよく似ている点は見逃せない。

この他に小型丸底土器と小形の直口壺の中間のような外形を呈す33、120があるが、33は頸部外面直上に僅かな稜があり、小形の壺か坩としたほうがよいかもしれない。

高坏・小形高坏・器台　ほとんどが坏部（器受け部）あるいは脚部のみの出土であり、高坏と器台の識別ができない脚部破片も多い。高坏の坏部には3種類ほどの形態の違うものがみられる。

高坏で坏底部と体部の境界に稜をもつものに、27、183がある。坏部口径が20cm近い大きなもので、内外面によくミガキがなされる。

坏底部と体部の稜がなく、脚接合部から内湾しながら滑らかに口縁部へ向かう外形の坏部をもつ高坏は、3が該当する。内外の器面にミガキがあったようだが摩滅して分からない。

高坏の脚部は、10、45、47、79、141、180、が該当する。坏部接合部から下方へまっすぐ開く47、端部が急激に外反してベッタリと接地する180、などの外形がみられる。たいていのものが側面に3孔を有すが、45は上下2孔が1単位となり、それが3単位で配されて、都合6孔をもっている。

79は、坏部に稜をもたない点は前段のものと同じだが、内湾の度合が弱くやや厚手のもの。外面にミガキが無く、口縁端部の僅かな内湾を伴うヨコナデ調整の痕跡が明瞭である。器形・器厚あるいは胎土などから他の高坏や小形高坏と異質な感がするもので、それは鉢・小型丸底土器の項で最初に扱った、逆台形を呈す鉢が他の鉢などとは異なった印象をもっていたのに共通する。

坏部に稜をもたない小形高坏には1・2が該当する。1の僅かに残る脚部には3孔が穿たれている。坏部に稜をもつものは、図示可能な大きさの破片では見当たらなかった。44の脚部は小形高坏のものとみられる。4孔があけられている。

器台は図示できたのは脚部だけで、100、142、143、152、172、が該当する。外形は脚部上端から下方へ徐々に開いていく、いわば斜辺に反りをもった台形を呈する。172のみは、脚部上半は僅かに下方へ開くむしろ筒形といってよい形態をとり、下半に至って急に側方に開き出す他に例のないもので、器厚も器受け部から脚部への非常に長い貫通孔を有する上半部のほうが厚い。

その他の器種・器形　187の甑、126の器種不明の鉢形土器、188の甕？底部がある。甑は内外面に雑な調整痕を残し平らな底部に1孔を有する。188は高坏の転用品とも考えたが、底面に切断・再加工痕も見当たらない。

ミニチュア　平底・丸底の容器形を意図したものに、9、117、162、164、高坏を表わすものに116、の4点が出土している。116は脚部の4孔も模倣した、精巧なものである。

②古墳時代中期の土器

6・7号古墳周溝・検出面および周辺の検出面から、土師器坏・高坏・壺、須恵器坏蓋・小型鼓・壺・甕が少量出土している。特に131～140は7号古墳周溝の一角からまとまって出土した供献用のものである。

土師器の高坏は75、123、124、125、131～137、186が該当する。坏部を欠くものが多いがかなり規格がそろっており、いずれも全形の分かる136・137に類似するものになると推定される。脚部内面を除きミガキが行われるが摩滅して不明瞭なものもある。坏は、77、138、139が該当する。138・139は丸底に近い底部から内湾する体部が開き、77は口縁部が体部から稜をもって外反するもので、内外面ミガキが施され、77の内面は黒色を呈している。140の壺は口頸部外面にのみ稜が残る有段口縁で、外面上段に暗文風のミガキがなされる。胴部破片も多数あるが接合・図示不可能であった。

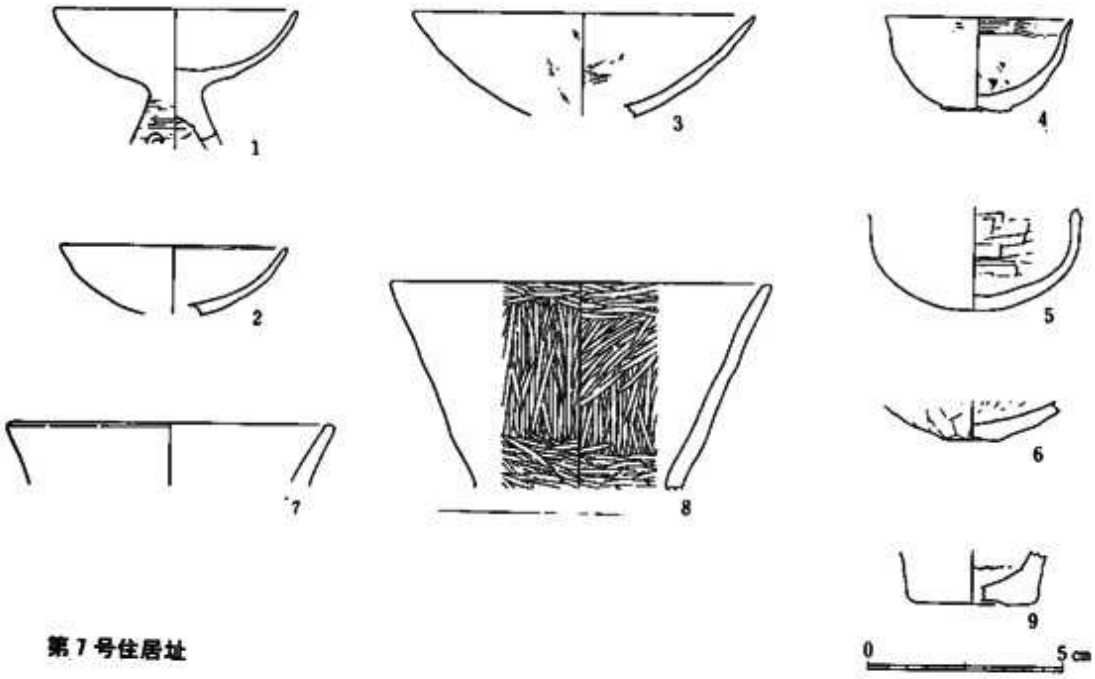
須恵器は、坏蓋に192、小型鼓に153、壺に177、甕に151、が該当する。192の坏蓋は天井部を欠くが、器高に占める体部の高さの割合が大きい形態を呈すとみられ、稜のつまみ出しはシャープで、端部は面取りがなされている。5世紀後半に比定できる。153の小型鼓は底部が尖り気味で全形が無花果形をなす。頸部の形状からみて口径は胴部の最大径を上回らないと考えられる。5世紀後半に比定されよう。151の甕は口縁端部の面が上下に拡張された形態をもち、頸部の稜は丸く鈍いものになっている。6世紀初頭頃のものであろう。

③まとめ

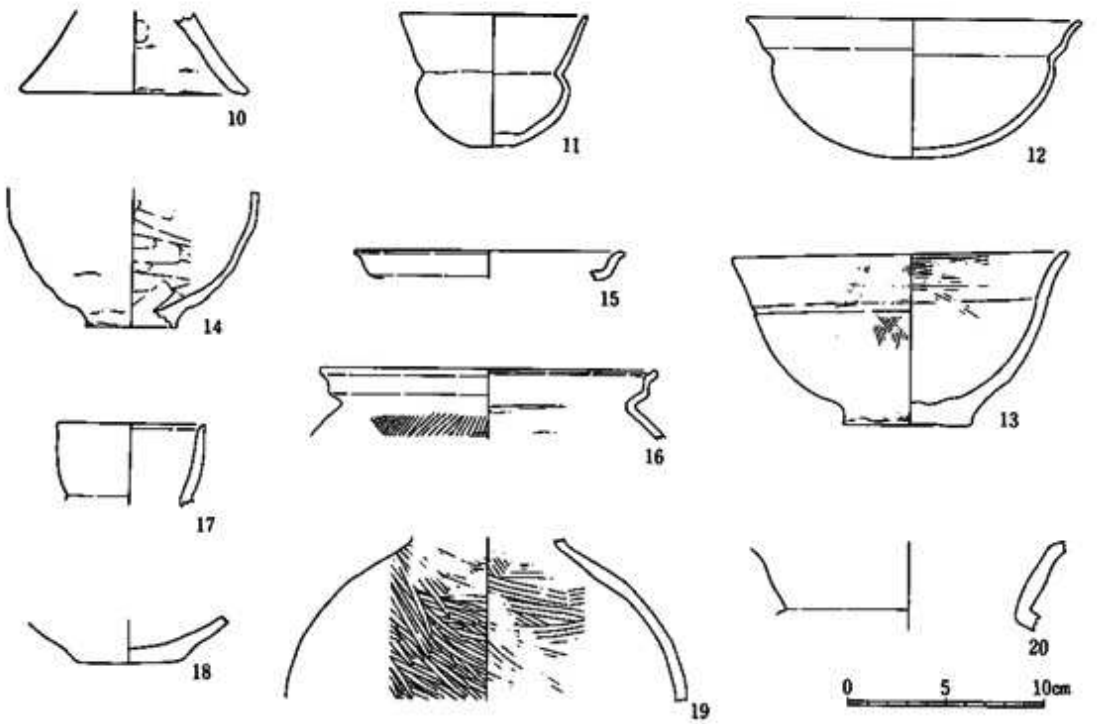
最後に気付いたこと、今後の課題となりそうなことを並べて古墳時代土器のまとめとしたい。第一は住居によっては全く出土しない器種（具体的にはいくつかの鉢や小型丸底土器）があること。もとより住居間で出土量に非常な偏差があり単純に比較するのは問題だが、例えば多数の土器出土のあった37住や40住からこれらが見つからないということは、この住居出土の土器群の組成からこれらが欠落していた可能性が高い。住居毎の役割の違いというよりは単に時期差とみたい。即ち本遺跡（集落）は前記の小形の土器類の発生（伝播）という画期を挟んで継続したということである。第二は当地方で弥生時代後期から続く器種（櫛描波状文をもった甕・逆台形の鉢など）とそこに全く系譜を持たない器種、在地の土器が変化したと考えられる器種、がみられること。他地域の様相もよく考慮した上で系譜性に基いた器種・器形の分類が必要となる。第三は中期の土器で7号古墳周溝からまとまって出土したものは規格性もあり胎土も外見上は同じであること。これは供献用としての同時製作、特注品の可能性を強くもつ。またこれらを含む古墳一帯出土の中期の土師器は一括性に欠けるが、同様出土の初期須恵器の年代で捉えられるものであろう。

註1　松本市教育委員会　1987『松本市赤木山遺跡群II』
2　宇賀神誠司　1987「古墳時代前期の土器について」同上書
3　坂井秀弥　1984「新潟県の様相」『第5回　三県シンポジウム　古墳出現期の地域性』

第6号住居址

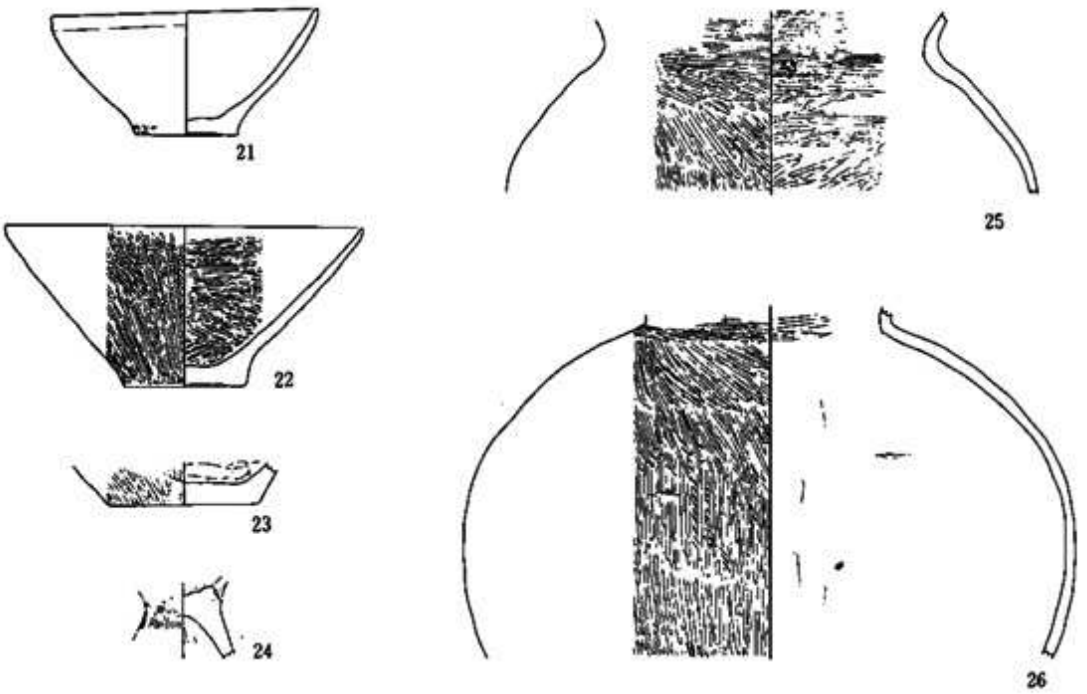


第7号住居址

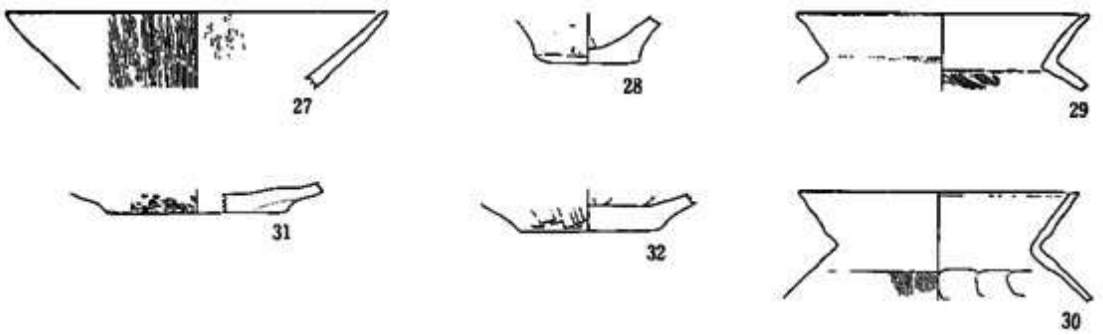


第55図　古墳時代出土土器(1)

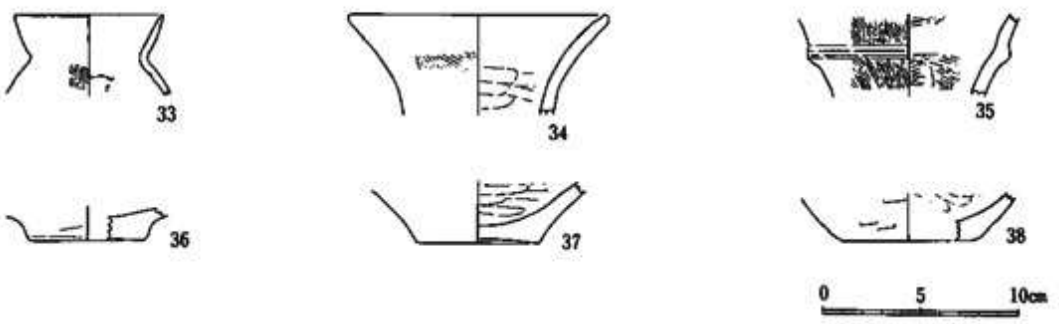
第8号住居址



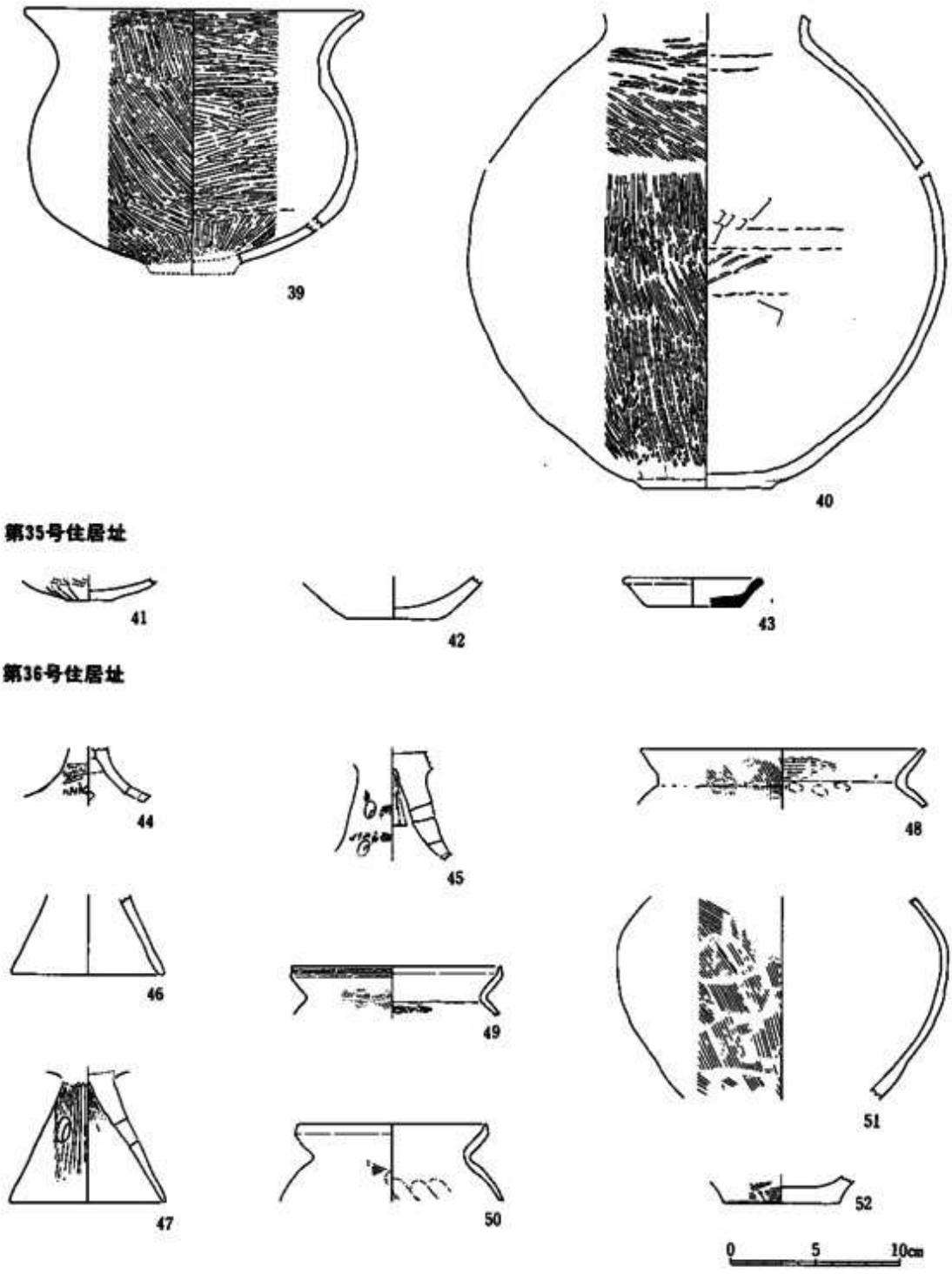
第31号住居址



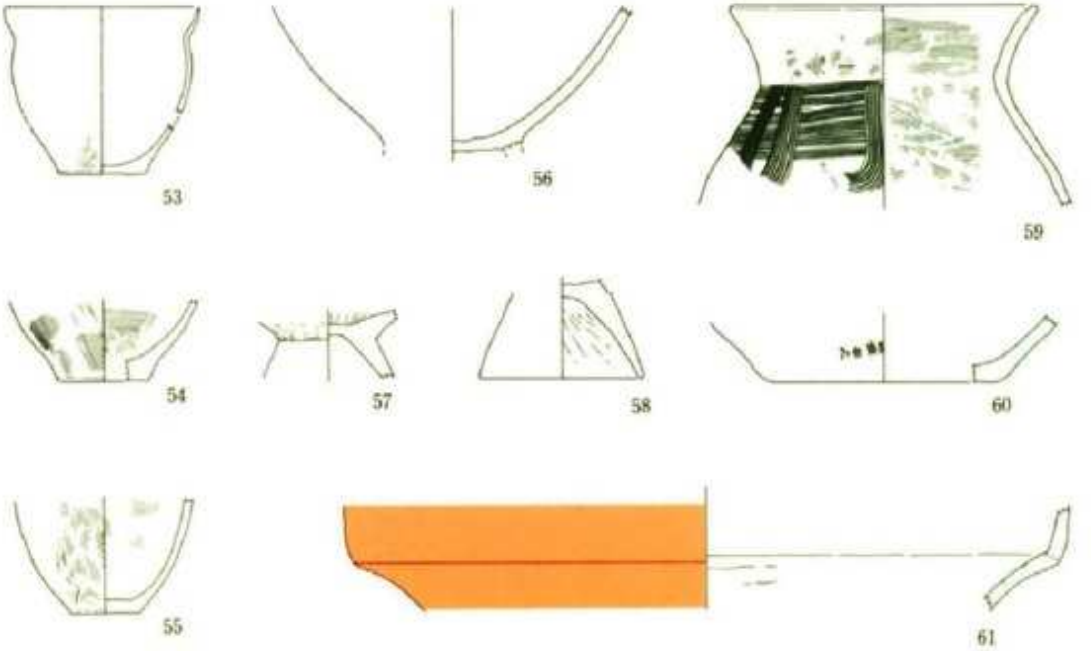
第32号住居址



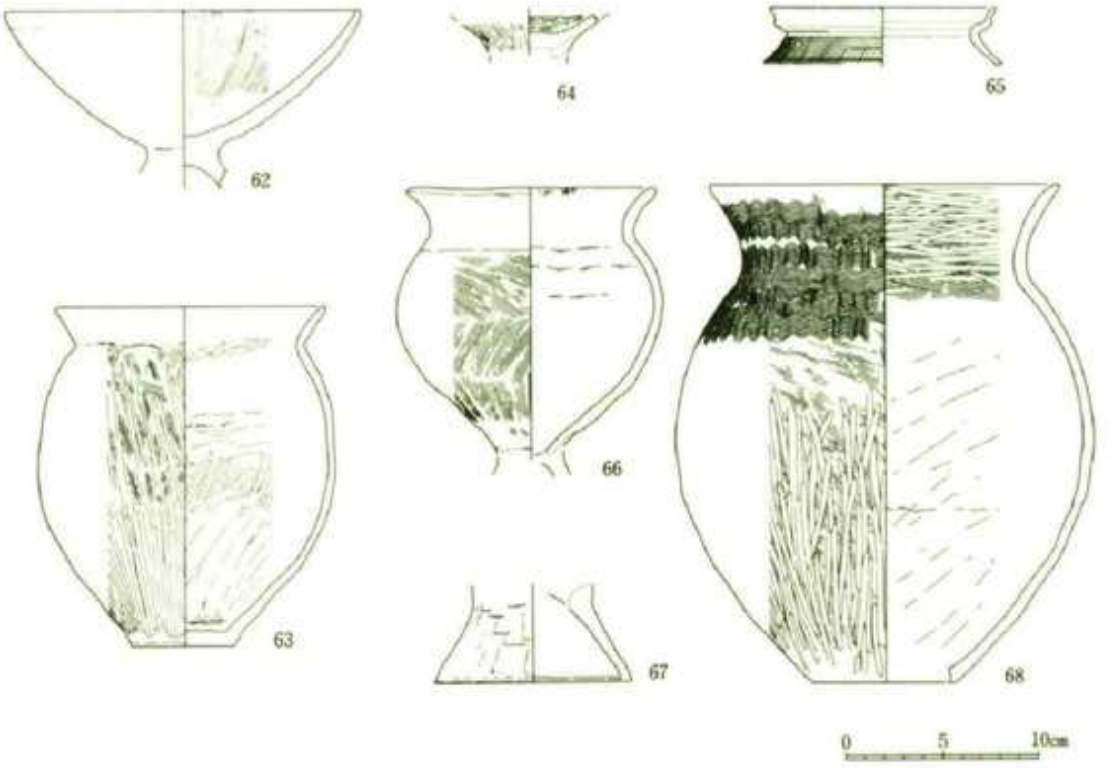
第56図　古墳時代出土土器(2)



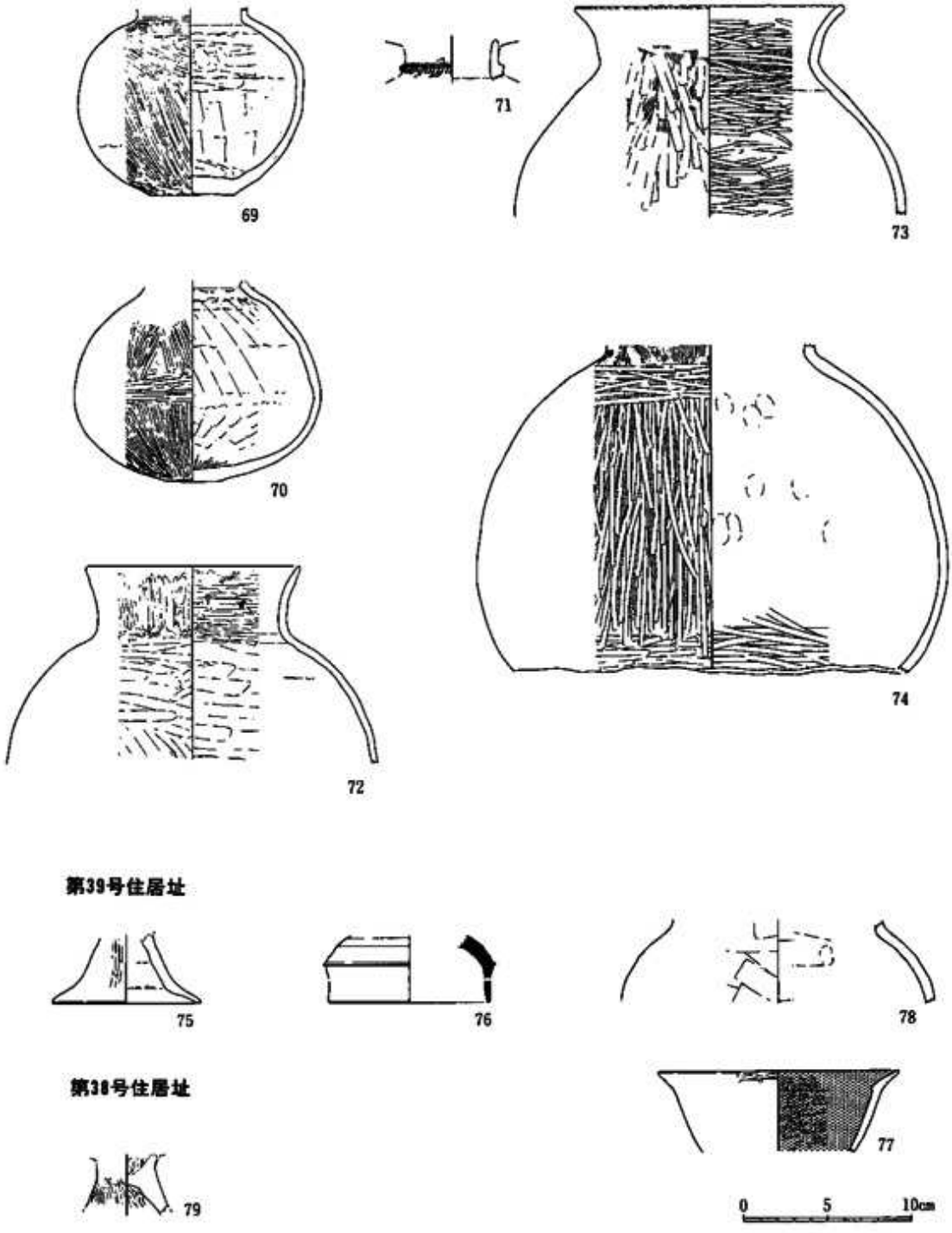
第57図　古墳時代出土土器(3)



第37号住居址

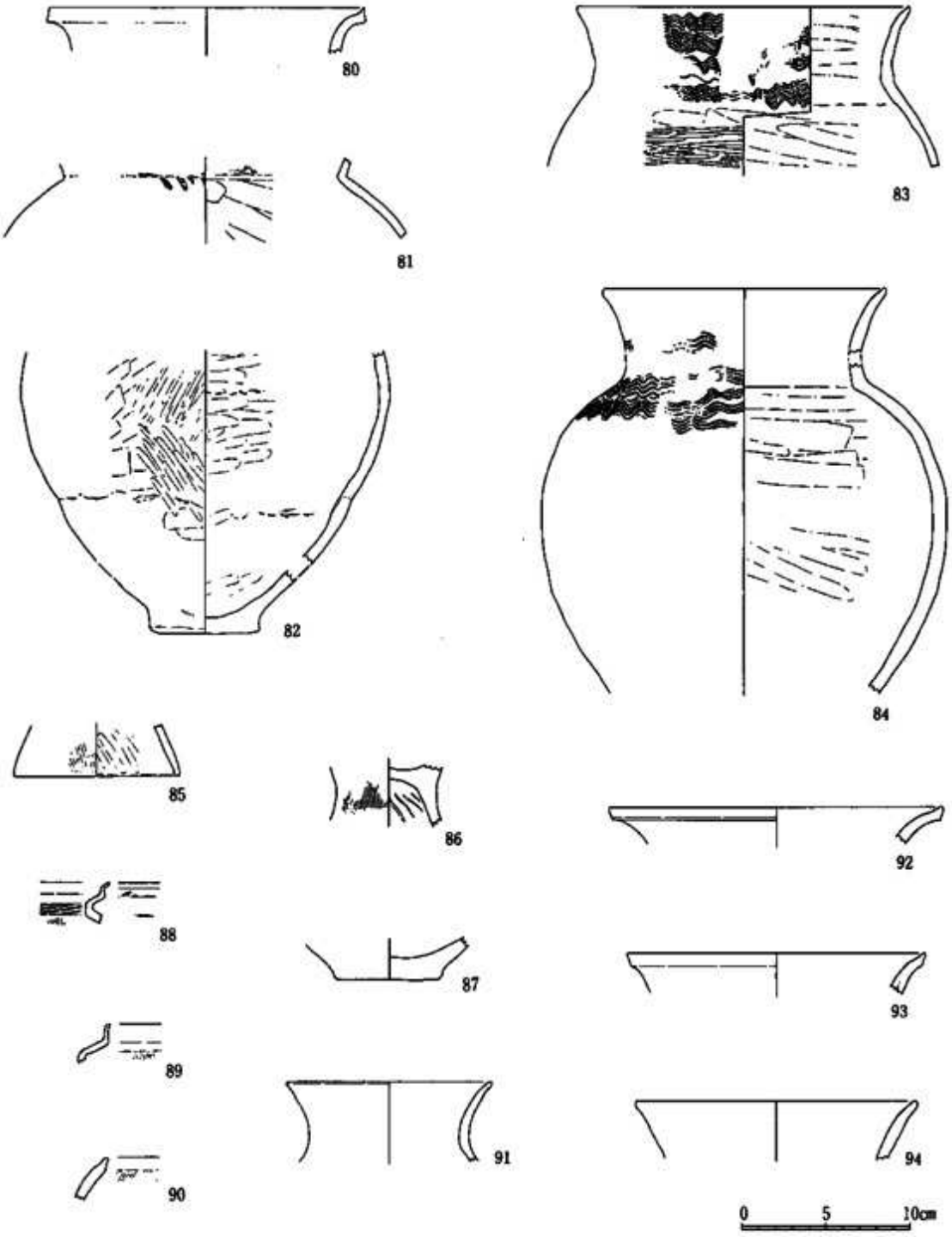


第58図　古墳時代出土土器(4)

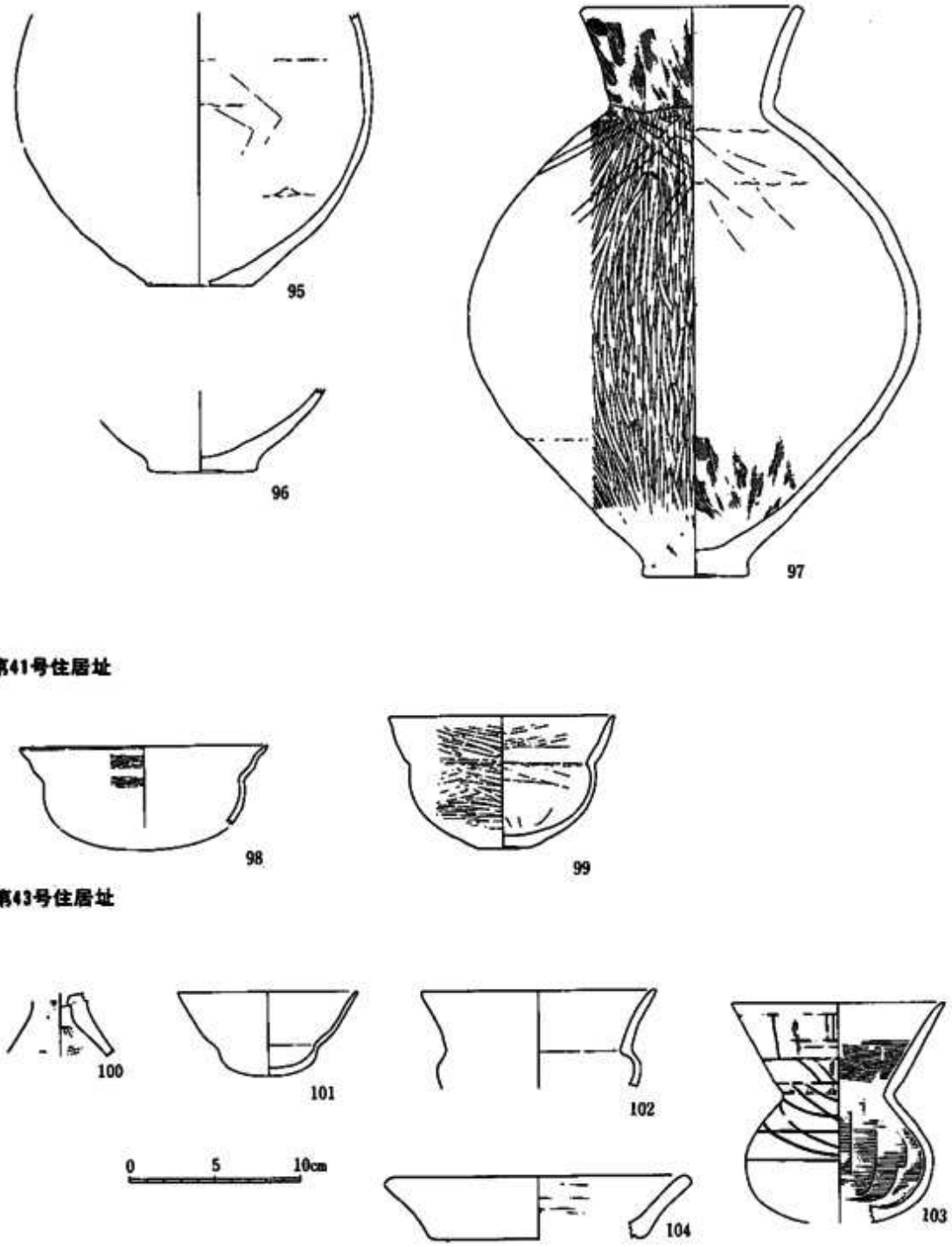


第59図　古墳時代出土土器(5)

第40号住居址

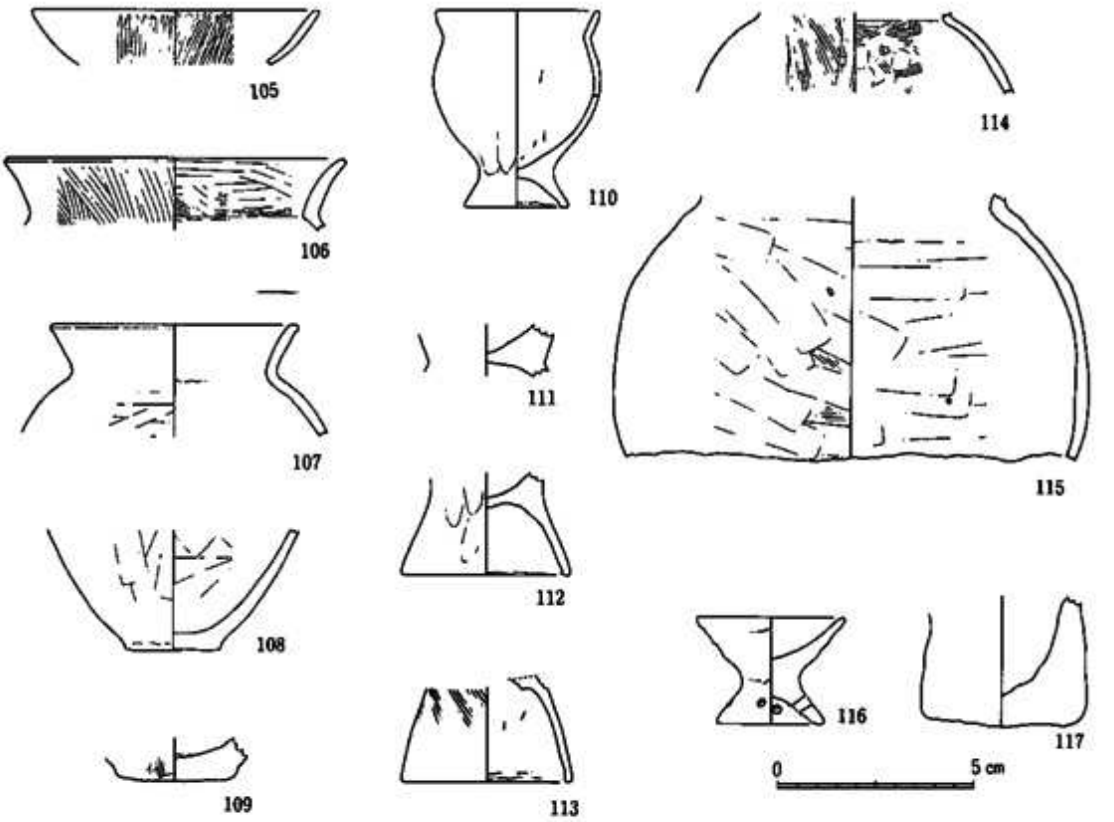


第60図　古墳時代出土土器(6)

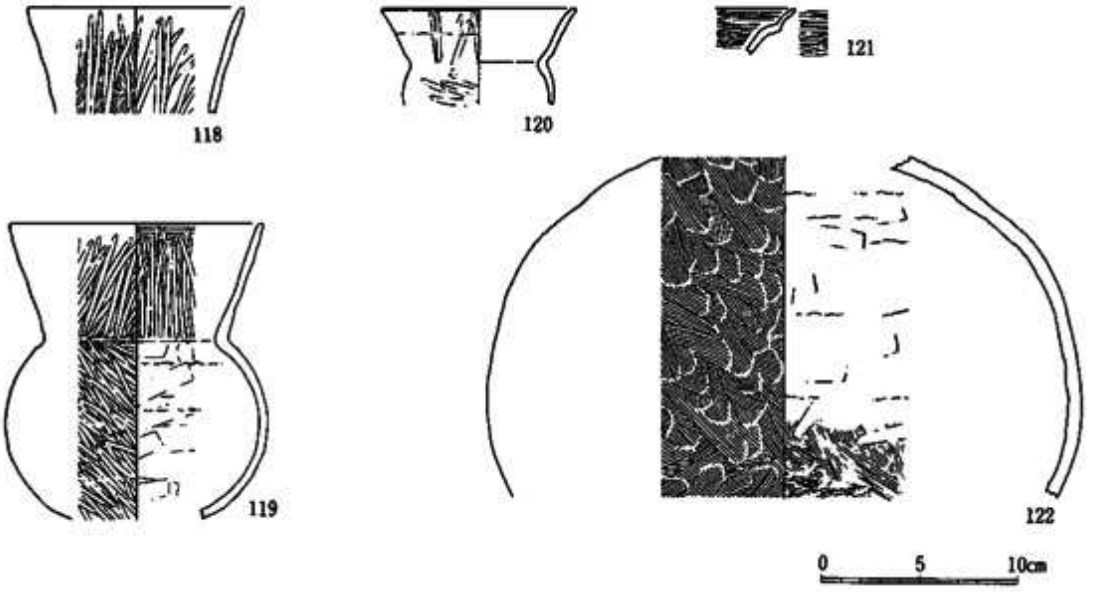


第61図　古墳時代出土土器(7)

第45号住居址

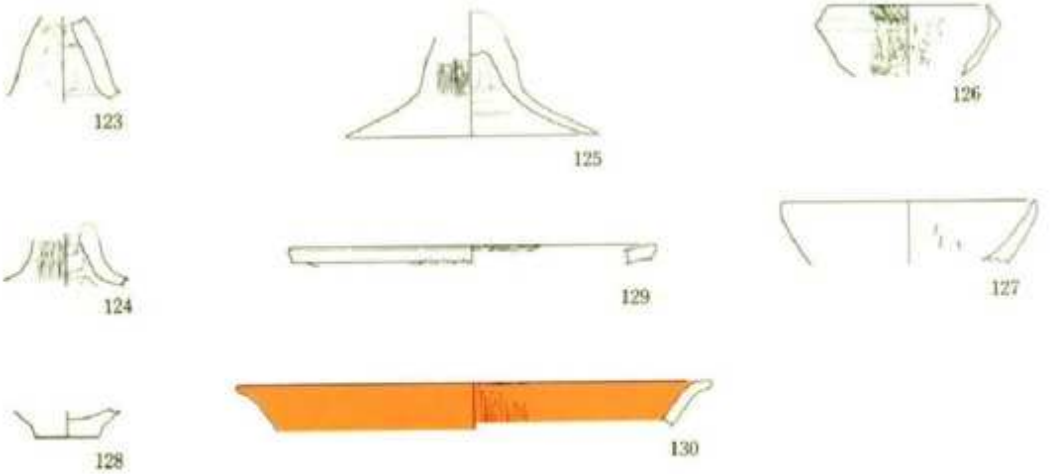


第46号住居址

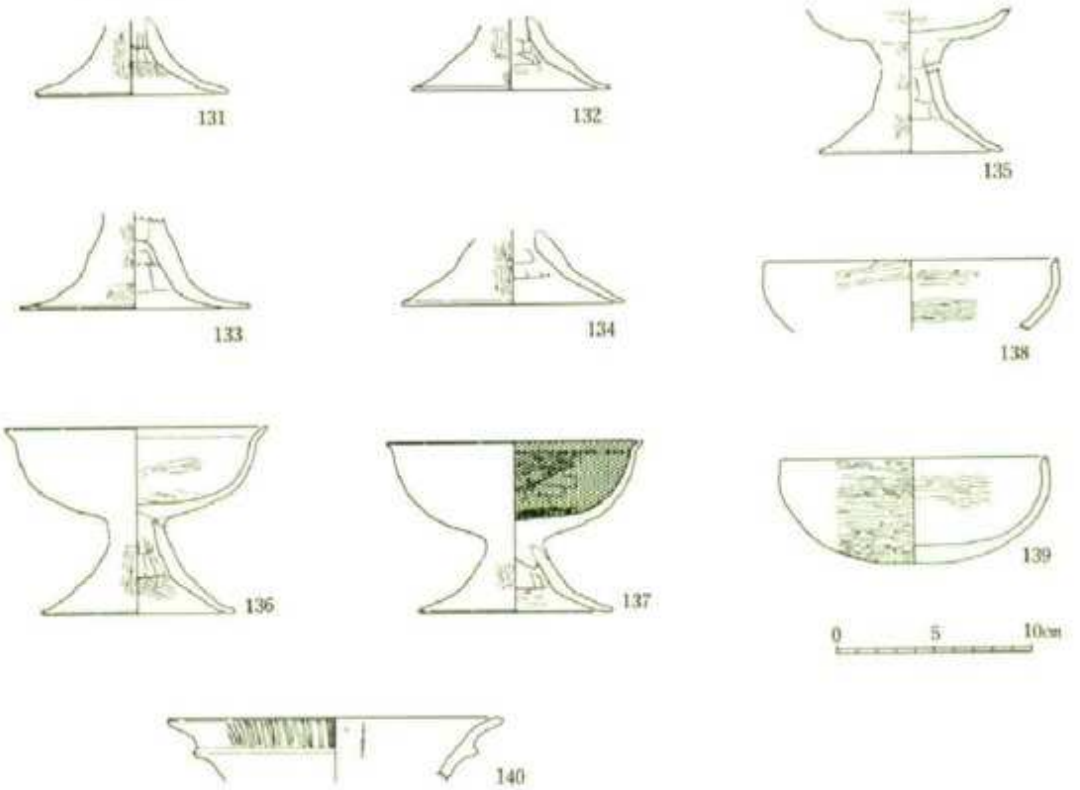


第62図　古墳時代出土土器(8)

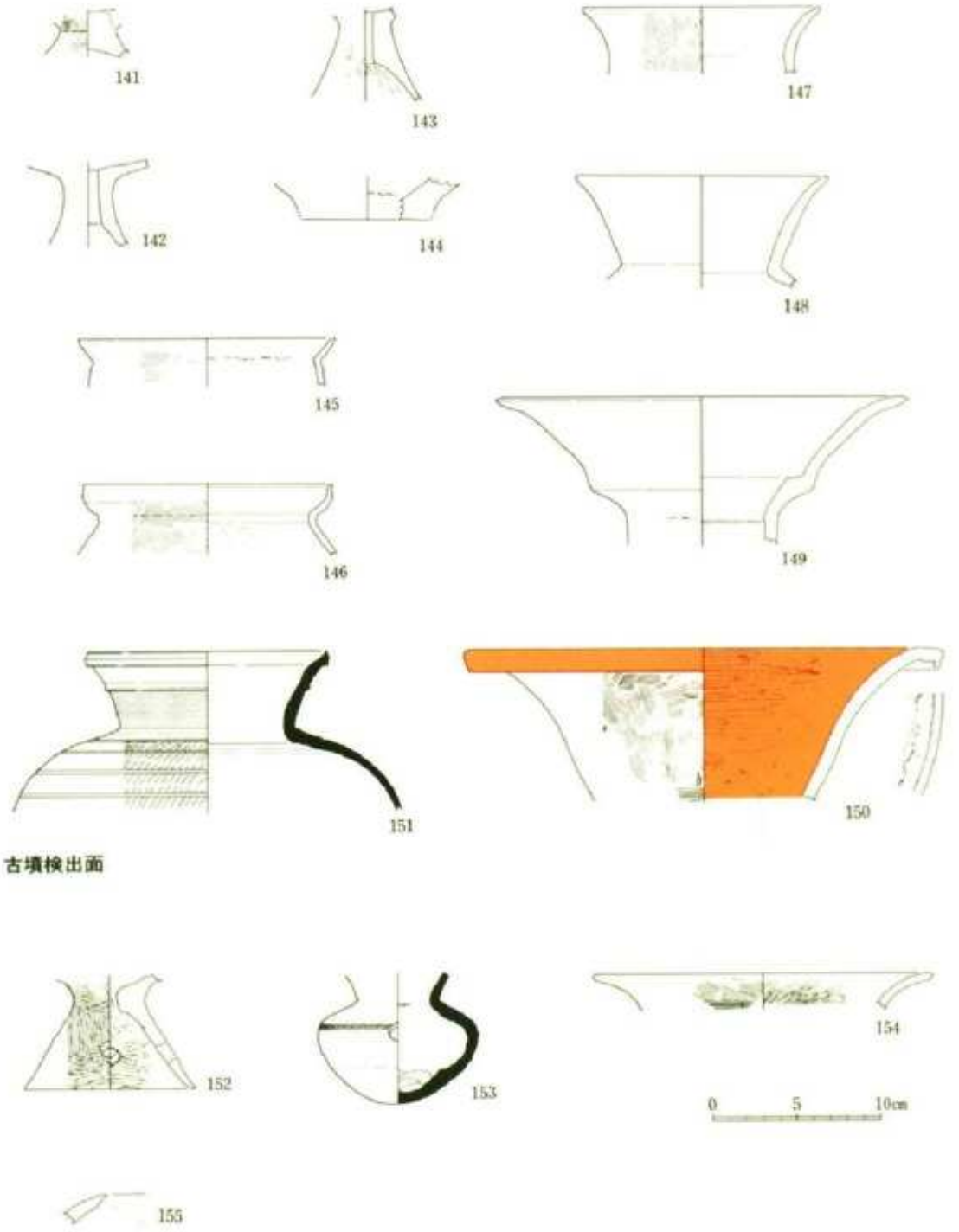
6号古墳



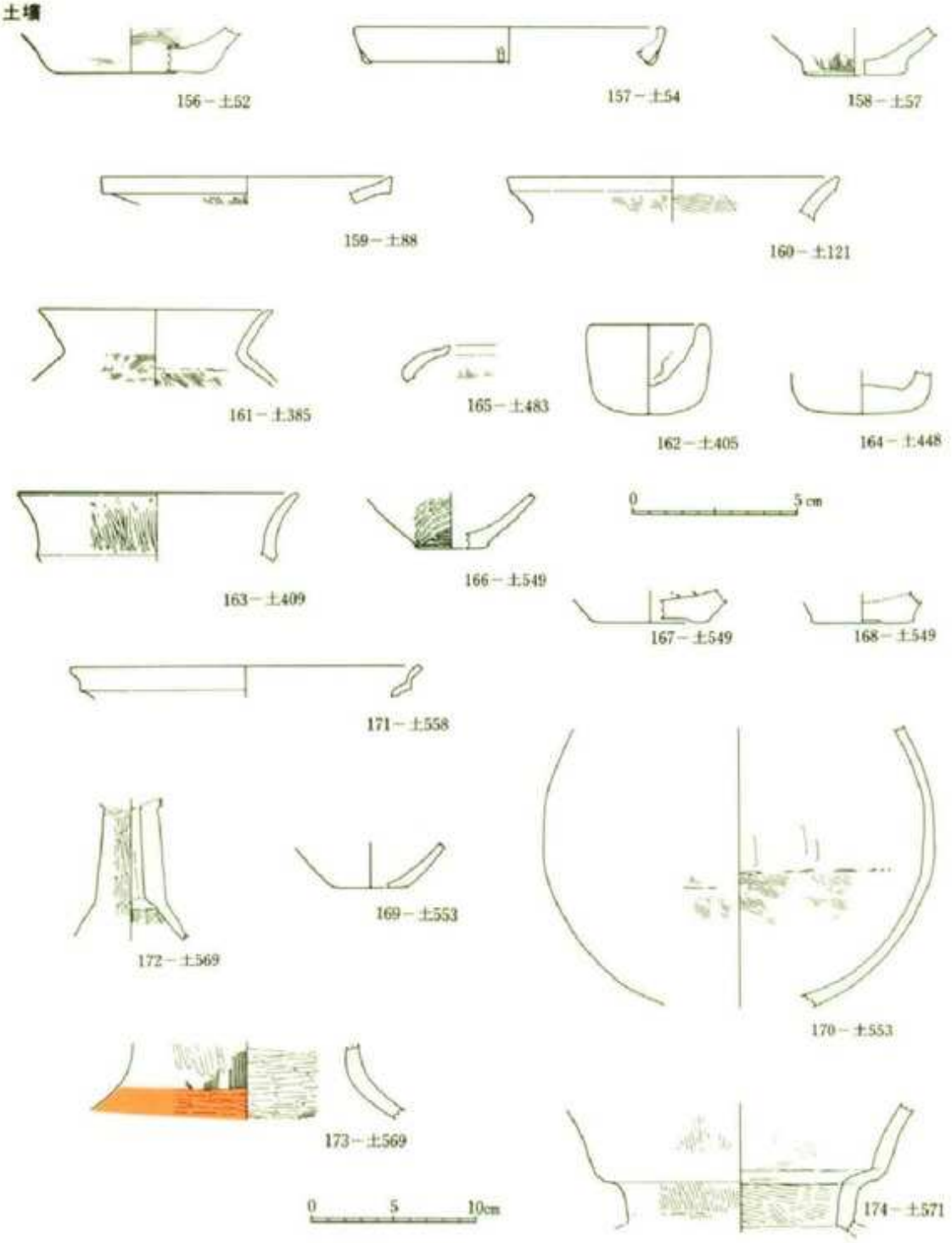
7号古墳周溝



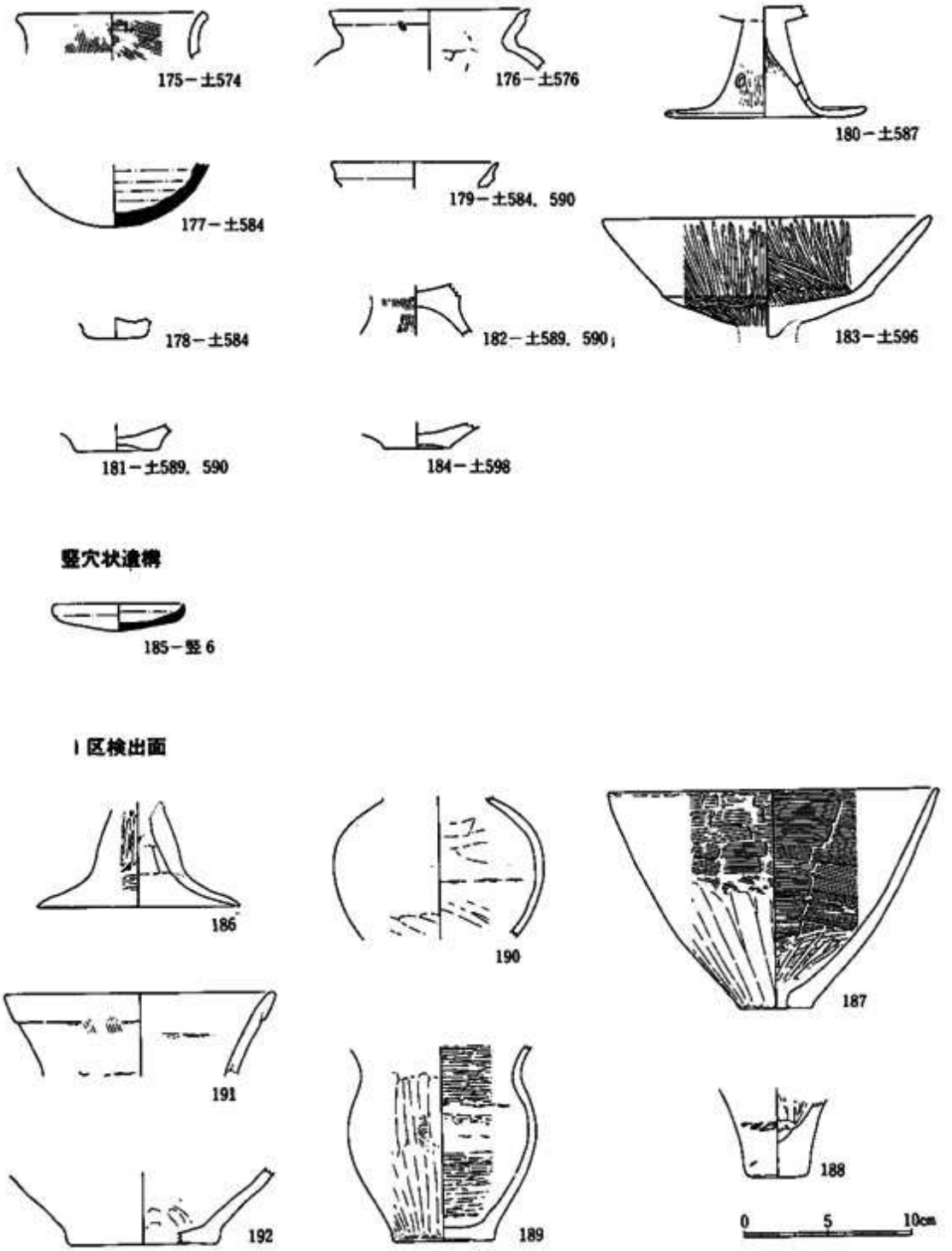
第63図　古墳時代出土土器(9)



第64図　古墳時代出土土器(10)

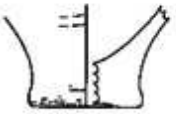


第65図　古墳時代出土土器(1)

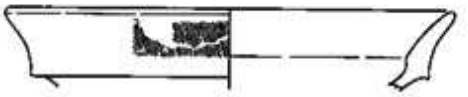


第66図　古墳時代出土土器(12)

II区検出面



193



194

III区検出面

195

196

197

0 5 10cm

198－40住

199－40住

200－40住

201－40住

202－40住

203－40住

204－42住

205－6号墳

206－40住

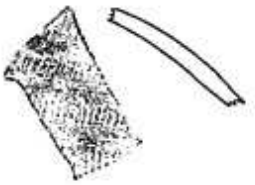
207－7号周溝

208－周溝D区

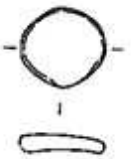
209－45住

210－土514

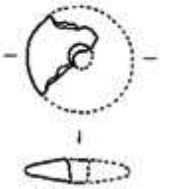
211－I区検出面



212－I区検出面



213－40住



214－37住

0 5 10cm

第67図　古墳時代出土土器(13)

古墳時代土器一覧表

表5

番号	器種	残存度	法量	色調焼成	胎土	調整	備考
住居址			器高	色調		外面	
土器			口径	焼成		内面	
図			底径				
6	小形高坏	脚部中位以上破片		淡橙褐色	白色・赤褐色微粒 微砂粒多混	口縁部ヨコナデ 脚部ハケ	
1			12.5	軟質		脚部ナデ	
55							
6	高坏	坏部1/6破片		黄茶褐色	白色微粒少混	ナデ 口縁部ヨコナデ	
2			11.7			ミガキ 口縁部ヨコナデ 口唇部に面を有する	
55				軟質			
6	高坏	坏部1/6破片		橙褐色	白色・赤褐色細粒 小砂粒少混	ハケのちミガキ 口縁部ヨコナデ	二次焼成を受ける
3			17.6			ミガキ 口縁部ヨコナデ	
55				軟質			
6	鉢	体部中位以上1/3欠損	4.7	橙褐色	白色・赤褐色細粒多混	底部ナデ 体部ナデ 口縁部ヨコナデのちハケ	底部ドーナツ状
4			9.5	軟質		体部ハケ 口縁部ヨコナデのちハケ	
55			3.6				
6	鉢	口縁部欠損		黄橙褐色	白色細粒石英多混	体部ヘラケズリのちナデ 頸部ヨコナデ	内外面に黒斑
5						板ナデ	
55			—	軟質			
6	甕	底部1/6破片		暗茶褐色	白色細粒細砂粒多混	底部ナデ 胴部ヘラケズリ	被熱により内外面薄く黒変
6						ヘラナデ	
55			2.8	やや堅緻			
6	甕	口縁部1/6破片		黄橙褐色	白色細粒多混	口縁部ヨコナデ	
7			16.9			口縁部ヨコナデ→口唇部面取り	
55				堅緻			
6	直口壺	口頸部完存		暗橙褐色	白色微細粒少混	口縁部ヨコナデ→口頸部ミガキ→頸部ナデ	
8			19.7			口縁部ヨコナデ→口頸部ミガキ	
55				やや堅緻			
6	ミニチュア	底部破片		内黒灰色 外灰白色	白色細粒多混		
9							
55			3.7	軟質			
7	高坏	脚部1/3破片		茶褐色	白色微細粒微砂粒多混	ナデ 脚端部ヨコナデ	被熱により内外面薄黒変
10						ナデ 脚端部ヨコナデ	
55			11.7	軟質			
7	小型丸底壺	口頸部1/3欠損	6.8	暗黄橙褐色	白色細粒細砂粒多混	口縁部ヨコナデ	内外面著しく摩滅
11			9.6			口縁部ヨコナデ	
55			2.2	軟質			
7	鉢	体部中位以下破片	7.1	黄橙褐色	白色微粒少混	口縁部ヨコナデ	
12			17.2			口縁部ヨコナデ	
55			—	軟質			
7	鉢	口縁部わずかに欠損	8.8	橙褐色	白色・赤褐色微細粒少混	口縁部ヨコナデ→口縁・体部の境に沈線→ハケ	底部ドーナツ状 外面に黒斑
13			17.0			口縁部ヨコナデ→ハケ	
55			6.6	軟質			

番号	器種	残存度	法量	色調焼成	胎土	調整	備考
住居址			器高	色調		外面	
土器			口径	焼成		内面	
図			底径				
7	甕	胴部中位以下		暗茶褐色	白色微粒、微	ナデ	被熱により内外面
14		½破片			砂粒少混		一部黒変
55			4.8	やや堅緻		ヘラナデ	
7	甕	口縁部½破片		淡橙褐色	白色細粒少混	口縁部ヨコナデ	内面に黒斑あり
15			14.0				
55				堅緻		口縁部ヨコナデ→口縁端部面取り	
7	S字甕	胴部上位以上		暗茶褐色	小砂粒混入	胴部ハケ　口縁部ヨコナデ	被熱により口縁部
16		½破片	17.4				内外面黒変、外面
55				堅緻		胴部ナデ→頸部ハケ 口縁部ヨコナデ→口巻部に沈線を有するヨコナデ	にスス付着
7	甕	口縁部½破片		橙褐色	白色微粒	口頸部ヨコナデ→口縁端部やや外反気味にヨコナデ	
17			7.6		微砂粒混入		
55				軟質		外面と同	
7	壺	底部½破片		暗橙褐色	白色細粒	底部ヘラケズリ	
18					細砂粒多混		
55			5.4	堅緻			
7	壺	胴部破片		黄茶褐色	黒色微粒	ミガキ	外面にスス付着
19					多混		
55				軟質		ハケのちナデ	
7	壺	口頸部破片		橙褐色	白色細粒	ヨコテデ	
20					多混		
55				やや堅緻		ヨコテデ	
8	鉢	口縁部わずか	6.3	橙褐色	白色微粒	体部ハケのちナデ→口縁部ヨコナデ	内面大半に黒斑
21		に欠損	13.7		石英混入		底部中央にわずか
56			5.3	堅緻		体部ナデ→口縁部ヨコナデ	に窪む
8	鉢	体部½欠損	8.2	黄褐色	白色微粒、石	底部ナデ　口縁部ヨコナデ→体部ハケのちミガキ	口縁部内面、見込
22			18.3		英雲母、小砂		部に黒斑あり
56			6.2	堅緻	粒混入	口縁部ヨコナデ→体部ハケのちミガキ	底部ドーナツ状
8	甕	底部破片		内黄白色 外暗褐色	白色粒、石英	底部ヘラケズリ→胴部ミガキ	被熱により外面薄
23					小石粒混入		く黒変
56			7.4	堅緻		ヘラナデ　見込部に爪状圧痕あり	
8	台付甕	脚部½破片		橙褐色	石英大小粒	ハケ	
24					小砂粒、小石		
56				堅緻	粒混入	坏部ヘラナデ　脚部ナデのち板ナデ	
8	甕	胴部上位½破		暗黄灰色	白色微粒、雲	ハケのちミガキ	内外面に棒圧痕が
25		片			母、微砂粒混		点在
56				堅緻	入	外面と同	被熱により外面薄
8	壺	胴部上半½破		暗黄灰色	白色粒、石英	ハケのちミガキ	く黒変 内面に棒圧痕あり
26		片			雲母、小砂粒		外面に黒斑あり
56				堅緻	混入	頸部ハケ　胴部上位ナデ　中位以下指おさえのち板ナデのちナデ	

番号	器種	残存度	法量	色調焼成	胎土	調整	備考
住居址			器高	色調		外面	
土器			口径	焼成		内面	
図			底径				
31	高坏	坏部1/6破片		茶褐色	白色微粒、石英、雲母少混	口縁部ヨコナデ→体部ミガキ	
27			19.6			外面と同	
56				堅緻			
31	甕	底部3/6破片		黄褐色	白色粒、石英多混	底部ナデ　胴部ハケのちナデ	
28						板ナデ	
56			5.4	堅緻			
31	甕	胴部上位以上1/6破片		明褐色	白色・赤褐色粒少混、石英大小粒多混	ハケ→口縁・頸部ヨコナデ	被熱により全面薄く黒変
29			15.0			胴部ハケ　口縁部ヨコナデ	
56				堅緻			
31	甕	胴部上位以上1/6破片		黄褐色	白色粒、石英小砂粒多混	胴部ハケ 口縁部ヨコナデ→口唇部面を持たせながらヨコナデ	外面にススが付着
30			14.4			胴部ヘラケズリ　口縁部ヨコナデ	
56				堅緻			
31	壺	底部1/6破片		黒灰色	白色微粒、雲母、小砂粒少混	胴部ハケ　底部ハケのちヘラケズリ	
31						ミガキ（？）	
56			9.4	堅緻			
31	壺	底部破片		黄褐色	白色・赤褐色微粒、石英、小石粒多混	底部ヘラケズリ　胴部板ナデ	
32						板ナデ	
56			7.0	堅緻			
32	坩	口縁部1/6破片		茶褐色	白色粒、石英多混	胴部ミガキ　口縁部ヨコナデ	
33			7.6			胴部ハケ　口縁部ヨコナデ	
56				軟質			
32	壺	口頸部1/6破片		黄灰白色	白色粒、石英小石粒混入	口頸部ヨコナデのちハケ 端部を内湾させながら口縁部ヨコナデ	
34			13.4			口頸部下半ヘラナデ　口縁部ヨコナデキ	
56				やや堅緻			
32	有段口縁壺	頸部1/6破片		黄灰色	白色粒、雲母混入	段部ヨコナデ→上段・下段に分けミガキ	外面ススが付着
35			(14.4)			板ナデ	
56				堅緻			
32	壺	底部1/6破片		灰褐色	白色粒、小砂粒混入	胴部板ナデ（？）	外面ススが付着
36						ナデ	
56			5.9	やや堅緻			
32	壺か甕	底部3/6破片		灰褐色	白色粒、石英混入	胴部ナデ	底部中央わずかにくぼむ
37						ヘラナデ	
56			6.2	堅緻			
32	壺か甕	底部1/6破片		黄白色	白色、赤褐色粒、小砂粒多混	胴部板ナデ	
38						ヘラナデ	
56			6.8	やや堅緻			
32	甕	胴部以上1/6破片	(14.4)	黄灰色	白色粒、石英混入	ミガキ	外面ススが付着
39			20.0			ミガキ	
57			(5.0)	堅緻			

番号	器種	残存度	法量	色調焼成	胎土	調整	備考
住居址			器高	色調		外面	
土器			口径	焼成		内面	
図			底径				
32	壺	胴部以下½破片		黄灰色	白色粒、石英小砂粒多混	底部ヘラケズリ　胴部ミガキ→底部際ナデ	被熱により外面胴部中位黒変しススが付着。底部際黒変
40						ナデのち板ナデ→部分的にミガキ	
57			7.5	やや堅緻			
35	壺	底部破片		黄灰色	白色粒、小砂粒少混	底部ヘラケズリ　胴部ミガキ	底部黒斑あり
41						板ナデのちナデ	
57			2.8	やや堅緻			
35	壺か甕	底部½破片		黄橙褐色	白色粒、石英多混		底部木葉底
42						ナデ	
57			5.4	やや堅緻			
35	丸底	¼破片	1.7	黄白色	白色微粒少混	ロクロナデ→口縁端部ヨコナデ→底部回転糸切	内面全体に淡緑色の釉
43			8.0			ロクロナデ→口縁端部ヨコナデ	
57			5.4	堅緻			
36	小形高坏	脚部¾破片		黄灰褐色	白色粒、石英小石多混	ミガキ	
44						ナデ（？）　爪型圧痕がまばらに一周する	
57				軟質			
36	高坏	脚部上半破片		黄灰褐色	白色・赤褐色粒、石英、小石多混	ハケ	
45						ヘラケズリ	
57				やや軟質			
36	古付甕	脚部½破片		黄橙褐色	白色粒、石英小砂粒多混		内外面著しく摩滅
46							
57			9.0	軟質			
36	高坏	脚部½破片		赤褐色	白色粒、赤褐色大小粒多混	ミガキ	内面絞り痕あり
47							
57			9.2	やや堅緻			
36	甕	口縁部⅓破片		茶褐色	白色・赤褐色粒、石英、多混	胴部ハケ　口縁部ハケのちヨコナデ	被熱により外面黒変 一部ススが付着
48			16.8			胴部ハケのち指おさえ　口縁部ハケのちヨコナデ	
57				軟質			
36	甕	口縁部⅓破片		茶褐色	白色粒、石英小石、多混	ハケのちナデ　口縁端部ヨコナデ	被熱により内面下半薄く黒変
49			12.5			胴部ハケ　口縁端部ヨコナデ	
57				軟質			
36	甕	胴部上位以上½破片		黄橙褐色	白色・赤褐色粒、石英大小粒、小石多混	胴部ハケ（？）　口縁端部ヨコナデ	強い被熱により外面赤灰に変色
50			11.2			胴部ナデ　口縁端部ヨコナデ	
57				軟質			
36	甕	胴部½破片		黄橙褐色	白色・赤褐色粒、石英、小石多混	ハケ	被熱により薄く黒変 内外面著しく摩滅
51							
57				軟質			
36	甕	底部破片		橙褐色	白色粒、小砂粒多混、雲母少混	胴部ハケ	被熱により赤橙に変色
52							
57			4.8	軟質			

番号	器種	残存度	法量	色調焼成	胎土	調整	備考
住居址			器高	色調		外面	
土器			口径	焼成		内面	
図			底径				
36	甕	底部完存	(8.5)	茶褐色	白色・赤褐色	ハケ（?）	強い被熱により赤橙を呈し内外面にススが付着
53		口縁、胴部¼	10.0		大小粒、石英		内面著しく摩滅
58		破片	4.4	軟質	多混		
36	甕	底部¼破片		黄橙褐色	白色・赤褐色	胴部ハケ	
54					粒、雲母混入	胴部ハケ	
58			4.4	軟質			
36	甕	胴部下半以下		黄橙褐色	白色・赤褐色	胴部ハケ　底部隙板状工具によるナデ	外面一部に黒斑
55		破片			粒、多混	胴部ハケ	
58			3.6	軟質			
36	台付甕	胴・脚接合部		黄灰褐色	白色・赤褐色		内外面著しく磨滅
56		¼破片			粒、石英多混		
58				軟質			
36	台付甕	胴・脚接合部		黄灰色	白色粒、大粒	胴部ハケのち指おさえ　脚部ナデ	脚部被熱により赤灰に変色、一部黒変の部分もあり
57		破片			石英、小石粒		
58				軟質	多混	胴部板ナデ　脚部ナデ（?）	
36	台付甕	脚部½破片		黄褐色	白色粒、石英	ナデ（?）	被熱により内外面一部赤褐～赤灰に変色
58					大小粒、小石	ナデ	
58			8.5	軟質	粒混入		
36	壺	胴部上位以上		黄灰色	白色・赤褐色	ハケ→口縁部ヨコナデ→胴部上位平行線結文・J字状文	
59		¼破片	13.6		粒石英、小砂	ハケ→口縁部ヨコナデ	
58				軟質	粒多混		
36	壺（?）	胴部下位以下		橙褐色	白色・赤褐色	胴部ハケのちナデ	
60		¼破片			大小粒、大粒石		
58			11.4	やや軟質	英、小石粒多混		
36	壺	胴張出部破片		黄橙褐色	白色・赤褐色		内面剥離
61					粒、石英混入		外面赤彩
58				軟質			
37	高坏	坏部½破片		黄橙褐色	白色・赤褐色	坏部ナデ　口縁部ヨコナデ	
62			18.2		粒多混	口縁部ヨコナデ→坏部ミガキ	
58				やや軟質			
37	甕	底部完存	17.3	橙褐色	白色粒、石英	底部へラケズリ（?）胴部ハケのちミガキ 口縁部ヨコナデ	被熱により外面ススが付着 一部剥離内面下半薄く黒変
63		口縁、胴部	13.7		多混	頸部ミガキ　胴部へラナデのち中位部分ハケのちミガキ　口縁部ヨコナデ	
58		½破片	5.1	やや軟質			
37	台付甕	胴・脚接合部		淡黄橙褐色	石英、小砂粒	ミガキ	
64		破片			混入	ミガキ	
58				堅緻			
37	S字甕	口縁部¼破片		黄橙褐色	白色粒、石英	胴部ハケのち頸部ヨコナデ　口縁部ヨコナデ	
65			11.7		雲母、小砂粒	口縁部ヨコナデ	
58					混入		

番号	器種	残存度	法量	色調焼成	胎土	調整	備考
住居址			器高	色調		外面	
土器			口径	焼成		内面	
図			底径				
37	台付甕	脚部欠損		暗橙褐色	白色粒、小石粒多混	胴部ハケ 胴・脚接合部ナデ 口縁部ハケのち強いヨコナデ	被熱により外面薄く黒変、一部スス付着
66			12.9				
58				軟質			
37	台付甕	脚部½破片		黄褐色	白色・赤褐色粒多混	板ナデ 脚端部面取り	被熱により内外面一部黒変
67						ナデ	
58			10.2	やや軟質			
37	甕	口縁部完存 胴部½破片	25.5	黄茶褐色	白色粒、小砂粒多混	口縁部ヨコナデ→胴部ハケのちナデ→胴部下半部ミガキ 頸部波状文	
68			18.1			口縁部ヨコナデ→口頸部ハケのちミガキ 胴部ヘラナデ	
58			7.4	やや軟質			
37	壺	口縁部欠損		黄灰色	白色粒、小砂粒少混	ヘラケズリのちミガキ	底部中央わずかに窪む 被熱により内外面薄く黒変、外面スス付着
69						下半板ナデのちナデ 上半ヘラナデのち指おさえ	
59			5.1	堅緻			
37	壺	口縁部欠損		暗褐色	白色・赤褐色粒多混	胴部ミガキ	被熱のため外面一部黒変
70						胴部上半強いヘラナデ 下半板ナデ	
59			3.3	やや堅緻			
37	壺	頸部½破片		黄橙褐色	白色微粒少混	ヨコナデ 突帯上に刻み わずかに波状文(?)	被熱により内面薄く黒変
71						ナデ	
59				堅緻			
37	壺	胴部上位以上½破片		赤橙褐色	白色微細粒少混	口頸・胴部ハケ→口縁端部ヨコナデ→口頸部ミガキ 胴部ヘラナデ	被熱により内外面の一部黒変、スス付着
72			12.8			口頸部ハケ 胴部ヘラナデ→口縁端部ヨコナデ→口頸部ミガキ	
59				堅緻			
37	甕	胴部中位以上破片		淡橙黄褐色	白色粒、小砂粒多混	口縁部ヨコナデ→頸部一部ハケ→頸部以下細い板状工具によるミガキ状のナデ	炉体土器 輕圧痕あり
73			16.2			口縁部ヨコナデ→頸部ハケ→全体にミガキ→口唇部刻み	
59				やや堅緻			
37	壺	胴部上位破片		黄橙褐色	白色大小粒多混	ハケのち細い板状工具によるミガキ状のナデ	炉体土器
74						ナデのち指おさえ→胴部下半細い板状工具によるミガキ状のナデ	
59				やや堅緻			
39	高坏	脚部½破片		赤橙褐色	白色・赤褐色粒多混	ミガキ(?)	古墳中期
75							
59			8.9	軟質			
39	坏蓋	½破片		灰色	黒色微粒、微砂粒わずかに混入	ロクロナデ→稜つまみ出し→天井部回転ヘラケズリ	須恵器
76			9.5			ロクロナデ 端部面取り	
59				堅緻			
39	坏	体部以上½破片		内黒色 外橙褐色	白色・赤褐色粒、石英混入	体部ヘラナデ(?) 口縁部ヨコナデ	
77			14.5			口縁部ヨコナデ→ミガキ→黒色処理	
59				やや軟質			
39	壺	胴部上位½破片		茶褐色	白色微粒、小砂粒少混	ヘラナデ	被熱により内面黒灰色、外面薄く黒変
78						ヘラナデ(?) 指おさえ	
59				堅緻			

番号	器種	残存度	法量	色調焼成	胎土	調整	備考
住居址			器高	色調		外面	
土器			口径	焼成		内面	
図			底径				
38	高坏	坏・脚接合部破片		暗橙褐色	白色・赤褐色粒、少混	ミガキ	脚部内面に絞り痕あり
79						坏部ヘラおさえ	
59				軟質			
40	甕	口縁部1/6破片		淡橙色	白色・赤褐色粒、石英、小石粒、多混	口唇部をつまみ状に立たせながら口縁ヨコナデ	
80			18.7				
60				軟質			
40	甕	脚部上位1/6破片		橙褐色	白色粒、小石粒、多混	頸部ハケ	被熱により外面一部黒変し、器面の荒れも激しい
81						脚部ヘラケズリ　口縁部ハケ（？）	
60				やや堅緻			
40	甕	底部完存 脚部中位以下1/6破片		暗赤橙褐色	白色・赤褐色粒、白色石英雲母、多混	底部ヘラケズリ　脚部ケズリ状のヘラナデのち一部ミガキ	被熱により一部黒変 調整が全体的に粗い
82						ヘラデナ	
60			6.6	やや堅緻			
40	甕	脚部上位以上1/6破片		橙褐色	白色・赤褐色大小粒、石英小石粒、多混	脚部ハケ・ヘラナデ→口縁端部ヨコナデ→脚部ミガキ　頸部波状文	被熱により口縁部内外面薄く黒変 器面荒れる
83			19.8			ヘラナデ→口縁端部ヨコナデ	
60				やや軟質			
40	甕	口縁部1/6 脚部1/6破片		黄橙褐色	白色・赤褐色大小粒、石英多混	頸部波状文　口縁端部ヨコナデ	被熱により外面一部黒変、器面の荒れ激しい。内面に黒色の付着物あり
84			16.6			脚部ヘラナデ　口縁端部ヨコナデ	
60				やや軟質			
40	台付甕	脚部破片		黄褐色	白色・赤褐色粒、小砂粒多混	ハケ	
85						ナデ	
60			9.9	軟質			
40	台付甕	脚・脚接合部破片		黄橙褐色	濁った石英大小粒 白色粒、小石粒、多混	ハケ	
86						脚部ヘラによる刻み状の沈線	
60				軟質			
40	壺か甕	底部3/6破片		黄橙褐色	白色粒多混		被熱により内面薄く黒変、内外面著しく摩滅
87							
60			6.0	軟質			
40	S字甕			灰色	白色・黒灰色粒雲母、小砂粒混入	端部ヨコナデ　口縁中段に刺突	
88						ハケ　端部ヨコナデ	
60				やや軟質			
40	甕			黄橙褐色	赤褐色粒石英多混	脚部ハケの一種（？）　口縁部ヨコナデ	被熱により外面薄く黒変、器面の荒れ激しい
89						口縁部ヨコナデ	
60				軟質			
40	壺			黄灰色	白色・赤褐色粒混入	口頸部ハケ→口縁端部ヨコナデ→口頸部ヨコナデ	
90						口縁端部ヨコナデ→口頸部ヨコナデ	
60				堅緻			
40	壺	口縁部1/6破片		黄褐色	白色粒、石英大小粒、小石粒多混		被熱により外面薄く黒変、器面の荒れ激しい
91			12.3				
60				やや堅緻			

番号	器種	残存度	法量	色調焼成	胎土	調整	備考
住居址			器高	色調		外面	
土器			口径				
図			底径	焼成		内面	
40	壺	口縁部1/4破片		黄褐色	赤褐色粒	口縁端部ヨコナデ　口頸部ヨコナデ	被熱により内面黒変
92			19.9		石英　多混		
60				堅緻		口縁端部ヨコナデ	
40	壺	口縁部1/4破片		赤褐色	白色・赤褐色	口縁端部ヨコナデ	器面摩滅している
93			17.8		粒、石英　多		
60				やや堅緻	混		
40	壺	口縁部1/4破片		淡黄橙褐色	白色粒、濁った石英、小石	口縁端部ヨコナデ	被熱により外面全体的に黒変、器面の荒れ激しい
94			16.6				
60				やや軟質	粒、雲母多混	口縁端部ヨコナデ	
40	壺	頸部中位以下ほぼ完存		黄橙褐色	白色粒、石英小石多混		被熱により外面一部黒変し脆くなっている。底部わずかにドーナツ状を呈している部分あり
95							
61			6.2	軟質		ヘラナデ（？）	
40	壺	底部破片		黄褐色	白色粒、濁った石英大小粒		底部ドーナツ状
96							器面著しく摩滅
61			6.4	やや軟質	きわめて多混		
40	壺	頸部1/4欠損	33.0	黄橙褐色	白色微粒	口頸部ナデ→全体にハケ→頸部にミガキのち底部摩ナデ　口唇部に面を有する	輪圧痕あり底部ドーナツ状
97			13.2		微砂粒混入		
61			6.3	堅緻		口縁端部ヨコナデ→口頸部ナデ　頸部中位以上ヘラ、板状工具によるナデ、下位ハケ	
41	鉢	体部中位以上1/4破片		黄褐色	白色・赤褐色	ミガキ	器面著しく摩滅
98			14.4		粒混入		
61			—	軟質			
41	壺	体部・口縁部1/4欠損	7.6	黄褐色	白色・赤褐色	ミガキ	外面体部下半に黒斑、底部中央にわずかに窪む
99			13.3		粒混入		
61			3.1	軟質		体部上半ヘラナデ、下半板ナデ　口縁部ミガキ	
43	器台	坏・脚接合部破片		黄褐色	白色粒、小砂粒多混	坏・脚接合部ヨコナデ→脚部ハケ	
100							
61				やや堅緻		ハケ	
43	小型丸底壺	口頸1/4欠損	5.1	橙褐色	白色・赤褐色		器面著しく摩滅
101			10.6		粒少混		
61			—	軟質			
43	小型丸底壺	口頸・体部1/4破片		暗黄褐色	白色微粒		器面著しく摩滅
102			13.8		少混		
61			—	軟質			
43	直口壺	口頸部1/4頸部1/4破片		淡黄茶褐色	黒灰色細粒	口縁端部ヨコナデ→口頸部ハケのちナデ→沈線に文様	被熱により外面全体薄く黒変
103			12.5		少混		
61				やや堅緻		口縁端部ヨコナデ→口頸部下半以下ハケ	
43	有段口縁壺	口縁部1/4破片		淡黄色	白色粒、小砂粒多混	口唇部面取り（？）	口縁内面一部黒斑
104			18.1				
61				やや軟質		ヘラナデ	

番号	器種	残存度	法量	色調焼成	胎土	調整	備考
住居址 土器 図			器高 口径 底径	色調 焼成		外面 内面	
45 105 62	高坏	坏部½破片	 14.7 	黄橙褐色 堅緻	白色微粒 少混	口縁端部ヨコナデ→ミガキ 口縁端部ヨコナデ→ミガキ	
45 106 62	甕	口縁部½破片	 17.5 	暗茶褐色 堅緻	白色大小粒 混入	ヨコナデのちハケ ヨコナデのち狭いハケのち広いハケ	被熱により内外面薄く黒変、外面スス付着
45 107 62	壺（？）	胴部上位以上 ½破片	 12.7 	暗茶褐色 やや堅緻	白色微粒 少混	胴部ヘラナデ　口縁部ヨコナデ 胴部ナデ　口縁部ヨコナデ	被熱により内外面薄く黒変
45 108 62	甕	底部ほぼ完存、胴部下半½破片	 4.9	黄褐色 やや堅緻	白色大小粒 多混	ヘラナデのち底部際ナデ ヘラナデ	内面炭化物付着、底部中央に線状の圧痕あり
45 109 62	壺か甕	底部破片	 6.0	淡黄茶褐色 やや堅緻	白色粒、石英 多混	底部ナデ　胴部ハケのち雑なナデ ナデ	被熱により内面黒変
45 110 62	小形台付甕	脚部完存胴部 ½破片	10.0 8.4 5.3	内黒灰色 外淡黄色 軟質	白色粒、小砂 粒少混	ヘラナデ　口縁部ヨコナデ 胴部板ナデ　脚部ナデ　口縁部ヨコナデ	
45 111 62	台付甕	胴・脚接合部 破片	 	橙茶褐色 堅緻	白色大小粒 粗砂粒多混	 胴部ナデ　脚部細いヘラ状工具によるナデ（？）	強い被熱により外面赤変、荒れも著しい
45 112 62	台付甕	脚部½破片	 8.7	淡黄色 軟質	白色微粒 小砂粒多混	ヘラナデ 板、又は丸棒状の工具によるナデ　端部ナデ	
45 113 62	S字甕	脚部½破片	 8.8	暗橙茶褐色 堅緻	白色粒、雲母 細砂粒多混	短縞線状のハケ 板ナデ　脚端部折り返し状	被熱により内外面薄く黒変
45 114 62	甕	胴部上位½破片	 	茶褐色 やや堅緻	白色微粒 少混	頸部ナデ　胴部ヘラケズリのちハケ 頸部ナデ　胴部ハケのち指おさえ	被熱により内外面薄く黒変
45 115 62	壺（？）	胴部上半破片	 	橙茶褐色 やや堅緻	白色粒、小砂 多混	ハケのちヘラナデ ヘラナデ	炉体土器 被熱により内外面薄く黒変、線圧痕あり
45 116 62	ミニチュア	坏部½欠損	2.8 3.8 2.8	茶褐色 やや堅緻	白色粒、微砂 粒多混		
45 117 62	ミニチュア	½破片	 4.0	淡灰黄色 やや堅緻	白色微粒 多混		高坏形

番号	器種	残存度	法量	色調焼成	胎土	調整	備考
住居址			器高	色調		外面	
土器			口径	焼成		内面	
図			底径				
46	直口壺	口頸部1/4破片		淡黄橙褐色	黒色微粒少混	口縁部ヨコナデ→口頸部ハケのちミガキ	
118			11.1	やや堅緻		口縁部ヨコナデ→口頸部ミガキ	
62							
46	直口壺	底部欠損		茶褐色	白色微粒小砂粒多混	口縁部ヨコナデ→全体にハケのちミガキ	外面全体にススが付着
119			13.0	堅緻		口縁部ヨコナデ→口頸部ハケのちミガキ 胴部ヘラナデ	
62							
46	甕	口頸部1/4体部1/4破片		淡黄色	白色微粒微砂粒少混	口縁部ヨコナデ→全体にミガキ	
120			10.0	軟質		口縁部ヨコナデ	
62							
46	鉢			明橙褐色	白色微粒少混	ハケのちミガキ	
121				軟質		ミガキ	
62							
46	壺	胴部上半1/4破片		内黒灰色外茶褐色	白色大粒きわめて多混	ハケ	被熱により外面一部黒変
122				やや軟質		胴部上半板ナデ・下半ハケ→上半下半の接合部ヘラ状のナデ	
62							
6号墳	高坏	脚部3/4破片		橙褐色	白色粒、小砂粒少混	ハケ	
123				やや堅緻		板状工具による強いナデ	
63							
6号墳	高坏	坏・脚接合部破片		黄褐色	微砂粒少混	ミガキ	
124				やや堅緻		ヘラケズリ	
63							
6号墳	高坏	脚部1/4破片		淡黄褐色	白色粒、赤褐色粒少混	ハケ→坏・脚接合部ナデ→脚端部ヨコナデ	
125				やや堅緻		ヘラナデのち一部ミガキ 脚端部ヨコナデ	
63			13.0				
6号墳	高坏（？）	坏部1/4破片		黄橙褐色	微砂粒少混	口縁端部ヨコナデ→体部ナデのちミガキ	
126			8.2	やや軟質		外面と同	
63							
6号墳	高坏	坏部上半1/4破片		褐色	白色微粒、微砂粒少混	工具によるミガキ状のナデ 口縁端部ヨコナデ	
127			13.2	軟質		板ナデ 口縁端部ヨコナデ	
63							
6号墳	壺か甕	底部破片		橙褐色	白色微粒、石英多混	底部ナデ	内外面著しく摩滅
128				やや堅緻			
63			3.2				
6号墳	甕	口縁部1/4破片		橙褐色	白色微粒少混	口縁端部ヨコナデ→ミガキ	
129			19.0	堅緻		外面と同	
63							
6号墳	壺	口縁部1/4破片		暗橙褐色	白色微粒小砂粒少混	口縁端部ヨコナデ	内外面著しく摩滅 内外面赤彩
130			24.6	やや軟質		ミガキ 口縁端部ヨコナデ	
63							

番号	器種	残存度	法量	色調焼成	胎土	調整	備考
住居址 土器 図			器高 口径 底径	色調 焼成		外面 内面	
7住周 131 63	高坏	脚部½破片	 10.0	橙褐色 やや軟質	精選 赤褐色粒混入	ミガキ 脚端部ヨコナデ ハケのちヘラケズリ 脚端部ヨコナデ	被熱のため内面一部黒変
7住周 132 63	高坏	脚部½破片	 10.2	橙褐色 軟質	精選、赤褐色粒混入、白色砂粒帯流し状に混入	ミガキ 脚端部ヨコナデ ハケのちヘラケズリ 脚端部ヨコナデ	
7住周 133 63	高坏	脚部½破片	 11.8	橙褐色 軟質	精選 赤褐色粒混入	ミガキ 脚端部ヨコナデ ヘラケズリ 脚端部ヨコナデ	外面一部摩滅
7住周 134 63	高坏	脚部½破片	 11.4	橙褐色 軟質	精選 赤褐色粒混入	ミガキ 脚端部ヨコナデ ヘラケズリ 脚端部ヨコナデ	被熱のため内面一部黒変
7住周 135 63	高坏	坏・脚接合部破片 脚部½破片	 9.5	橙褐色 軟質	精選、赤褐色粒多混、白色砂粒帯流し状に混入	ミガキ 脚端部ヨコナデ 坏部ミガキ 脚部ヘラケズリ 脚端部ヨコナデ	
7住周 136 63	高坏	½破片	9.5 13.4 9.6	橙褐色 軟質	精選、赤褐色粒多混、白色砂粒帯流し状に混入	坏部・口縁端部ヨコナデ 脚部ハケ 坏部ミガキ・ヘラナデ 口縁端部ヨコナデ 黒色処理不完全 脚部ハケのちヘラケズリ→脚端部ヨコナデ	
7住周 137 63	高坏	½破片	8.7 13.2 9.8	内黒色 外橙褐色 軟質	精選、赤褐色粒多混、白色砂粒帯流し状に混入	脚部ミガキ 坏部ヘラナデのちミガキ 口縁端部ヨコナデ 黒色処理 脚部ハケのちヘラケズリ→脚端部ヨコナデ	
7住周 138 63	坏	底部欠損	 15.0 	橙褐色 軟質	精選 赤褐色粒混入	口縁端部ヨコナデ→ミガキ 外面と同	
7住周 139 63	坏	ほぼ完存	5.3 13.6 3.0	橙褐色 軟質	精選 赤褐色粒混入	口縁端部ヨコナデ→ミガキ 外面と同	
7住周 140 63	有段口縁壺	口縁部 ⅛破片	 16.8 	橙褐色 軟質	精選 赤褐色粒混入	口縁端部・段部ヨコナデ→上段ミガキ・暗文 口縁端部ヨコナデ→ハケ	
7住周 141 64	高坏	坏・脚部接合部½破片	 	赤褐色 堅緻	白色・赤褐色粒、石英少混	脚部ミガキ 坏・脚接合部のみミガキ以前のハケが見える 脚部ヘラナデ（？）	
7住周 142 64	器台	坏・脚部接合部½破片	 	淡橙褐色 軟質	白色・赤褐色粒、濁った石英多混		内外面著しく摩滅
7住周 143 64	器台	脚部½破片	 	黄橙褐色 軟質	精選 白色・赤褐色粒少混	脚部ヘラケズリ・ハケ 脚部ヘラによるおさえ状のナデ	

番号	器種	残存度	法量	色調焼成	胎土	調整	備考
住居址			器高	色調		外面	
土器			口径				
図			底径	焼成		内面	
7 住居	壺（？）	底部1/3破片		橙褐色	暗灰石英	ヘラナデ　ナデ	
144					白色粒多混		
64			7.5	軟質		ヘラナデ	
7 住居	甕	口縁部1/6破片		茶褐色	白色粒、石英	口縁部ヨコナデ→ハケ	
145			15.4		少混		
64				堅緻		口縁部ヨコナデ→ヘラナデ	
7 住居	甕	口縁部1/6破片		黄褐色	白色微粒、石	ハケ→口縁端部ヨコナデ　口唇部面取り	被熱により外面全
146			14.8		英大小粒、小		体薄く黒変
64				堅緻	石粒少混	胴部ナデ　頸部ヘラナデ 口縁部ヨコナデ	
7 住居	壺	口頸部1/6破片		黄褐色	白色・赤褐色	口頸部ハケ	被熱により外面全
147			14.1		微粒		体薄く黒変
64				やや堅緻	石英微粒	口頸部ヘラケズリ様のナデ 口縁端部ヨコナデ	
7 住居	壺	口頸部1/6破片		黄褐色	白色粒、石英	口縁部ヨコナデ	被熱により内面や
148			15.1		きわめて多混		や黒変、内外面著
64				軟質			しく摩滅
7 住居	有段口縁壺	口頸部1/3破片		橙褐色	白色粒、石英		内外面著しく摩滅
149			24.6		小砂粒多混		
64				軟質			
7 住居	壺	口頸部1/3破片		黄橙褐色	白色粒、石英	ハケ→端部折り返しのち指おさえ→口唇部ヨコ	内面赤彩
150			14.2		混入	ナデ　口頸部下端平行櫛描文	
64				堅緻		ハケのちミガキ	
7 住居	甕	胴部上位以上		灰白色	白色微粒	ロクロナデ→口頸部・端部ヨコナデ→口頸部下半かき目・胴	須恵器
151		1/3破片	28.6		少混	部タタキ目のちナデ→頸部直下ヨコナデ→ほぼ等間隔沈線	
64				堅緻		ロクロナデ→頸部直下回転ヘラケズリ口頸部ヨコナデ	
古検	器台	脚部ほぼ完存		暗橙褐色	白色粒、小砂	坏部ハケ　脚部ミガキ　脚端部ヨコナデ	
152					粒混入		
64			10.0	やや軟質		脚部ハケのちミガキ	
古検	甕	口頸部以下		淡青灰色	白色粒、微砂	ロクロナデ→底部ナデ　肩部波状文	須恵器
153		完存			粒少混		
64			—	堅緻		ロクロナデ→頸部ナデ　見込部分棒状工具による叩き	
古検	甕	口縁部1/6破片		暗茶褐色	微砂粒、雲母	口縁端部ヨコナデ→ハケのち櫛状文	被熱により内外面
154			20.2		少混		黒変
64				堅緻		口縁端部ヨコナデ→ミガキ	
古検	壺	口縁部1/6破片		茶褐色	黒色粒、微砂	口縁端部ヨコナデ→ハケ	
155					粒少混		
64				やや堅緻		口縁端部ヨコナデ	
土52	甕	底部1/3破片		茶褐色	白色・黒色粒	底部ナデ　胴部ハケ・ナデ	被熱のため外面全
156					小砂粒多混		体薄く黒変
65			9.4	やや堅緻		ハケ	

番号	器種	残存度	法量	色調焼成	胎土	調整	備考
住居址			器高	色調		外面	
土器			口径				
図			底径	焼成		内面	
土54	有段口縁壺	口縁部1/6破片		淡橙褐色	白色大小粒多混	口縁部ヨコナデ　棒状貼付文	器面著しく摩滅内面剥離
157			19.0				
65				軟質			
土57	甕	底部3/6破片		黄茶褐色	大小砂粒多混	底部ナデ　胴部ハケのちナデ	被熱により外面全体薄く黒変
158						ハケ	
65			6.4	堅緻			
土58	壺	口縁部1/6破片		橙褐色	白色粒、微細砂粒少混	ハケ→口縁隆起部直下ヨコナデ	
159			17.8			口縁端部つまみ出し状にヨコナデ	
65				堅緻			
土121	甕（？）	口縁部1/6破片		暗茶褐色	白色粒、微砂粒少混	口縁端部ヨコナデ→ハケ→隆起部直下ヨコナデ	被熱により内外面一部黒変
160			20.3			ハケ　口縁端部ヨコナデ	
65				堅緻			
土385	甕	胴部上位以上1/6破片		茶褐色	白色粒、雲母小砂粒多混	胴部ハケのちナデ　口縁部ヨコナデ	被熱により内外面黒変
161			14.2			胴部ハケ・指おさえ　口縁部ヨコナデ	
65				堅緻			
土405	ミニチュア	1/6破片	2.7	黄橙褐色	白色粒、微砂粒多混		
162			3.6				
65			—	やや軟質			
土409	有段口縁壺	口縁部1/6破片		黄褐色	白色微細粒多混	口縁部上段ミガキ→口縁端部ヨコナデ	被熱により外面一部黒変
163			17.2			口縁部ヨコナデ	
65				堅緻			
土448	ミニチュア	底部完存		淡橙褐色	白色微細粒多混		
164							
65				やや軟質			
土483	甕			淡橙褐色	白色粒、石英多混	ハケのちヨコナデ　口縁端部ヨコナデ	被熱により外面一部黒変
165						口縁端部ヨコナデ	
65				軟質			
土549	甕	胴部下位以下1/6破片		黄灰褐色	白色・赤褐色粒、石英大小粒混入	タタキ	被熱により外面薄く黒変
166						ナデ	
65			4.4	堅緻			
土549	壺	底部1/6破片		淡黄褐色	雲母、微砂粒多混	ナデ	底部から胴部下位にかけて広範囲に黒斑 底部ドーナツ状
167						板ナデ	
65			7.2	やや堅緻			
土549	壺	底部1/6破片		茶褐色	白色粒、微細砂粒多混		底部ドーナツ状
168							
65			6.2	やや堅緻			
土553	壺	胴部下位以下1/6破片		橙褐色	白色粒、石英大小粒、小石粒多混	底部ヘラケズリ	内面に黒斑
169							
65			4.8	やや堅緻			

番号	器種	残存度	法量	色調焼成	胎土	調整	備考
住居址			器高	色調		外面	
土器			口径	焼成		内面	
図			底径				
±553	壺	胴部上半½破片		黄灰色	白色・赤褐色粒、石英、砂粒きわめて多混	ハケ	被熱により外面やや黒変、器面の荒れも激しい
170						胴部上半板ナデ・下半ハケ	
65				軟質			
±558	甕	口縁部¼破片		橙茶褐色	白色微粒 微砂粒多混	口縁部ヨコナデ	被熱により内外面薄く黒変
171			21.4			口縁部ヨコナデ	
65				やや堅緻			
±569	器台（？）	脚部上半破片		黄橙褐色	白色微粒混入	ミガキ→脚端部ヨコナデ	被熱により内外面薄く黒変
172						脚部中位以上ヘラケズリ・下位ナデのちハケ	
65				堅緻			
±569	壺	頸部½破片		黄橙褐色	白色・赤褐色粒、石英大小粒少混	櫛描直線文のちミガキ	頸部下端以下赤彩
173						ハケのちミガキ	
65				堅緻			
±571	有段口縁壺	頸部¼破片		暗黄褐色	白色粒、石英多混	ハケのち段部ヨコナデ	
174						ハケ　上中段部ヨコナデ	
65				堅緻			
±574	壺（？）	口頸部¼破片		橙褐色	白色微粒少混	ハケ→口縁端部ヨコナデ	
175			11.4			外面と同	
66				軟質			
±576	甕	胴部上位以上¼破片		淡橙褐色	白色・赤褐色粒混入	頸部ヨコナデ　胴部ナデ　口縁端部ヨコナデ	輪圧痕あり
176			12.0			口縁部ヨコナデ→板ナデ　鍋部に面を有する	
66				堅緻			
±584	甕	胴部下半以上¼破片		灰色	白色微粒少混	ロクロナデのちナデ	須恵器
177						ロクロナデのち見込部分ナデ	
66			－	堅緻			
±584	小形甕（？）	底部破片		黄橙褐色	白色微粒少混	ナデ	
178						ナデ	
66			3.8	やや軟質			
±584/590	甕	口縁部¼破片		暗茶褐色	白色・黒色微粒少混	口縁部ヨコナデ	被熱により外面薄く黒変
179			10.0			口縁部ヨコナデ	
66				堅緻			
±587	高坏	脚部½破片		黄橙褐色	白色・赤褐色粒混入	ミガキ　脚端部持ち上がり気味にヨコナデ	内面絞り痕あり
180							
66			12.0	やや軟質			
±589/590	壺	底部破片		黄橙褐色	白色粒、石英多混	胴部ヘラナデ	底部ドーナツ状
181							
66			4.8	やや堅緻			
±589/590	台付甕	胴・脚接合部破片		橙褐色	白色粒、石英多混	脚部ハケ	被熱により外面の荒れが激しい
182						胴部ナデ・ヘラナデ　脚部ナデ	
66				軟質			

番号	器種	残存度	法量	色調焼成	胎土	調整	備考
住居址			器高	色調		外面	
土器			口径	焼成		内面	
図			底径				
土596	高坏	坏部½破片		黄橙褐色	白色粒、石英粒、砂粒少混	口縁部ヨコナデ→ミガキ	
183			19.6			外面と同	
66				やや堅緻			
土598	壺	底部破片		暗黄茶褐色	石英大小粒、雲母微粒、黒色光沢粒混	ミガキ	内外面著しく摩滅
184						指おさえ	
66			3.8	堅緻			
竪6	皿	½破片	1.6	淡白橙色	白色微粒 赤褐色粒 微砂粒混入	口縁部ヨコナデ　ナデ	
185			7.7			外面と同	
66			—	堅緻			
I検	高坏	脚部½破片		黄橙褐色	白色・赤褐色粒、微砂粒少混	ハケのちミガキ→脚端部ヨコナデ	
186						ハケのちケズリ→脚部下半ヨコナデ	
66			12.0	堅緻			
I検	甕	½破片	13.0	黄灰色	白色大小粒少混	口縁端部ヨコナデ→体部上半ハケ・下半ケズリ状ヘラナデ	被熱により外面上半薄く黒変・内面暗赤褐色に変化
187			19.6			口縁端部ヨコナデ→体部ハケのち下半ヘラナデ	
66			4.3	やや堅緻			
I検	甕（？）	胴部下位以上以下破片		黄橙褐色	白色・黒色・赤褐色粒混入	底部ナデ　胴部ハケのちナデ	
188							
66			3.6	堅緻			
I検	甕	底部完存 体部½破片		黄褐色	濁った石英、白色粒混入	底部ナデ　胴部ハケのちケズリ状のヘラナデ 頸部ヨコナデ	底部ドーナツ状、被熱のため内外面黒色・見込部分赤灰色に変化内面炭化物付着
189						胴部中位指おさえのちミガキ・下位ミガキ 頸部ハケのちミガキ	
66			6.0	堅緻			
I検	甕	胴部½破片		黄褐色	白色微粒、石英微粒少混	頸部ヨコナデ　胴部上半ヘラケズリのちナデ 下半ヘラナデ	被熱により外面著しく黒変しススが付着・内面上半薄く黒変
190						ヘラナデ	
66				堅緻			
I検	折り返し口縁壺	口頸部½破片		黄灰色	白色・黒色粒小砂粒多混	口頸部ハケのちナデ　口縁端部ヨコナデ	内外面一部摩滅
191			16.0			口頸部ナデ　口縁端部ヨコナデ	
66				やや軟質			
I検	壺	胴部下位以下⅓破片		黄白色	黒灰色・白色粒多混		底部中央やや窪む
192						ナデ・ヘラナデ	
66			8.8	堅緻			
II検	甕（？）	胴部下位以下⅓破片		黄橙褐色	白色粒、石英少混	胴部下位ハケのちナデ・中位以上ヘラナデ（？）	底部ドーナツ状
193						ナデ	
67			5.4	堅緻			
II検	有段口縁壺	口頸部½破片		黄橙褐色	白色・赤褐色粒、石英混入	口頸部上段ハケ→段部ヨコナデ 口縁端部ヨコナデ	内面全体著しく荒れている
194			22.9				
67				やや堅緻			
III検	甕（？）	胴部下位以下⅓破片		黄褐色	白色微粒、石英、雲母、微砂粒多混	ハケのちミガキ	
195						ハケ	
67			4.8	堅緻			

番号	器種	残存度	法量	色調焼成	胎土	調整	備考
住居址			器高	色調		外面	
土器			口径				
図			底径	焼成		内面	
III検	体	口縁部・体部 1/4破片		黄橙褐色	精選 白色・赤褐色 微粒少混	ヘラナデ→口縁端部ヨコナデ→ミガキ	
196			11.2			外面と同	
67				堅緻			
III検	壺	口頸部1/4破片		橙褐色	精選 白色微粒、小石少混	ハケ　口縁部ヨコナデ→口縁端部面取りのち櫛描刺突文	
197			16.0			口縁部ヨコナデ	
67				堅緻			
40	甕	拓本		淡黄褐色	白色・赤褐色 微粒混入	叩き目	
198						ナデ	
67				やや堅緻			
40	甕	拓本		茶褐色	白色・赤褐色 粒混入	ハケのち叩き目	
199						ナデ	
67				やや堅緻			
40	甕	拓本		茶褐色	白色・赤褐色 微粒混入	ナデ・ハケ・叩き目	被熱により外面薄く黒変
200						ナデ・ハケ	
67				やや堅緻			
40	甕	拓本		淡褐色	白色・赤褐色 微粒混入	叩き目	外面一部荒れている
201						ナデ	
67				堅緻			
40	甕	拓本		淡黄褐色	白色粒混入	叩き目	内面炭化物付着
202						ナデ	
67				やや堅緻			
40	甕	拓本		淡黄褐色	白色・赤褐色 微粒混入	叩き目	破片の一部を意識的に丸くしてある
203						ナデ	
67				やや堅緻			
42	甕	拓本		褐色	白色微粒混入	叩き目	
204						ナデ	
67				やや堅緻			
6号墳	甕	拓本		淡黄褐色	白色微粒混入	叩き目	
205						ナデ	
67				やや堅緻			
40	甕	拓本		淡茶褐色	白色粒混入	縦羽状櫛描文	
206						ナデ	
67				やや堅緻			
7墳周	甕	拓本		暗褐色	白色微粒混入	板状工具によるナデのち縦羽状櫛描文	外面黒斑あり
207						ハケのちナデ	
67				やや堅緻			
7墳裾	甕	拓本		褐色	白色微粒混入	板状工具による縦羽状櫛描文	
208						ナデ	
67				やや堅緻			

番号	器種	残存度	法量	色調焼成	胎土	調整	備考
住居址			器高	色調		外面	
土器			口径	焼成		内面	
図			底径				
45	甕	拓本		茶褐色	白色粒混入	櫛状波状文 直線文	
209				やや堅緻		ナデ	
67							
土514	壺	拓本		灰褐色	微砂粒少混		内外面著しく摩滅
210				堅緻			
67							
1検	甕	拓本		青灰色	白色微粒混入	叩き目のちカキ目	須恵器
211				堅緻		同心円文	
67							
1検	甕	拓本		青灰色	白色微粒混入	叩き目のちカキ目	須恵器
212				堅緻		同心円文	
67							
40	土製円板	完存		茶褐色	白色・赤褐色粒混入	上面ナデ	
213				やや軟質		下面ヘラミガキ	
67							
37	紡錘車	1/3破片		茶褐色	白色微粒混入		
214				やや軟質			
67							

(3) 陶磁器　(第68図)

本址出土の陶磁器はごく僅かで、土壙からの出土とIII区検出面より出土のものが主である。小破片も含めて23片しかなく、図示しえたものは7点である。時代的には輸入白磁から吹付けの碗までと幅が広い。図示したものを中心に記述したい。

輸入陶磁器には白磁碗片(1)と青磁碗片がある。1は口禿の碗で内面の口縁下に僅かな稜をもち外面はロクロ整形の段がある。器壁は薄く灰白色をしている。13～14Cに多いものである。土壙507出土。青磁片は鎬蓮弁で釉色は薄い緑灰色をしている。III区検出面出土。

陶器　瀬戸美濃系のものを中心として14片ある。2はおろし皿で片口がつく。口唇は厚くなり端部に溝をもつもので片口部分は短く、釉は口縁部のみに付け掛けしてある。胎土は薄灰茶色でやや軽い。II区検出面出土。白瓷系の擂鉢片が1点ある。III区検出面出土。この2点は13～15Cころのものか。緑茶色の釉をしたものが2点ある。3は瓶の口で殆ど直立した短い口縁部で端部は小さく外に反る。細かい貫入がある。土壙394出土。図示しないが同様の釉の皿片が1点ある。土壙430出土。18～19Cころのものか。他に薄手小型の壺状のものの肩の小破片がIII区検出面から出土している。以上5点は瀬戸美濃系のものである。

在地産あるいは産地不明のものが10点ある。4は向付で内外に黒灰色をした釉がかかっている。胎土は黄灰色でやわらかである。産地不詳、土壙586出土。5は赤茶色をした鉢で外面一部に煤が付着している。胎土は砂粒を含んだ橙茶色で地元産ではないかと思われる。土壙574出土。6は甕の肩の部分で内外に鉄釉が濃くかかっており、一部に白色釉を掛け流している。地元窯から類似したものが多く出ている。III区検出面出土。7は鉄釉の鉢で薄手でロづくりは外に折り返している。産地は不明である。III区検出面出土。8は擂鉢で外面は黒茶色の釉、内面は2.7cm幅に19本の細かい目をたてている。胎土は黒灰色で緻密である。産地不明。III区検出面出土。この他鉄釉の灯明皿、擂鉢、壺型のものなどの小破片がある。いずれもIII区検出面出土のものである。これらは20C代と思われる二片を除いて19世紀後半のものとみている。

磁器　染付の破片が7片ある。図示したものは9一点のみである。9は深目の皿で外面には笹状の文様、内面には墨吹による文様が描かれているものである。同一器体か腰にあたる破片もある。18C代の伊万里系のものとみている。III区検出面出土。他に染付碗片があり出土地点とともに時代・産地とも前者と同様のものである。その他は20C代の蓋物と吹付けの碗の小片がある。III区検出面出土である。

1－土507

2－II区検出面

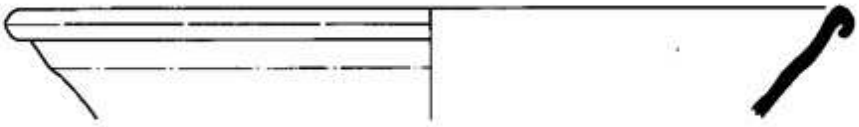
3－土394

4－土586

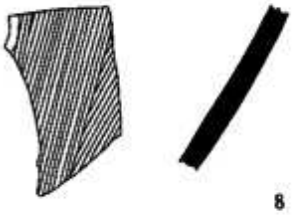
5－土574

III区検出面

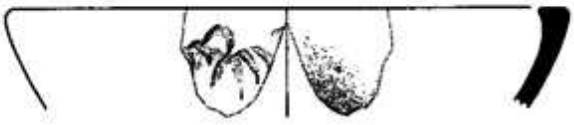
6



7



8



9

0　5　10cm

第68図　出土陶磁器

2　石器・石製品　（第69図～74図）

今回の発掘調査では定形的な石器のほか、２次加工のある剥片・使用痕のある剥片・剥片・砕片が多数出土している。向畑遺跡の石器群を理解するためにはこれらも含めた総合的な分析が必要である。しかし、次年度も発掘が予定されていることから、今回は定形的な石器に限って報告することにした。

向畑遺跡では縄文時代から古墳時代（以降）にわたる51点の石器と１点の石製品が出土している。これらのうち、磨製石鏃と石庖丁は弥生時代の、砥石は古墳時代以降のもので、そのほかは縄文時代の遺物である。このうち特徴的なものとして、縄文時代早期後半に多くみられる特殊磨石の１点、第45号住居址の砥石の３点があげられよう。前者は今回報告の石器の中では時期がさかのぼる資料であり、後者は鉄器を研いだ砥石としては古い時期に位置づけられる資料である。また、石器の石材のうち黒曜石・チャート・硬砂岩は搬入品の可能性がある。石製品としては管玉が１点出土している。

整理にあたっては実測できるものはすべて図化し、掲載することにした。また、すべての石器について出土地点・法量・石質・欠損状況などを一覧表に登載した。なお、石質鑑定については太田守夫氏のご教示を受けた。

1）石鏃

13点出土。石材は黒曜石製７点、チャート製６点で、チャートの占める割合が多い点が特徴である。基部を分類すると、平基・無茎鏃２点（１・12）、凹基・無茎鏃10点（２～９・11・13）、不明が１点（10）で、凹基・無茎鏃の占める割合が多い。また凹基・無茎鏃のなかでもえぐり込みの浅いもの（４・６）から深いもの（９）まである。チャート製の石鏃は黒曜石製の石鏃に較べてえぐり込みの浅い傾向がある。平基・無茎鏃が２点ともチャート製であることから、石材としてチャートを使用した場合、深いえぐりをつくりだすことが技術的に困難だったことも考えられよう。

2）石錐

２点出土。14はつまみをもつ錐で、錐部の断面は三角形を呈している。つまみ部の側面には斜めの線条痕が観察される。黒曜石製。15は棒状錐で、錐部は両面・両側から剥離がおこなわれているため断面は凸レンズ状を呈している。チャート製。

3）石匙

２点出土。16はつまみの部分で、チャート製。17は横形・偏刃の石匙で刃部は外湾している。つまみは刃部の割に大きく、素材の横長剥片を剥離した際の打面を残している。刃部の調整は両面からおこなわれているが、背面側が斜度の急な剥離であるのにたいし、腹面側は押圧剥離と考えられる非常に薄い剥離がほどこされている。そのため、刃部は片刃状を呈している。腹面には凸形のバルブ、バルバースカーが観察される。チャート製。

4）スクレイパー

5点出土。18は素材の縦長剥辺の両側縁辺に刃部をつくりだしている。腹面（主要剥離面）の左側辺は両面加工、右側辺は片面加工である。チャート製。19は平面が長方形で、長側辺に刃部をもつもの。刃部調整の剥離は背面側だけにほどこされ、片刃・直刃である。ホルンフェルス（砂岩）製。20は剥辺の背面の下部縁辺に刃部をつくりだしている。背面には左側に自然面があり、ネガティブなバルブ・バルバースカーをもつ剥離面が観察でき、素材の剥辺が剥離される以前に少なくとも2回剥片剥離が行われている。チャート製。21・22は両面加工の直刃をもつもの。頭部と側面は整形のための剥離がおこなわれているが、頭部は階段状剥離のため断面が厚くなっている。また、21の腹面側の剥離面の稜は摩耗してつぶれている。このつぶれは刃部の剥離面にはほとんどみられないので、着柄か手を防御するために石器の表面に木・紐・皮などで被ったためにできた可能性がある。硬砂岩製。22は千枚岩製。

5）ピエス・エスキーユ

2点出土。23は平面が方形、断面が逆三角形を呈している。上端は打面状の平坦面があり加撃痕が数ヵ所観察される。下端にはつぶれが生じている。黒曜石製。24は平面が方形、断面は紡錘形を呈している。上端にはつぶれが生じている。黒曜石製。

6）ノッチ

1点出土。25は縦長剥片の片側辺に凹状のえぐりを作り出している。剥離は腹面（主要剥離面）側からおこなわれており、片刃状を呈している。黒曜石製。

7）打製石斧

5点出土。27の短冊形を除いて、撥形・円刃の打製石斧が出土している。26（砂岩製）・28（硬砂岩製）は両側辺の中央縁辺に顕著なつぶれがみられる。特に、28は意図的に敲打して背面と腹面の区別がつかないほどつぶしをおこなっている。27は頭部端に礫の表皮を残している。背面側は腹面側にくらべて剥離面や稜が鈍くなっているが、風化の度合によって生じたものか着柄によるものか明確にできなかった。砂岩製。29は背面の全面に礫の表皮を残している。側縁部にはつぶれが観察される。ホルンフェルス（砂岩）製。30は片側の縁辺につぶれがある。ひん岩製。

8）磨製石斧

2点出土。31は乳棒状石斧で、刃部は蛤刃である。表面はよく研磨されているが、前段階におこなわれた敲打の痕跡を残している。研磨の方向は、線状痕の観察から長軸に対して斜めの左下がりと直行するものがほとんどである。刃部には、使用痕と考えられる剥離面とつぶれがある。閃緑岩製。他に、磨製石斧の使用の際に本体から剥離した破損品と考えられるものがある。これは3面に研磨面をもち、側面と上面のあいだに角稜をもつことから、定角式石斧もしくは偏平片刃石斧と考えられるものである。頁岩製。

9）凹・敲・磨石

11点出土している。32は棒状の自然礫に研磨痕があるもの。研磨の方向は長軸に対してやや斜行

する。硬砂岩製。33は石鹸形を呈するもので全面に磨面をもつ。側面は磨面のほかに敲打痕が観察される。この敲打痕が側面の面取り（整形）のためにおこなわれたものか、使用痕なのかは不明である。上面は凸形を呈し、中央にくぼみを1つもつ。下面もわずかに凸形を呈しくぼみを3つもつが、研磨の度合は上面より激しい。物質をすりつぶす場合には、接地面積の広いこの下面でおこなったほうがより効率的であったと考えられる。安山岩製。34は両面に磨面と浅いくぼみを1箇所づつもつもの。片面のくぼみの周辺には炭化物が付着している。砂岩製。35は先細の先端に敲打面をもち、器面全体には磨面がある。磨面は右側面と下面に顕著にみられる。また、器面が被熱により赤色化している。砂岩製。36は特殊磨石(1)である。断面3角形の棒状を呈し、3面とも（調整）磨面がある。さらに、3角形の頂部の1つに幅の狭いザラザラした機能磨面をもっている。砂岩製。37は大きな自然礫の一部に磨面をもつもの。手に保持して使用するには重すぎるので置き砥石として使われた可能性がある。砂岩製。38はやや縦長の石鹸形を呈するもの。上・下面に磨面、上・下・両側面のそれぞれに2つ以上のくぼみをもっている。また、側面は、敲打が頻繁に行われた結果くぼんだり剝落しているので、この敲打は側面の面取りと考えるよりは使用によって生じたものと考えられる。安山岩製。39は断面3角形の棒状を呈するもので、1面にくぼみを複数個もつもの。3面とも磨面をもつが2面は凹状で、くぼみをもつ面はわずかに凸でザラザラしている。砂岩製。40は平面が円形で両面に磨面をもつもので、下面中央にはアバタ状の敲打痕が観察される。このほかに、磨石の破片2点が出土している。安山岩製。

10）磨製石鏃

2点出土。41は磨製石鏃の未製品で、頭・脚・片側面が破損している。剝片の縁辺に調整剝離をおこなったのち研磨している。チャート製。

11）磨製石庖丁

1点出土。平面が半円形で、刃部は直刃である。上部に3孔をもつが、左端のものは途中で破損しているため穿孔されていたのか、穿孔の途中であったのかわからない。中央孔の上部には紐ずれ痕が生じている。砂質頁岩製。

12）砥石

6点出土している。すべて小形で手持ちの砥石と考えられる。43は他の砥石にくらべて砥面が荒い。砥面はすくなくとも3面以上ある。砂岩製。44～46は45住出土のものである。44は砥面は1つだが非常によく研磨されており、砥面の端の方には線条痕が集中している。ひん岩製。45は全面が砥石に利用されている。砥の方向はさまざまだが長軸に平行するものがほとんどである。ホルンフェルス（砂岩）製。46は破損しているが、少なくとも3面の砥面をもっている。砂岩製。47は4面の砥面を持つ。しかし、両側面は凹凸が激しいため、上・下面に砥が集中している。砂岩製。48は片端が破損しているが、5ないし6の砥面をもつもの。砥の方向は長軸に直行するものと平行するものとがある。砂岩製。

13) 管玉

1点出土。碧玉製で片側から穿孔されている。長軸と平行する方向でよく研磨されている。

注1　特殊磨石の各部の名称については、

八木光則「いわゆる『特殊磨石』について－中部地方における縄文早期の石器研究への問題提起－」　『信濃』第28巻第4号　1976を参考にした。

なお、実測図では機能磨面をスクリーントーンで表現している。

表6

石器一覧表

石　鏃

No.	石器No.	分　類	注　記	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石　質	欠損状況	備　考
1	1	平基・無茎	32住東北下層	(2.01)	1.31	0.28	(0.61)	チャート	先端部欠	
2	2	凹基・無茎	37住南西覆土	(1.36)	1.46	0.44	(0.61)	黒曜石	上半部欠	
3	3	凹基・無茎	土壙77	1.54	1.15	0.37	0.48	黒曜石	完　形	
4	4	凹基・無茎	土壙397	1.64	1.05	0.27	0.44	チャート	完　形	
5	5	凹基・無茎	土壙435	1.89	1.38	0.28	0.49	黒曜石	完　形	
6	6	凹基・無茎	土壙492	(1.57)	(1.22)	0.21	(0.33)	黒曜石	両脚欠	
7	7	凹基・無茎	土壙521	(2.09)	(1.26)	0.24	(0.63)	チャート	先端・両脚欠	
8	8	凹基・無茎	土壙534	(1.51)	(1.72)	0.22	(0.64)	チャート	片脚端欠	
9	9	凹基・無茎	竪穴状遺構5	2.73	1.39	0.21	0.61	黒曜石	完　形	
10	10	不　明	6号墳検出面	(1.78)	(1.39)	(0.47)	(0.79)	黒曜石	下半部欠	
11	11	凹基・無茎	2区検出面	(1.52)	(1.26)	0.22	(0.45)	黒曜石	先端・両脚欠	
12	12	平基・無茎	43住南検出面	(1.92)	(1.25)	0.49	(0.89)	チャート	先端・両脚欠	
13	13	凹基・無茎	3区検出面	(1.39)	(1.54)	(0.25)	(0.55)	チャート	上半部・片脚欠	

石　錐

No.	石器No.	分　類	注　記	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石　質	欠損状況	備　考
1	14	つまみ	土壙525	2.83	1.41	0.86	2.35	黒曜石	完　形	側面に擦痕
2	15	棒　状	2区溝8	3.93	1.14	0.98	3.40	チャート	完　形	

石　匙

No.	石器No.	分　類	注　記	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石　質	欠損状況	備　考
1	16	不　明	土壙429	(3.02)	(1.94)	(0.57)	(4.33)	チャート	つまみ部残	
2	17	横形・偏刃	3区南西検出面	3.39	2.77	0.81	5.23	チャート	完　形	

スクレイパー

No.	石器No.	注記	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	欠損状況	備考
1	18	31住南西	(6.51)	3.61	0.91	(24.65)	チャート	下端部欠	
2	19	土壙94	(3.13)	(8.02)	(0.89)	(33.74)	ホルンフェルス(変質)	片側縁欠	
3	20	土壙442	4.37	5.62	1.44	29.34	チャート	完形	
4	21	7号墳周溝Q区	(4.16)	(5.51)	(0.95)	(31.12)	硬砂岩	½欠	裏面側の剥離面の稜が摩耗
5	22	6区検出面	4.21	(6.83)	(1.05)	(42.00)	千枚岩	片側縁欠	

ピエス・エスキーユ

No.	石器No.	注記	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	欠損状況	備考
1	23	2区溝8	2.06	1.92	1.02	3.75	黒曜石	完形	
2	24	6区検出面	1.70	1.53	0.54	1.44	黒曜石	完形	

ノッチ

No.	石器No.	注記	長さ(cm)	直径(cm)	孔径(cm)	重さ(g)	石質	欠損状況	備考
1	25	土壙481	3.25	1.01	0.52	2.80	黒曜石		

打製石斧

No.	石器No.	分類	注記	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	欠損状況	備考
1	26	撥・円刃	7住南西下層	(9.63)	4.31	2.05	(93.93)	砂岩	刃部欠	側縁部つぶれ
2	27	短冊・不明	33住	(8.53)	(3.39)	1.51	(60.56)	砂岩	刃部欠	
3	28	撥・円刃	土壙411	(8.37)	4.31	1.97	(87.59)	硬砂岩	頭部欠	側縁部つぶれ
4	29	撥・不明	土壙415	(9.59)	(5.22)	1.71	(128.52)	ホルンフェルス(変質)	刃部欠	側縁部つぶれ
5	30	撥・円刃	6号墳周溝	(10.34)	5.36	(1.46)	(107.43)	粉岩	頭部欠	側縁部つぶれ

磨製石斧

No.	石器No.	注記	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	欠損状況	備考
1	31	竪穴状遺構7	(15.90)	5.21	3.51	(483)	閃緑岩	頭部欠	乳棒状・刃部摩耗
2		2区中東検出面	(2.16)	(3.32)	(0.32)	(3.29)	頁岩	刃部端残	

凹・敲・磨石

No.	石器No.	凹部	敲打痕	磨面	注記	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	欠損状況	備考
1	32			○	33住東南上層	12.04	4.71	3.16	245.95	硬砂岩	完形	
2	33	○(1+3)	○	○	土壙429	8.83	6.37	3.91	299.0	安山岩	完形	
3	34	○(1+1)		○	土壙474	(9.58)	(5.55)	(2.65)	(229.69)	砂岩	½欠	被熱・炭化物付着
4	35		○	○	土壙480	(17.98)	(10.05)	(5.92)	(1400)	砂岩	片端欠	被熱
5	36			○	土壙525	(7.88)	(4.05)	(4.50)	(231.42)	砂岩	½欠	特殊磨石
6	37			○	土壙582	31.05	11.95	10.55	5200	砂岩	完形	
7					7号墳周溝B区	(12.13)	(5.04)	(3.29)	(314)	硬砂岩	⅔欠	
8	38	○(4面)	○	○	2区検出面	10.11	6.11	3.59	350	安山岩	完形	被熱
9				○	2区検出面	(8.35)	(5.10)	(5.19)	(260.2)	安山岩	⅔欠	
10	39	○(2)		○	3区南検出面	(8.91)	(5.14)	(3.42)	(198.32)	砂岩	½欠	
11	40		○	○	不明	9.80	8.60	4.45	496	安山岩	完形	

磨製石鏃

No.	石器No.	注記	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	欠損状況	備考
1	41	土壙483	(3.98)	(2.08)	(0.62)	(5.92)	チャート	3/5欠	未製品

石庖丁

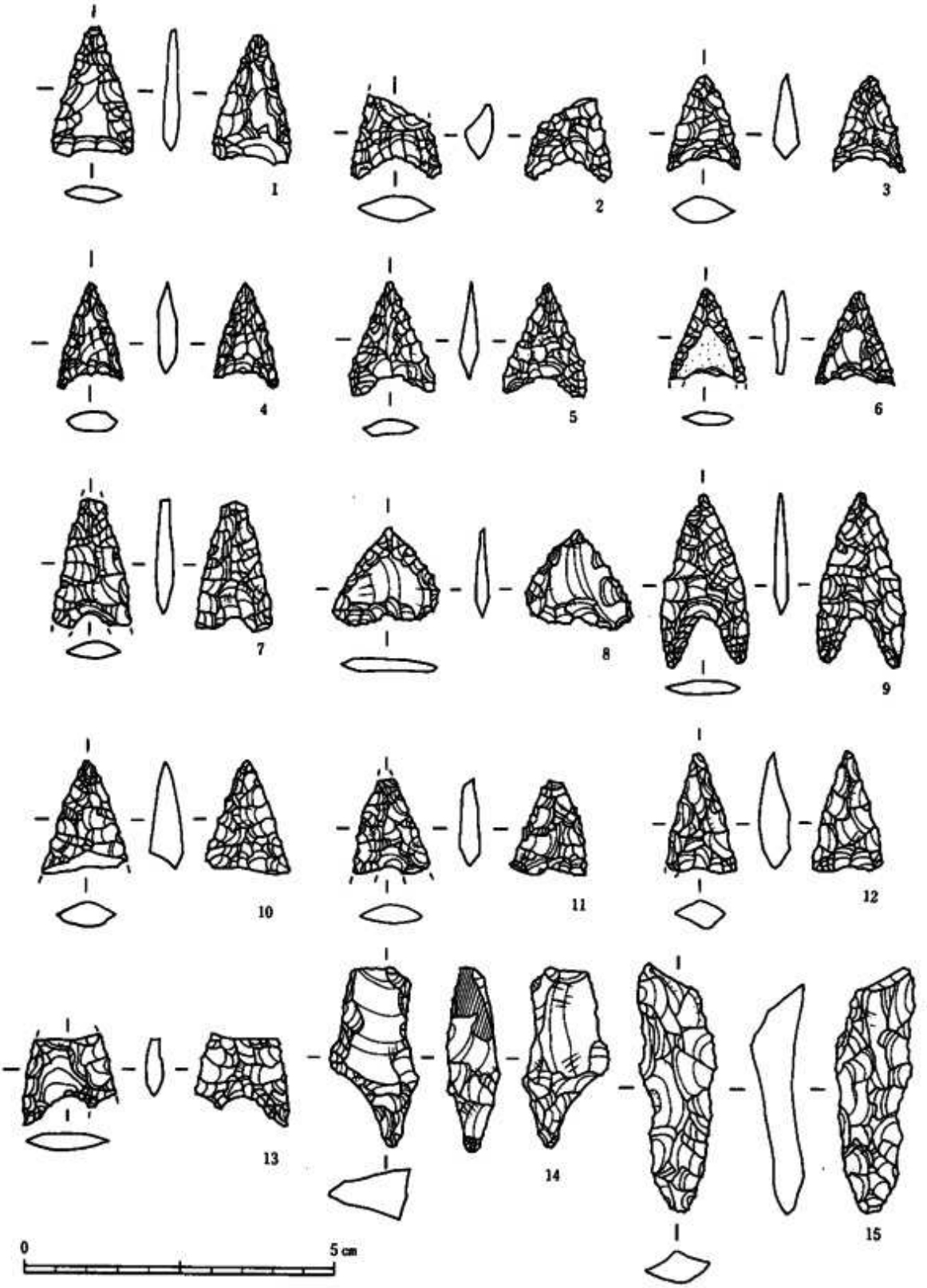
No.	石器No.	注記	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	欠損状況	備考
1	42	7号墳周溝G区	3.79	(6.71)	(0.64)	(25.19)	砂質頁岩	両端欠	3孔(両側穿孔)穿ずれ痕あり

砥石

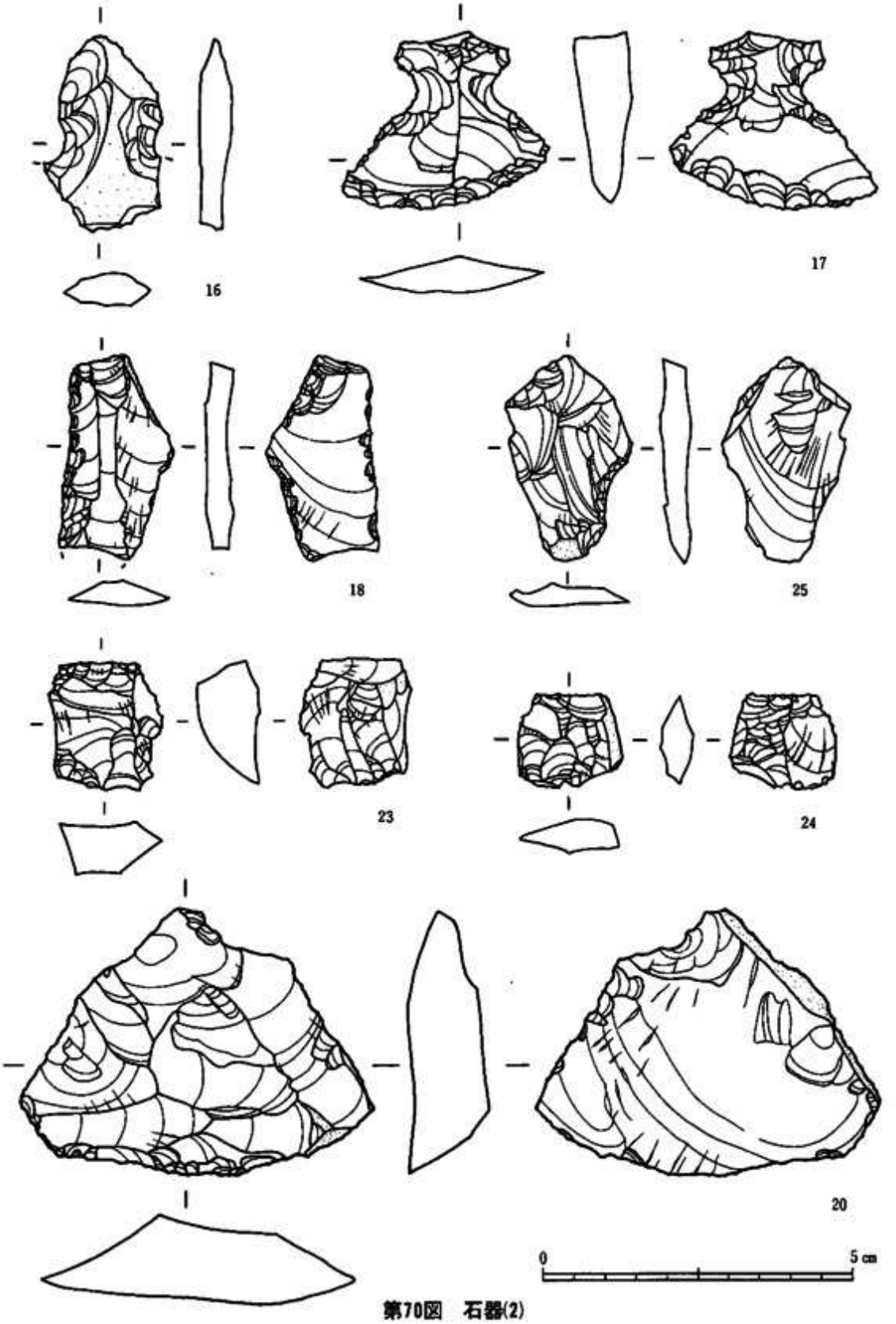
No.	石器No.	注記	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	欠損状況	備考
1	43	35住東南	(8.15)	(7.01)	(1.62)	(90.24)	砂岩	2/3欠	(砥面3)
2	44	45住No.1	(5.84)	(4.24)	(3.75)	(118.78)	粉岩	不明	(砥面1)
3	45	45住No.2	17.70	4.09	2.55	169.17	ホルンフェルス(硬質)	完形	砥面5
4	46	45住No.3	(9.06)	(5.35)	(2.34)	(153.74)	砂岩	不明	(砥面3)
5	47	土壙396	(12.76)	2.78	2.67	(118.09)	砂岩	完形	砥面4
6	48	6号墳周溝検出面	(3.64)	(2.77)	(1.54)	(30.04)	砂岩	1/8欠	(砥面5) 被熱

管玉

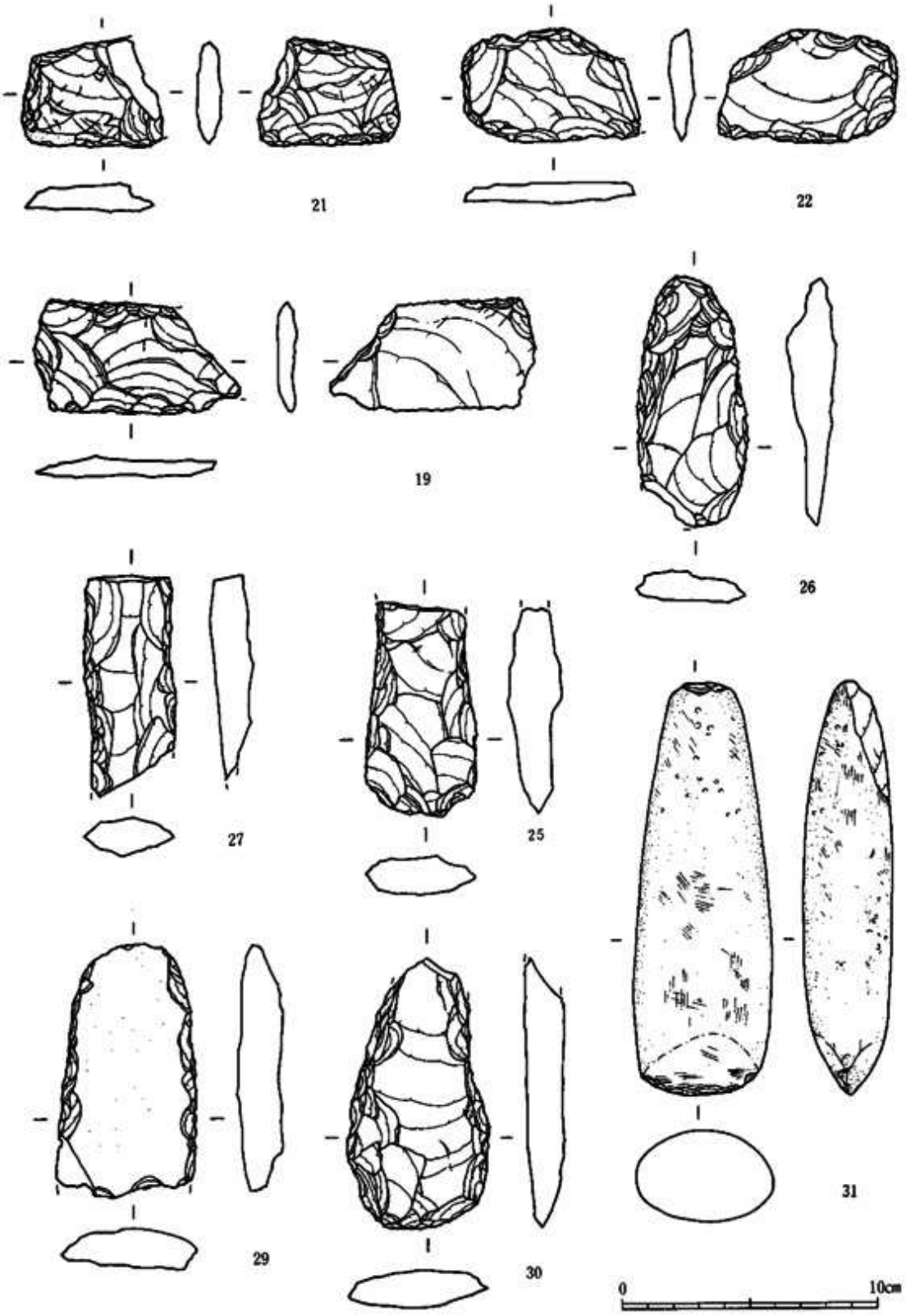
No.	石器No.	注記	長さ(cm)	直径(cm)	孔径(cm)	重さ(g)	石質	欠損状況	備考
1	49	43住ピット1	2.28	0.56	0.28	1.20	碧玉		片側穿孔



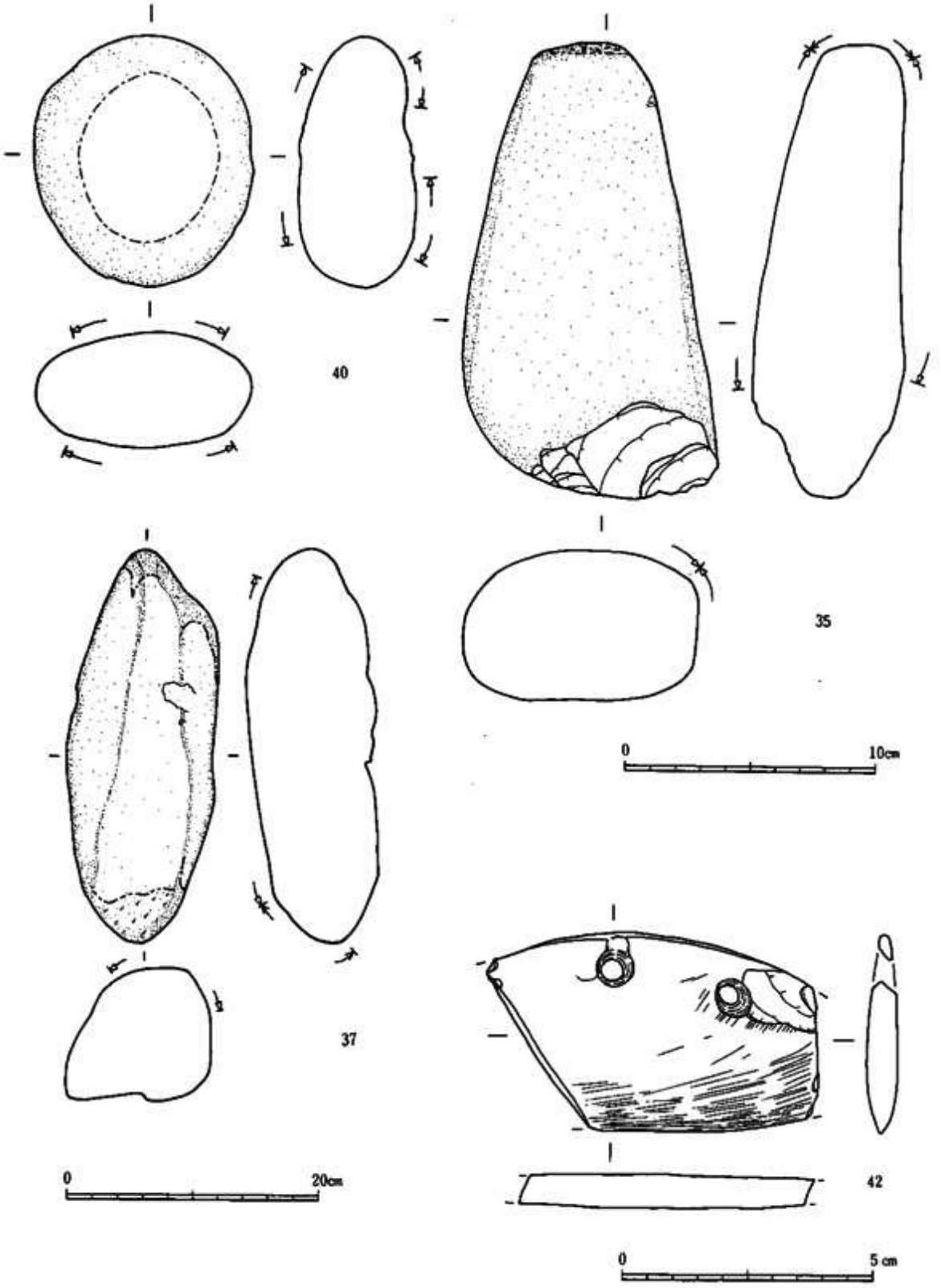
第69図　石器(1)



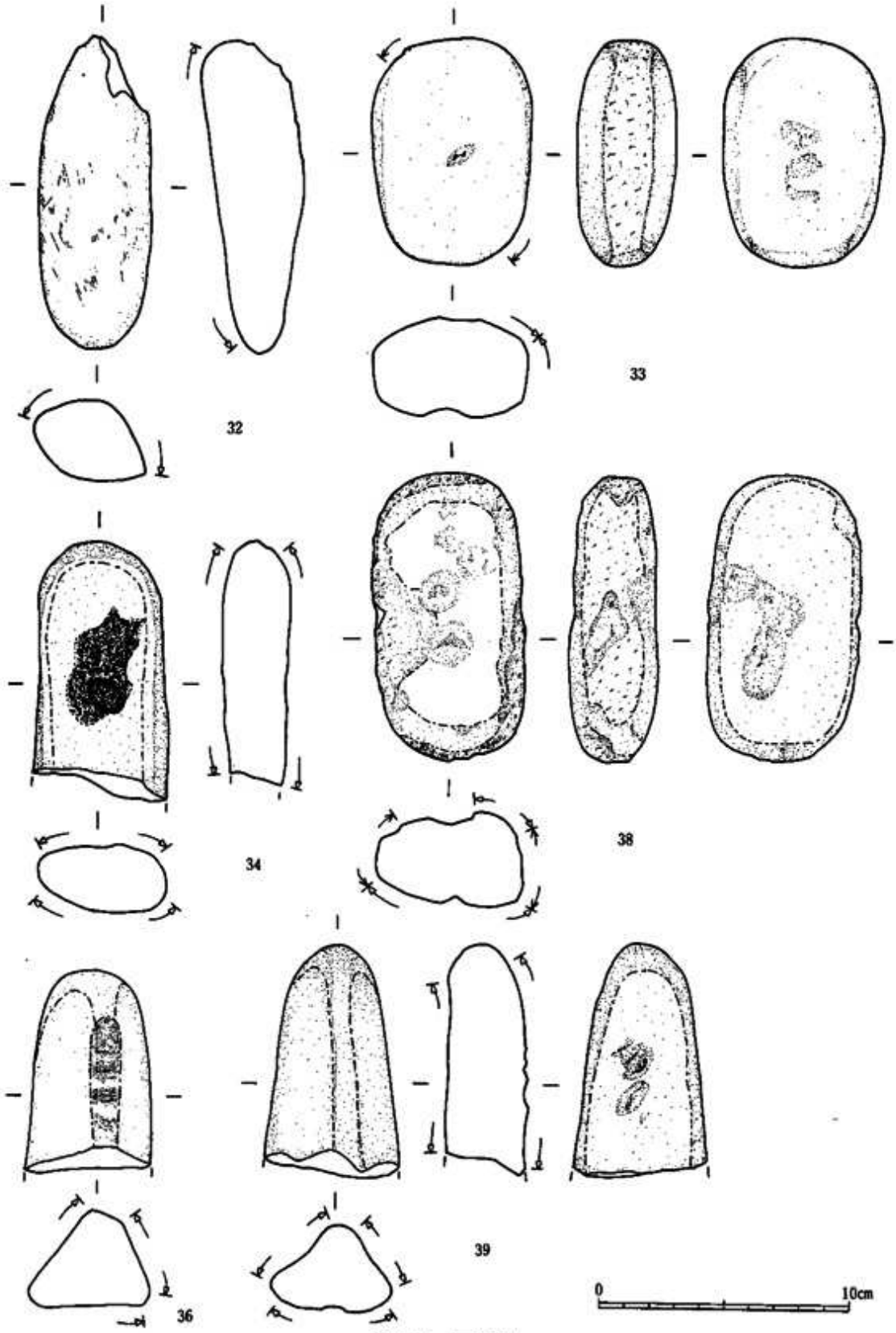
第70図　石器(2)



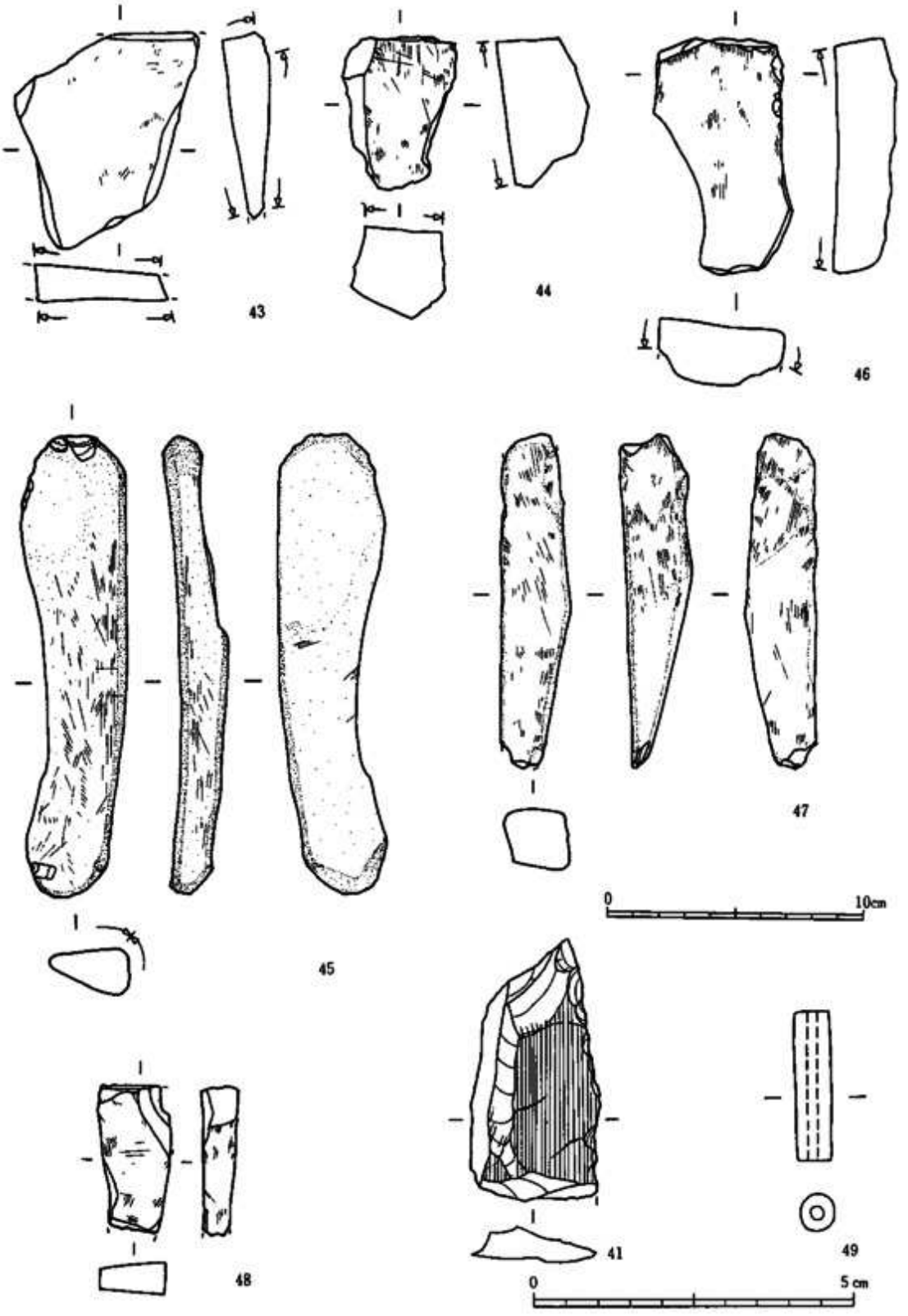
第71図　石器(3)



第72図　石器(4)



第73図　石器(5)

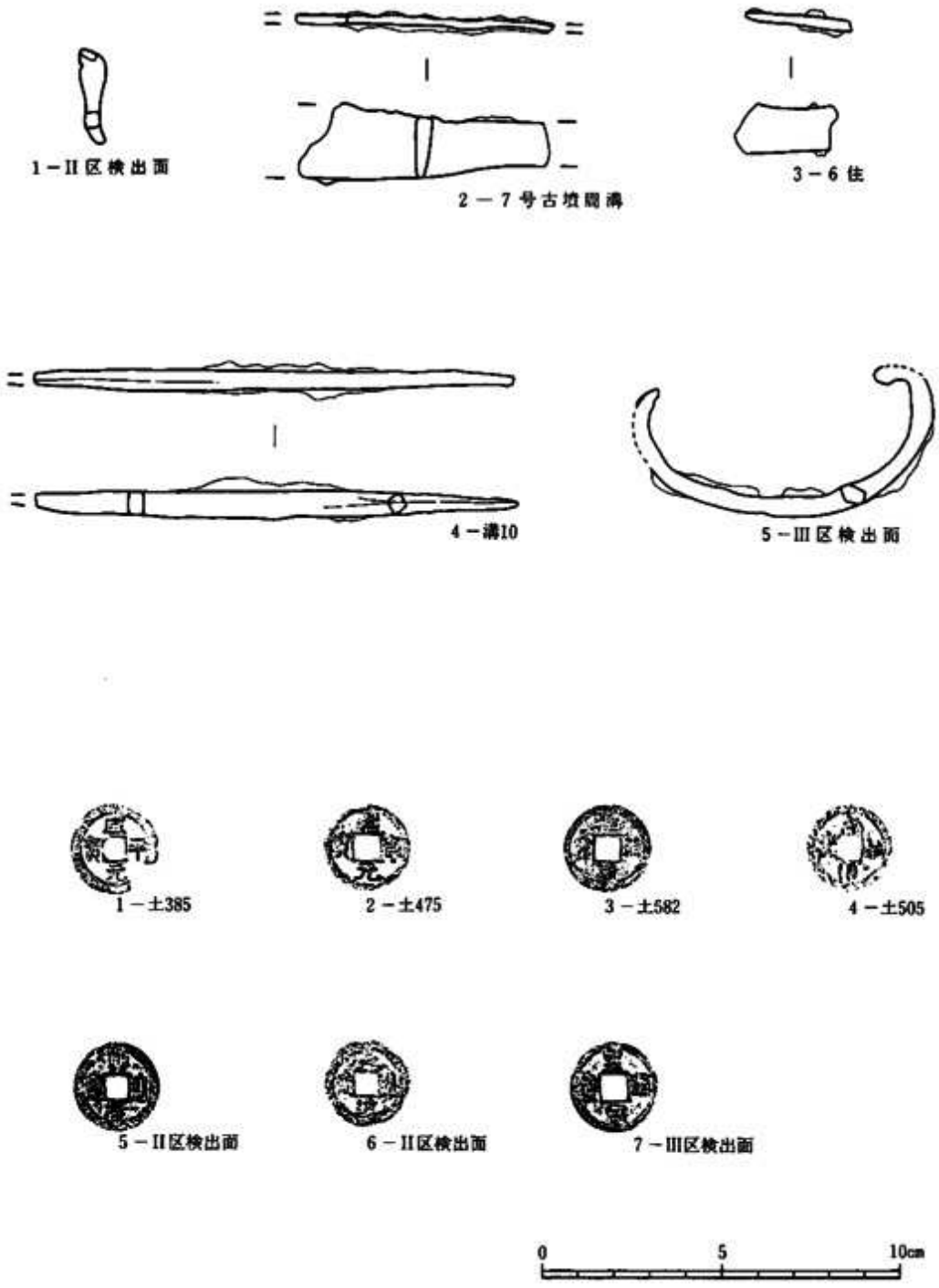


第74図　石器(6)・石製品

3　鉄器・銭貨　（第75図）

鉄器は５点と少なく、他に鉄滓が10号住居址から２片125.6ｇ、土壙217, 393から14.6ｇ33.1ｇが出土している。１は釘で上部欠損のものである。胴が太く先は曲がっている。重量は1.8ｇでII区検出面出土。２～４は刀子状のもので、２は現況長さ７cm幅２cmのものであるが、芯の厚さが0.3mmと薄い。重量10.6ｇ７号古墳周溝出土。３も刀子の小破片で二枚の金を重ねたように中は細い空洞になっている。重量2.1ｇ、６号住居址出土。４は刀子状のもので、両先端は尖っているが刃がないので、果してどのような使用の仕方がされたのかわからない。断面は四角で茎の方はねじれている。重量は19.8ｇ、溝10より出土。５は箪笥など引き出しの把手で現在使用しているものと変わりがない。断面形は楕円を呈する。近代のものではないか。重量12.2ｇIII区検出面出土。釘・刀子は伴出土器から古墳時代のものとみたい。しかし４については地金の腐食程度から見て時期が下がるのではないかと思われる。

古銭は宋銭７枚の出土をみた。いずれも１枚ずつの出土である。初鋳年からみると998～1,101年で時代幅が狭い。１の咸平元宝は二つに割れて一部が欠損している。重量2.0ｇ、土壙385出土。２は土壙475出土の熙寧元宝で2.8ｇ。３は土壙582出土の元祐通宝で被熱していて読みくいが篆書で書いてある。重量2.9ｇ。４は土壙505出土のもので強く被熱をうけている。文字は不明であるが強いて読めば元符通宝とも読める。2.6ｇである。５はII区検出面より出土した聖宋元宝で篆書体である。重量は3.0ｇである。６はII区北部検出面より出土した元豊通宝である。草書体である。重量は2.9ｇである。７は皇宋通宝でIII区南部検出面出土のもので篆書である。3.0ｇの重量である。このような古銭の出土例から見ると中世の遺構からの出土が多いので、これらの出土遺構も中世と見たい。


1－II区検出面
2－7号古墳周溝
3－6住
4－溝10
5－III区検出面
1－土385
2－土475
3－土582
4－土505
5－II区検出面
6－II区検出面
7－III区検出面
0
5
10cm

第75図　鉄器・銭貨

第4章　結　語

向畑遺跡は前述のように向畑古墳群の一部であり、事前調査の際も多少の遺物を採集している。今回の県道建設工事に当たっても、これら遺跡の重要性をご理解頂きスムーズに調査に着手できた。ただこの一帯が県営ほ場整備事業と重なり、ほ場に関わる発掘調査と並行して調査を行ったため耕作の合間に発掘調査を行うということになり、掘っては埋める繰り返しのため全体の掌握は測量図の集成によるしかなかった。全景の写真がとれなかった点やや悔いが残る。

さて、今回の県道分の調査では多くの遺構・遺物が出た。その数量は既述のため略すがほ場分と合わせると実に竪穴住居址47、竪穴状遺構6、古墳2、土壙955に及ぶ。これらの結果から種々のことが考えられる。

①古墳時代　竪穴住居址の殆どが古墳時代前期に位置するものである。ほら貝山の北西端に弘法山古墳があり、和泉川を隔てて棺護山には中山36号古墳がある。この古墳は4C中半とされているので、向畑遺跡の時代と重なる部分がある。弘法山古墳を作った人達の生活基盤がまだつきとめられていなので、今回の発掘成果が何らかの手掛りとなって、解明の糸口になればと思っている。63年度も隣接地を調査する予定であるので、全てが終了した時点で考えてみたい。

古墳そのものについても、今まで向畑古墳群はカニ堀沢に沿って東西に連なり、坪ノ内古墳群に続き、尾根の先端で南に回っていると見ていたが、今回の発見により東端も南に回っていることが判った。土地の古老の話では南側斜面近くにも古墳があったという指摘がある。とすれば全面的に古墳があったこととなり、向畑一帯が墳墓の地として使用されていたといえる。

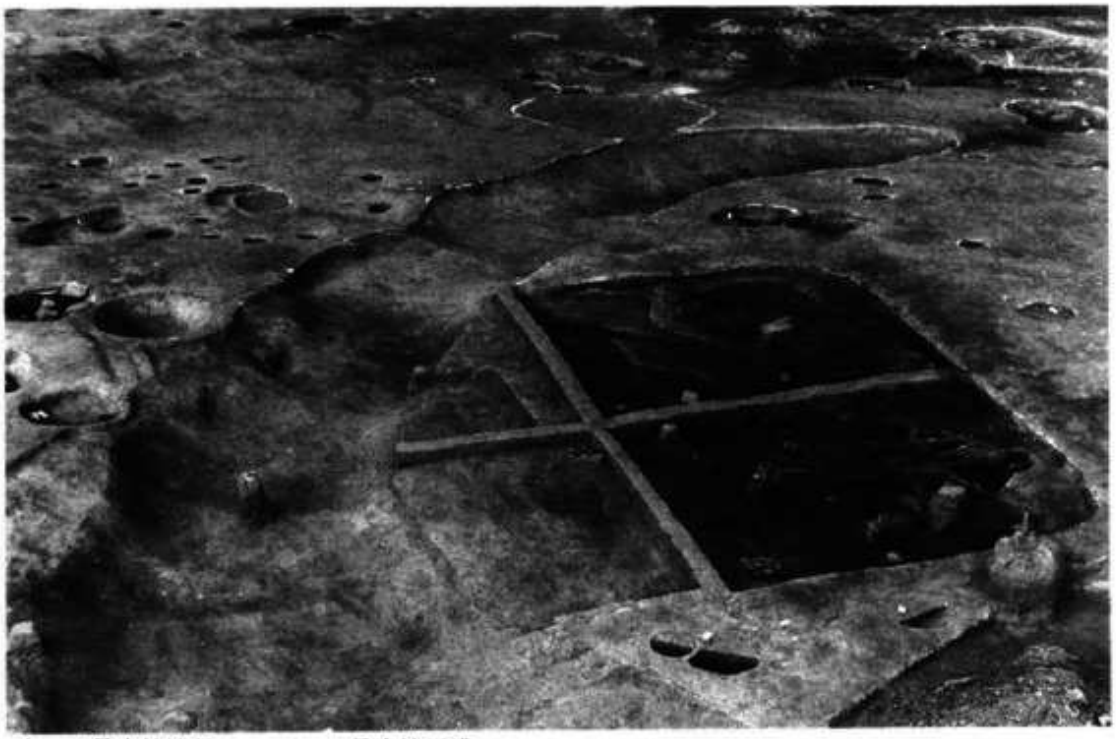
②中世　土壙について考えてみたい。今回出土の土壙の殆どは中世の墓とみている。その理由は前項で詳述したとおりである。他県の中世墳墓例と比べると配石・マウンド等がなく、また蔵骨器・石遺物もないなど資料的に欠けるものが多いが、部分的には同例もある。

この墓を守っていた人達はどこに集落を営んでいたかについては、遺構の検出のない今早計には判断できないが、ただ地形的にみれば東側から南東にかけた山麓に根拠地があったのではなかろうか。

発掘調査にあたっては松本建設事務所、中山土地改良区、中山公民館等関係の方々に御協力頂いた。また東京大学資料編纂所千々和到氏、長野県史編纂委員井原今朝男氏他多くの方々にご教示いただいた。記して謝意を表します。

参考文献

磐田市文化財保存顕彰会『大原墳墓調査報告書』1984
三重県教育委員会「横尾中世墓発掘調査資料」1986, 8 .29～30発表資料
『歴史手帖』1986－14巻11号「特集シンポジウム中世墳墓を考える－中世都市と墓をめぐって－」名著出版　1986



上：6号古墳遠景　　下：7号古墳周溝

第1図版

6号古墳遠景

6号古墳遠景

6号古墳遠景

6号古墳遠景

7号古墳遠景

7号古墳南側周溝

7号古墳南側周溝

第6号住居址

第2図版

第 7 号住居址

7 住地床炉

第 8 号住居址

第 9 号住居址

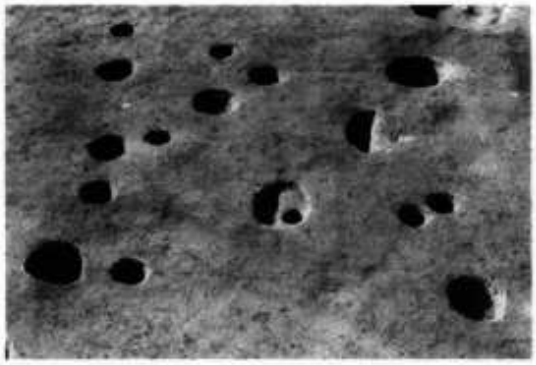
第10号住居址

第31号住居址

第31号住居址

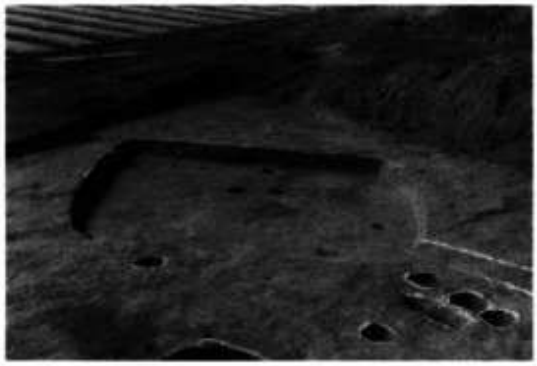
第33号住居址

第 3 図版



第34号住居址

第35号住居址



第36号住居址

第37号住居址

37住遺物出土状況

37住埋甕炉

37住埋甕炉

37住地床炉

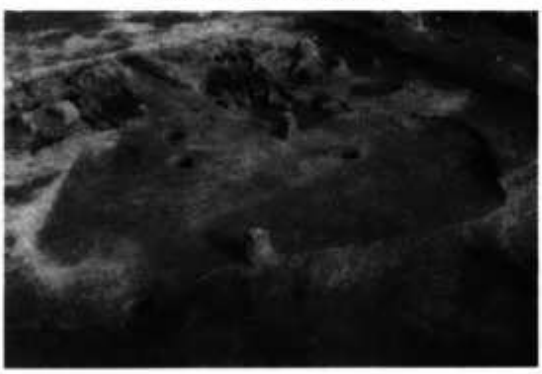
第 4 図版

第38号住居址

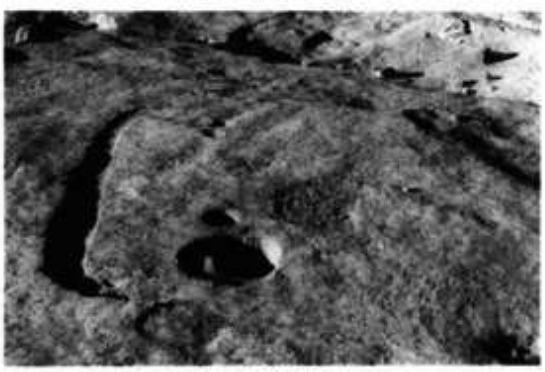
第40号住居址

40住炭化材出土状況

第39号住居址



第42号住居址

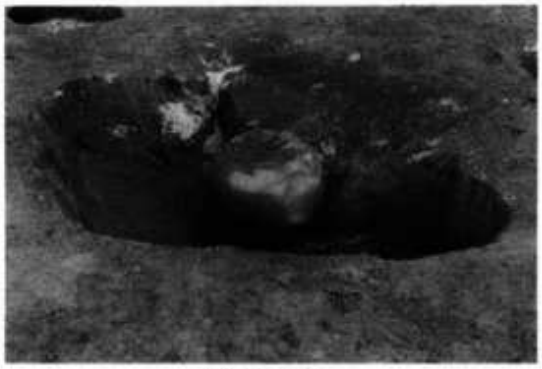


第43号住居址

第45号住居址

45住埋甕炉

第 5 図版



45住埋甕炉

第46号住居址

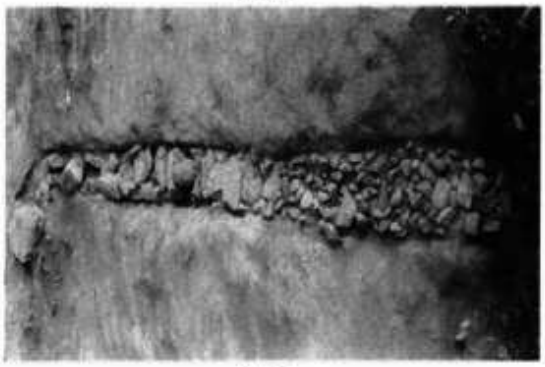
溝 6

溝 8

溝 9

溝10

溝12



溝15

第 6 図版

溝15

竪穴状遺構 5

竪穴状遺構 6

竪穴状遺構 7

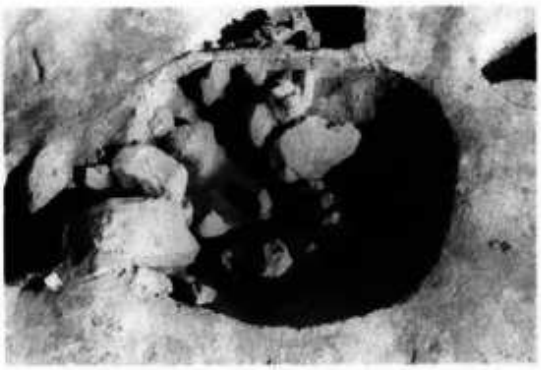
特殊遺構 1

土壙480

土壙480

土壙481

第 7 図版



土壙486

土壙911

土壙485

土壙396

土壙548

土壙378

土壙898

土壙549

第 8 図版

土壙474

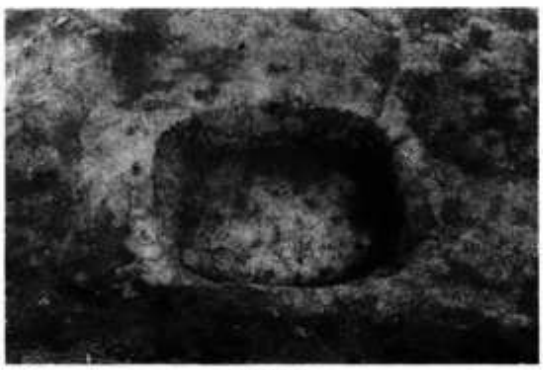
土壙55

土壙52

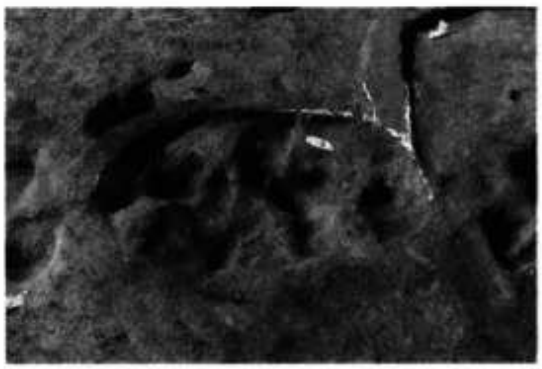
土壙498

土壙59

土壙405



土壙96



土壙591

第 9 図版

土壙491

土壙54

土壙114

土壙389

土壙824

土壙906

土壙71

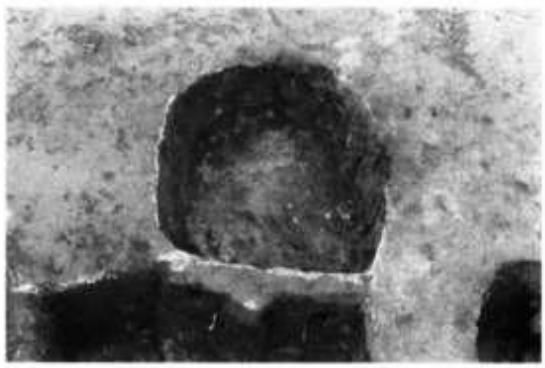
土壙71

第10図版

土壙438

土壙489

土壙418



土壙416

土壙379

I 地区

II地区

除雪作業

第11図版

1（脚端部は推定復元）

4

8

11

12

13

21

22

第12図版

47

62（脚部は推定復元）

70

66

65

97

63

第13図版

74

68

72

69

73

99

101

103

第14図版

115

116（ミニチュア）

117（ミニチュア）

119

110

149

第15図版

136

137

139

135

150

152

第16図版

153

180

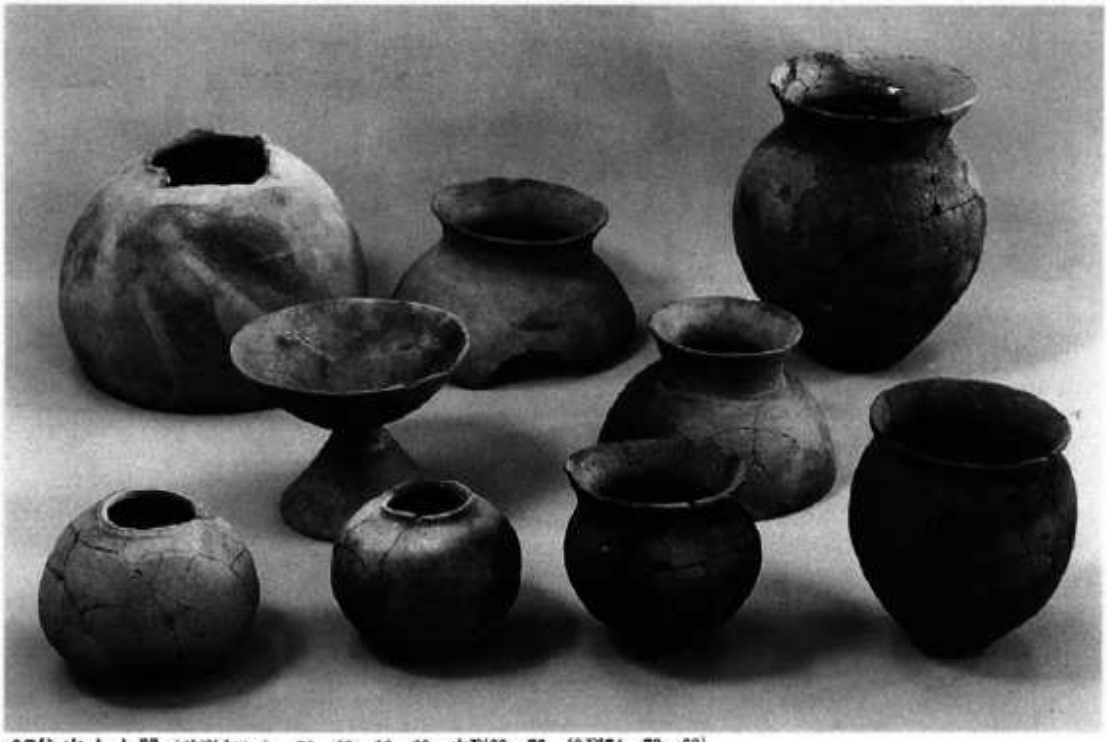
183（脚部は推定復元）

162（ミニチュア）

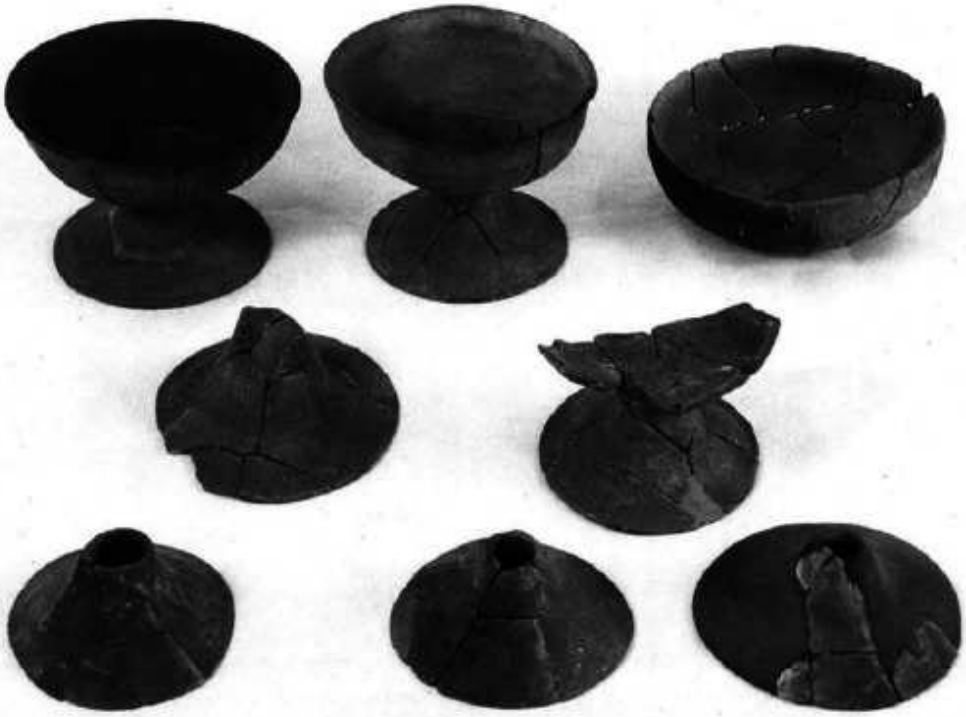
187

189

第17図版

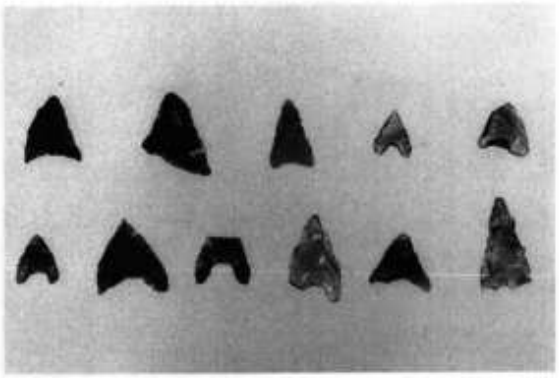


37住出土土器（前列左から、70、69、66、63、中列62、72、後列74、73、68）

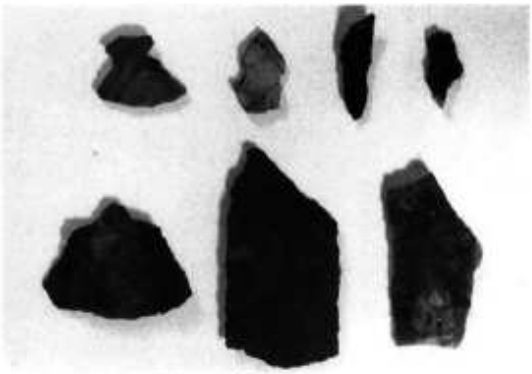


7号古墳周溝供献土器（前列左から131、134、132、中列133、135、後列137、136、139）

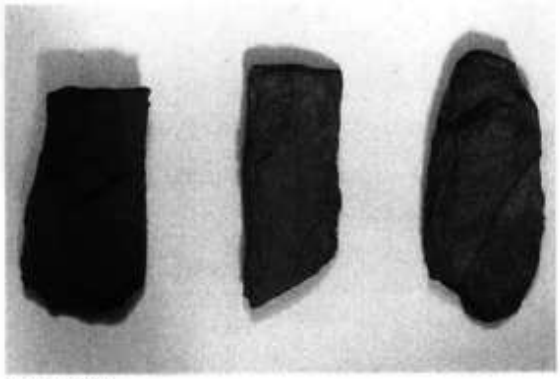
第18図版



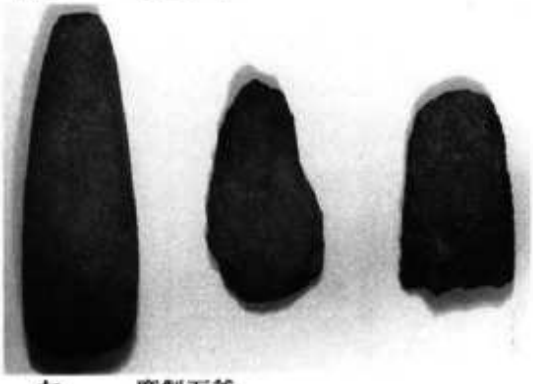
石鏃



上段　石匙・石錐
下段　スクレイパー

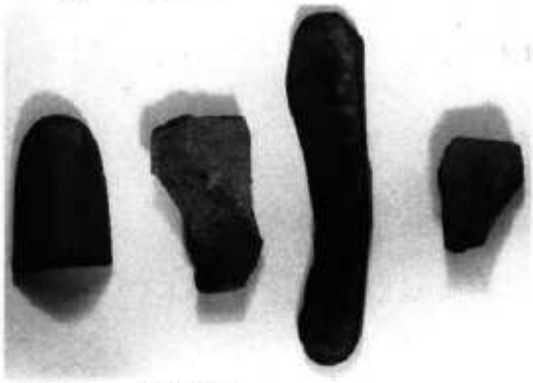


打製石斧



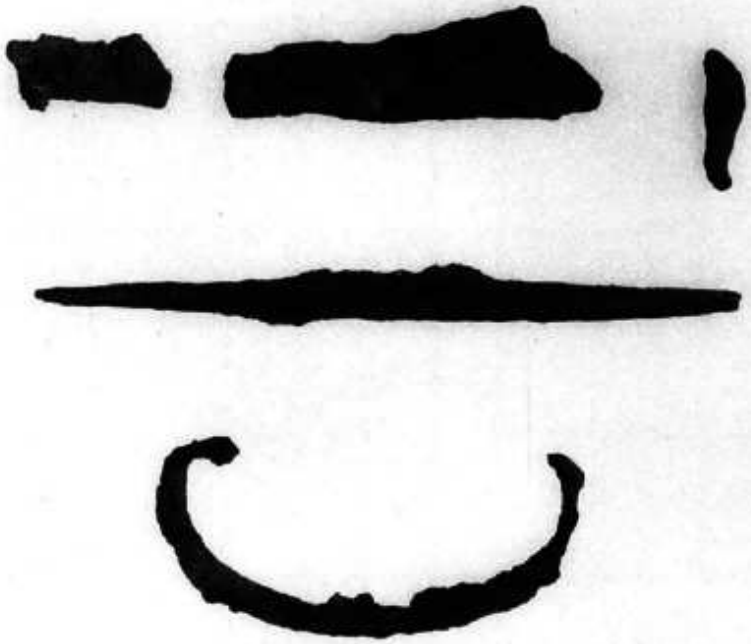
左　磨製石斧
中・右　打製石斧

上段　左　磨製石斧の刃部破損品
　　中　磨製石鏃の未製品
　　右　管　玉
下段　　磨製石庖丁

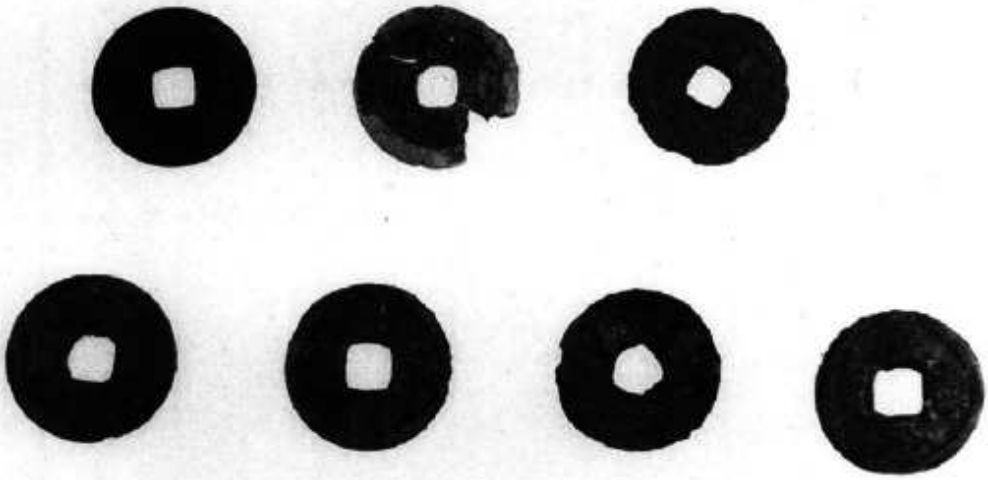


左端　特殊磨石
その他　砥　石

第19図版



鉄器



銭貨

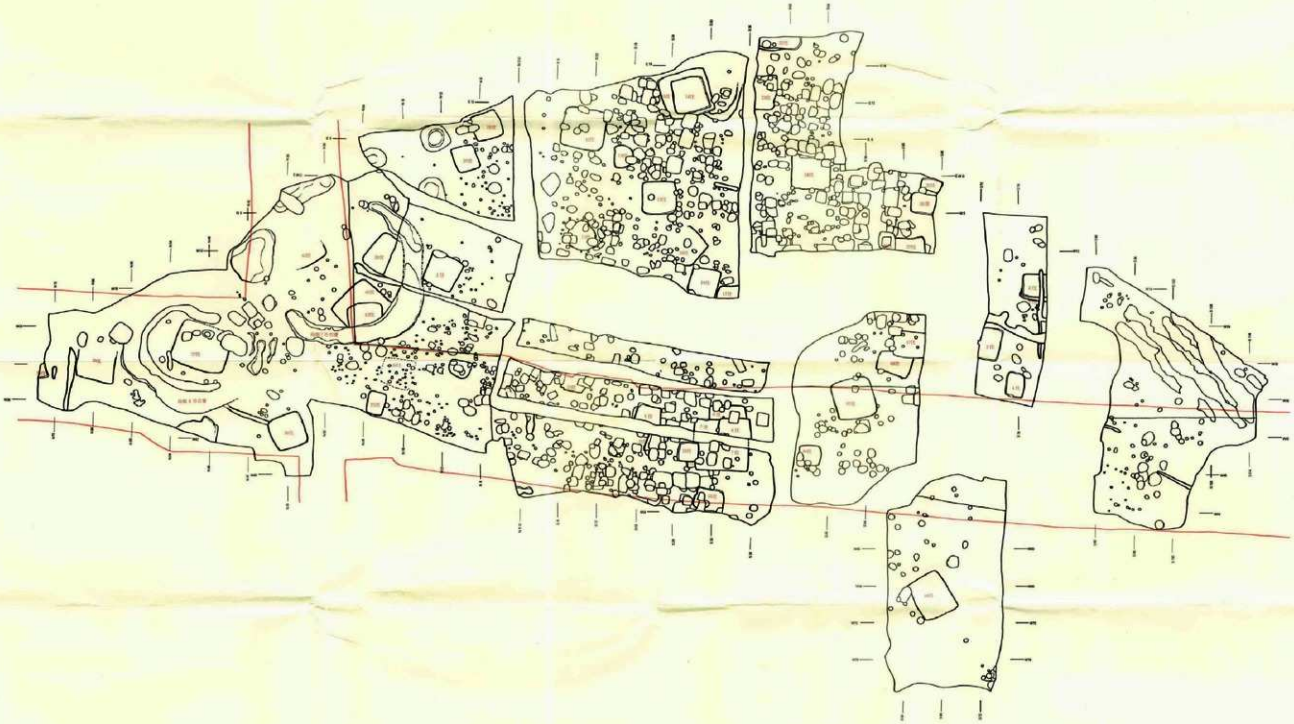
第20図版

松本市文化財調査報告No.60

松本市向畑遺跡Ⅰ

昭和63年3月20日　印刷
昭和63年3月30日　発行

発行　松本市教育委員会
印刷　精美堂印刷株式会社



付図　向畑遺跡全体図（$\frac{1}{300}$）